銀河英雄伝説～ラインハルトに負けません

三田弾正

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
銀河英雄伝説～ラインハルトに負けません

【Ｎコード】
Ｎ３８６３Ｘ

【作者名】
三田弾正

【あらすじ】
銀河英雄伝説の幻の皇后、シュザンナ・フォン・ベーネミュンデ侯爵夫人の子供の一人に転生し、これから来る破滅を何とか、避けようとする、皇女の物語です。
この小説は「らいとすたっふルール２００４」にしたがって作成されています。
ストーリー上原作のキャラクターの姓が変わる事があります。
人名辞典ＵＰしました。

第一話　お母様は、シュザンナ（前書き）

劇中の暗殺者は、ＣＶ真柴摩利（シーマ・ガラハウ）さんのイメージです。

第一話　お母様は、シュザンナ

……暗い……それと暖かい？
耳に入るのは、ドイツ語らしい女性の声。
『私の可愛いベービ、今度こそ無事に生まれてきておくれ』

んん！
体が流れるーーーーーーーーーー！？
眩しい此処はどこだ？？

「お生まれになりました、お美しい皇女様です」
誰かが言う声が聞こえる。
薄目を開けて見てみると、レトロな看護服を着た女性が喋っている。

なるほど、さっきのは母親の胎内ですか。今は産まれた所のようです。

母らしき人が、「おお、私の可愛いベービ今度こそ守りますからね」
そう言っているのが聞こえます。

看護婦が、「侯爵夫人、皇女様のお体を清浄して参ります」
そう言って、私を連れて別室へと移動しました。

その看護婦が、体を拭きながら恐ろしいことを言い始めました。
「フッ・・チョロいもんだね。あんたに恨みはないが、
生まれるところを間違えたのさ。自分の生まれの不幸を呪うがいい」

うわあああ、シャアの台詞じゃあるまいし、目つき変わってる

よこの女。
助けを呼ぼうと大声で泣くが、
「フッ・・死ぬのが判るのかい。この部屋は完全防音だから、ムダ・ダ・ヨ」
生まれてすぐに死亡フラグですかーーー！！　酷すぎる！！
「この針の先端に付いている薬なら楽に死ねるから、安心して死にな」
針の先端がゆっくりと、右腕に近づいていきます。
「傷が残ると面倒だからね。爪の間に刺してあげるよ」
痛い、痛いですよ。爪の間なんて、拷問じゃあるまいし。
死ねるー、火事場の馬鹿力よ出てくれーーーーーーーーーーーーー！！
右腕を振り回し抵抗したところ、そんな行動を予想していなかった女の手から針が飛び、そのままその女の目に突き刺さりました。
「ウギャアアアアアアーーーーーーーーーーー！！！！」
その瞬間、すさまじい悲鳴を上げて、女がのたうち回り始めました。
暫くすると悲鳴も聞こえなくなり、女は動かなくなりました。
これからどうなるんだろうと思っていると、あまりに帰るのが遅いのを心配したのでしょうか、何人もの女性が入ってきました。扉を開けた瞬間、中の惨状を見て、『皇女様はご無事か！』多くの方が近寄ってきてたのですが、真っ先に髪が乱れたままの母親らしき女性が抱き上げてくれました。
「おお、あなたもまた失う所であった」
母親ですね、これは。泣きながら、ぎゅーっと抱きかかえてくれます。

耳に聞こえるのは、「宮中警備隊を、呼べ」とか「侯爵夫人と皇女様を別室へ」とか、
「背後関係を探れ」とかが聞こえてきます。

そのまま別室で清浄され、母親に抱かれて病院らしき所から、彼女の家らしき邸宅へ連れて行かれて、邸宅内の赤ちゃん入れるプラ製箱に入れられました。

しかし、いきなり暗殺されそうになるとは。私はいったい誰なんだ?
侯爵夫人とか皇女様とか宮中警備隊とか、現代じゃ聞き慣れない言葉だし。
侯爵夫人が母親らしい。
皇女が私。
で、宮中警備隊があると。どっかの王宮かな?

疲れたんで、少し寝よう。

ん、ガヤガヤする。また暗殺か?

ホッ、母親が立ち上がったのか、ん?
「皇帝陛下のお成りでございます」
誰かがそう言っている。
皇帝陛下???

「シュザンナ、無事か」
「陛下」
「おお、この子が予の子か」

「陛下、そうでございます」

「おお、シュザンナに似て愛い子じゃ」
「陛下、危ういところでございました」

「聞いておる、大事に育てるのじゃ」
「警備も強化させよう、ようがんばった」
「陛下」

「今宵は、親子三人で過ごそうぞ」
『陛下』
意識が薄れていった・・・・・ＺＺＺＺＺ

一ヶ月ほどたって、私の立ち位置が判明しました。

こんにちは、私はテレーゼ・フォン・ゴールデンバウムと申します。
ゴールデンバウム王朝第３６代皇帝フリードリヒ４世　と寵姫シュザンナ・フォン・ベーネミュンデ侯爵夫人との間に生まれた、第３皇女です。

大きな声では言えないのですが、実は私、転生者なんです。

ゴールデンバウム王朝と言えば、銀河英雄伝説の世界ですよ。

第３６代皇帝フリードリヒ４世と言えば、ラインハルトの簒奪を知りながら、あえてそのままにした、あの皇帝ですよ。
　シュザンナ・フォン・ベーネミュンデ侯爵夫人と言えば、子供４人ぐらい殺されて、アンネローゼに嫉妬して、フレーゲル男爵にそそのかされて、暗殺狙って失敗して、死んだ人じゃないですか。

私も暗殺されかかったし、これからも危険がいっぱい。

今年って何年なんだろう。喋れないし字も書けないからどうにもならないよ。

食っちゃ寝、食っちゃ寝を繰り返すこと2年。
やっと喋れるようなり「ムッター、ファーター」と言うと、シュザンナ母様とフリードリヒ父様が、目を細めて喜んでくれた。

どうも警備が完璧なのと、女だから、帝位に関係ないからと、敵からは放置され始めたみたいな感じ。
ノイエ・サンスーシだからか、カレンダーとか無いし、年度が判らない。困った。
つたない言葉で「お母様、私の、お誕生日は、何年なの」って聞いたら。

「テレーゼ、難しい言葉を覚えたのですね」
にこやかに話してくれました。
「あなたのお誕生日は、４７１年2月3日生まれですよ」

「お母様、ありがとうです」
女官が来て、「テレーゼ様、お昼寝の時間でございます」
と来て、ベットへ寝かされました。
考えようとしたけど、寝てしましました。

翌日から、これからの人生について考え始めた。

んー、お父様が４８７年に亡くなられるから、そのとき１６歳か。
ラインハルトがクーデター起こすのが４８８年だから、１７歳。
お母様がフレーゲルにそそのかされるのが、４８６年で１５歳。
お母様が暗殺未遂をしたら、私もとばっちり食うかも知れない。
それで生き残っても、アンネローゼを狙った女の娘じゃ、酷い目に

遣いそうな気が。
それで無事でも、リップシュタットの後で、あのランズベルク伯に我が儘小僧と共に誘拐されるかも知れない。
路頭に迷うのはいやだ。

アンネローゼが後宮に来るのが４７７年ぐらいだから、あと４年か。
６歳の時に父上に甘えまくって、アンネローゼが来るのを阻止できれば安全だ。
よっし、それで行こう。

第一話　お母様は、シュザンナ（後書き）

いつか、続きを書きたいです。

パウル様に修正して頂きました。

ありがとうございます。

第二話　韜晦作戦準備よし（前書き）

お待たせしました、少ないですが第二話です。

第二話　韜晦作戦準備よし

帝国暦４７３年7月１０日　　１３時

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　ベーネミュンデ侯爵邸

「テレーゼ私の可愛いテレーゼ，陛下より沢山のドレスが送られて来ましたよ」
「お母様、お父様からですか」
「そうですよ、あなたのお父様からのプレゼントですよ」
「わーい、綺麗」
「本当に綺麗ね」
「お母様、着たいですぅ」
「そうですね、ヘレーネ、クラリッサ、支度をなさい」
「かしこまりました侯爵夫人」
「わーい、わーい」

帝国暦４７３年7月１０日　　１９時

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　ベーネミュンデ侯爵邸　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

ふうう、疲れたよ。
お母様ったらノリノリに成っちゃって、あれからお茶の時間を挟んで４時間も着せ替えだもの。
無邪気な2歳児を、演じるのも大変だよ。
相変わらず夕食はドイツ料理だし、たまには梅干しとお茶漬け食べたい。
お米と紅茶はあるから、探せばあるかも。けどお母様が食べるの許

してくれないな。

しかし、私を暗殺しようとした黒幕は誰なんだろう。
４７０年に、兄様が死産と言うことに、なってるけど暗殺の可能性が大だな。
確か母様は４回妊娠してるから、あと２人生まれるかも知れない。
無事に男子が生まれてくれれば皇位継承が拗れないかも知れない。
まあ私が生きているから妊娠しない可能性もあるけどどうなるやら。

暗殺の黒幕って、原作じゃ、ブラウンシュヴァイク公とかリッテンハイム候とか言われてるけど、ルードヴィヒ兄様が、生きている限りあの２家に帝位が行くことはないのだから、ルードヴィヒ兄様が、急死する事を知らない訳だから、そんなことをするんだろうか。
それとも、ルードヴィヒ兄様の急死事態が、ブラウンシュヴァイク公とかリッテンハイム候とかの、策謀だったとしたら、あり得ることだ。

しかし此処に、私というイレギュラーが、発生したそうなると、最低２人暗殺しないと成らなくなった、図らずもリスク分散が出来る訳か。
こうなると、あまり才気を見せると、敵の的になりそうだな。
暗殺から、逃れるためには、注意しつつこれまで道理、無邪気な皇女を演じ続けよう。
韜晦しなければ命が危ないからね。
これこそ韜晦作戦だ。

第三話　暗殺の裏幕（前書き）

短いです、すみません。
サブタイトル的に、此処で分けないと駄目だったので。

暗殺者経歴は、お察し下さい。

第三話　暗殺の裏幕

■オーディン　某所

「あの女、大言壮語吐いたくせに失敗するとは！」
「手練れの物が居たのでしょう」
「あの者から、こちらの正体が知れることはあるまいな？」
「それは、ご心配無用でございます。
かの者は叛徒共からの亡命者。ガンダルヴァ星系とかで植民者の反乱に毒ガスを使い住民を虐殺したとか。上層部の命令で暴徒鎮圧用無気力ガスだと、だまされたそうですが上層部がそれを隠すためにかの者達を事故に見せかけて皆殺にした中で唯一逃げてきた者、我々が突き出せば死有のみでございましたからな。生きるためには何でもしましょう」

「フフフどうせ成功しても始末するつもりであったのであろう」
「これは手厳しいすべては閣下の為でございます」
「おぬしには苦労かけるの」
「いえ臣の成すところでございます」
「しかしこれであの赤子の周囲に手を出し辛くなった」
「しかし男児ではありませんのでさほど気にする必要はないのでは」
「うむそうじゃな、昨年の赤子は男児であったあのときは見事に死産と言うことになってくれたからの」
「今回の事で、昨年の死産は暗殺だったとの噂が真実味を持ってまことしやかに流れ始めておりますから」
「ここ暫くはおとなしくするのが肝要であろう」
「御意」

第四話　皇帝即位２０周年記念（前書き）

連続投稿です、お待たせしました。

第四話　皇帝即位２０周年記念

帝国暦４７６年２月３日

■オーディン　ノイエ・サンスーシ「黒真珠の間」

「皇帝陛下、在位２０周年、万歳」
「テレーゼ皇女殿下、御生誕５周年、万歳」
「万歳」

「いや、めでたい、お美しい皇女様のご尊顔を拝謁出来ましたな」
「皇帝陛下もまだまだお若い」
「テレーゼ様の初お目見え、楽しみでしたからの」

「僅か５歳であの美貌、あと１０年もしたら、銀河一の美貌と成りましょう」
「今の内に、誼を結んおこうかの」
「我が家の、嫡男に是非とも降嫁して欲しいものよ」

「なんの、卿の嫡男は１７ではないか、遅すぎるわ、それに比べて、我が息は８歳でちょうど釣り合う」
「卿の息子は、卿に似てぶ男だそうじゃの、釣り合わんよ」
「なにを、なにを、我が息子こそふさわしい」

「話が弾んでおるの」
「これは、ブラウンシュヴァイク公」
「テレーゼ様は、お美しいの」
「奥方が、嫉妬しますぞ」
「ははは」

「伯父上」
「おおフレーゲル」
「それではまた」

「ヨアヒムよ。お前、テレーゼ様をどう思う？」
「お美しい、お方ですな」
「どうだ、お前が望むのなら、いずれ陛下に、お頼み申す事も出来るが」

「しかし、あの噂がございましょう、あの女が、首を縦に振るとは思えませんが」
「確かに、あの噂はあるが、わしは知らんぞ」
「しかし、２度続けての降嫁など出来ましょうか」

「オトフリート４世陛下の時代には、一人に３度続けての降嫁もあったぐらいじゃ」
「なるほど」
「お前も、誇り有る、ブラウンシュヴァイク一門の男としての矜持を見せてみよ」

「伯父上」
「考えておくことだ、権門とはそうゆうものだ」
「さてヨアヒム共に挨拶に参るぞ」

「おお、このランズベルク伯アルフレッド、皇女殿下に、詩を、献上いたく存じます」
「皇女陛下、我がヒルデスハイム邸に是非とも、行脚いただきたく存じます」
「なんの、我がヘルクスハイマー邸にこそ是非とも、行脚いただ

きたく存じます」

「これこれ、テレーゼが困っておろう、まだ幼いのじゃ、驚かすでないぞ、ハハハハ」
「皇帝陛下」
「おお、ルードヴィヒよ、おぬしの妹じゃ、可愛かろう」

「はい、可愛ゆうございますな」
「ほれ、テレーゼや、兄上じゃ」
「兄上ですゥ？」

「うむそうじゃ、兄上のルードヴィヒじゃ」
「兄上様、こんにぃちゅあ」
「ああ、こんにちは」

「父様、ごきげんうらわちくって、言うの？」
「よいよい、まだそこまでは無理じゃろう、のう、ルードヴィヒ」
「そうでございますね、幼き子に未だ無理がありましょう」

「うぅー」
「どうした、テレーゼ？」
「おちっこー！」
シャーーーーーー
「わぁあぁん」

「陛下お召し物が」
「よいよい、長きにわたり、此処にいたのじゃ、子供には、辛かろう、
すまぬが、ルードヴィヒ、着替えて参る、
暫く、儂の代わりをしていて欲しい」

「判りました、陛下」
「テレーゼも疲れたであろう、今日はもう休むのじゃ」
「おとうしゃま、ぐすぐす」

ががやがやがや

「皇女様が、お漏らしとは」
「未だ5歳じゃしかたあるまい」
「最近は、陛下もテレーゼ様に会いによくベーネミュンデ侯爵夫人の所へいくそうじゃ」
「それで、夫人のご機嫌がよいのですな」

「面白いことよの」
「これは、リッテンハイム候」

「先ほど挨拶してきたが、皇女殿下がこの目出たきときに、お漏らしとはの、我が家のザビーネは3歳だがその様なことはないぞよ」
「侯爵、不敬ですぞ」
「なんの、酒の上での、戯れ言よホホホホ」

帝国暦476年2月3日　深夜

■オーディン　某所

「今宵の宴はいかがでしたか？」
「ふむ、初めて、あの娘にあったが、挨拶中に、お漏らしをしておったわ」

「ほう、恥を掻いたわけですな」

「そうよ、舌足らずに、喋っておった、そのまま、陛下のズボンに、漏らしおった」

「前代未聞ですな」

「あの女が甘やかして居るのだろう、聞いたか、今回着る為に、陛下から、ドレスが１０００着も届いたそうだ」

「よいではございませんか、馬鹿な寵姫と、その娘、我が儘に育っていただければ、誰も支持しません」

「そうよの、適齢期が来たら、どこぞの門閥貴族へ、降嫁させるように、お勧めすればよいの」

「さようでございます」

「今回の姿を見て、安心したわ、あれは、捨て置いても平気よ、ただ寵姫達に、男児が生まれたら、始末せねばならんがな」

「御意」

第五話　皇帝即位２０周年記念裏側（前書き）

第四話の主人公側です

第五話　皇帝即位２０周年記念裏側

帝国暦４７６年２月３日

■オーディン　ノイエ・サンスーシ「黒真珠の間」　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

「皇帝陛下、在位２０周年、万歳」
「テレーゼ皇女殿下、御生誕５周年、万歳」
「万歳」

父様と私のお祝いに、帝国中の貴族、廷臣、軍人、そして、令嬢や令息達が、これでもかって、着飾って、来ている。
贅を尽くして、豪勢すぎるわ、ドンだけ金かけてるのよ。
貴族連中が、集まっては、降嫁とか、うちの子にとか、狙われてるのありありですね。

おっ、あれは、ブラウンシュヴァイク公じゃん、リアルに見ると、なんかねー。
一応、義兄になるわけだけど・・・・ねー。
誰か近づいていていった、ん?あの髪型、あの顔、未だ若いけど、フレーゲルじゃない?
２人で話し始めたみたい。

ジュースでも飲みますか、演技も疲れるし。

「お父様、おれんじじゅーすが欲しでしゅ」
「誰か、テレーゼに、オレンジジュースを持ってまいれ」
「はっ」

「お父様、ありがとうでしゅ」
「うむうむ」

うげ、ブラウンシュヴァイク公とフレーゲルがやって来たよ、いやだな。
「皇帝陛下、皇女殿下にはご機嫌麗しく」
「うむ、公爵」
「皇帝陛下、皇女殿下、此処にいますのは、甥のフレーゲル男爵です、どうぞお見知りおきを」
「ヨアヒム・フォン・フレーゲルと申します、皇帝陛下、皇女殿下の御意を得まして、子々孫々の誉としたく存じます」
「そうか、フレーゲルよ、励め」
「御意」
フレーゲルかよ、この頃から、嫌みっぽく感じるな。

また貴族が来た、今度は誰だ?
「皇帝陛下、皇女殿下にはご機嫌麗しく」
「うむ、候爵」
ああ、この髭、リッテンハイム候じゃん

次々に挨拶来るから、かったるい。
「おお、このランズベルク伯アルフレッド、皇女殿下に、詩を、献上いたく存じます」
うげ、誘拐犯の、えせ詩人じゃん、この頃から、下手な詩を、作ってたのか。

「皇女陛下、我が、ヒルデスハイム邸に是非とも、行脚いただきたく存じます」
自意識過剰の、自己陶酔来たー。

「なんの、我が、ヘルクスハイマー邸にこそ是非とも、行脚いただきたく存じます」
ん、ヘクスハイマーって聞いた気が・・・・・・あっ、指向性ゼッフル粒子事件と遺伝子欠陥か。

「これこれ、テレーゼが、困っておろう、まだ、幼いのじゃ、驚かすでないぞ、ハハハハ」

あっ、考えていて、無口になっていた。

「皇帝陛下」
「おお、ルードヴィヒよ、おぬしの妹じゃ、可愛かろう」
「はい、可愛ゆうございますな」
「ほれ、テレーゼや、兄上じゃ」

ルードヴィヒ皇太子か。

「兄上ですゥ？」
「うむそうじゃ、兄上のルードヴィヒじゃ」

敵を欺くには、まず味方からと言うから、馬鹿をやりますか。

「兄上様、こんにぃちゅあ」
「ああ、こんにちは」
「父様、ごきげんうらわちくって、言うの？」
「よいよい、まだそこまでは無理じゃろう、のう、ルードヴィヒ」
「そうでございますね、幼き子に未だ未だ無理がありましょう」

しまったな、トイレに行きたくなってきた。
此処は、漏らそう、死にたいぐらい恥ずかしいが、これほどのイン

パクトはあるまえ。

「うぅー」
「どうした、テレーゼ？」
「おちっこー！」
シャーーーーーー
「わぁあぁん」

お父様、冷たいでしょうが、申し訳ありません。

「陛下お召し物が」
「よいよい、長きにわたり、此処にいたのじゃ、子供には、辛かろう、
すまぬが、ルードヴィヒ、着替えて参る、
暫く、儂の代わりをしていて欲しい」
「判りました、陛下」
「テレーゼも疲れたであろう、今日はもう休むのじゃ」
「おとうしゃま、ぐすぐす」

ああー恥ずかしい！！
一生言われるんだろうな。
冷たいし。
早く着替えよう。

第六話　士官学校探訪（前書き）

書くのが止まらない。

第六話　士官学校探訪

帝国暦４７６年7月8日

■オーディン　帝国軍士官学校　　アルノルト・フォン・フライエンフェルフ中将

本年度の士官学校入校式に、皇帝陛下のご臨席を、賜る事になった。
国防の第一たる士官達にお言葉をいただけるそうだ。
その後、在校生の授業も見学するとのことだ。
本来であれば、入校式当日は授業はないのだが、本日は普通道理行うことと成った。
長い一日と成りそうだ。

■オーディン　帝国軍士官学校　　オスカー・フォン・ロイエンタール

全く今日はついていない、昨夜の女は良かったが、旦那が居るとは知らなかった。
いきなりベランダから逃げる羽目になるとは、まったく。
しかも隣には、朝からテンションが異様に高い鶏冠頭が居るし、五月蠅い頭が痛いだろうが！
皇帝の臨席だって全くくだらん、気まぐれはやめて欲しい物だ。

■オーディン　帝国軍士官学校　　皇帝フリードリヒ４世

士官学校へ行くことになった、本来であればこの様なことは、する気が無いのだが、テレーゼが兵隊さんの学校を見てみたいというので行くことにした。

■オーディン　帝国軍士官学校　　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

やって来ました、士官学校、父様がへんな女（アンネローゼ）に、引っかからないように、最近色々なところへ、連れて行ってもらっています、上目遣いのおねだりモードで大概ＯＫです。
それに、今年の入学生には原作キャラが居ないけど、在校生には、ロイエンタール、ミッターマイヤー、ビッテンフェルト、ワーレン、アイゼナッハとか居るし、顔見せには良いかなって。

父様と一緒に侍従武官やらと共に学校へ行くと、宇宙艦隊司令長官ヴィルフリート・フォン・ベヒトルスハイム元帥が校長のアルノルト・フォン・フライエンフェルフ中将と共に、迎えに出てきた。
へー、ミュッケンベルガーは未だ長官じゃないんだ。
挨拶が終わって早速、入校式で訓辞を行う、父様と長官、今までこういう事は余りないことらしくて、校長が卿達は名誉であるとか言ってる。最後に私が、「お兄ちゃん達、頑張ってくだちゃい」て言ったら、結構盛り上がってしまった。萌はこの時代にも通用するんだね。

次に４年の授業を見学、戦略理論見てたら、教官が良いところ見せようと、前の方の学生にこの問題を解けって言って、立ち上がったのが、錆銅色の髪で後頭部が跳ねてるって、アイゼナッハじゃない？
この頃から無口だったんだな、ヤーとかしか言わないし。

次に行くのか、話してみたいんだけど、仕方がないか。

続いて3年にやって来ました、3年生は格闘術ですか、体操着着てやってますね、まあ皇帝の手前、装甲服は着れないんでしょうね、勝ち抜きをやっているようで、ベスト4が決まったようです。
ここから、天覧試合と言うわけですね。
残ってるのは、やっぱり、ロイエンタール、ビッテンフェルト、ワーレンですね、残り一人は見たこと無いので、モブキャラですね。

始めの合図で、4人が戦闘始めましたね、おっビッテン強いモブを一発ですっ飛ばした、ワーレンとロイエンタールは、間合いを計ってる、ワーレン出るけど、ロイエン軽く足払い、すっ飛んだー、最後は、ビッテンVSロイエンですか、ビッテン相変わらず猪突猛進、ロイエン飛んだ、再度突っ込むビッテン、ロイエンそのまま受け流しながら、足払いしながら、一本背負いだ。
ロイエンタールの勝ちだ。

ロイエンタールには、父様から金時計が贈られました。
私は、「父様絵本で見たんだけど、勝利の女神がキスするのってありですよね」て言ったら。
『よいよい、テレーゼの好きにするがよい』とにこやかにOKしてくれました。

その後、ロイエンタールのホッペにキスしました。
ロイエンタールは、ビックリしてましたね。
ビッテンフェルトには、持ってきていた、銀製の櫛をあげました、喜んでいたよ。
ワーレンには、ハンカチをあげました、恐縮ですって言ってた。

■オーディン　帝国軍士官学校　　オスカー・フォン・ロ

イエンタール

驚いた皇帝から金時計を下賜されるとは、さらに驚いたのは皇女が俺にキスしたことだ、勝利の女神うんぬんと言い、皇帝の許可を受けほっぺたにキスしてきた、明日から噂が流れるだろう、マールバッハの家からも言ってくるかも知れんな。

■オーディン　帝国軍士官学校　　フリッツ・ヨーゼフ・ビッテンフェルト

皇帝陛下のご臨席による授業と聞いて、俺たち平民には関係ないと、ワーレンと話したのだが、まさか陛下から、お言葉を賜るとは思わなかった、それにだ、皇女様が、にこやかに来て、『すごいです』とおっしゃって、『髪が乱れてますぅ』とご自身ご使用の銀の櫛を賜されたのだ、大変感動した、大事にしよう。

■オーディン　帝国軍士官学校　　アウグスト・ザムエル・ワーレン

皇帝陛下のご臨席による授業と聞いて、俺たち平民には関係ないと、ビッテンフェルトが話してきたのだが同感だった、しかし俺たちが、最後まで生き残り戦い終わると、４人とも皇帝陛下から、お言葉を賜るとは正直驚いた。
しかも、皇女様が、『汗がすごいですぅ』と言い、ご自分のハンカチを、俺に下賜されるとは驚きだ、使うわけにもいかんから、大事に保管しよう。

■オーディン　帝国軍士官学校　　テレーゼ・フォン・

ゴールデンバウム

3年の授業が済んで、いよいよ疾風ウォルフの2年生です。
戦術理論の授業か、教官理屈倒れのシュターデンじゃん、うわー、
『皇帝陛下の御為に』とかそんなことばかり言い始めたよ、父様の
前だからみんな真剣に聞いてるけど、眠くなるねこれ、んーウォル
フ居るかなー、前の方には居ないな、あっ居た後ろの方で、なんか
書き物しながら見てる。残念、前にいれば喋れたかも知れないのに、
仕方ないか。

結局シュターデンの眠くなる授業のせいで、途中から寝てしまい、
気がついたら、宮殿に帰る車の中でした。

帰ったら、お父様とお母様と一緒に御夕飯を食べて寝ました。
最近とみに、お父様とお母様の仲が良いので、アンネローゼフラグ
を断ち切れそうな勢いです、このまま行けば、ラインハルトは只の
人だね。

帝国暦476年7月8日　深夜

■オーディン　某所

「して今日の動きはどうじゃった」
「間者の話ですと、格闘戦を見て、喜んでいたとのこと」
「くだらんな」
「さらには、勝者に話しかけ、頬にキスをしたとか」

「立場が判らん、子供じゃ」
「まことに」
「最早、放置しても良いかもしれん、あの者は、どう言っておる」

「無邪気で、思慮の足りない子供だと」
「陛下もあの女の元に通い詰めておる、最早又、子ができるやもしれん」
「そちらに力を入れるようにと命令せよ」

第六話　士官学校探訪（後書き）

次回予告
パッパパーパラー、
皇帝の浮気癖を阻止しようと、テレーゼは行く、そして母に運命の日が！
次回、銀河英雄伝説～ラインハルトに負けません
第七話　初夏の風そして
銀河の歴史が又１ページ

第七話　初夏の風そして

帝国暦４７７年3月３１日

■　オーディン　ノイエ・サンスーシ　ベーネミュンデ侯爵邸
　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

最近お母様の機嫌が非常によい。
やはりお父様が毎日のように来てくださるからだろう。
昨日もオペラ鑑賞に連れ立っていった、ローエングリンらしいがよく知らない。
メックリンガーなら知ってるだろうけど、未だに繋がりがないし。

このところは、ロリコン趣味の女遊びが絶えてきて真っ当な生活環境へと変わってきている。
たくよー５０過ぎの男が１５歳を愛人にするんじゃねーよ。
それを勧める、茶坊主どももどうしようもない。
やっと女の陰を薄くできたから、これからも変な女（アンネローゼ）に、引っ掛からないようにさせなければならないな。

帝国暦４８７年にお父様が亡くなられるのを、防ぐためお酒をあまり呑まないように、あちらこちらへと一緒に動いて出かけるようにしている。
最近は顔色も良く息切れも無いようだ。
この半年でも山登り（庭園内の丘だけど）やハイキング、乗馬など一緒に楽しんでいる。
意外だったのはお父様は乗馬がヘタだったことだ、若い頃放蕩三昧だったため遊んでばかりでやってなかったらしい。

出来るなら何とかして役立たずの門閥貴族を潰して、帝国を再生したいな。
まずは、グリンメルスハウゼン爺様に繋ぎを作って、相談に乗って貰わないとだめだな。
んーしかし、いきなり会うと他の者に不審がられるから何とかチャンスを作らないと。

そう言えば、ケスラーって何時から、グリンメルスハウゼン爺様の部下だっただろう。
映像見るとずいぶん親しそうだっし、個人的にかなり前から繋がりがあったのかもしれないな。
４７２年に士官学校卒業してるから、２５歳で大尉ぐらいかな？
ケスラーが来てくれれば、これほど頼もしいことは無いのに。

帝国暦４７７年４月１日

■　オーディン　ノイエ・サンスーシ　ベーネミュンデ侯爵邸
　　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

本日お母様から重大な発表があるとのこと。
お父様が臨席する夕食時に発表するからと待ちの姿勢。
夕方６時にお父様が来てくれました。
そしてにこやかな、お母様から発表が有りました。

『テレーゼに弟か妹が出来ますよ』
流産予定の子供か。守れたら守りたいな。
「お母様、わー嬉しいおめでとうです」
お父様も喜んでくれました。

良しこれで、当分の間他の女は排除できるだろう。
エイプリルフールじゃないよね。

帝国暦４７７年４月

■オーディン　某所

「あの女が又妊娠したと」
「あの者よりの知らせにございます」
「早い内に始末させるのだ、小娘のように生き残る可能性もあるのだから」
「流産と言うことでよろしいでしょうか」
「お前に任せる」
「御意」

帝国暦４７７年６月３０日

■　オーディン　ノイエ・サンスーシ　ベーネミュンデ侯爵邸
　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

ふううう、そうなんだよね。
新しい寵姫としてアンネローゼがやって来たそうだ。
お母様が非常に怒っておられた、危険な兆候だ！

アンネローゼが来たのって、宮内省職員が自分の点数稼ぎのために見つけてきたんだよね。
そうならないように、お父様をお母様の元へ日々通わせる作戦だっ

たが、
子供が出来たから夜のお勤め無いから、お寂しいであろうと勝手に連れてきやがった。
余計なことをしくさってからに！

ここの所お母様の所へ度々通っていたから、
安心してアンネローゼを探せ作戦を行わなかったけどてか探せるわけがないけど。

原作道理起こるのか、イベントが！
歴史の修正力というやか、はたまたバタフライ現象か。
これでラインハルトがやって来る！！！
帝国の危機だー！

お父様も押しに弱いから、認めてしまうし。
お偉いさん達もあまり、お母様に権力が行くのが危険と感じたのだろう。
クソッ、コルヴィッツめ一時は出世して喜んでいるだろうが、いつか必ず後悔させてやる！！

とにかくも信頼できる味方を探さなきゃだめだ。
グリンメルスハウゼン爺様に早く繋ぎを取らないといけなくなった。

帝国暦４７７年７月

■オーディン　某所

「陛下に新たな寵姫が出来たな」
「はっ宮内省の役人が市井で見つけてきたとのこと」

「平民か？」

「いえ一応帝国騎士ですが、平民以下の生活だったとか」
「歳は幾つだ」
「１５歳で在ます」

「良いの、ここの所。陛下は酒もあまり飲まず健康になりつつあるから、
新しい寵姫に性を吸われれば早くに衰弱しよう」
「まことに」

「政権にしがみつきたがるあの老いぼれ共に、
侯爵夫人の権勢が増えると困ると、
囁き新たな寵姫をもって侯爵夫人を牽制せよと言ったが、
これほど早く決まるとはおもわんかった」
「これで流産すれば万々歳じゃ」
「御意」

第八話　織り姫ＶＳ彦星（前書き）

時間が中々進まないので、戦闘シーンが殆ど無い銀英伝に。

第八話　織り姫ＶＳ彦星

帝国暦４７７年　７月７日

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　オルテンシア庭園
テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

本日非公式ながら新寵姫アンネローゼと顔を合わせる事にした。
本来であればこの様なことは異例なのだが、
数日前お父様に『会わせないと二度と一緒にお風呂に入らない』とだだをこねて今日という日を迎えた。
その際に弟も見たいから連れてきてと無理矢理に連れてこさせることにした。

お母様にはコッソリと泥棒猫の顔を見てきますと言ってきた。

形式的には庭園散歩中の、皇帝父娘が偶然庭園に来ていた新寵姫姉弟に会うという良くあるパターン。
取りあえず一発目が肝心なので、如何にも皇帝の娘という態度をとらなきゃね。

庭園の東屋で待っていると侍従に先導されたアンネローゼとラインハルトがやってきた。
おうおうアンネローゼの人生あきらめた感じとラインハルトの苦虫つぶしたような顔を無理に平常にしているような感じがよくわかるな。

此方の侍従がわざとらしく大きな声で『皇帝陛下ご臨席でございます』と言うと

お父様が『うむご苦労、して其所に居るのは誰じゃ』と言えば
向こうの侍従が『グリューネワルト伯爵夫人とその弟にございます』
と返す
お父様『此方へ来るが良い』
ですぐ近くへ来たというわけ。

「伯爵夫人此所はどうじゃな？」
「このように綺麗な庭園は初めてでございます」
必死に自分の運命を諦めて居る方は気の毒なんだけどね、けど貴女
こそ最大のキーパーソンですから。
「そこもこは誰じゃな」

「伯爵夫人の弟にございます」
「面を上げよ」
「良い目をしておるな」
目の奥に憎悪の炎が見えるよ。

この目を見て良い目だなんて、お父様この時からラインハルトに期
待していたのかもしれないな。
「今年より幼年学校で学ぶとのことです」
「励めよ」
「はっ」

ぷぷっスゲー演技腹の中は煮えくりかえってるだろうに良くやる
よ。
で帰って一人で怒りを滾らせるんだね、
キルヒアイスが未だ来てないから。

さて私の出番だ一丁やりますか。
「お父様その方が伯爵夫人ですか？」

「そおじゃ伯爵夫人じゃ」

「グリューネワルト伯爵夫人ご機嫌麗しく、私テレーゼ・フォン・ゴールデンバウムでございます」
「テレーゼ皇女様ご機嫌麗しく、アンネローゼ・フォン・グリューネワルトでございます」
「弟御の名は何とおっしゃるのですか」
いきなり振られて驚いてるな　くくく
「テレーゼ皇女様ご機嫌麗しく、ラインハルト・フォン・ミューゼルと申します」

　ここでいたぶるのも一興だけれど、必要以上に憎悪をたぎらせる必要もあるまい。
普通にやりますか。口元を扇で隠してお母様のような口調で。
「ラインハルトとやら、美しいのまるで彫刻のようじゃ、さぞやおなごにもてようぞ。
将来が楽しみじゃ、士官学校を出たら妾の近衛に成るがよい楽しみじゃ。」

ふふ、とまどってら何を言ったらいいかわからんだろうね。

「よいよい、名誉なことと戸惑っておるのじゃろう」
「お父様ー昼餉に行きましょう」
「そうじゃの」

帝国暦４７７年　７月７日

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　オルテンシア庭園
ラインハルト・フォン・ミューゼル

今日姉上と共に皇帝に会いに来た、姉上を奪った敵の姿を見てやる！
案内役が姉上と俺を連れて行く、偶然を装い会うらしいがくだらん
作法だ、俺が宇宙を手に入れたらくだらん作法など廃止してやる！
皇帝とその横に小さな少女が居る、皇帝の娘か。
「伯爵夫人此所はどうじゃな？」
「このように綺麗な庭園は初めてでございます」

わざとらしい挨拶が続く。
皇帝が俺の存在を聞いてきた、知ってるだろうにくだらん。
憎悪の目で見たが、皇帝は気がつかないようだ。

「良い目をしておるな」
「今年より幼年学校で学ぶとのことです」
「励めよ」
言われたので「はっ」と言ってやった。

いつか貴様にその犯した罪にふさわしい最後をくれてやる！
キルヒアイスはどうしているんだろう？

姉上に皇女が挨拶してきた。
そのうちに俺の名前を聞いてきた、姉上に迷惑がかかるといけない
のでしっかり作法道理に名乗ってやった。
するとだ『ラインハルトとやら、美しいのまるで彫刻のようじゃ、
さぞやおなごにもてようぞ。
将来が楽しみじゃ、士官学校を出たら妾の近衛に成るがよい楽しみ
じゃ。』

上から見下すような傲慢な態度で話してきた！
近衛だとふざけるな！

俺は案山子になるつもりはない！
姉上のため俺は宇宙を手に入れるのだから。

帝国暦４７７年　７月７日

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　オルテンシア庭園　アンネローゼ・フォン・グリューネワルト

今日皇帝陛下よりテレーゼ皇女殿下が私とラインハルトに会いたいと言うことで参内させるようにと連絡が来たため、ラインハルトを連れて庭園へ向かった。
侍従の案内で皇帝陛下にお会いし、ご挨拶後にテレーゼ皇女殿下が私に挨拶していただいた、私も挨拶を仕返した。
テレーゼ皇女殿下はにこやかに挨拶してくれその後にラインハルトにの名前を聞いてきた、
ラインハルトがしっかりと挨拶できるか心配したのですが、ちゃんと挨拶できて安心したのですが、

皇女殿下が『ラインハルトとやら、美しいのまるで彫刻のようじゃ、さぞやおなごにもてようぞ。
将来が楽しみじゃ、士官学校を出たら妾の近衛に成るがよい楽しみじゃ。」
とおっしゃった所ラインハルトの顔がきつくなって来たのです、
あの子は少々気の短いところが有るので何かしないか心配でしたが、
皇帝陛下が「よいよい、名誉なことと戸惑っておるのじゃろう』
とフォローしていただいたのでありがたかったのです。

第八話　織り姫ＶＳ彦星（後書き）

アンネローゼ側を入れました

第５次イゼルローン攻略戦の並行追撃作戦対策作戦は有るんですが、

そこまで行くのが大変。

第九話　それぞれの昼餉（前書き）

ぎりぎり１２日更新です

第九話　それぞれの昼餉

帝国暦４７７年　７月７日　　昼

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　ベーネミュンデ侯爵邸
　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

アンネローゼとラインハルトとの面会を終えたあと、お父様と馬車でお母様の待つ館へ向かう途中
「お母様の真似をして喋って見ました」
「ははははそうかそうか」
どうやら誤魔化せたようです。

今日は昼餉をお母様とお父様一緒に食べるようにして貰っていますので、
あとは本人達の気分次第で落ち着くのではないかと思うのですが険悪なら私が出て仲裁を計るつもりです。

館に着いたらお母様がお出迎えに出てきていました、
やはり焦りがあるのでしょう普通なら執事が迎え入れる物なのですがね。
お母様はにこやかに「陛下きていただき有り難うございます」
ふむ普段の母上の苛つきが消えている良いことだ。

食事中は当たり障りのないお話や私の教育に対する話などだったのですがねー
デザートになるとお母様が『新しい寵姫の寝心地はどうですか』ってジャブな嫌味を一発
うわー母様ストレート過ぎます子供がいるのですよ

すると父様『テレーゼが嫌がったから、まだじゃ、元々国務尚書等が勧めてきたので仕方なくな』
すると母様少し考えてから、『若い寵姫を求めるのは仕方がない事ですがテレーゼの為にも館への行脚は出来る限りお願い申し上げます』

おっ母様手を未だ出してないと聞いて少しは和らいだ。
まあ数日前から母様をフォーローし続けたかいがあったよ。

他の寵姫の手前毎日来るのは無理だけど、出来るだけ多く来てくれると父様が約束してくれました。
家庭円満に成らなきゃだめだね。

結局その日はお父様はお母様と私の教育について話し合うことになり館に泊まることになりました。
お母様は夕餉の際には数日前までの苛つきやドンヨリした空気が無くなり晴れ晴れとしていました。
よかったよー。

けど今年の九月から始まる私の本格的な教育について話があったので、
私としては内容が厳しそうなのでブルーに成りましたよ。
てか、紅茶の銘柄だとか、お香の銘柄、とかいらねーー！！
ご学友を誰にしようとかも話が出たし、話が合うか不安だね、

こちとら、皇女でも根が庶民ですからね。
なまじ原作知ってるし下手に親しくなってその子が不幸になるとか知ってると絶えられないじゃん。
逆に災いになるのだとどうしていいやら。

なまじ軍事知識があるのも善し悪しで、口を出したいんだが出せないもどかしさ。
アルレスハイム、サイオキシン麻薬、イゼルローン攻防戦、ティアマト会戦とか
軍事的に教えたいのが教えられない、教えたら教えたで変に思われるし
暗殺の黒幕も未だに解らないし、下手に爪を出すわけにはいかないんだよね。
こまったもんだ。
相談できるブレインが欲しい今日この頃。
グリンメルスハウゼン爺さんに早く会いたいのに機会が全くない何とかしてくれーー！

帝国暦４７７年　７月７日　　昼

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　ベーネミュンデ侯爵邸
　フリードリヒ４世

　本日テレーゼが、新しき寵姫アンネローゼとその弟に会ってみたいと言われたために場を設けることにした。
わしは、娘には弱い父親なのでついついテレーゼに甘くしてしまう。
アンネローゼの弟に会うのは初めてじゃったが、あやつに会った時心地よさを感じてしまった、
あの目あの表情、普段皇帝たるわしに媚び諂い裏では罵っている者たちと違う
わしを恨み憎む目がはっきりとわかった。
あの者こそわしの長きに渡る鬱積とした心を流してくれるのではないか。
あやつは、わしの願いをかなえてくれるであろうか。

だがテレーゼとシュザンナを巻き込みたくはないものじゃ。

テレーゼも何か感じたのか、あの者に挑発的な態度で臨んでいたの、
普段のテレーゼとは何か違うテレーゼを見たようじゃ。
テレーゼ自体はシュザンナのまねをしたと言っておるが、
あれはわしと同じかも知れん、５０年間周りを謀り続けたわしのよ
うに。
テレーゼがそうであれば、また違うやり方もできるやも知れん、
グリンメルスハウゼンに相談してみるか。

帝国暦４７７年　７月７日　　昼

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　ベーネミュンデ侯爵邸
シュザンナ・フォン・ベーネミュンデ

　本日テレーゼが憎っくき女を見に行くという。
そんな女見に行く必要がないと言ったが、『お父様を連れてくるし
泥棒猫を見てきます』と
健気なことを言ってくれたので送り出すことにした。

昼餉の用意をさせ待っていると、テレーゼが陛下をお連れしてくれ
た、
玄関へ迎えた時テレーゼとにこやかに手を繋ぎながら馬車から降り
てくる姿を見たとき
今までの鬱積した気持ちが消えていく気がした。

けれども少しは陛下に怨みの一つも差し上げようと、
『新しい寵姫の寝心地はどうですか』いってあげましたわ。
陛下は慌てて『テレーゼが嫌がったから、まだじゃ、元々国務尚書
等が勧めてきたので仕方なくな』

まあ寵姫のもとへ行くのも仕事のうちですから、そこのところは納得してあまり行き過ぎないように、
『若い寵姫を求めるのは仕方がない事ですがテレーゼの為にも館への行脚は出来る限りお願い申し上げます』と釘を刺しておきました。

今日のこともテレーゼが私のことを思い行ってくれたこと、
本当にこの子は健気で可愛いのでしょう、
ずっとずっと守りますからね、私の大事な大事なテレーゼ。

帝国暦４７７年　７月７日　　昼

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　　グリューネワルト伯爵邸

「ラインハルトいよいよ明日から幼年学校ですね」
「はい姉上」
「ラインハルト別に軍隊へ入らなくても、官吏とかでもいいのじゃない、あなたが危険なところへ行く必要はないのに」
「姉上僕は軍隊へ行って出世したいんです」
「無理をする必要はないのですよラインハルト」
「いえ自分の決めた道です」
「そうですか」

一人で大丈夫なのかしら、ジークが居てくれたら。
「ラインハルト一人で大丈夫なの？」
「大丈夫ですよ姉上、もっともキルヒアイスが居ればもっといいでしょうけど」
「それではジークが言いといえば入学できるよう
皇帝陛下にお願いしてみます」

「姉上そんな事が出来るのですか？」
「ジーク一人なら可能だと思います」
「姉上よろしくお願いします」
「けどジークが行きたいと言ったらですからね、無理やりはいけませんよ」
「わかっていますよ、けど絶対キルヒアイスは来てくれます」
「そうなるといいわねラインハルト」
「ええ」

第十話　ロイエンタールはロリエンタール？（前書き）

士官学校の一年後です

第十話　ロイエンタールはロリエンタール？

帝国暦４７７年７月８日

■オーディン　帝国軍士官学校　　リヒャルト・オイゲン

今年も新学期が始まる私も此で2年だ。
士官学校は2人部屋で1年と3年、2年と4年という感じで、上級生と下級生をペアーにして部屋割りをしている。
私が去年大いなる大志を抱いて入校したのが昨日のように感じる、まさかの皇帝陛下と皇女殿下のご臨席、そしてお言葉を賜るなぞ、平民としては破格のことだった。
さらに皇女殿下が『お兄ちゃん達、頑張ってくだちゃい』と仰った時の同期生の興奮ぶりは今でも耳に残っている、あれで皇女殿下のファンになった同期達が多数でた、かく言う私もファンだ。

そのあと陛下達は各授業を見学していったそうだが、3年の格闘授業で決勝者4人に陛下お褒めのお言葉を賜ったそうだ。
それよりも全校生徒が注目したのは、優勝者であるロイエンタール先輩が皇女殿下にキスされたという話だった、この話は噂好きな連中の手で夕方には全校生徒に知れ渡り、
テレーゼ皇女様ファンクラブ（当日の昼過ぎには雄志が作成していた）の面々が『ロイエンタールの女ったらしー！』や『ロリエンタール！』と騒ぐシーンも見られた。先輩方の話によるとロイエンタール先輩は入校当初から女癖が悪く彼方此方の女性と浮き名を流していたそうだ、彼女を寝取られた方も居るそうで、その男が我らがアイドル、テレーゼ皇女様のキスを奪ったと尾ひれが付いたらしい。
実際には頬にキスだったそうだが、食堂の灼熱ぶりは凄まじかったものだ。

そのほかテレーゼ皇女様が2位のビッテンフェルト先輩に銀の櫛を3位のワーレン先輩にはハンカチを賜った後が大変だった。
先輩方が貰った物を是非見せてくれと行列を作り、ハンカチに至っては香りをかがせろとか、変態じみた方々が多数出現した。
大騒ぎになりシュターデン教官が怒りまくっていた懐かしい思い出だ。

しかしその当事者の一人ビッテンフェルト先輩とルームメートの私にしては先輩が貰った櫛をコッソリ見せてくれだの、舐めさせろだの言われて困ったものだった。
ルームメイトとして先輩と住みだして4日目だっからどういう反応をして良いか迷った物だ、
先輩は概して豪快、大雑把、猪突猛進と来ているが悪い人ではないし、親身になって色々教えてくれている、だが歯止めがきかないときは自分が押さえ役として動かざるを得ないのが何ともいえないな。

2年に成ってルームメイトが変わるかと思ったが今年もビッテンフェルト先輩と同室である意味期待ある意味ガッカリな自分が居るが微妙なところだろうな。
先輩はさっきから洗面台で髪型の調整をしていて最後の調整にあの銀の櫛を使っている。
さてあと一時間もすれば新学期だそろそろ支度をしよう。

■オーディン　帝国軍士官学校　　フリッツ・ヨーゼフ・ビッテンフェルト

もう4年長かった士官学校も今年で終わりだ、去年は始まって早々皇帝陛下とテレーゼ皇女様がご臨席して銀の櫛までいただいた、

今でもテレーゼ皇女様の笑顔が目に浮かぶ、貰った櫛はこの髪型の仕上げに大事に使わせて貰っている、うむそろそろ支度をせんと遅刻してしまうな、「オイゲンそろそろ行くかー」

■オーディン　帝国軍士官学校　　アウグスト・ザムエル・ワーレン

あれから1年か格闘授業で3位になり陛下のお言葉と皇女殿下からハンカチを賜ったのが昨日の事のようだ、ハンカチは大事にしまっておこうとしたが、どこから噂が漏れたのか『見せろ』『香りをかがせろ』などの輩が多数寮の部屋にまで押しかけて来るようになった、部屋の鍵を開けようとする馬鹿まで現れたので、仕方なく額に入れ両親に預けて実家へと避難させた。本当は持ち歩きたいのだ仕方がない。

■オーディン　帝国軍士官学校　　オスカー・フォン・ロイエンタール

やっと4年だ去年は散々だった。
いきなり皇帝から金時計は貰うわ皇女からキスを貰うわ。
其れだけなら良いそれに尾ひれが付いて『ロイエンタールが皇女のキスを奪った』だの『5歳児に欲情するロリエンタール』『女の敵』『馬鹿野郎ー』『テレーゼ様汚した悪い奴』だのさんざん言われまくり、
遊び相手の女達にも『ロリなんでしょ』『ツルペタが好きなのね』『皇女様相手では分が悪すぎます』『皇女様のお相手を奪うことは出来ません』とか言われまくって女があまり寄りつかなかったのだ。

俺が何をしたと言うのだ、みんな勘違いではないか！

最近疎遠だったマールバッハの伯父もいきなり連絡してきてパーティーに招待され行ってみれば、
会う人それぞれに『テレーゼ皇女殿下より接吻を賜り有望な甥でございます』と紹介はするわ
『オスカーどうだ養子に成らんか』と言ってくるし、全くろくな事が有りはしない。
早く卒業して任務に付きたい物だ。

■オーディン　帝国軍士官学校　　ウォルフガング・ミッターマイヤー

今年も新学期が来たいよいよ俺も3年か、去年は学校中がテレーゼ皇女様で盛り上がっていたな、3年生のロイエンタールという先輩がキスしたとかで、大波乱が起きていたが、自分はエヴァ一筋だから気にしなかった。
卒業したらエヴァにプロポーズしたいが、エヴァが受けてくれるか不安なんだよな。

■オーディン　帝国軍士官学校
リヒャルト・オイゲン

大変な事が起こった。今年もテレーゼ皇女様が来て下さるはずだったのだが、校長フライエンフェルフ中将とシュターデン教官が昨年の新学期早々の学校で起こった騒ぎ（ロリエンタール事件）を鑑み今回はご遠慮願ったらしい、其れを聞いた在校生は大騒ぎを起こ

し、『校長を変えろ』『シュターデン消えろ』とか大変だった。皆ガッカリしている残念だ。

第十一話　刃物女とお友達（前書き）

第十話最後を補填しました。

第十一話　刃物女とお友達

帝国暦４７７年7月２５日

■オーディン　　ノイエ・サンスーシ　黒真珠の間　　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

本日9月から一緒に勉強するご学友との顔合わせが有るのでパーティーを開くことになった。
いやね一々そんなことでパーティー開くのも馬鹿馬鹿しいと思うんだけど、貴族社会じゃ此が常識で議会無いからこういう時に色々な決め事とかもするんだって。

いつもの通り『皇帝陛下の御為に』『皇太子殿下万歳』『皇女殿下万歳』
とか言ってるんだけど、大半は内心お父様を侮蔑してるんだよね。
虎視眈々と次の皇帝の位を狙う物達や媚びを売って要職に就こうとする者千差万別だね。

向こうでは、ルードヴィヒ皇太子がにこやかに挨拶しているんだあの元気な兄上が４８３年ぐらいに急死って怪しくない？殺られたんじゃないかと推測してますよ。
ＯＶＡでヘルクスハイマーがリッテンハイムに死産したと言われている兄上を殺したんじゃ無いかと言って、私は知らんがブラウンシュヴァイクならやりかねないと言っていたから、しかも４８３年と言えば父様も重篤に陥っていた、その時に後を継ぐべき皇太子が急死し残るのは門地の後ろ盾がない１歳ほどの赤子どう見てもブラウンシュヴァイク、リッテンハイムが絡んでいるとしか見えないんだ

よね。

フェザーン&地球教という可能性もルビンスキーが４８２年に自治領主に就任しているし前の自治領主は地球教の支持から逸脱して処分されている訳だし就任記念の実績作りに暗殺した可能性もあるな。ただあの時点では帝国同盟とも戦力はほぼ拮抗。所謂４８対４０対１２の状態でわざわざ帝国が滅ぶ様なことをしないだろう、後半のルビンスキーなら独自の判断でしただろうけどあの当時そんな力はないはず
しかし注意しておくことには手を抜かないようにしないと駄目だな。

しかし今日は私のご学友候補と顔合わせと家庭教師役やお姉様役の夫人や令嬢も来てるから会場に大輪の花が咲いたがごとくなり、その花に群がる貴族の子弟がナンパして居るみたいに見えるね。

私の所にはご機嫌伺いに来る方々の多いこと多いこと、腐っても皇帝陛下の権力は未だあるようです。
アマーリエ、クリスティーネ姉上達は既に売却済みで残りは私だけだからみんな来るよね。

各爵や軍の重鎮達や宮廷の廷臣達の子弟達がわらわらと来ては挨拶をしていくし挨拶し疲れます、帝国貴族だけで４０００家以上居るけどまあクロプシュトック候のようにハブされてる方々も居るから全部じゃないけどね。
まあ男児はご学友には成らないから将来の許嫁候補て感じだね。

さっき来たのはあのフレーゲル、来た瞬間ウゲッて思ったけど顔に出さないのが仕事だしね、『皇女殿下私も来年には士官学校入校でございます、是非来年の視察ではエスコートさせていただきたく存じます』

とか言ってくるから適当に煙に巻いておいたよ。
ミュッケンベルガー元帥いやこの頃は大将の子息のフリーデグットさんは１４歳だけど大将ソックリな堂々とした体格で好感の持てる方でしたね。

おっ今度来たのはどっかで見た顔だけど誰だっけ？んトゥルナイゼン・・・ああああのラインハルトの幼年学校同期生でへまやって精彩を欠いて閉職に回されたトゥルナイゼンか伯爵だったんだな、まあ普通にご挨拶っと。
今度はマールバッハ伯爵がロイエンタールを連れてきたよ、まあ伯父甥の関係だから有るんだろうけど、にこやかに『マールバッハ伯レオンハルトで御座います、皇女殿下にはご機嫌麗しく、此処に居るのは我が甥オスカーで御座います。先年は皇帝陛下皇女殿下には類い希なる栄誉をいただき祝着至極に御座います』

『マールバッハ伯が甥オスカー・フォン・ロイエンタールで御座います皇女殿下ご機嫌麗しく存じます』
「マールバッハ伯痛み入ります、ロイエンタール卿一年ぶりですね息災にしていましたか」
「はっ皇女殿下も御息災で何よりで御座います」
こんな感じで挨拶するんだけどロイエンタールは嬉しくないんだよねきっと、女性に対して母親の増悪があるから。

オフレッサーとかは未だ此処に出られるほどの地位じゃないみたいで姿が見えない会ってみたいのに残念、いずれ装甲擲弾兵の閲兵を父様に頼んで連れて行ってもらおう、今年士官学校へは校長とシュターデンのせいで行けなかったのだから、せめて卒業式には参加したいな。

一休みして午後からはご学友候補のご令嬢方とのパーティーです。

同じ歳だけどブラウンシュヴァイク公令嬢のエリザベートとかは来てないんだよね。

館で古典文学を教えて貰う講師としてベアトリクス・フォン・マリーンドルフ伯爵夫人が紹介されたんだけどヒルダのお母さんだよね？一緒に付いて来ている子供ってヒルダじゃない？

「ベアトリクス・フォン・マリーンドルフと申します、この度皇女殿下へ古典文学をお教えすることと成りました」

「ヒルデガルド・フォン・マリーンドルフと申します以後お見知りおきを」

「よろしくお願いしますね」

ヒルダショートカットじゃない綺麗なロングじゃんいつ頃切ったんだろう。

お外の学校でも習うらしいだけど来た方が、ヴェストパーレ男爵夫人だったけど年取ってるよ似てるけど年増です、どうやらお母さんのようですね。

「マルグリート・フォン・ヴェストパーレ男爵夫人で御座います、この度皇女殿下のご教育の一環として我が校の総力を挙げますのでご安心下さい」

総力なんか挙げなくて良いからさ適当にいこうよ＞＜

「マグダレーナ・フォン・ヴェストパーレと申します以後お見知りおきを」

男爵夫人だこの美少女が芸術家の愛人を7人も囲う方になるのですね、メックリンガーに未だ会ってないのかな？今度聞いてみよう。

次から次へと教師役とお姉様役とのご挨拶が続いていよいよご学友登場か。

ケルトリング侯爵家のクラリッサ嬢、エーレンベルク元帥の曾孫の

ブリギッテ嬢、メクレンブルク伯爵家のヴィクトーリア嬢と順番に紹介されていく5人いるそうだけど次の言葉にん？って思ったです。

リヒテンラーデ侯爵家エルフリーデ嬢？？？てか彼女刃物女じゃないか？うわーリヒテン爺さん養女にして入れてきたのかよ、刺されるのはいやだー！けど見た限り大人しくて可憐な美少女なんだけどな。

やっぱり家族殺されて極寒の流刑星に流されたのがやさぐれさせたんだな。

「皇女殿下私エルフリーデ・フォン・コーラあっリヒテンラーデと申しますよろしくお願いいたします」

間違えなんて可愛いじゃん彼女を不幸にしないように頑張ろう。

最後が・・・えっグリンメルスハウゼン子爵家のカロリーネ嬢・・・・・グリンメルスハウゼン爺さんの縁者だよね、そうだよね？

「皇女殿下私カロリーネ・フォン・グリンメルスハウゼンと申しますよろしくお願いいたします」

えーと取りあえず後で聞けばいいか今日はグリンメルスハウゼン爺さん来てないみたいだし。

「私こそよろしくお願いいたします」

しかし爺さんこんな孫？いたのか。

まあ此で9月からは6人で勉強だ、科目が多くて憂鬱だね。

第十一話　刃物女とお友達（後書き）

明日から出張でＵＰ出来るか未定です。

第十二話　裏の事情（前書き）

出かける前に今日の分だけは更新、今夜は難しいです。

第十二話　裏の事情

帝国暦４７７年７月２５日

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　黒真珠の間　ヨヒアム・フォン・フレーゲル

本日我が妻になるテレーゼ皇女のご学友お披露目会が開かれた、許嫁候補も居るだろうという輩も居るが其れは間違えだ、テレーゼ皇女の夫は私ヨヒアム・フォン・フレーゲル男爵以外には考えられないのだ。本日も謁見時『皇女殿下私も来年には士官学校入校でございます、是非来年の視察ではエスコートさせていただきたく存じます』と言ったら、にこやかに接してくれたのだ。伯父上も全面的に協力してくれるから他の連中には負けはしないのだ。

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　黒真珠の間　フリーデグット・フォン・ミュッケンベルガー

祖父に連れられテレーゼ皇女殿下のご学友お披露目会に参加した本来なら幼年学校４年であるから授業があるのだが免除されたのだが、本来ならばミュッケンベルガー伯爵家の本家たる再従兄弟が出るのが普通なのだが既婚者なので私にお鉢が回ってきたようだ。どうやらお披露目会と将来の婚約者候補を絞り込むための会だったようだ。テレーゼ皇女殿下とお話ししたが可愛らしいかたであった。フレーゲル先輩がニヤニヤと自分の世界に入っていたようだが気にしないことにした。

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　黒真珠の間　オスカー・フォン・ロイエンタール

マールバッハの伯父にどうしてもと言われ行く気がなかった不敬にあたると言われ仕方が無く皇女のご学友お披露目会なるパーティーに参加した。
仕方がなかったがパーティーに群がる無数の艶やかな花達、手折ってみたいと感じたが皇女への挨拶に連れられ挨拶をせざるを得なくなった。伯父だけ挨拶で良いだろうと思ったら俺に振ってきた『マールバッハ伯痛み入ります、ロイエンタール卿一年ぶりですね息災にしていましたか』

はぁ！息災じゃないお前のせいで去年は散々だったんだぞと言えないから『はっ皇女殿下も御息災で何よりで御座います』と心にもないことを言ってきた。しかし伯父が又噂を流すかもしれないなんとかしてくれ！

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　黒真珠の間　ヒルデガルド・フォン・マリーンドルフ

お母様に連れられてテレーゼ皇女殿下のパーティーへ出席した、お母様が古典文学を教えるそうで私はお姉様役で遊び相手とかするらしい、テレーゼ様はにこやかでたいそう可愛く可憐なかたでした、今度会えるのが楽しみです。

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　黒真珠の間　マグダレーナ・フォン・ヴェストパーレ

お母様の学校でテレーゼ皇女殿下のご教育をお手伝いすると言うことで、ご学友お披露目会に参加しご学友も観察するために一緒に参加した。皇女様は私顔を見ると一瞬ジーとみましたがすぐに笑顔で挨拶を返していただきました、9月からは私も参加する事になりそうですから頑張らなければなりませんね。

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　黒真珠の間　エルフリーデ・フォン・リヒテンラーデ

緊張するな、7月になっていきなりリヒテンラーデ大叔父様から父に私を養女に欲しいと連絡があった何でも皇女殿下のご学友として私が選ればれるそうでビックリした、今日初めて皇女殿下にお会いしてご挨拶したけど、いきなり自己紹介で名字を間違えるんて恥ずかしいよー皇女様は変に思わなかったか其れが不安だよ。けど優しそうなかたで良かった9月からが楽しみです。

■オーディン　某所

「今宵のパーティーは如何でございました」
「小娘の学友選びと婚約者候補選びが茶番だったな」
「そうでございますか」
「うむいくら教師が良くても役に立たん知識ではどうしようもあるまえ」
「御意」
「其れよりあの女の流産はどうした」
「あの者からですと自然に流産させないと怪しまれる為特殊な薬を使うとの事です」

「急がせよ」
「御意」

■オーディン　グリンメルスハウゼン子爵邸　リヒャルト・フォン・グリンメルスハウゼン

テレーゼ皇女殿下のご学友お披露目会に参加したカロリーネが帰ってきた。
「カロリーネご苦労であった」
「はっ御屋形様」
「テレーゼ様はいかがであった？」

「御屋形様の仰る通り皇帝陛下と同じかと」
「やはりな、自分をお隠し有られる方か」
「御意」

「兄も暗殺され自らも生まれながらに暗殺されかかったお方じゃ陛下と同じ様に成られるのも判る気がするの」
「御意」
「カロリーネ済まんの無理を言って」

「何を仰います御屋形様、私のような者を養女として育てていただき何不住無く居られるのも御屋形様のお陰にございます」
「此から辛かろうがテレーゼ様を守ってくれ」
「御意」
「カロリーネあまり鯱張るでないぞ」
「御意」

第十三話　退屈なる日々（前書き）

相変わらず遅い時間経過。

第十三話　退屈なる日々

帝国暦４７７年８月１５日

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　桃珊瑚の間　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

本日９月からの勉強で宮殿内からヴェストパーレ男爵家が主催する学校へ通うための侍従武官との初顔合わせが行われるのです。お母様は私が外の学校へ通うのは前代未聞だと反対したのですが、お父様が世間を見るのもよいことじゃとお母様を説得し（お父様がお母様のところへ通う回数を増やす約束をしたらしい）週２日通う事に決まり残り２日は館で勉強し１日は見学等の野外学習日で残り２日が休日という感じになるそうだ。

女官に連れられて部屋に入ると既に４人の男女が待っていました。男性２人女性２人で身のこなしから相当な腕の持ち主ではと感じました。

最初にリーダーらしき３０代に見える男性から挨拶がありました。

「皇女殿下ご機嫌麗しく、この度殿下侍従武官に任命されました、クレメンス・ブレンターノ大佐で有ります」

続いて２０代ぐらいの男性が「皇女殿下ご機嫌麗しく、この度殿下侍従武官補に任命されました、ハインリヒ・フォン・ヴィッツレーベン大尉で有ります」

それから２０代前半ぐらいの女性士官から「皇女殿下ご機嫌麗しく、この度殿下侍従武官補に任命されました、マルティナ・フォン・バウマイスター中尉で有ります」

最後に同じく２０代前半ぐらいの女性士官から「皇女殿下ご機嫌麗

しく、この度殿下侍従武官補に任命されました、ヴァーリア・ディーツゲン少尉で有ります」

４人から丁重に挨拶がされました。こちらも此から命を預ける訳ですから丁重にぺこりとお辞儀をしながら「テレーゼ・フォン・ゴールデンバウムです、此から苦労をかけると思いますがよろしくお願いいたします」

あまりの丁重さと腰の低さに驚いているようです。普通皇族どころか貴族もこんな態度取らないよね。

まあ最初が肝心ですし嫌々守られるよりは愛想良くしておいた方が良いじゃないですか。へんな貴族の紐付きだったら嫌ですけどね、その辺は追々判るでしょう。

顔合わせが終わって４人が退席したので自室に帰って何となくボーッとしながら考え事。

今日は日本じゃ終戦記念日かぁもう日本もないし関係ない日になってるんだけどね、元日本人としてはしみじみする訳ですよ、甲子園も高校野球もない夏の日。

スイカが食べたい気がしますね後で侍従長にスイカがないか聞いてみましょう。

そう言えば来年に第４次イゼルローン攻略戦が有るはずですが原作に載って無いので判らないんですよねＯＶＡでアキレウス級旗艦戦艦がトールハンマーで沈むシーンが出てますが、トールハンマーで沈んだアキレウス級旗艦戦艦は記録上無いので４７８年に戦没したらしい第４艦隊旗艦アキレウスが該当するんじゃないかと言われてましたからね。けれども来年イゼルローン攻略戦が有るとは言えませんしね、何か手は無いですかね。

そう言えば同盟の大規模戦闘のパターンは評議会選挙の年統合作戦

本部長改選の時に活発化ましたね、帝国領侵攻作戦が前者でしたし、ヤンのイゼルローン攻略が後者でしたね。

同盟の選挙と改選のパターンさえ判ればかなり正確に攻撃がわかるのでは無いでしょうか、研究する価値はありそうですね、問題は一人でしないと行けないと言うことで時間が足りないし資料が集まるかどうか、せめて軍務省と統帥本部の協力は欲しいが、あまり動き回るのも駄目だし・・・ん・・・困った知識も宝の持ち腐れだよ。

カロリーネと学友になれたからグリンメルスハウゼン爺さん家に遊びに隠れて会いに行って相談するかな時間いつが良いんだろう本人に聞かなきゃ駄目だから暫くはむりだな。

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　小部屋

「グリンメルスハウゼンその娘がカロリーネか」
「陛下そうでございます」
「カロリーネ、テレーゼはやはり儂と同じか」
「皇帝陛下皇女殿下は韜晦なさっております」

「鯱張らずに喋るが良いぞ」
「いやしかし恐れ多い事なれば」
「良いのじゃ儂は堅苦しいのは嫌いでな」
「カロリーネ此から陛下には直接度々連絡をするのだからそうせい」

「はっ陛下」
「未だ堅苦しいぞハハハ」
「してグリンメルスハウゼン今回付けた護衛はどうじゃ？」
「私の部下から選りすぐりの者を選びました、ケスラーは私の代理

ですので動かせませんが、ブレンターノ、ヴィッツレーベン、バウマイスター、ディーツゲン４人とも腕利きでございます」

「女官も４人紛れ込ませております」
「他には？」
「外出時には装甲擲弾兵出身者からなる護衛部隊を２個小隊用意しております」
「１００人か見事じゃの」
「しかし油断は禁物でございます」

「うむ、カロリーネご苦労じゃがテレーゼを頼むぞ」
「もったいないお言葉でございます」
「これ。またじゃな、ハハハ」
「カロリーネご苦労」
「陛下失礼いたします」

「さてグリンメルスよ幼年学校のあの者はどうして居る」
「はい成績は優秀であります共に連れて行った赤毛者も成績優秀でございます」
「ほう思わぬ拾い物であったか」

「そうですな、しかし」
「どうしたのじゃ？」
「あの者達校内でも孤立しており度々喧嘩沙汰を起こしており、さらに姉の悪口を聞くと逆上し石で相手の頭を殴り続けました、幸いにも死者は出ておりませんが問題になっておりまして、放校の可能性も出ております」

「うむその辺は儂が姉に頼まれたとして事を荒立てないよう伝えさせよう」

「そうでうすな陛下」
「しかしあの者がどう化けるか楽しみよのフフフ」
「グリンメルスよ此からも頼むぞ」
「御意でございます」

第十四話　退屈なる日々その２（前書き）

すみません、今回話の関係上凄くつまらないです。

第十四話　退屈なる日々その２

帝国暦４７７年９月１日

■オーディン　　テレーゼ・フォンゴール・デンバウム

本日より憂鬱な授業が始まります、夏休み明けなのに宿題未だ出来てない心境です。
いやね歴史、科学、国語、数学、語学、とかの実用な物は良いんだよ、けど貴族のたしなみお香当てやお茶のブレンド当て（伊藤園にでも勤めるつもりか？てかヤンにやらせれば１００点じゃねー？）とか実用的じゃねーーーーーーーーー！

通うために用意された地上車を見ればあくまで外見は普通の車の様に見えるんだよね外見はさ・・・・でもさーサイズがでかすぎ戦車みたいな大きさなんですこれ、乗ってみると又々冗談かと思うような装甲板ですガラスも厚いです後で聞いたら戦艦用装甲板の流用だそうです・・・てかさ其処までしないと外出られないなら出ること無いんじゃねーの？と思うが皇女じゃあ仕方がないかぁ。

んで朝７時に起きてお母様と朝食後身支度をしたらお出かけです、ただねーノイエ・サンスーシってだだっ広いから町へ出るまで４０分かかるので飽きるよね、出れば２０分で着くのにですよ、宮殿内だけでもヘリでも使いたいですよね。

９時にやって来ました、ヴェストパーレレ家の学校へ皆さん来てらっしゃいます、因みに学友５人と共に学園長たるヴェストパーレ男爵夫人にご挨拶です。

早速の授業は無いですが此行われる教育の方針とか何を習うとか先生はどなただとか淡々と説明されていきます。
其れが終わると懇談会で先生方と我々生徒達が雑談します、お菓子を摘みながら紅茶で喉を潤す、んー良いねこのままなら良いんだけどね、明日から地獄が始まるのだね。

　其れで2日目早速文学の勉強ですか、まあ良いですけど。美術の勉強ですね教師を見るとメックリンガーじゃないですね普通のおばさんです、未だ娘さんはメックリンガーは未だ付き合ってないようですね、8人も愛人居るなんて親が聞いたら泣くよねふしだらな娘ですって、まあそのうちメックリンガーを連れてくるんだろうねその時が楽しみです。
夕方はみんなでお茶会明日は用事がないのでお休みです。

本日は何もやることがないのですよ、仕方がないので作戦を考えましょう。
どっかオーディンへのルートの惑星にグランドキャノン作れないかなと妄想、金と時間がかかりすぎて没、
移動要塞で機動防御だとガイエスブルグで失敗検討を求める、んーろくな事が考えつかんなこんな日はやめよう。

　今日明日は宮殿で習い事です、学友が来てダンスにお花にお香にお茶に歌とオペラ鑑賞。
ああああくびが出ますね、習いたいことが全然出来ません。
歴史と科学と軍学とか習いたいのですが駄目ですね、お父様に相談するか迷いますね。

　休みの日です今までは毎日が休みでしたが休みが減った割にはやることが有りません退屈です。
いっその事何処かへ行きたいのですが母様は妊娠中父様は謁見で暇

がないそうですタイミングが悪いですね、誰かの家に行こうにも先に連絡して準備をしないと駄目なので時間がありませんでした、次回からはちゃんと連絡をしておきましょう。

帝国暦４７７年１０月

■オーディン　　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

９月から始まった勉強も一ヶ月が過ぎ少しずつ落ち着きを得て来ました。
週１回のペースで順番に学友の家にお呼ばれし同じように週１回で館へは５人全員を呼ぶ形で過ごしてきました。

最初にリヒテンラーデ侯爵家へ行きましたよ、流石国務尚書の家ですね立派です凄いですね、まるで美術館のようです訪ねると侯爵自ら出迎えてくれましたよ。この人映像で見るとスゲー悪そうに見えるんですよね、ところが我々を迎えるときには笑顔なんですよ不気味ですね。越後屋とか似合いそうな感じがして少し笑いそうになりましたよ。

エルフリーデは映像を見た感じと全然違って優しいよい子ですから可愛くて仕方有りませんからロイエンタールの毒牙から守ってあげたいですよ。リヒテンラーデ侯とも話をしたいけど今の年齢じゃ駄目でね何とかしたいのは山々だけど年相応の対処しかできないです。

次がケルトリング侯爵家この家は武人の家系ですからね同盟のブルース・アッシュビーにボコボコにされてから家運が傾いたんですが、ミュッケンベルガー伯爵家とのつながりは非常に強いですから

ねその筋から復活しようと頑張ってるんですよね。やはり当主のケルトリング少将がお出迎え、雰囲気からして前線方の武人に見えますね、ただ此処も同じで話を殆ど聞くことが出来ないんですよね、折角の現場の声が聞こえないもどかしかが残念です。

メクレンブルク伯爵はごく普通の門閥貴族で大げさでなんかランズベルク伯を思い出しましたよ、可もなく不可もない極点的な門閥貴族ですね。相談等はしてもしょうがないタイプふむ員数あわせで集めたような人材だね。

エーレンベルク元帥は子爵です、元帥本来は仕事だけど皇女が来るというのでお出迎えしてくれました、きっと帰ったら書類の山でしょうすみませんね。此処でも当たり障りのない話ばかりで終わってしましました。やっぱ1対1じゃないと話せないね。

やって来ました、苦節6年8ヶ月会いたい会いたいと思っていた、グリンメルスハウゼン子爵家へ今日突撃です。ワクワクしますね到着するとグリンメルスハウゼン子爵とカロリーネがお出迎えしてくれました。おおっ初めて見るがこの頃確か67歳ぐらいか未だ未だ元気に見えるこの老人が彼のグリンメルスハウゼン文書を遺した訳ですね、今回は誰がその文書を手に入れるんだろうか気になるね。

早速ご挨拶「この度はお宅にお呼びいただきありがとうございます」
「皇女殿下には我が館に行幸頂き誠にありがとうございます」
よし此でアポの準備ぐらいは出来たね、後はどのように話をするチャンスを作るかだね。
カロリーネさんは控えめな性格で表に出てこないタイプですね。お爺さんと一緒で目立たぬような感じですよ。

こうして9月から始まったお宅訪問は順当に進んでるです。

第十五話　暗雲（前書き）

書いてて感情移入してしまった。

第十五話　暗雲

帝国暦４７７年１２月

■オーデイン　ノイエ・サンスーシ　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

グリンメルスハウゼン爺様に初遭遇してから既に３ヶ月近くその後会いに行っても軍務や領地へ行っているとかで全然会えません、こりゃ困った避けられているのでしょうか。カロリーネに聞いてもちょうど都合が悪いらしいですと言われています。何とかせねばあかんな。

■オーデイン　ノイエ・サンスーシ　小部屋

「グリンメルスよテレーゼに会ってやらんのか？」
「今少し資質をみております」
「そちが見て後どのくらいじゃ」
「年明けにはよいかと」

「どのような事を聞きたがっておるのじゃ」
「カロリーネによると陛下の若い頃の話を色々聞きたいからと仰っているそうです」
「ふむあの頃のことか」
「ですなあのころのこでしょう」

「父の威厳は大丈夫かの」
「陛下のお心もテレーゼ様なれば判りましょう」
「まあそうじゃの」

「恐らくその話は口実でありましょう、相当に政治、歴史、軍学などに興味を持たれておりますからそちらの話がメインかと存じます」

「これは楽しみじゃ逐次伝えるように」

「判りました」

「シュザンナの方は大丈夫か」

「こちらも手練れを付けておりますれば」

「うむ頼むぞ」

「はっ」

帝国暦４７７年１２月２４日

■オーデイン　ノイエ・サンスーシ　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

本日はクリスマスです。この時代にもキリスト教は廃れたようですがクリスマスは有るのです不思議だね♪

お母様は臨月なので参加せず、宮殿でパーティーよりはヴェストパーレ男爵邸でパーティーをすることにしました。

在校生や教え子さん達が皆さん着飾って来ています、男性は居ないです女だけのパーティーです。

クラちゃんブリちゃんリアちゃんエルちゃんカロちゃんみんなかわいく着飾っています、話すことは誰それの御曹司は格好いいとか誰それは嫌だとか、かしましいですよ。ヒルダさんもマグダさんも来てますから話が弾みます。

聞いているとヒルダさんこの頃から真面目ですね、マグダ姐さんは

この頃既にパトロンを考えているような口調ですね早い早いですね。
9時までパーティーしてお開き大人の方はこれからご用があるそうです、知ってますけどね、子供はおとなしく帰りますよふふ。

帝国暦477年12月26日

■オーデイン　　ノイエ・サンスーシ　　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

クリスマスから2日後、本日お母様の出産予定日です。今までなら何らかの妨害が何者からか行われてきたのですが今回はそれに鑑み身元のしっかりした者を付けていましたので安心できるそうです。
大きなおなかで辛そうなお母様は先ほどから陣痛がして分娩室へ入って行かれました、私のこともありますので出産後の処置に3人が入り処置するそうです、此なら相互監視が出来ますから安心ですね。

分娩室に入って2時間あまり経ちますが未だに出てきません心配です。
3時間ほどでやっと出てきましたが、侍従長の顔色が悪いです。

「まさかお母様が何かあったのですか?」
「いえ侯爵夫人はご無事ですがお子様の方が・・・・・」
「子供がどうしたのですか?」
「お生まれに成ったのですが呼吸をしておらず懸命の処置も虚しく先ほどお亡くなりに成りました」
「え・・・・・・・・」

えっ死んだ・・・死んだ・・・何で何で・・・何でこんな所だ

け原作と一緒になるの！！
そんなそんなこの子は無事に生まれてきて育つはずじゃなかったの。
みんなで守ろうとしたのに何で死んじゃったの・・・・・辛いよ辛すぎるよ幾ら原作がそうだからって、生まれる前から死を宣告されているなんて酷すぎる。あまりに無情すぎるよ！

殺されたんだきっと、兄上みたいにそして私みたいに殺そうとして殺されたんだ！！
ブラウンシュバイクかリッテンハイムかフェザーンか地球教か誰にしても許さない絶対許さない必ず敵を討つ！！

みてやがれ奴らを地獄の底へ追い詰めてやる！！
自分らの犯した罪を思い出すがいい！！

「皇女殿下がショックで興奮しておられる女官はお連れして差し上げろ」
「皇女殿下さあ行きましょう」
「けどお母様が・・・！」
「ご心配をお掛けしては反って侯爵夫人に障ります」
「判りました」

部屋に帰ってきて一人にしてもらい、この世界に来て初めて思いっきり泣きました、初めて出来る弟か妹大事にしたいと思ったそれなのにそれすら許されないこんな世界の皇帝一家って辛いよね。
会えなかった弟か妹天国で幸せになってね。必ず敵はとるから見守っていてね。

■オーデイン　ノイエ・サンスーシ　シュザンナ・フォン・ベーネミュンデ

３人目の御産ですから楽に出来ましたが、生まれた子を見て思わず天を呪いたくなりました。子供は奇形児だったのです、私が悪いのでしょうどうすればいいのか途方に暮れ自分を責めました、目に浮かぶのはテレーゼの笑顔ですこの様な劣悪遺伝子を持つ私がテレーゼの母親として一緒にいられる訳がない、ルドルフ大帝時代であれば母娘共々死を賜るはずです。

たとえ今の陛下でも私はテレーゼと引き離されるでしょう。テレーゼの為ならこんな母親は居ない方がいい死んでしまいたい、丁度手術台上にメスがある、テレーゼこんなお母さんを許しておくれ。幸せに暮らすんですよ・・・私の大事な大事な可愛い可愛いテレーゼ・・・・・

「きゃーーーーー侯爵夫人!!」

第十六話　蜉蝣の命

帝国暦４７７年１２月２６日

■オーデイン　　ノイエ・サンスーシ　　フリードリヒ４世

シュザンナが本日儂の子を出産する、テレーゼが生まれて６年又儂の子が出来るとは、帝国を滅びへ向かわせるこの儂に。
出産時には間に合わなかったが３時間後に分娩室へしかし奇形児が生まれシュザンナがショックを受けていると聞き急ぎ向かった。直ぐさま部屋に入ると『きゃーーーー侯爵夫人!!』と悲鳴が聞こえ見るとシュザンナがメスを右手に持ち自らの喉を突こうとしていた。
儂は無我夢中でシュザンナの手を握りしめた、その際手のひらが切れたが、そんなことは気にならなかった。

「シュザンナやめるのじゃ!」
「陛下お止め下さりますな」
「馬鹿なことはするではない」
「テレーゼ・テレーゼの為でございます」
「テレーゼの為じゃと?」

「私のような劣悪遺伝子の持ち主が母親ではあの子が不憫です」
「その様なことはない!」
「いいえあの子の為です」
「違うのじゃシュザンナ、違うのじゃ」
「は?」
「まず落ち着くのじゃ、そして儂の話をよく聞くのじゃ」

女官達が席を外していくの、グリンメルの手の者達じゃな
「良いかシュザンナ今回の事はお前のせいではない」
「そんなお慰めを・・・・」
「違うのじゃ、此はゴールデンバウムの血なのじゃ」
「陛下のお血」

「そうじゃルドルフ大帝以来ゴールデンバウムの血は汚れ続けてきた、代々死産、奇形児、異常者などが多数出てきて居るのじゃ、だからシュザンナおぬしのせいではない」
「しかし」
「儂の子の内４人は流産、９人は死産、９人が成人前に死んでおる、儂の兄弟も７人が病死じゃ、ゴールデンバウムの血は濁り生命力が衰えておるのじゃ」

「しかし私の血にも有るやも知れません」
「テレーゼを見よあの子は五体満足で何不住無い体で生まれてきたではないか、これがシュザンナお前の功績じゃ」
「陛下」
「テレーゼの為にお前は必要なのじゃ母親を失ったとしたら、どれだけ悲しみ傷つくであろうか、そんなことをするでない」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・

「陛下判りました、テレーゼの為に私は生きます。テレーゼを守り慈しむます」
「判ってくれたかシュザンナ」
「はい陛下、あっお手が」

「よいよいシュザンナが無事だったのじゃこんな傷何ともないわ」
「お手当をせねば成りません」
「たれぞ陛下のお手当を」

「さて、シュザンナよ。テレーゼが非常に興奮しているそうじゃ、此から参ろうぞ」
「陛下お供いたします」
「親子三人で語ろうぞ」

帝国暦４７７年１２月２６日

■オーデイン　ノイエ・サンスーシ　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

ちくしょうちくしょうワンワン泣いていると、女官がお父様とお母様が会いに来てくれたと伝えに来てくれた。お父様とお母様が来てくれた、悲しいはずなのに来てくれたすぐに会いたい、走って出て行った。

「お母様ー、お父様ー」
「テレーゼー」
「テレーゼよ」
「お母様、お母様赤ちゃんが赤ちゃんが・・・・」
「テレーゼ残念だけど駄目でした」

「殺されたのですね！」
「テレーゼ其れは違うぞ」
「お父様違う訳無い！」

「テレーゼ本当に違うのよ」
「お母様まで悔しくないのですか！」

「テレーゼ落ち着きなさい、そしてよく聞きなさい」
「お前には辛いかも知れんが、此はゴールデンバウムの宿痾なのじゃ」
「宿痾？」
「そう長い間溜まり溜まった悪いところじゃ」
「悪いところ」
「幼いお前には辛いが、我々の血では赤ん坊が育ち辛いのじゃ、そのため今回の子も死んでしまったのじゃ」

「テレーゼご免なさい貴方に弟を生んであげられなくて」
「お母様が悪いんじゃない」
「お母様もお父様も悲しいんだから、三人で赤ちゃんが天国で幸せになれるようにお祈りしようよ」
「テレーゼそうですね」

「テレーゼそうじゃな」
「今日は一緒に寝ましょう」
「お母様お体は大丈夫なのですか」
「大丈夫ですよ」
「儂も一緒で良いかな」

「はいお父様」
「身支度をしましょうね」
「お父様お母様　、だいっすき」

両親と寝る準備しながら今回のことを考えていた。
今回は本当に死産だったのか、怒り狂ったがお父様お母様が違うと

いってくれた、可哀想な弟よ天国で幸せにしておくれ。

ゴールデンバウムの血か、確かに遺伝子異常が多い系統だし生命力が弱っているのか。お父様お母様を悲しませ無い為に私がしっかりしないと、今日は怒りに任せて切れてしまったけど、命を守る為に冷静さを強化しないと駄目だ。

「テレーゼそろそろ寝ましょう」
「はーぃお父様お母様」

■オーディン　某所

「ハハハハハようやった」
「あの者見事に任務を成功させてくれました」
「そうよ、一時は失敗したかと思うたが見事にやってくれた」

「流産を狙いながら其れが失敗したときの為に奇形児と言う次作を行っておりました」
「奇形児とはゴールデンバウムの血のなせる技か？」
「其れもございますが、フェニトイン、プリドミン等の薬を使うと奇形児率が非常に上がるそうでございます」

「なるほど其れは此からもつかえるの」
「御意」
「あの者には此からも逐一繋ぎをするようにせよ」
「御意」
「ハハハハハアーハハハハ」

第十六話　蜉蝣の命（後書き）

黒幕が動いていました。

第十七話　グリンメルスハウゼン子爵（前書き）

やっとグリンメルスハウゼン子爵の話に、ヤンが出るのはいつの日か。

第十七話　グリンメルスハウゼン子爵

帝国暦４７７年１２月２７日

■オーディン　　ノイエ・サンスーシ　　ベーデミュンンデ侯爵邸　　テレーゼ・フォンゴールデンバウム

昨日は悲しいことがありました。弟が生まれそして死にました。取り乱し酷い状態でしたが父様母様によって慰められ勇気付けられました。今日から又頑張ろうという気力がわいてきました。

朝起きると父様母様が見守ってくれていました嬉しかったです。小声で父様が『テレーゼや此からのことを思うのであれば年明けにもグリンメルスハウゼンに会ってきなさい』と言ってくれました。私は『はい』と返事をしました。

その後支度をして朝食を食べながら赤ちゃんのお墓はどうなるのと聞くと皇室専門の墓地に埋葬されたとのことです、早いと思ったら生きられなかったので早く天国へ送ってあげるとのことでした。そんな風習があるのかと思いました。

取りあえず午後にお参りに行き冥福を祈りました、人生ってむなしいね。

帝国暦４７８年１月１日

■オーディン　　ノイエ・サンスーシ　　テレーゼ・フォンゴールデンバウム

新年になりました。今年こそは良い年でありますようにと大神オーディンに祈りました。
さらに元日本人として初日の出を見ながら天照大神に祈願しました。

新年ですので身支度をした後いつもの通り、黒真珠の間で新年パーティーです。
喪中の習慣がないのか或いは帝室としての義務でしょうか、父様は若干思い込んだような顔で笑顔を無理に作って居るようです。

私としては欠席したいのですが義務ですから仕方がありません。いくら転生者でも今の六歳児の精神がメインですので、身近の死にはメンタル面で非常に辛いです。
皆さん王子死産を知っていますが、さすがは貴族神経が図太いかライバル死んで嬉しいのか、全然平気で談笑してますよね。
兄上は軽いため息を吐きながら談笑に応じています。

マグダ姐さん、（いやねお姉さんと言うより姐さんじゃないかと我ら6人組では呼んでるんですよ）とヒルダお姉さんが来てくれて慰めてくれます、因みに敬語は止めてと言ってるんですが、正規の時には矢張り敬語なんですよね。

「皇女殿下この度はご心中お察しいたします」
「男爵令嬢お心遣い痛み入ります」
「皇女殿下のお心を思うと胸が痛みます」

「伯爵令嬢お心遣い痛み入ります」
取りあえずの社交辞令をして少し離れた所で雑談。
普段は敬語なしでお願いしているのです。

「弟さんは残念な結果だったわね」
「死産だそうですね」
「そうなのです、外因的なことを聞いたのですが正真正銘の死産だと母から聞きました」
「気を強く持ちなさいね私も出来る限りのことをしますわ」

「私もお手伝いできることはします」
「お姉さん、お姉さんありがとうございます、頑張りますんで今年もよろしくお願いいたします」
「ええ今年もよろしくね」
「今年もよろしくおねがいします」

「そう言えばお姉さん、グリューネワルト伯爵夫人とお友達になったそうですね」
「ええアンネローゼがみんなから爪弾きにされて気の毒で母性本能を擽られましたわ」
「伯爵夫人はどのようなお方なのですか」

だいたい原作で知ってるけどね、男爵夫人の見識を聞きたいのがね。
「私も聞きたいですね」
「彼女は凄く大人しくて物静かで優しく料理も上手よ」
「綺麗な方ですよね」
「そうですね」

「テレーゼ様～」
「クラちゃんブリちゃんリアちゃんエルちゃんカロちゃん」
「今年もよろしくおねがいします」
「今年もよろしくおねがいします」

ワイワイしながら新年は始まっていったのです。

帝国暦４７８年1月7日

■オーディン　　テレーゼ・フォンゴールデンバウム

今日この瞬間こそ待ちに待った時、父様が会いに行けと勧めてくれたのだ全身全霊をかけ力を見せよう。果たして鬼が出るか蛇が出るか、グリンメルスハウゼン爺さんの裏の顔が有れば正体を見せてもらえるか正念場だ。

■オーディン　グリンメルスハウゼン子爵邸　　リヒャルト・フォン・グリンメルスハウゼン

本日テレーゼ様と初めて会談する、私が見てきた限りテレーゼ様は大器だ。年齢不相応の冷静さ知恵も有り機敏も効き政治経済歴史軍学等に多大まれなる興味を引いている。この姿は幼き頃の陛下を彷彿とさせるものじゃ、儂も久々に朝から興奮しておる新たな昇竜を見つけたのかも知れんからな。
テレーゼ様がいらっしゃったのお手並みを拝見させて貰いましょうかの。

■オーディン　グリンメルスハウゼン子爵邸　　テレーゼ・フォンゴールデンバウム

「皇女殿下このような老人の元へ行脚頂き名誉この上なき事、誠にありがとう存じます」

「グリンメルスハウゼン子爵この度はお招き頂き誠にありがとう存じます」
「ささどうぞ」
「痛み入ります」
ふむ普段と違う客間に通されたわ秘匿の意味がある訳だね。

「皇女殿下におかれましてはこの老人に何をお聞きに成られたいのでしょうか？」
「父様の若き頃の思い出話をして頂きたくて参りました」
「皇帝陛下のお話でございますか」
「そうです」

「皇帝陛下は若かりし頃よりご聡明であらしゃりましてございます」
「そうでございましたか」
「皇太子時代においいても其れは其れはご立派でございました」
ふむ試してますね、目が面白そうに見えますよ。そろそろ聞きますかね。

「そうですね若き頃は優秀な兄、才気に富む弟の間で無気力凡庸愚物として自身を韜晦なさっていたのですからね、その為に町の飲み屋の店主に借金を作り皇帝次男が土下座したんですから、天晴れとか言いようがありませんよね、其処まで出来るお父様を尊敬しております」

「・・・・・殿下」
言い過ぎですかね。
「そろそろ相談相手が欲しかったのです、腹を割ってはなせる相手が」
「其れが私だと仰るのですか？」

「もちろん、父からグリンメルスハウゼン子爵へ会いに行けと勧た事もありますが、宮廷や貴族の噂話や動向を長年にわたりお調べしているとかなんとか」
「さようでございますか」
「そろそろお互い猫をかぶるのは止めませんか」
「・・・・・・」
「・・・・・・」

お互いで睨めっこです
「ふふふふふ」
「ははははは」
「殿下には負けましたわ」
「勝ちましたね」

「して何をお聞きしたいのですかな」
「グリンメルスハウゼン子爵貴方は父の影の部門を取り仕切って居ますよね」
「はてさて」
「ここへ来ても知らんぷりですか、色々なスキャンダル等を調べてらっしゃるそうですわね」
「ふむ、よう知っておられますな」
「宮廷内で話を聞いていて次第に判りましたよ」

「さて殿下はこの老人に何をさせたいのですか」
「取りあえずは」
「第一に父が華麗に滅べは良いと考えていた帝国再生準備における人材確保」
「第二に帝国内部の叛乱勢力の確定及び内部への浸透」
「第三に叛乱軍に対しての軍とは別の情報組織の整備」

「第四にフェザーン対策」
「第五に皇族の身辺警護、私は生まれたときに暗殺されかかってますからね」
「取りあえず今の年齢ではこのぐらいが精一杯でしょう」

「殿下流石ですな。とても6歳には思えない考えです」
「できますか」
「できましょう、陛下よりも殿下の好きにさせよとのお言葉を貰っておりますから」
「グリンメルスハウゼン子爵此からよろしくお願いいたしますね」
「この老人残りの人生のすべてを殿下に捧げましょうぞ」

「今日は有意義な日でした。其れと殿下では無くテレーゼで良いです」
「ではテレーゼ様今宵は良き日でございました、お気おつけて」
「では失礼いたします」

よっしゃ矢張りグリンメルスハウゼン子爵はスパイマスターだった原作じゃ其れらしい描写がありありだった物ね、其れを言う訳にはいかなかったけど何とか出来た。父様感謝でございます、此から忙しくなるぞ、人材確保が第一だラインハルトに取られてたまるかこっちが先取りだー！

■オーディン　グリンメルスハウゼン子爵邸　リヒャルト・フォン・グリンメルスハウゼン

今宵テレーゼ様と話してみて先ほどの感が間違いで無いと身にしみて判った。

まさにあの才気韜晦具合正しく陛下の御血を色濃く引いておられる。
あれほどとは思わなんだ若干6歳とは末恐ろしいぐらいじゃ。

男児であれば確実に皇帝として中興の祖となれる素質じゃ。
しかし男児で有れば今この世には居ないじゃろう、女子に生まれたのは天の采配としか思えん。
此から短い人生精一杯陛下とテレーゼ様の為に誠心誠意尽くそうぞ。
早速明日にでもケスラーと話し合わんといかんの、出来るだけ早く陛下と話もしなければならん。
忙しいが面白い年になりそうじゃ。

第十七話　グリンメルスハウゼン子爵（後書き）

第五次イゼルローン攻略戦、エル・ファシルの戦い、帝国領侵攻作戦のプロットは出来てるのに其処まで話が行かない状態、果たしていつになるやら。

第十八話　それぞれの新年（前書き）

亀のような歩みです。

第十八話　それぞれの新年

帝国暦４７８年1月8日

■オーディン　　グリンメルスハウゼン子爵邸

「ケスラー大尉来たか」
「閣下お呼びだそうで、本日は何を」
「昨日テレーゼ様にお会いしたのじゃ」
「皇女殿下とですな」

「テレーゼ様は睨んだ通り、いやそれ以上の逸材だったわ」
「閣下それほどのお方ですか」
「そうよあの年齢であの知謀冷静は陛下以上じゃ、楽しみじゃわ」
「して我々はどの様な対応を」

「我らは全面的にテレーゼ様をご支援いたすのじゃ、各リーダに通達行うのじゃ」
「はっ、では幼年学校の方はいかが致すのですか？」
「あの者の動向は今まで道理に逐一記録し探るようにせよ」
「しかし宜しいのですか、あの者の危険な言動を陛下とてお知りでしょうに」

「陛下は知っていて敢えて目を瞑っておられるのじゃ」
「其れは又どの様なお考えで」
「陛下のお考えは追々判るであろう」
済まぬのケスラーいずれ明かすときも来よう。

「来週テレーゼ様と会談するで、ご要望に添った資料を集めよ、そ

してケスラー貴官も同伴せい」
「はっ準備を整えます」
「此から益々忙しくなるぞ心せよ」
「はっ」

帝国暦４７８年１月８日

■オーディン　　幼年学校寄宿舎

「キルヒアイス聞いたか」
「何をでしょうかラインハルト様」
「あの男の寵姫が男児を死産したそうだ」

「それはなんというか」
「キルヒアイス愉快だな、あの男は姉上を奪い取ったのだ、その報いに子を取られたのだから」
「ラインハルト様・・」

「子だけではない、いずれあの者のすべてを奪い取り惨めな死を与えてやろう」
「ラインハルト様お声が聞こえてしまします」
「キルヒアイスは心配性だな」
「ラインハルト様」

帝国暦４７８年１月８日

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　グリューネワルト伯爵邸　アンネローゼ・フォン・グリューネワルト

新しい年が始まり私がここへ来て最初の新年でしたね、去年までならラインハルトとジークが居てくれて楽しい年明けでしたのに・・・ラインハルトやジークは風邪など牽いていないでしょうか心配です、けれどラインハルトやジークを呼ぶ訳にもいきませんし、マグダレーナとドロテーアとお茶会でもしましょう。

帝国暦４７８年１月８日

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　ベーネミュンデ侯爵邸　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

昨日のグリンメルスハウゼン爺さんとの会談で全面的な支援を約束して貰い一先ず安心です。
来週も会談しその時に必要な人材組織資金等の大まかな流れを決めるつもりですので、人材については原作知識をフル動員しながら転生者とばれぬように、如何にも偶然を装って決めていかないと危険ですね。

ラインハルト元帥府の主要メンバーとかは確実に引き込まないと駄目ですね、どうやら父様はラインハルトにも期待しておられる様なのである程度まで、ラインハルトが出世するのは此方も黙認ですね。

取りあえずはミッターマイヤーとロイエンタール、ミュラー、メックリンガー、ケスラー、アイゼナッハ、ケンプ、ファーレンハイト、ルッツ、ワーレン、ビッテンフェルト辺りか。Ｍｒレンネンは要らねー、義眼はうちの家憎んでるし猛毒だから生理的に拒否したい、そうそう忘れちゃ行けないメルカッツ、陸戦じゃ原始人かリュ

ーネブルクだけど危険が一杯なんだよな、閣僚じゃシルヴァーベルヒ、リヒター、ブラッケ、オスマイヤー、マインホフ、ブルックドルフ辺りを引き抜きたいな、そうなると領土がないと実験不可能だな、どっかの星貰えないかな。

バイエルラインやベルゲングリューンとかも超必要だし補給のベテランも絶対要るな、けど原作じゃ同盟のキャゼルヌ先輩かシンクレア・ゼップだったけか？しか思いつかんぞ。
ともかく来週の話し合いからはじめなきゃ駄目だね。

帝国暦４７８年１月８日

■オーディン　帝国軍士官学校　　オスカー・フォン・ロイエンタール

新年最初の授業が終わった、人の噂も七十五日と過去の偉人は言ったそうだが其れは嘘だと断言できる。
既に１年半経つが未だに思い出したくもないあの事件の為に親衛隊からは目の敵にされ、女どもからも敬遠されまくっているのだから堪らん状態だ。

マールバッハの伯父も相変わらず無茶振りをしてくるし、最近は自分の娘俺の従妹に当たるリヒャルダと結婚させ跡継ぎにしようと企んでいるらしい。皇帝陛下の愛娘の皇女殿下の覚え目出度い若手士官としての名声を望んでいるようだ。

冗談じゃないあの娘のお陰で散々だったんだ、あれは俺にとっての疫病神だ災厄の女王と言っても良いだろう、あと半年か早く卒業したい卒業して一刻も早くオーディンから離れたい離れるんだ！！

第十九話　ロリとの遭遇（前書き）

続きは第二十話です。
これから仕事行ってきます。

第十九話　ロリとの遭遇

帝国暦４７８年1月１４日

■オーディン　グリンメルスハウゼン子爵邸　テレーゼ・フォンゴールデンバウム

グリンメルス爺様との会談から、一週間待ちに待ちましたいよいよ今日から爺さん達と悪巧みの開始です。

爺様の館へ向かうといつもの小部屋へ案内されました。相変わらずの日向ぼっこ提督とはとても言えないシャッキリした姿勢で迎えてくれます。

「テレーゼ様よくお越し下さいました」

「グリンメルスハウゼン子爵今日もよろしくお願いしますね」

爺様は考えながら一言。

「グリンメルスハウゼンでは長すぎますな、テレーゼ様何か呼び方がありますかな？」

ふむ頭の回転とかも試されていますね流石です。パット考え。

「では、ラテン語で耳を意味するアウリスではいかかでしょうか？」

爺様目を細めて。

「ほう、博識ですな良い響きです、ではアウリスとお呼び下さい」

「よろしくお願いしますね、アウリス殿」

「アウリスと呼び捨てで構いませんぞ」

「教えを請うのに呼び捨てでは余りに失礼かと」

爺様はふむふむと満足そうにうなずいている。

「判りました私がテレーゼ様を一人前に育て終わったとき呼び捨てにして貰いますぞ」
ニヤニヤしてますね、ものすごく楽しそうだ。
「はいよろしくお願いします、アウリス殿。それと私に様付けも要らないのですが」
「流石に其れはご勘弁を」

「駄目ですか」
「其処までは儂が持ちませんわ」
「判りました其れはあきらめます」
「御意」
「御意も止めましょう、はいか判りましたで良いでしょう」
「判りました」

爺様も納得してくれたらしく、終始にこやかに進みますね。
爺様が身を正して真剣な顔をして此方へ向かい直した。

「テレーゼ様先週頼まれました人材に関するリストで御座いますが帝国臣民２５０億の中からですから中々調べが進みません」
「其れはそうです其処まで無茶は申しません」
嬉しそうですね又試しましたか、食えない爺様ですね、まあ其れが其れで楽しいんですがね。

「軍人の中でなら今幼年学校ですが非常に有能な人物がおりますぞ」
ニヤニヤしてますね、判りますよ金と赤でしょ、判ってて言ってるな、けど金は知ってるが赤は知らないふりをしないとね。

「ほう其れはどんな人物ですか、私の知っている幼年学校生だとミュッケンベルガーとフレーゲルしか知りませんが、ミュッケンベルガーは期待できそうですがフレーゲルはねー」

「いえいえグリューネワルト伯爵夫人の弟です」
全く危険物を使いこなせと言うのですかね、いやからかってるんですね、ニヤニヤ。

「ああラインハルトですね、父様と一緒に会いましたよ。父様を見るあの目あの顔あの内面から出る憎悪がよく見えました。
能力的には非常に優秀に見えますね、けど彼は猛毒ですね今の私には使いこなせないですね。
今は様子見で良いでしょう父様の様にね」
爺様其処までと言う顔をしてみてるね、爺様クルーじゃなきゃ駄目だよフフ。

「そうなりますと優秀な人材については部下にリストを作らせておりますので、その者を呼んで宜しいでしょうか」
「無論ですその様にご苦労して頂いている部下の方に会わないのは失礼に当たりますので是非お会いしたいです」
「判りました」
そうすると爺様はインターホンで誰かを呼んでます、暫くするとノックがされて２０代中盤ぐらいの士官が入ってきました。

「閣下ケスラー大尉入ります」
「うむ、ケスラー大尉よう来た、テレーゼ皇女殿下じゃ、殿下私の部下で取り纏めをしているケスラーと申します、ケスラー皇女殿下にご挨拶を」

おー来ましたよーケスラーです、ロリですよロリとの遭遇ですよ、ケスラーにしては私はドストライクゾーンです。

「皇女殿下ご尊顔を賜り恐悦至極で御座います、小官グリンメルスハウゼン閣下にお仕えする、ウルリッヒ・ケスラー大尉と申します。

元来平民たる臣が皇女殿下に直接ご挨拶するなど不敬の極みで御座いますが平にご容赦をお願いいたします」

なるほど爺様ケスラーも出汁に使ってるな。ケスラーも気の毒に此処は助けてあげましょう、私の中ではケスラーの信頼度凄く高いから、仲良くしたいいね。

「ケスラー大尉その様にかしこまらなくても構いません、私達は同士です皇族、貴族、平民の差など何がありましょう。同じ赤い血の流れた人間じゃないですか、そんなへりくだった挨拶は無用ですよ。私のことはテレーゼで良いですよ」

ケスラー驚いてますそりゃそうだよね、六歳児の言うことじゃないし。

「その様な恐れ多いことを」

「返って敬語を使われる方が気になりますよ」

「ケスラーよテレーゼ様が良いとっしゃっておるのじゃテレーゼ様とお呼びすればよい」

「御意」

「じゃあ改めてケスラー大尉テレーゼ・フォン・ゴールデンバウムです此からよろしくお願いしますね」

「テレーゼ様ウルリッヒ・ケスラー大尉と申します、此よりテレーゼ様にお仕えし足します、どうぞよろしくお願いいたします」

「よいの此で顔合わせは終了じゃな。早速話し合いに入るかの」

「よろしくお願いしますね」

「判りました」

「ケスラー資料を」

「御意」

第二十話　人材収集計画

帝国暦４７８年1月１４日

■オーディン　グリンメルスハウゼン子爵邸　リヒャルト・フォン・グリンメルスハウゼン

テレーゼ様が本日いらっしゃる、どの様におもてなしするか楽しみじゃな。
いらっしゃったようじゃ、シャキッとした姿勢と眼光でお出迎えじゃな。

「テレーゼ様よくお越し下さいました」
「グリンメルスハウゼン子爵今日もよろしくお願いしますね」
ほうほう驚かんな、流石じゃちと試してみるかの。

「グリンメルスハウゼンでは長すぎますな、テレーゼ様何か呼び方がありますかな？」
「では、ラテン語で耳を意味するアウリスではいかかでしょうか？」
ほう速攻で返した来たのしかもラテン語とは流石じゃ。

「ほう、博識ですな良い響きです、ではアウリスとお呼び下さい」
「よろしくお願いしますね、アウリス殿」
「アウリスと呼び捨てで構いませんぞ」
「教えを請うのに呼び捨てでは余りに失礼かと」

立派じゃな師を尊ぶ心、普通はとても出せんの。
「判りました私がテレーゼ様を一人前に育て終わったとき呼び捨て

にして貰いますぞ」
嬉しくてついつい顔にでしてしまうの。
「はいよろしくお願いします、アウリス殿。それと私に様付けも要らないのですが」

さて本題に入るかの。
「テレーゼ様先週頼まれました人材に関するリストで御座いますが帝国臣民２５０億の中からですから中々調べが進みません」
「其れはそうです其処まで無茶は申しません」
やはりちゃんと判ってらっしゃる、人材としてあの者の話をして見るかの一度お会いしておるし、どの程度の人物眼があるかの。

「軍人の中でなら今幼年学校ですが非常に有能な人物がおりますぞ」

「ほう其れはどんな人物ですか、私の知っている幼年学校生だとミュッケンベルガーとフレーゲルしか知りませんが、ミュッケンベルガーは期待できそうですがフレーゲルはねー」
テレーゼ様すっとぼけておりますな。
「いえいえグリューネワルト伯爵夫人の弟です」
ニヤッとしましたな判ってらっしゃる。

「ああラインハルトですね、父様と一緒に会いましたよ。父様を見るあの目あの顔あの内面から出る憎悪がよく見えました。
能力的には非常に優秀に見えますね、けど彼は猛毒ですね今の私には使いこなせないですね。
今は様子見で良いでしょう父様の様にね」
ほう僅かな会見で此処まで人物鑑定をするとは、儂でもかなわんなそろそろケスラーを呼ぶかの。

「そうなりますと優秀な人材については部下にリストを作らせてお

りますので、その者を呼んで宜しいでしょうか」
「無論ですその様にご苦労して頂いている部下の方に会わないのは失礼に当たりますので是非お会いしたいです」
受け答えも完璧じゃな、しかもケスラーに対しての受け答えも皇族貴族平民の身分差も考慮しない大らかさ、此こそ王者のカリスマじゃものすごく楽しみになってきたの。

■オーディン　グリンメルスハウゼン子爵邸　ウルリッヒ・ケスラー

初めて皇女殿下にお会いし驚いた6歳なのにあの威厳カリスマ聡明さ末が楽しみな女傑と成るはずだ、私がへりくだって挨拶したとき、同士だからと名前で呼んでくれと言われ驚いた。
しかも身分に躊躇しない大胆さ此は本物だ、これほど嬉しいことはないだろうこれからが楽しみだ。
閣下と共にお仕えに足るお方だ。

■オーディン　グリンメルスハウゼン子爵邸

「さて其れでは今回の趣旨を説明します。
此から数年をかけて銀河帝国の病巣を取り除く外科手術と考えて下さい。
その為の優秀な人材がまず必要となります。
そこで人材のリスト作成をお願いします」

「諒解しました」
「まず忠誠心な厚い優秀な軍人を此は宇宙艦隊司令官候補、幕僚参

謀候補に当てる艦隊派。
的確な作戦を立てられる作戦派。
補給担当、後方支援等の後方派。
陸戦部隊。

また現在の技術部主流から外れた外された所謂勢力争いで負けた組などから優秀な人材を密かに秘密研究所へ移転させる。
帝国内、叛徒内、フェザーン内に作るスパイ組織の構成員。
政治に関しては、今までの政治に囚われない斬新な政策を考えられる者。

社会整備、インフラ、流通、経済等に詳しい者。
尚門閥貴族の紐付きではなく出来る限り下級貴族平民等から人材を集めてる。
こんな所ですね」

爺様もケスラーも驚いていますね。とても六歳児が考える物じゃないと、仕方がないですよ死にたくないですから、このまま座していればラインハルトに滅ぼされる可能性が大きいのですから。

爺さんとケスラーが頷き有ってから返事が来たね。
「テレーゼ様のご指摘誠に理にかなっております、全力をかけて行動に移します」
「よろしくお願いしますね」
「判りました」

「其れでは私の方も色々な所を廻り此と思う人材をピックアップします」
「その者達の調査はお任せあれ」
「其れでは失礼しするわね」

「はっお気御付けてお帰り下さい」

第二十一話　黒いテレーゼ（前書き）

黒いテレーゼ参上です

第二十一話　黒いテレーゼ

帝国暦４７８年４月１２日

■オーディン　　グリンメルスハウゼン子爵邸　　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

　秘密会議開始から４ヶ月日々精進の毎日です。
２月の誕生日は去年のような派手な物ではなく知り合いを招待して行いましたよ、我ら６人衆母娘にマグダ姐さん母娘、ヒルダ姉さん母娘とか若干名です、だってフレーゲルなんか来たら嫌じゃないですか。
そんな訳で男子禁制状態でパーティーしましたよ。

最近お母様はスッカリ落ち着かれて、にこやかで子煩悩なお母さん状態です。
原作やＯＶＡ板のベーネミュンデ侯爵夫人と全く別人状態ですよ。
お父様もよくおいでになり一緒にオペラ鑑賞とかに出かけていきます。
まあＯＶＡで見てもお父様はお母様を巻き込みたくない為に疎遠にしていた訳ですから、巻き込む心配が無くなりつつあるので安心してきているのでしょうね。

逆にアンネローゼへのお渡りが非常に少なく宮廷では無理矢理押し付けられたから気に入らないと言う噂がまことしやかに流れています。
アンネローゼが可哀想に感じましたね、きっとラインハルトは怒り心頭でしょうね。
姉上を奪った上に馬鹿にしていると。益々憎悪が増えそうです。

へたすれば、ベーネミュンデ侯爵夫人事件じゃなくグリューネワルト伯爵夫人事件が起こるかも知れないですね。
アンネローゼがしなくても、お付きの者が暴発するかも知れない。
そんなことはさせませんがね。

毎日お勉強と悪巧みと各種行事に参加とか大変です、お友達や姐さん達との付き合いも非常に大事ですから、なんと言っても癒されます。特にエルちゃんが可愛いです萌えますよ。
ともかくオーバーワークですけど死にたくないので頑張ってます。
どこぞのニート侍の【働きたくないでござる】じゃなく死にたくないでござるですね。

7月には士官学校の卒業式に行く予定を立てています、待ってろよロイエンタールふふふ。
9月か10月ぐらいに同盟軍がイゼルローンへ侵攻する可能性が有るのでその対策も立てねば行けないところです。

そして今日も定期連絡会で、爺様とケスラーとで話し合いです。
相変わらず爺様はニコニコ、ケスラーは考えてる顔です。

まずは爺様が切り出して。
「テレーゼ様今回の趣旨はいかがしますかの」
「まず、技術的計画を述べますので後で照査して下さい。なお此から述べる計画は研究所が出来た段階で行う予定です。
研究所ですが明からさまに研究所としたらばれますのでダミーを作ります。」
「テレーゼ様なぜ即在の技術部では駄目なのですか」
ケスラー其処が肝心だよね。

「言ってみれば現在の技術部はシャフト大将の独壇場です。

シャフト大将が優秀ならば構わないのですが彼は政治力で今の地位を築いたそうです。
さらに自分の地位を脅かす可能性のある人物を地方や前線に飛ばし自分の子分やイエスマン自分より劣る者で技術部を固めています。
其れでは研究が出来ませんし横やりが入る可能性が多きく情報漏れが懸念されます」
「確かにシャフト大将には良い噂は聞きませんな」
「さようじゃの」

「そこで秘密研究所です。研究所は地方星域の僻地に作り例えば軍用缶詰工場とかに化けさせます、其処へ当該者達を職員として配置し研究させます、こうすればシャフト達は左遷されたと考えるでしょう」
「いい手ですね」

「そこで研究して貰うのは次のような事です」
ケスラーメモを取ってますね。

「第一に叛徒の戦艦か巡航艦を数隻捕獲し艦の運行用ソフトを解析しそのデーターを我が軍の物と比べて下さい、此は敵の方が運行用ソフトの出来が良いとの噂が有る為です」
実際同盟軍のソフトの方が優れてるんだよね。

「第二にそれに関するのですが艦船の自動操縦システムの強化と自動砲撃システムの開発です」
「それはどう言うことで？」
「まあ敵に突っ込ませるってかんじですかね」
シトレがイゼルローンに無人艦突っ込ませたしね此方もお返しで。

「あとは気がついたら追々研究目標に入れていきましょう」

「判りました」
爺様とケスラーも頷いてます。

「今度は人口についてです。取りあえず質問は後でまとめて答えますのでよろしく。
まず政治犯及び共和主義者の大まかな罪状及び人数、教育程度、思想的な過激度、労働条件、家族、健康状態そしてどの星系のどの星に何人居るか、その星の宇宙港へ何日で集められるか。
その星からイゼルローンへ何日で到着するかを三年ごと位に資料を集めて下さい」

「次に殺人、強姦、重過失傷害、放火等の重犯罪者のリストと収監されている監獄そして集めてイゼルローンまで何日で到着するかを同じく三年ごとに資料を集めて下さい」

「次に叛徒から連れてきて農奴と成っている者達の居場所、そして同じくイゼルローンへ何日で到着するかを三年ごとに資料を集めて下さい」

「また叛徒軍俘虜の収容所と其処にいる人数及び待遇そしてイゼルローンへ何日で到着するかを三年ごとに資料を集めて下さい。取りあえずは以上ですね」

2人とも不思議がってますね。ケスラーが質問してきますね。
「テレーゼ様資料集めは可能ですが、何に利用なさるのですか？」
秘中の秘なので今は未だ言えないからお茶を濁しておきますか。
「いずれ叛徒共との戦いと我が軍の捕虜に関しての手に使うんですよ」
「そうですか」
「それと我が軍の捕虜達がどこで何をしているか、待遇等はどうな

のかを調べて下さい、我が国は捕虜に優しくありませんから【生きて虜囚の恥を知り死して虜囚の恥を知らず】ですから彼らに慰問袋を送りたいんですよ、頑張って下さい決して見捨てませんと勇気を与えたいんです」

「テレーゼ様なんとお優しいことを」

いや気の毒なのも有るんだけど、絶望の淵にある捕虜達が後々ラインハルトによって帰国できるんだけど、その時少しでもラインハルトに着く人間を減らしたいのも有るんだよね。

それにエコニア捕虜収容所じゃ不正が行われていたからね、慰問袋に入れる予定の品物もピンハネするんじゃないかと、そうすれば同盟の捕虜虐待の証拠になるじゃん。

「所でこの組織の資金源を考えたんですが、吝嗇だったお爺さまの貯めた資金じゃ無いんですか？」

爺様一寸驚いたなビンゴか。

「お爺さまが山ほど蓄えた資金でお父様が帝位継いだとき財政赤字が綺麗に無くなったそうですよね。

そのあと相当余った資金を、お父様は遊興や建物建築等で使い果たしたと聞いておりますが、其れ嘘でしょ？」

「はっ気づかれましたか、流石でございますな、その通りです。相当量を水増しで請求しましてな、その水増し分を元に色々増やしてきました」

「では研究所とかの資金も大丈夫ですね」

「国家予算の数十倍の資金はあります」

「なるほどね」

推理が当たったね。

■オーディン　　グリンメルスハウゼン子爵邸　　リヒャルト・フォン・グリンメルスハウゼン

テレーゼ様がお帰りなったあとケスラーと今日のことを話し合った。

「テレーゼ様の勘の良さとアイデアは誠に驚くことばかりじゃ」

「まことに、資金源の事など推測で当ててしましましたから」

「そうよなあの時は些か慌てたわ」

「技術に関しての造形やシャフトの危うさなども優れた観測です」

「ふむそうじゃの捕虜に関する御優しさも好ましいの」

「まことに捕虜もそうですが、判らないのは政治犯等ですね」

「ほんに判らんの、叛徒との戦いで何に使うのやら」

「テレーゼ様の事です考えが有ってのことでしょう」

「そうじゃの」

「ケスラー今日はご苦労であった」

「御意」

第二十一話　黒いテレーゼ（後書き）

【G夫人がB夫人に害意を抱いている】て匿名の手紙が届いたりしてw

第二十二話　みんなで企めば怖くない！（前書き）

卒業式は二十三話になりました。

第二十二話　みんなで企めば怖くない！

帝国暦４７８年5月１０日

■オーディン　グリンメルスハウゼン子爵邸　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

本日も連絡会議、結構頻繁に此処へ来ると怪しまれるのでアリバイ作りが大変な今日この頃です。
いつものように爺様とケスラーが見守る中答弁開始です。

「テレーゼ様前回ご依頼を受けました研究所の件ですが来年度予算に潜り込ませる様に手配をしました」
「ご苦労様です。これで何とかなりそうですね。
所で叛徒には選挙という物があるそうですね、その時は叛徒が好戦的になるとか、以前の資料を見たのですがどうやら今年がその年に当たるようです」

ケスラーが気付いたみたいですね。
「確かにその様な行動パターンが以前言われたことがありましたな。調べてみる価値はありそうですし警戒しその兆候があるなら迎撃の準備をしないとだめですな」

「お父様や軍部への根回しはよろしくお願いしますわ。今はまだ他人に正体をさらすことは避けたいですからね」
「たしかのそうじゃのテレーゼ様のお姿は晒してはならんの、儂が陛下にお伝えしよう」
「では軍部のほうが小官が手配りしたします」

「あとですね、このことを余り広く知られると叛徒やその様な確率を信じない方々がなにやら騒ぎ出す可能性が有るので、必要最小限でお願いします」
「確かにそうです」
「そうじゃの」

「あとですね、この館に士官学校に有るような戦術シュミレーターを置けませんか？」
「なにをなさるのですかな」
「色々閃いた戦法があるので実際に試してみたいのですよ」
「ほう其れは楽しみですな。ケスラー準備出来るかの？」

「備品の発注が終わっていますので今年中に配備するのは疑念を呼びます。
申し訳ございませんが、来年であれば損耗分として潜り込ませられます」
「仕方有りませんね。それでは来年まで我慢しましょう、其れまではアイデアとして暖めて置きます」
ケスラーが本当に申し訳なさそうに頭を下げます。

「あと優秀な人材を発見しました」
「ほうテレーゼ様のお眼鏡に叶う相手がおりましたか」
「どの様な人材ですか」
2人とも興味津々です。

「今年士官学校を卒業する生徒ですが、オスカー・フォン・ロイエンタール、フリッツ・ヨーゼフ・ビッテンフェルト、アウグスト・ザムエル・ワーレンが二年前に士官学校へ視察を行ったとき優秀な人材かと思いました」
「なるほど、では早速三名を調べましょう」

■オーディン　グリンメルスハウゼン子爵邸　リヒャルト・フォン・グリンメルスハウゼン

「相変わらずテレーゼ様には驚かさせられるばかりじゃの」
「まことに」
「叛徒の攻勢の件頼んだぞ」
「御意」

帝国暦４７８年5月１９日

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　小部屋　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

今日はお父様にお願いしに来ました。お父様は終始にこやかです。
「テレーゼやグリンメルスより聞いたが、可能性が高いのじゃな」
「はいお父様過去のデーターを照査した結果かなりの確率で攻撃が来ます」
お父様考えながら。
「そうかでは軍に準備命令を出さねば成らんな、しかし外れた場合はどうするのじゃ」

「一つの案なのですが、迎撃艦隊に今期卒業の新規士官を研修として乗せて遠洋航海とすれば幾らでも準備が出来ます」
「つまりは迎撃艦隊は無く訓練艦隊だとして敵を欺くのか」
「そうです。敵と予算と信じない者達を欺きます」
お父様楽しそうです、普段の枯れた雰囲気から目が鋭くなりますね。
流石我が師匠、天下一の猫かぶりですね。

「その為に卒業生を遠洋航海に出かけさせる様に勅命を出して頂きたいのですよ、前例がないので現場が渋ると思うのです」
「父も使うかテレーゼはハハハ」
お父様凄く楽しそうです。
「ええ東洋の諺に【立ってる者は親でも使えと】というのがありますから、お父様もお願いしますね」
「よいよい儂は娘には甘いのじゃからなハハハ」

「それとお父様、士官学校の卒業式に参加したいのですが良いでしょうか？」
「よいよいどうゆう気じゃな？」
「士官学校に顔を出しておきたいのと、今年度卒業生に原石が居るんですよ」
「ほほ其れはあの時優勝した者かの？」

「はいあの者も入っていますが他にも居りますので」
「よいよい行ってまいるがよい、エーレンベルクには儂が伝えておこう」
「お父様、ありがとうございます」

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　小部屋　フリードリヒ四世

本日娘がお願いに来た、儂は娘が可愛くてしょうがないからの。
グリンメルスの言っておった同盟の事じゃった。
聞くごとに此はと思う事ばかりじゃった。
弱冠七歳でこの知謀じゃ儂など足元にも及ばん、儂は逃げて居ったからな。
彼の者に会って儂の願いを叶えてくれると思ったが、それ以上の資

質じゃ。
今は只テレーゼが儂の期待じゃ、彼の者には悪いがテレーゼの礎に成ってもらおうかの。
テレーゼが彼の者をどう扱うか楽しみじゃ、其れまでは彼の者の行動は目を瞑る事にしようぞ。
さて近いうちに三長官を呼んで指示しなければならぬな、これは楽しみじゃな。

帝国暦４７８年5月２８日

■オーディン　グリンメルスハウゼン子爵邸　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

ロイエンタール卒業まで一ヶ月一寸となりました。
まずはケスラーが3人の調査をしてきたそうです。
「テレーゼ様3人の調査を致しましたが、ビッテンフェルト、ワーレンは素行問題等は有りません。
些かビッテンフェルトが口が悪く短気なところをのぞけばですが。
ワーレンに関しては非常に優秀です冷静沈着ですし。
しかしロイエンタールは素行が悪すぎます、女癖が悪く何度もトラブル等を起こしています。
あのような者が良いのでしょうか？」

「ケスラー確かに女癖が悪いのは良くないですが其れを上回る資質が有るのですから、一概に切り捨てることはしないですよ」
ケスラー本気で心配してるみたいだね。

「しかしです。あの者の噂ではロリエンタールと呼ばれており、恐れ多くもテレーゼ様の唇を奪ったと言うではないですか。その様な不埒で不敬な者をテレーゼ様のおそばに置く訳にはいきません」

「ああその噂ですか、それは武術優勝のご褒美にほっぺたに軽くキスしただけですよ。
其処まで噂が大きくなっていたとは、ビックリですよ」

クックックッワーハッハ。ロリエンタールだって可笑しいー吹き出しちゃうよ！
ケスラーが怪訝な顔するまえに我慢我慢、家帰ってから笑おう。

「そうですかしかし士官学校ではロリエンタール事件として有名だそうです。
今年の入校式にテレーゼ様が呼ばれなかったのはその為だそうです」
「なるほど迷惑をかけた訳ですね、しかしどんな事件なのですか？」
「テレーゼ様言い難いのですが、テレーゼ様が士官学校へお行かれた時余りの可愛さに生徒達がファンクラブを創立したのです。
その総数は全校生徒の八割という状態になりました。
およそ１６０００人です、その時テレーゼ様がロイエンタールにキスをしたと言うことで学校中が彼に嫉妬し大騒ぎと成ったのです。
それ以来彼はロリエンタールと言われいるのです」

うわー気の毒ですね、ロイエンタールだからかパーティーで余所余所しかったのは、けど女の敵には少しは反省して貰った方が良かったと言うことにしましょう。

「けど能力に問題無ければ良いのですよ、追々修正していけば良い訳ですし」
「士官学校の評判ではテレーゼ様の侍従武官とと言う噂が流れております」
「良いんじゃない噂は噂で、その時にならないと決めませんよ」
本当は決めてるんだけどね。

「ケスラーご苦労様です」
「御意」
「御意はいいのに」
「はっ」

第二十二話　みんなで企めば怖くない！（後書き）

卒業式書こうとしたらそこまで行けませんでした。

第二十三話　軍務尚書のお仕事（前書き）

すみません、卒業式がなかなか来ません。二十四話こそ卒業式に。

第二十三話　軍務尚書のお仕事

帝国暦４７８年5月２１日

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　謁見室　ハーロルト・フォン・エーレンベルク

皇帝陛下がお呼びとの事ゆえ参内すると国務尚書と余り仲の良くない同僚達も参内していた。
国務尚書リヒテンラーデ侯は相変わらずの苦虫をかみつぶしたような顔をしている。
宇宙艦隊司令長官ベヒトルスハイムは元帥杖を持つ手が落ち着かない様子であり。
統帥本部長のシュタインホフは相変わらず捉え所のない顔をしながらなにやら考えてるように見える。

暫く待つと陛下がご登場なされたため、全員で挨拶をし陛下からお言葉があった。
陛下は深刻に話し始められた。

其れは今年中に叛徒共がイゼルローンへ侵攻する可能性が有るとのことであった、陛下なりに情報をどこからか手に入れたらしいが、シュタインホフの情報部からであろうか？
嫌違うなシュタインホフも初耳の様な驚きをしている。

ベヒトルスハイムが『恐れ多いながら可能性だけで軍を動かせません』と言うと、
陛下が『それならば新規士官を研修するために遠洋航海という形で軍の準備をするが良い』と仰った。

なるほど良い考えだ此なら叛徒にも悟られずに準備が出来よう、陛下も旨いことを考える物だ。

最近の陛下は以前と比べて精力的に成られている。
以前ならば二日酔いで謁見しておられた物だがいまは確りと謁見しておられるのだから。
お変わりに成られたのは、グリューネワルト伯爵夫人が寵姫に成られてからであるから、伯爵夫人の何かしらの影響なのだろう。

シュタインホフにはイゼルローンでの作戦の立案をご命令成された。
自分の番になり、陛下より『今年度卒業生は従来のような一年間デスクワークではなく半年間はイゼルローンへ配置し戦場の息吹に曝すようにいたせ、成績優秀者は旗艦に乗せ研修させるよう』勅命を受けた。

その後『今度の士官学校卒業式にテレーゼが出たいと言っておるから頼むぞ』と仰られたのです。
皇太子殿下ならば緊張もするが。テレーゼ様は何度かお会いし何度も話し、ブリギッテとも仲の良いお方であるし過度の心配はないでしょうな。

皇帝陛下は我らに『叛徒共やフェザーンに知られぬように防諜を確実な物として準備せよ』と仰った。
此には我らも驚きの表情をしてしまっわい。
シュタインホフが口を開けて目を見開く姿は滑稽であった。
陛下はお変わりつつあるという感覚を持ち、自身の職責を益々精進する気になったのが今日という日であった。

帝国暦４７８年６月１５日

■オーディン　軍務省　軍務尚書室　ハーロルト・フォン・エーレンベルク

陛下との謁見から早三週間我々は急ピッチで準備を続けていた。
新規任官士官５０７８人の辞令準備やイゼルローン要塞における配備場所への準備を宇宙艦隊総司令部とやりとりしながら行ってきた。
練習艦隊（イゼルローン増援）がオーディンを発つのが７月１０日であるから大変なことであるがやりがいのある仕事だが、この種類の量は何とかならんのだろうかここ一週間は判子押しばかりしている。
面倒だからと適当には押せんしいい加減疲れてくる物だ。
ベヒトルスハイムやシュタインホフはある程度部下に丸投げ出来るが儂はできんからな仕方のないことだ。
此で叛徒共が来なければ、内容を知らずに残業の連続の部下達から文句が続出するだろう。
この状態では士官学校の卒業式は軍務次官代理をさせテレーゼ様をエスコートさせねばならんな。

帝国暦４７８年７月８日

■オーディン　軍務省　軍務尚書室　ハーロルト・フォン・エーレンベルク

取りあえず早朝から士官学校の入校式だけは参加し訓辞を述べてきたが、疲れから貴賓席で居眠りしてしまった。
先ほどシュタインホフから情報部が叛徒共のイゼルローン攻撃を

察知したとの連絡があった。
彼奴も役に立つときがあるのだな。
これで今までしてきた苦労が報われる、部下達も納得してくれるだろう明後日は出撃だし肩の荷がやっと下りた気がする。
此から先は、ベヒトルスハイムと艦隊司令ミュッケンベルガーとイゼルローンの連中の仕事だ。
１２日は久しぶりにブリギッテと何処かへ出かけるとしよう、どこがよいであろうかの。

第二十四話　ロイエンタールの憂鬱

帝国暦４７８年６月３０日

■オーディン　帝国軍士官学校　リヒャルト・オイゲン

今日は先輩方の卒業式だ、ビッテンフェルト先輩とも此でお別れと思うと寂しい気分がする。
ああ見えて良い先輩だった、自分にとって良い人生経験になったと思うが胃薬と友達になってしまったが其れは仕方がないと諦めた。
ビッテンフェルト先輩のお陰でワーレン先輩やロイエンタール先輩と知り合えたのだから悪いことは忘れよう。

ロイエンタール先輩も一時はテレーゼ様の事で総スカンを食らったが、その後デマだと解り嫉妬する奴が減ったが、まあ冗談交じりに未だにロリエンタールと呼ばれてはいるが、話してみると良い先輩だった。

しかし最近ロイエンタール先輩の伯父が伯爵でテレーゼ様の侍従武官にロイエンタール先輩を押しているとの話が流れて、再度ロイエンタール先輩に対する風当たりが強くなってきている。
酒の席で先輩に聞いたが、絶対にならない前線へ行きたい万が一侍従武官の辞令が来たら任官拒否して実家経営の鉱山へ住み込むつもりだと切実に話してくれた。
あの真剣な表情は本物だが、みんなは信じないだろう先輩ご愁傷様です。

■オーディン　帝国軍士官学校　　オスカー・フォン・ロイエンタール

さあ待ちに待った卒業だ！此でオーディンから離れられる。
あの伯父が俺を悪魔（テレーゼ）の侍従武官に出来るように運動したらしいがそんなことはさせんよ。
校長に直訴して帝国の為に前線勤務を願い出たら、校長は非常に満足げに頷いていた。
万が一近衛や侍従武官の辞令が来るなら任官拒否して実家経営の鉱山へ住み込むつもりだ。

俺ながらウキウキとしながら講堂で式典が始まる前に今回は軍務尚書は用事で来れないらしく、次官が来ると話が伝わってきた。
そして式典が始まり列席者が紹介されたとき、俺は悪魔を見た！
奴だ奴が居る、なぜ此処にいる！

悪魔（テレーゼ）の姿を見た同期達は一斉に拍手を行いはじめた。
まあ良いだろう、彼処に座っている限りは俺には関係ないのだから。
式典が始まり上位１０人まで恩賜の短剣を授与される事に成っているが、事もあろうにあの悪魔が授与するらしい。

俺は目の前が暗くなった何故なら俺はクラスヘッドだったのだ！
俺はそのまま腹痛で逃げようとしたくらいだ。
俺たちが一人一人呼ばれ短剣を授与される、悪魔の前に立ち短剣を渡された。
にこりとして『おめでとうございます』とごく普通に言われてホッとした。

式典が終わるまでは何か仕掛けてくるのではないかと思いながらビクビクしていたが何もなかった。

しかしである、なぜか式典が終わり謝恩会で鶏冠頭（ビッテンフェルト）やワーレン達と話していたとき、
後輩達が俺を卒業記念だと無理矢理連れ出し胴上げを始めたのだ、
そのまま会場から担ぎ出されて胴上げされ、口々にテレーゼ様の侍従武官、テレーゼ様の侍従武官と念仏のように唱え始めた。
やばいと感じたが鶏冠頭（ビッテンフェルト）やワーレン達は笑うばかりで助けてもくれん。
友達がいのない奴らだ。
そして３０回にも及ぶ胴上げをしまくられたあげく最後にプールへ叩き込まれたのだ！

俺が何をしたと言うんだ、あれは悪魔じゃない魔王だ！

■オーディン　帝国軍士官学校　　フリッツ・ヨーゼフ・ビッテンフェルト

いよいよ卒業だ、長いようで短い４年間だった、しかし面白い奴らと出会えて良かったと思っている、
ロイエンタールの女癖の悪さには驚いたが、
テレーゼ様の一件以来大人しくなったからな。
良い経験だったのだろう。
さてどこへ配属されるやら楽しみだ。

式典にはテレーゼ様がご臨席だった、クラストップ１０人が短剣を授与されるらしいが俺はぎりぎり１０番だった為、頂けることとなった。

テレーゼ様から物を貰うのは2度目だが2年経ってお美しく成られ

た物だ。
俺に授与されるとき、『ビッテンフェルト皇帝陛下為に尽くして下さい』と言われたがテレーゼ様になら尽くしたいと思うのは不敬であろうか。
まあこれで益々フアンになってしまうな。

謝恩会でロイエンタールがフアンクラブに拉致されプールに落とされた、笑っちまった。

■オーディン　帝国軍士官学校　　アウグスト・ザムエル・ワーレン

待ちに待った卒業式、卒業したらリーザと結婚だ。新婚旅行はクロイツナハ？へ行くかな何よりも楽しみだ。
式典にはテレーゼ様がご臨席だった、クラストップ１０人が短剣を授与されるそうで俺は５位だから授与された。

あのハンカチ以来の再会であったが、テレーゼ様は俺のことを良く覚えていらっしゃった。
『ワーレン格闘術は上達しましたか、皇帝陛下に尽くして下さい』と言われた。
しかしテレーゼ様が俺のことを覚えてくれていた事に感動を覚えた。

謝恩会の途中でロイエンタールが下級生に胴上げされながらプールに落とされた時は笑った。

■オーディン　帝国軍士官学校　　アントン・フェルナー

「あのお方がテレーゼ様か」
ギュンターが言う
「可愛い方ですね」
ミュラーが言う

テレーゼ様を直接見るのは今日が初めて先輩方から聞かされた話を噂半分に聞いていたが、１００パーセントだったとは驚いた。
なるほど人気が出る訳だ、あの顔あの気品あの優雅さ。
これで我々のクラスメートからもフアンが出来るな。
俺たちはどうなるか判らんが。

第二十五話　脱出！いいえ放流です（前書き）

第二十六話　第四次イゼルローン攻防戦が未だ書けないのに、第２７～２９話が完成している。
２６話を一時飛ばして掲載しようか考え中。

第二十五話　脱出！いいえ放流です

帝国暦４７８年　７月１０日

■オーディン　宇宙艦隊第２宇宙港　　オスカー・フォン・ロイエンタール

俺は今日ほど軍務省、統帥本部、宇宙艦隊司令本部そして叛徒共に感謝することはないだろう。
あの魔王（テレーゼ）から俺を救ってくれたのだから。大神オーディンよ今日ほど貴方に感謝したことはない。
思えば二年前新学期に調子に乗り武術授業で優勝したのがケチの付き始めだった。
今日の惨状を思えばあの時、鶏冠頭（ビッテンフェルト）に負けていれば良かったのだ。
今更思うが一生の不覚だ。

翌年の新学期は校長とシュターデン教官の尽力で魔王が来ないと知ったときは、２人に感謝したものだ。
所が魔王は卒業式にやって来た、目の前が暗くなった何故なら俺はクラスヘッドだったのだ！
魔王が恩賜の短剣授与をすると聞いたとき、俺はそのまま腹痛で逃げようとしたくらいだ。

配属先は士官学校の下馬評で魔王の侍従武官という話がまことしやかに流れたため、卒業式に無理矢理校庭に連れ出され３０回にも及ぶ胴上げをしまくられたあげく最後にプールへ叩き込まれたのだ！
あの伯父も侍従武官に成るようにと運動し始めたが、俺自身が宇宙艦隊に配属されなければ任官拒否して実家経営の鉱山に住み着くと我を通しまくった。

危ういところであったが、叛乱軍がイゼルローンへ侵攻するとの情報が入り、宇宙艦隊司令本部、軍務省、統帥本部で新規卒業士官の艦隊による研修が決まり成績優秀者は例外なく全員旗艦に乗艦するように決まったのである。

此で最低でも４ヶ月は魔王から逃れられるし、イゼルローンなら女共も噂は知らんだろう。
エーレンベルク元帥、シュタインホフ元帥、ベヒトルスハイム元帥そして叛徒の指導者よ。
ありがとう本当にありがとう！

■オーディン　宇宙艦隊第２宇宙港　　フリッツ・ヨーゼフ・ビッテンフェルト

いやー良かった任官直後に仮配置とは言え宇宙艦隊旗艦に配属とは嬉しい限りだ。
本来なら新規士官は一年間デスクワークと言うのがこの所のパターンだったからな、はっきり言って俺は机に向かうのが苦手だデスクワークなんぞ、やってられるか！
所が叛乱軍のイゼルローン攻撃が有るからと旗艦勤務だ、いやはや楽しみだ。
ロイエンタールも奴らしくない機嫌の良さだな。

■オーディン　宇宙艦隊第２宇宙港　　アウグスト・ザムエル・ワーレン

今回いきなりの出陣に驚いた。

本来なら一年はデスクワークでゆっくり出来ると思ったのだが当てが外れた事に成る、リーザとの新婚旅行も暫くはお預けだ、早く帰れれば良いが叛乱軍めこんな時に攻めてくるな！

■オーディン　宇宙艦隊第２宇宙港

近日中にイゼルローンに叛徒共が大規模侵攻を行う可能性大と情報部及びフェザーンなどの情報によりイゼルローンへの増援部隊の派遣が始まった。
指揮官はグレゴール・フォン・ミュッケンベルガー大将、艦艇１５５００隻、兵員１６３万９０００名である。

その艦隊の中に４７８年度士官学校卒業生達が配属されていた。本来ならば一年間はデスクワークすることが普通であるが成績優秀者に戦闘を感じさせるまたとない機会として旗艦勤務として上位２０人が辞令を受けた。又その他卒業生もイゼルローンにて戦場の空気を感じる物として派遣される事が決まった。
そして旗艦配置の卒業生の中にオスカー・フォン・ロイエンタール、アウグスト・ザムエル・ワーレン、フリッツ・ヨーゼフ・ビッテンフェルトの３名も居た。

「おうロイエンタール今回の出兵で艦隊戦はあるかな？」
一人うきうきするビッテンフェルト。

「どうだか判らんが出陣は良い物だ」
なぜかホッとしにやけるロイエンタール。

「相手が居ることだ、こちらの都合では動いてくれまえ」
一寸憮然な態度のワーレン。

「其れはそうだがワーレン、出来ればドカーンとでかいのを見てみたいじゃないか」
「花火では有るまいしそう簡単にはいかんよ」
「ロイエンタールの言う通りだな」
「そんなもんか、つまらん」
「そろそろ出発だビッテンフェルト置いていくぞ」
「ああ置いていくか」
「ちっ判った」

■オーディン　グリンメルスハウゼン子爵邸

「テレーゼ様ロイエンタール達を武官就任させず前線へ向かわして宜しかったのですか？」
ケスラーが新規士官の書類を見せながら聞いてくる。
「いいのよ、私の武官としたり近衛にしたら、宇宙の気を吸えないでしょ。
実戦経験が無いと頭でっかちの養殖物に成ってしまうわ、今必要なのは天然物の人材なのよ。
シュターデンみたいに理屈だけの単細胞馬鹿は御しがたいでしょ。
それじゃ駄目なんだよね実戦で鍛えた技と勘が必要でしょう」

「其れで敢えて前線へ送るように陛下の勅命まで頂いたのですか？」
ケスラーその位で驚いては駄目だよ。

「今回は成績優秀者は旗艦で仕事その他はイゼルローン内で見学って形に命令してるから、戦場の気を知るには一番だと思ってね、所謂社会科見学ですよ」
「つまりはテレーゼ様の手の内で踊っていると」

「悪辣かも知れないけど、こうでもしないと駄目なのよ。敢えて心を鬼にして千尋の谷に突き落とすのよね」

「そう言うお気持ちでしたか」

「そそ。半年後に帰投するから其れから本番ですね」

「諒解しました」

第二十五話　脱出！いいえ放流です（後書き）

台詞を改訂

第二十六話　復活のロイエンタール（前書き）

第四次イゼルローン攻防戦が未だ書けないのに、書けたのはエル・ファシルの英雄です。

最後に増補しました。

第二十六話　復活のロイエンタール

帝国暦４７８年９月１日

■イゼルーローン要塞　　オスカー・フォン・ロイエンタール

やっとオーディンを出立しホッとした。
最初のワープを抜けたとき此ほど安堵した事は無かった。
もう魔王（テレーゼ）は遙か彼方だ！
此から俺の時間が始まるのだ！

いよいよイゼルローンだ、これで魔王は五千光年の彼方だ。
ホッとしたこれで暫くは自由恋愛が楽しめるという物だ、
まあ一週間は要塞の各部署の見学だから出かけられんが、８．９は休暇だこれからが楽しみだ。

翌日から要塞司令室や艦艇用ドック、浮遊砲台等を見学を行い宇宙艦艇に乗り回廊部の狭さや危険宙域の外園ぎりぎりまで航行したりし非常に為になる行為だった。
鶏冠頭（ビッテンフェルト）は戦艦に乗ると異様なぐらい興奮して、自分の艦は真っ黒に塗るぞと力説していたがお前未だ少尉だろう船が貰えるのが何時になるんだ？

ワーレンは心有らずとゆう感じで溜息をついていた。
そんなに嫁が恋しいか、俺には判らん事だがな。
俺は俺で今度の休みのことが気になってばかりいた。

そうこうしているうちに、８日が来た俺は早速バーへと繰り出した、

ネット情報で奇麗所が集まる所でイゼルローンでもお勧めスポットだと言うので行ってた。
店に行くと３０代前半ぐらの斜に構えた美女がお出迎えしてくれた。

「あら少尉さん初めての方よね？」
「ああオーディンから来た」
「まあ遠いところをようこそ、私当店のママをやっています、ユリアーネって言います」

「当たりのようだ、ママの態度も良いし、ホステスの質も良い」
「レテーナ此方のお客さんに来てあげて」
ママが呼んだ娘は、俺好みのいい女だった。
「レテーナて言いますお客様のお名前は？」
「オスカー、オスカー・フォン・ロイエンタールだ」
この名前に反応するだろうか？

反応しないな矢張り此処までは噂が来ていないのだな。
「ロイエンタール様で宜しいですか？」
「ああ構わんよ」
「よろしくお願いいたしますね、ロイエンタール様」
「此方こそミスレテーナ」
「レテーナで良いです」
「そうか」
今日は楽しい日になりそうだ。

■イゼルローン要塞　　バー　ファンタズィー　　ユリアーネ・フェルゼンシュタイン

本日調査対象のオスカー・フォン・ロイエンタールが来店した早

速羽を伸ばしに来たようだ。
レテーナを付けたが早速気に入った模様、そのうちに誘われるだろう以上。
御屋形様へ定時連絡終了。　明日以降も調査を続ける。

帝国暦４７８年９月９日

■イゼルローン要塞　　オスカー・フォン・ロイエンタール

今日も午前中は仲間とイゼルローン繁華街で必需品を購入してきた、あとは彼処へ行くだけだ。
昨日一日で感じたことは、レテーナは俺好みだし、向こうも満更ではないように見える。
しかし営業スマイルの可能性もあるから、数回は通って誘ってみるか。

仲間を誘ってファンタズィーへ向かう、鶏冠頭（ビッテンフェルト）とワーレンも誘ったが、
鶏冠頭（ビッテンフェルト）はバーへ行くより戦艦のドックへ見学に行くと何人かの艦船マニアと共に
出かけていった。

ワーレンは新婚の妻が居るのでそう言う所は行かんと断ってきた。
堅物だな、一人の女に操を立てるのがそんなに大事か？
半年も放っておけば、お前の妻も俺の親のように他の男に会ってるかもしれんのだぞ。
帰ったら違う奴の子がいるかも知れんぞ。

まあしょうがない。行きたくない奴は行かないで良い、楽しいことはライバルが少ない方が良いからな。
到着すると早速ユリアーネが出迎えてくれた。
「ロイエンタール様また来て下さったんですね嬉しいわ」
「ああまた来た」
「レテーナで宜しいかしら？」
「そうしてくれ」
「レテーナ。ロイエンタール様がいらっしゃってくださったわよ」

「ロイエンタール様またきてくださって嬉しいです」
「ああ今日もお前に会いにきた」
「嬉しいです」

今日も良い日だった。レテーナもかなり俺に興味を抱いてきたしあと少しだな。
魔王から逃れて以来運が向いてきた、これからが楽しみだ。

■イゼルローン要塞　　バー　ファンタズィー　　ユリアーネ・フェルゼンシュタイン

本日もオスカー・フォン・ロイエンタールが来店した。
相変わらずレテーナ狙いのようだ、来週辺りは誘われたならＯＫするようにさせよう。
御屋形様へ定時連絡終了。　　明日以降も調査を続ける。

■オーディン　　ノイエ・サンスーシ　　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

過日ケスラーよりロイエンタールの素行調査書を見せて貰った。
案の定女遊びを始めたようですね。
まあ束縛していたら男は逃げますから、息抜きさせてあげないと駄目ですからね。
まあしかし何処にでも爺様の組織構成員は居るんだね驚いたよ。
ロイエンタールよ息抜きして良く育って帰ってくるんだよ。

第二十六話　復活のロイエンタール（後書き）

これ以上書くと「らいとすたっふルール２００４」に当たる可能性があるので御想像に任せます。
誤植直しました。

第二十七話　第四次イゼルローン攻略戦（前書き）

初の戦闘シーンです、こんな感じですが如何でしょうか？
年月修正７７８→７８７　　４７９→４７８へ
最後に増補しました。

第二十七話　第四次イゼルローン攻略戦

宇宙暦７８７年　帝国暦４７８年９月１８日

■イゼルローン要塞

予てから予想されていた叛乱軍イゼルローン攻略部隊の予兆と思われる行動が次々と入ってきたのは標準時９月１８日午前９時のことであった。
イゼルローン要塞司令部内で、オペレーターの声が響き渡る。

「回廊外方に設置した偵察衛星からの連絡が次々に途絶えていきます」
「ティアマト星系アンシャルの軌道上に敵艦隊らしき反応あり」

イゼルローン要塞司令官テーグリヒスベック大将と駐留艦隊司令官プラテンシュレーガー大将そして増援艦隊司令官ミュッケンベルガー大将がそれぞれの幕僚を引き連れ作戦を立て始める。

■イゼルローン要塞　　グレゴール・フォン・ミュッケンベルガー大将

テーグリヒスベックが
『基本戦術は、駐留艦隊が叛徒共を要塞主砲の射程内に引き込みトールハンマーで撃破する』と主張する
するとプラテンシュレーガーが『我々は囮か』と反論する。
それに同調するように、両者の幕僚達も口々に同じように相手を誹謗する。

何なのだ此処は、叛徒が来て居るのに味方同士で争って唖みあっている。
これでは埒があかない状態ではないか。
此方は一刻も早く叛徒共を撃退せねばならんのに、出撃すら出来ないではないか。

折角皇帝陛下から信任を得てこの増援艦隊の指揮を任されたのに、このままでは陛下に申し訳がたたん。
そして第2次ティアマト会戦で散った。我が父ウィルヘルムと会戦前に倒れた大叔父ケルトリング元帥の無念を晴らす機会なのだ、此処は儂が作戦を述べた方が良いな。

「両人とも言い合っていても埒があくまい。
この作戦はどうだ、叛徒共は我々増援艦隊の到来を知らなかろう、艦隊を流体金属内に止めトールハンマー砲撃後出撃し混乱する叛徒共を一気に殲滅する」

司令部内でも良い案なのではとの声が聞こえる。
そこへプラテンシュレーガー大将が其れでは駐留艦隊が道化ではないかと文句を言ってきた。
「ではどうすればいいのか」
「逆にすればいい、駐留艦隊が流体金属内で待機し、卿の艦隊が敵をおびき寄せればいい」

身勝手な考えだ、損害を受けるのが嫌で貧乏くじを俺に引かせるつもりか。
しかしこのまま言い争っても仕方ない、戦う気のない奴に任せても失敗しかねん、
自分が出るしか無かろう。

「判った自分が出よう」
「頼んだぞ後詰めは任せるがいい」
嬉しそうに言うな、頬がゆるんで居るぞプラテンシュレーガー。

「グライフス連れてきた新規士官達上位２０名以外は講堂にて戦闘を視聴させよ」
「はっ」
「２０名は旗艦ヴィルヘルミナに乗艦艦橋に集結するように」
「直ちに命令します」
「テーグリヒスベック大将、プラテンシュレーガー大将後はよろしく頼みますぞ」
「了解した」
「任せて起きたまえ」

ヴィルヘルミナに乗艦し艦隊が発進する。
流体金属の海を突き抜け次々に戦艦、巡航艦等が真空の大海へと飛翔する。
このうち何隻がまた海へと戻れるのであろうか。
艦隊は各分隊、戦隊ごとに隊列を組みつつある、イゼルローンからは敵艦隊が近づいているとの入電が入り続ける。
１時間で隊列を組み終わり増援軍１５５００隻が戦闘形態を整えた。
ヴィルヘルミナのモニターからもティアマト星系方面から来る敵艦隊を捉えつつあった。

新規士官に聞こえるように参謀長に話しかけた。
「参謀長作戦は当初の通り敵をトールハンマーの射程内に誘い込む、誘い込んだら艦隊は天頂方向へ急速撤退だタイミングを間違えないよう、各分艦隊に作戦を徹底させよ」
「はっ直ちに」

次第に明らかになってくる敵艦隊、オペレーターが概算の敵艦隊数を伝えてくる。
「敵艦隊総数凡そ４００００隻」
凡そ2倍強の戦力に艦橋内にざわめきが起こる。
ふっ発破をかけるか。
「敵が４００００隻でも我が方は駐留艦隊と合わせれば３００００隻を超える、そしてトールハンマーがあるこの戦い勝てるぞ」
落ち着いたか、後は奴らがタイミングを間違えなければ勝てる。

敵艦隊が戦闘圏内へと近づいてくる。
オペレーターの声だけが響いていく「敵イエローゾーンを突破射程圏内に入ります」
「未だだあと少し引きつけろ」
「敵艦発砲」
「あの距離では有効打には成らんよ」
グライフスの言う通りだ、あの距離では防御シールドに弾かれる。
何発かは先頭集団に着弾するがシールドに阻まれ有効打とは成らない。

後ろを振り返ると新規士官達が固まって見ている、まあいきなり撃たれるのだ怖くもあろう。
しかし数人はモニターを確りと凝視し肝が据わって見える。

「敵艦隊距離１１光秒、有効射程距離に入りました」
「全艦ファイエル！」

漆黒の闇の中艦隊からビームの奔流が敵艦隊に対して弾き出される。
たちまち敵艦隊の先頭で花火が弾けるように大輪の光の花が咲きまくる。

先頭部隊を痛撃された敵艦隊だが2倍以上の戦力差に勢いづくのか怯まずに押し込んでくる。

此方も少しずつではあるが、損害が生じ始めている。
うむ、これは押し込まれた振りをしながらジリジリと後退するのも骨だな。
すでに艦隊はトールハンマー射程内に進入している。

オペレーターが報告する「敵艦隊トールハンマー射程まであと2光秒」
左舷分艦隊は流石ケルトリングだまとまりが良い。
右舷分艦隊が押され気味だな、バレンホイムは何をしてる！
本隊予備シュタイエルマルクでテコ入れだな。

「シュタイエルマルク准将に命令、本隊予備から２０００隻を持って戦線後方から回頭し右翼の傷口をふさげ」
「シュタイエルマルク、トールハンマー射程までの時間稼ぎだ引き際間違えるなよ」
「諒解しました」
これで右翼は対処できた。シュタイエルマルクなら安心だ。
更に圧力を加えてくる同盟艦隊。

「敵艦隊トールハンマー射程まであと０．５光秒」
「シュタイエルマルク分艦隊敵左翼先端に攻撃を開始しました、敵先端が崩れていきます」
よし、流石だシュタイエルマルク、だが深追いはするなよ。

「敵艦隊損害を物ともせず突入してきます」
「奴らは自殺志願者か？」
グライフスが驚いている。

「敵艦隊トールハンマー射程内に入りました」
「よし、あと2光秒引きつけるぞ」
「シュタイエルマルク分艦隊がバレンホイム分艦隊の援護に成功しました」
「バレンホイムに後退を指示、艦列を立て直しつつシュタイエルマルク分艦隊の後方へ廻れ」

「敵艦隊更に突進」
よし、そろそろだな艦隊を後退させ敵を引きずり込むぞ。
「イゼルローンから準備宜しの通信入りました」
よし来たか。
「全艦に命令全速で後退せよ。０．５光秒後退後天頂方向へ高速移動、トールハンマーが来るぞ」

敵艦隊は何も考えていないのか？壊走と勘違いしたのか？射程内に次々と敵艦が集まってくる。
そして遂に、イゼルローンの流体金属がパラボラ型に凹み其処から出力９億２４００万メガワットのビームが放たれた。

次の瞬間叛徒の艦隊は一瞬にして大損害を浴びた、混乱しつつある敵艦隊に第2波が発射され更に敵が消滅する。
その直後イゼルローンから駐留艦隊が出撃してきた。

「ふ、プラテンシュレーガーやっと出てきたか」
「敵艦隊壊走しています」
「よし我が艦隊は天頂方向より敵第二陣に攻撃をかける」

「素点固定」
「ファイエル」

敵第二陣に弾着し其れなりの戦果を挙げる。

「駐留艦隊突出してきます」
味方撃ちしそうになる為攻撃が出来なくなる。
「プラテンシュレーガーは何をしてるんだ！」
「戦果が欲しいのでしょうな」
「バラバラではないか、あれでは逆襲を食らうぞ」

案の定駐留艦隊は敵艦隊の逆襲で損害を出す。
そうこうしているうちに、敵艦隊は回廊から脱出していき、これ以上の追撃は不能だと言うことで艦隊はイゼルローンへ帰還した。

帝国軍の損害
ミュッケンベルガー艦隊　１３８７隻、９万３８１５名
プラテンシュレーガー駐留艦隊　２７７６隻　２３万８５１８名

最初から力戦したミュッケンベルガー艦隊より逆襲を食らった駐留艦隊の方が倍の損害をだした。

此処に第４次イゼルローン防衛戦は幕を閉じた。

第二十七話　第四次イゼルローン攻略戦（後書き）

ウィキペディアの引用先が間違えていて、９億４２００万メガワットになっていたのを、ご指摘して頂き直しました。

第二十八話　イゼルローンを血に染めて（前書き）

同盟側です。

第二十八話　イゼルローンを血に染めて

宇宙暦７８７年年　帝国暦４７９年９月

■イゼルローン要塞　　同盟軍イゼルローン遠征隊

自由惑星同盟は銀河帝国の最重要の軍事拠点たるイゼルローン要塞を攻略すべく、第４次の遠征隊を派遣した。
遠征隊がハイネセンを出発し回廊内に進入したのは宇宙暦７８７年９月１２日のことであった。
同盟軍参加兵力、第４艦隊１４５００隻、第７艦隊１４３００隻、第１２艦隊１３４００隻。合計４２２００隻兵員４３９万６０００名であった。同盟軍第４艦隊司令官サダ中将、第７艦隊司令官シンクレア中将、第１２艦隊司令官ロボス中将であった。

回廊進入直後の９月１３日、第４艦隊旗艦アキレウスでは事件が起こっていた、サダ中将が急性腹膜炎で指揮を執ることが不能になったのだ。
緊急の事でサダ中将は後送され変わって副艦隊司令官クラドック少将を戦時特例で中将待遇とし指揮を任せていた。

第４艦隊旗艦アキレウス艦橋ではクラドック中将がほくそ笑んでいた。
俺にも運が向いてきた、此所で活躍すれば中将になり艦隊司令になれる、
しかも第４艦隊が先頭だ、戦力も敵の3倍ほどだ勝ち戦になるぞ。
オペレーターの報告で我に返る。
「要塞より敵艦総数凡そ１５０００隻、敵艦隊此方へ向かってきま

す」
ふっ艦隊数はほぼ同数いける！

「よし射程に入り次第砲撃する、そのまま要塞まで押しきるぞ」
参謀長が意見する「もっと引きつけてから攻撃をした方が良いですが」
ちっ此奴自分が司令官に成れなかったからと、嫉妬してじゃまする気か。

「参謀長戦いは気勢を持った方が勝つのだよ、消極的な言動は慎みたまえ」
「・・・・」
「敵艦隊射程内に入りました」
「よし全艦撃て」

艦隊から放たれたビームが次々と敵艦に命中していくが、大半がシールドで防御される。
「ちっ弾いたか、全速前進間合いを詰めろ！」
参謀長が苦虫を潰したような顔をしていやがる馬鹿にしやがって。

「敵艦隊発砲、直撃来ます」
突っ込んだ先頭部隊がシコタマ叩かれる、不味い俺の経歴に傷が付く！
「全艦突撃撃って撃って撃ちまくれ！」

いいぞ敵に損害が出てきている、ジリジリ圧力を受け後退していく、特に右翼の敵はばらけ始めているな。
「敵右翼に攻撃を集中せよ！」
右翼の乱れが激しくなってきた、良しいけるぞ。

参謀長がまた余計なことを意見して来やがった。
「司令、第7、第１２艦隊と連携を取りませんと隊列が伸びすぎます」
「黙れ！今は押してるんだ。此処で止まれば敵が持ち直す、そんなことも判らんのか！」

オペレーターの声が響く。
「回廊危険宙域ギリギリから敵艦隊凡そ２０００、我が艦隊左翼に攻撃」
馬鹿野郎余計なことを言いやがるから、見逃したじゃないか！
「敵は最後の足掻きだ、撃って撃って撃ちまくれ！」

「第１２艦隊ロボス中将より入電『先走るな隊列を立て直しつつ後続部隊との連携を保て』」
「司令敵の動きを見極めませんと」
「返信はどうなさいますか？」
「無視しろ！」
「司令ロボス中将が最先任です命令に従わないと」
「黙れ！俺に意見するな！」
「しかし」
ちっ！勝ったら参謀長は真っ先に首だ！五月蠅い奴はいらん！

「ロボスが先任だろうが、艦隊司令官は俺だ！今は同格の中将だ関係ない！」
ロボスの奴俺だけ手柄を立てるのに嫉妬してるらしいな。

「敵壊走を始めました」
「ようし行けるぞこのまま敵艦隊と追走して要塞に肉薄しろ！」
要塞砲は此で使えんよ。
「司令！！」

「なんだ？」
「敵艦隊天頂方向へ急速上昇、要塞表面から光が！」
「司令急速後退をトールハンマー来ますー！」
「直撃来ます・・・・・・・・・・！！」
馬鹿な俺の野望が・・・・・・・・・・
次の瞬間第４艦隊旗艦アキレウスはその周りにいた僚艦共々原子の粒として消え去った。

第１２艦隊旗艦ペルーンではロボス中将がその閃光を見ながら唸っていた。
クラドックの阿呆が！
「参謀長第４艦隊の残存部隊に速攻で後退せよと命令出せ」
「はっただちに」

「トールハンマー第２波来まーす！」
またも沈む第４艦隊の各艦、最早組織的な動きも出来ない状態でバラバラに撤退してくる。
「第４艦隊生き残りの最先任を探して撤退指揮を行わせろ」

悲鳴のようなオペレータの声が響く。
「敵艦隊天頂方向から再度攻撃来ます！」
「要塞表面から敵艦隊出現しました」

「参謀長敵は更に艦隊を隠していたらしい、不味いぞこれは。」
「司令官閣下いかが致しますか？」
「第４艦隊残存はティアマト星系まで後退させろ、第７、第１２艦

隊で敵を防ぎつつ後退だ」

「第４艦隊分艦隊旗艦タケミカヅチ確認」

「阿呆の旗艦じゃないか、誰が指揮を執ってる？」

「パストーレ准将です」

「パストーレに第４艦隊を纏めてティアマト星系まで兎に角逃げろと連絡しろ！」

「諒解」

「第７艦隊のシンクレアに連絡を」

「シンクレア此は不味いぞ、敵の数が予想以上だ」

「確かに、阿呆のせいで作戦も滅茶苦茶だ」

「さすがにもう無理だろう」

「だな」

「俺とお前で繰り引きながら後退だ」

「判った」

嵩にかかって追撃してくる帝国軍特に、イゼルローンから出てきた艦隊は凄い勢いで追ってくる。

しかしロボスとシンクレアの逆襲に会い戦果を余り挙げられずに終わった。

同盟軍の４回目のイゼルローン攻撃は失敗に終わった。

同盟軍の損害

第４艦隊旗艦アキレウス以下６４３７隻、兵員６１万３８７７名

第７艦隊１１７７隻、兵員７万５８８７名

第１２艦隊１２６１隻、兵員８万４５２２名

またしても同盟軍の敗北に終わった。

第二十八話　イゼルローンを血に染めて（後書き）

ムーア＋（ホーランド÷3）＝クラドック中将と言う感じ。

第二十九話　新米少尉のイゼルローン日記（前書き）

今回グタグタです。

第二十九話　新米少尉のイゼルローン日記

帝国暦４７８年９月

■イゼルローン要塞　　フリッツ・ヨーゼフ・ビッテンフェルト

９月１日
イゼルローンへ到着した。
楽しみにしていた前線勤務だ俺たち下っ端は仕事がないから要塞内の各所を見学だ。
要塞司令部ではトールハンマーの予行演習や浮遊砲台の操作法など教えて貰った。

９月９日
ロイエンタールがバーへ誘ってきたが断った、此処まで来たら歩かなければ面白くないだろう。
楽しみだったのは、艦艇ドックだ！各種戦艦や巡航艦が多数並び整備や修理が行われている、
流石にこれだけの戦艦を間近に見るのは初めてだ、この重厚さこの機能美良い物だ。
向こうには高速戦艦が停泊している、これは良い！スマートだし美しい艦だ良し決めた。
俺の旗艦はこのクラスだそうしよう。

９月１８日午前９時
朝起きたらロイエンタールが居なかった。
昨夜は何処かへ行っていたようだ、朝飯をかっこんでいる途中に帰ってきた。

ミーティングを始めようとしたとき敵襲の放送が鳴り、いよいよ戦闘かと周りの連中と話していた時、
新規士官のうち上位２０名は旗艦へ乗艦せよと命令が来た。
よし俺も戦闘だ、叛徒共みておれよ！

凄まじい戦闘だ流石はミュッケンベルガー大将だ。
的確な指示で敵の攻撃を受け流していく、同期連中は殆どが震えまくっている。
だらしないぞお前達！流石にロイエンタールとワーレンはスクリーンを見ながら一々頷いている。
敵将の猛攻が凄い勢いに感じるんだが、司令官は非常に落ち着いた口調で命令を出す。

受け流していくそうだ、しかし右翼が崩れつつある、あの攻撃は凄いと思うのだが、ロイエンタールがあれはお前のように猪突猛進だと言いやがった。
俺はそんなんじゃないぞ！

司令官が予備の艦隊を迂回戦術で敵左翼に叩きつけた、おー敵が崩れていく、あのような戦法も使えるのか勉強になるな。
後退しつつトールハンマーの準備が出来たと連絡があると、艦隊は急速上昇し後に残った叛徒の艦隊がトールハンマーで大打撃を食らっていった。

司令官の追撃命令と駐留艦隊の突出で敵は撤退していった。
存外叛徒共もだらしない。
今回は大変参考になった。特に敵の圧力を躱しつつ陣形の再編は授業では中々体験できない、良い経験だった。

帝国暦４７８年９月

■イゼルローン要塞　　アウグスト・ザムエル・ワーレン

９月１日
やっとイゼルローンだ、５０日間オーディンに連絡が付けられず、非常に寂しい気分だった。
しかし今日からはＦＴＬ通信でリーザと話が出来るようになる、凄く楽しみだ早く夜にならんかな。

９月２日
久しぶりに話をしたリーザは相変わらず綺麗だ、早く帰りたくし仕方ない。
研修中にやけてしまい、案内士官から怪訝な目で見られた気をつけなばならんな。
しかし今日も連絡しよう。

９月９日
ロイエンタールがバーへ行こうと誘ってきたが断った、当たり前だ俺にはリーザが居るんだ、お前じゃ有る前えし女遊びをしていられるか。
ロイエンタールはそうかと言って一人で出かけていったが、彼奴のスキップは初めて見たが見物だった。

９月１８日
ビッテンフェルトが朝起きたらロイエンタールが消えていると言ってきたが、
大方お前が寝坊して先にロイエンタールが出たんだろうって言ってやったが。

食堂にもおらず、何処へ行ったと話していたら、
士官学校在学中の門限破り時のように窓から入ってきた。
はあ、お前は少尉になっても同じか。

呆れていたら敵襲の放送があり、どうするんだと皆でざわついていたが、新規士官上位２０名は旗艦へ集合と来たので慌てて集合した。
実際の戦闘という物は聞くのとは全く違い緊張の連続だ。
いつもはいきがっている、貴族出身の連中はブルブル震えて居るが、ビッテンフェルトやロイエンタールは何処吹く風でスクリーンに移る戦況を確認している。

司令官は作戦が旨い。見ていても的確な戦法で猪突猛進の敵の圧力を躱していく。
少しずつ罠にはめる様は燻し銀の男らしさだ、俺もあのように的確な指示が出来る人間になりたい。
トールハンマー砲撃には肝を冷やされた。あれほどの攻撃は敵ながら気の毒に思えてしまう。

今回の研修は非常に為になったが、リーザに会えないのが辛い、
半年の予定だったが敵を撃退したのだから、もう帰れるのだろうか
其れだけが心配だ。
そんな話をしていたら、ロイエンタールが俺は帰らんって力説していたが、
そんなにいい女でも居たのか?俺には判らん事だ。

帝国暦４７８年９月

■イゼルローン要塞　　オスカー・フォン・ロイエンタール

9月1日
よしイゼルローンだ！もう俺は自由だ魔王は居ない、イゼルローンの恋人達よ俺は来た！
しかし外出許可が1週間ごとは残念無念だ。
研修よ早く終わってくれ、鶏冠頭（ビッテンフェルト）は喜んでいるが俺は早く自由になりたいんだ。

9月7日8日
レテーナよお前を落としてみせる。

9月18日
遂にレテーナの家に招待された、店から帰りに小洒落たレストランで食事し家へエスコートされた。
家は洒落たマンションでイゼルローンにあるとは驚きだ、
軽く酒を飲みながらレテーナの身の上話、不思議とレテーナとは話をしたくなる。
そのまま夜は更けていく。

翌朝起きたら午前8時半過ぎだった、
官舎へ行くが門番が居る為に昔のように窓から侵入した。
ワーレン達が呆れていたが、女との情事は俺の人生だからな。

呆れられている中敵襲があり、俺たちは旗艦に乗って迎撃だった。
司令官の的確な戦法だが右翼の指揮官が下手くそだった、俺ならあんな指揮は執らんのにな、
あれで正規艦隊指揮艦とは情けない。

左翼のケルトリング少将は流石に旨い、
しかし娘は魔王の取り巻きだ絶対に手を出さないようにしよう！

遊撃を指揮したシュタイエルマルク准将の指揮も水際だっていて参考になる。

しかし敵将の指揮が余りにも不味い戦法だ、只突っ込むだけで、鶏(ビッ)冠頭(テンフェルト)よりむごく兵が気の毒だ。

しかし叛乱軍め余りにも弱すぎる、此で終わりではオーディンへ早く帰らなければ成らないじゃないか、

魔王から逃れたのに帰りたくはない！

このままイゼルローンへ永住したい、何とかならない物だろうか。

第三十話　チシャ娘（前書き）

あざといレタス娘、悪巧みする。

第三十話　チシャ娘

帝国暦４７８年１０月１日

■オーディン　　ノイエ・サンスーシ　　小部屋

先だってのイゼルローン防衛戦の戦闘報告書や素行報告書を読みながら、お父様、爺様、ケスラー達と話し合い中。
お父様は血色の良い顔で頷きながら読んでいる。
最近はお父様も頻繁に会合に参加して生き生きとしています。

「テレーゼよお前の推測が当たったの」
「決断して頂いたのはお父様ですし、それに見合う情報を出してくれたのは皆ですから」
「よいよい謙虚じゃの」

「ケスラーよ、ミュッケンベルガーとケルトリング、シュタイエルマルクはよう働いたが、要塞の方は駄目じゃな」
「御意、調べました結果要塞司令部は未だ及第点ですが、駐留艦隊司令部は落第点でございます」
「ふむそろそろ替え時かの、のうグリンメルスよ」
「既に任地に行き5年膿んでおりましょう」
「では変えるか、後任は軍務尚書に任せようぞ」

うわー此であの味方殺しが行くのか。
考えていると、お父様が気がついたのか。
「テレーゼどうした真剣な顔をして」
「いえ、要塞の司令部同士が仲が良くないようで、
其れを是正するのはお父様の勅命しか無いかと思いまして」

「ふむそうじゃの、親任の時にきつく言い聞かせよう」

少しは良くなるか、けど平行追撃作戦対策は早くしないと駄目だな。ケルトリング少将かクラリッサのお父様だけど意外に戦闘上手なんだな、原作には出てこないが何処かで戦死したのかも知れないが、此からのことを考えると貴重な戦力だ。

シュタイエルマルクって聞いた事があるんだけど、どこだっけか？

「ケスラー、シュタイエルマルクってなんか聞いた気がするんですけど？」

「御意、第二次ティアマト会戦で勇戦したシュタイエルマルク中将の孫でございます」

「なるほどあの勇将シュタイエルマルクの血筋ですか、祖父同様流石ですね」

いずれシュタイエルマルクもスカウトしよう。

おやおや爺様、ウツラウツラしてきてますね、日向ぼっこ提督の面目躍如ですか、

まあそれだけケスラーを信頼している証拠だし、お父様もクスクス笑ってます。

「今回は敵が此方の艦隊に圧力をかけて壊走させながら平行に追撃しようとしたみたいだけど次回以降も同じ手を使ってくる可能性があるのでは？」

「確かにその手はあります、統帥本部で研究させましょう」

「問題はミュッケンベルガー大将のように的確な戦法をとれる将帥が居ないと破綻する事だと思いますよ」

「確かにそうじゃな、そうならん様に作戦を作らせねばならぬの」

「負けた後で直ぐに攻めては来ないでしょうね、次回までに考えれば良いのでは、

いっその事ミュッケンベンガー大将をイゼルローン要塞総司令官にするのも手ですが」

「いやあの者は次期宇宙艦隊司令長官にと考えておる、
今回上級大将に昇進させ宇宙艦隊副司令長官にするつもりじゃ」
なるほどね、彼なら威厳があるしピッタリでしょう。

ラインハルトは『堂々たる者だ、ただし堂々たるだけだ』と批判していたけど、
あれは自分の物差しで言っているだけで実際各戦線では有利に戦っているから、
父様の人物評価は確実だね。

完全に爺様寝てますが、寝てるふりかも知れないのがこの爺様の凄さ。
そうそう慰問袋の事も頼もう。
「お父様、奮戦むなしく叛乱軍の俘虜になってしまった可哀想な将兵達に慰問袋を送りたいのですが、宜しいでしょうか？」
「うむ考えがあるのか？」
「兵達が可哀想ですし平民の人気取りにも使えると思います、
それに何れ帰還させたときに我々の味方としてカウントできるでしょう」
「ではテレーゼに任せよう、自由にせい」
「はいお父様、ケスラーその旨準備を手伝って下さい」
「御意」

そうだズーッと気になっていた事を聞こう。
「お父様お聞きしたいのですが、グリューネワルト伯爵夫人の父親が男爵を求めたとか、断ったとか聞いたのですが、どちらが本当なのですか？」

「あの男は男爵には自分は過ぎたる物と辞退してきおった、其れなりに矜持があるので有ろう」

なるほどね、ラインハルトは父親のことを毛嫌いしていたけど親なりの矜持があったんだな。

此処は一手撃ちますか、ケスラーなら出来るでしょうし。

「ケスラー、グリューネワルト伯爵夫人の弟ですが、最近どうでしょうか？」

「はっ、相変わらず問題を起こしております、走るトラブルと言われてるそうです」

「ハハハ、相変わらずよの」

父上楽しみますね。

「普通なら放校処分に成るのをそのまま居るられるのが、お父様のお陰だと判ってないんでしょうね、あの目見れば、お父様を相当恨んでいるのが判りますし」

「そうかテレーゼにも判るか」

「判りますよお父様、ギラギラした野心がだだ漏れです」

「お父様提案なのですが、爵位もない貧乏騎士の小倅と馬鹿にされるのが相当頭に来るのでしょうね、

それならグリューネワルト伯爵夫人の身内なのですから、男爵か子爵を与えてしまったら如何でしょうか？」

ふっいずれ、平民や下級貴族の支持を受ける時、

爵位も持たない貧乏貴族出だと言う事もある程度加味されているから、

そのフラグを折ってあげましょう。

ラインハルト・フォン・ミューゼル男爵殿、いや子爵殿かな。

「そうかのあの者が受けるかの」
そうでしょうね、お父様もそう思う出しょうね、ケスラーも頷いてるわね、
私も思うよ、けどね作戦はビッテンの様に突撃だけじゃ無いんだよ。
搦め手から攻めるのも手なんだよ。

「お父様、其処は搦め手から攻めるのが手ですよ」
「ほうテレーゼならどうする？」
「グリューネワルト伯爵夫人を使います、
まず伯爵夫人にミューゼルの幼年学校における虐めを誰かに教えさせて心配させます。
そしてお父様がその旨で彼に爵位を与えると言えば、伯爵夫人は喜んで受けるでしょう。
そうすれはシスコンのあの者の事です、一も二もなく受けるでしょう」

うわー言い過ぎたかな、お父様もケスラーも引いてるよ。

「ほほーテレーゼ様流石ですな」
やっぱ爺様起きてたか。
「うむ流石じゃ」

「お父様の子供ですし、良い師匠達が居りますからね」
「ハハハそうかそうじゃの、のうグリンメルス、ケスラーよ」
「あと今回の爵位授与のカモフラージュにイゼルローンで活躍したミュッケンベンガー大将は伯爵家の次男で爵位を継げません、取りあえず大将を男爵か子爵に叙勲した方が良いかと其れだけの武勲を立てていますし、ここで恩を売っておけば後々役に立ちます」

「他の者が不公平を感じるのではないかの？」
「その辺は大将は十分な武勲をあげてますから大丈夫ですね、
あの者については、お父様だから大丈夫でしょう」

「ハハハ儂は寵姫には甘いからの」
「そう言う訳です」
「陛下流石でございますな、テレーゼ様なれば此から安心ですな」

「自分が無能と知っている者と違い、
自分が誰よりも優れていると言い、
自分よりも劣る者は歯牙にもかけない者には、
それ相応の嫌がらせを受けるべきですからね」

フフフ、貴方がお母様に対して付けた渾名のチシャ夫人。
貴方の嫌いなチシャの様に巻き巻きしてあげますよ。
ラインハルト・フォン・ミューゼル君。

第三十話　チシャ娘（後書き）

増補しました

第三十一話　大いなる罠（前書き）

むっちゃ黒いです。

第三十一話　大いなる罠

帝国暦４７８年１０月２日　　午前

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　ベーデミュンデ侯爵夫人邸

前回の会議に於いて決まった作戦を実行すべく必要なシナリオを作成中です。
ユリアンのイゼルローン日記に帝国歴４８８年に捕虜交換が行われていて其れが5年ぶりしかも５０年ぶりの大規模交換だと言うことは、
４８３年に交換が行われている計算になるがその時は少数しか交換されていない。

エコニアにはケーフェンヒラー大佐以下５５０００人ほどが居るはずだしどうするか、
エコニアはヤンが来年赴任する所だからな、それに暴動があるどうすべきか。
みすみす死ぬ兵達を助けたいしどうしょう。

ケーフェンヒラー大佐以下５５０００人を恩赦で引き取れれば、
大佐の証言から帝国内スパイ網の存在を知らせることが出来る、
しかしケーフェンヒラー大佐は帰還を拒否するだろう。

しかしヤンがアッシュビーを調べてローザス提督に会いに行って、
直ぐにローザス提督が自殺他殺事故とも判らない睡眠薬の量間違えで死去している、
そしてスパイ網の答えを出した直後にケーフェンヒラー大佐が急死している。

あまりにも出来すぎていないか、ヤンの報告書自体２５年間の機密扱いに成った。

ローザス提督とケーフェンヒラー大佐は口封じに殺られた可能性が大きい。

民主共和制と言いながら衆愚政治で憂国騎士団などが平気で闊歩している国だ、

ヤンの暗殺未遂とかもしている、あり得すぎる事態だ。

ヤンが事態を起こす前ならケーフェンヒラー大佐を呼び戻すことが出来るかもしれない。

此方もある程度の大物の捕虜を出して交換するしかない。

そのへんは皆に相談しましょう。

仕方ない此処は一端諦めて、慰問袋だが帝国の缶詰や食料品、本、衣類、あと1人1本のワインだね出来るだけ良いワインを送りましょう、捕虜に里心を付けることも出来ます。

４１０年物は流石に無理だが４６３年物辺りなら揃うでしょう。

４６３年物も同盟では結構なビンテージワインですから、

おそらくはかなりの数がピンハネされるでしょうね。

ピンハネされた物は同盟内で高値取引されるでしょう、

収容所所長とかの小役人が自分の懐を潤すために。

捕虜が帰還してワインを飲んでないあるいは数が合わない状態ならば、

『同盟は捕虜に対しての救恤品を搾取している』と宣伝できますから。

それを口実に戦闘を行うことが可能ですからね。

救恤品送付と捕虜交換については。
多少強引だが名目はお父様の在位２３周年記念として、
俘虜に成った者達にも慈悲を行い、帰国させ恩赦を与えて罪に問わない様にする。
エコニアだけだと勘ぐられるから、数的には３０万程度は交換しよう。

作戦としては、ミュッケンベルガーを子爵に叙勲し、ラインハルト叙勲も行う、
その時ついでに恩赦も行う形にすれば、門閥貴族やリヒテン爺さん達うるさ型も、
ラインハルトの批判が大きくて、それほど文句は出ないはず。

そうなると慰問袋と捕虜交換に付いて、
即位の月の４７９年の２月に間に合うように今月中には準備を終えないとだめだな。
フェザーンの高等弁務官事務所から捕虜交換と慰問袋送付を、同盟へ連絡しよう。
この頃のフェザーンは黒狐じゃないから、陰謀に巻き込まれる可能性は低いだろう。

その後イゼルローンに居るミュッケンベルガーに連絡して同盟に使者を送り、
受け渡しの話し合いをさせよう。
そうなると大規模な事になるから、
父様と爺様とケスラーに相談しよう、早いうちがいいな今から連絡してみよう。

帝国暦４７８年１０月2日　午後
■オーディン　ノイエ・サンスーシ　小部屋

早速父様のところへ、爺様、ケスラーがやって来た、
ケスラーは爺様の副官のポジションみたいに成っています。

父様が聞いてきます。
「テレーゼ突然いったい何のようじゃな」
「はいお父様、昨日の計画シナリオを考えまして、
是非お父様達に演技と品物の準備をお願いしたいのです」

「シナリオはこうです、
その１、叛徒共に俘虜に救恤品として慰問袋送付を提案します。
此は１月の終わりまでに俘虜に届くようにします。
その中身ですが、衣類、本、食料品などですが、一番大事なのが４６３年物辺りのビンテージワインを１人１本です。」

３人とも、えって顔してますね。
それはそうですよね、俘虜にビンテージワインなんて帝国じゃ普通送りませんよ。
「なぜワインを?」
お父様も疑問ですよね。

「第１には俘虜に里心を付かせる為、第２に俘虜がお父様に感謝すること、
第３に此が一番大事なのですが罠です」
「罠じゃと?」
みんな怪訝な顔してるね。

「そうです、叛徒共の組織はかなり腐敗が進んでいるそうです、

其処へ高く売れるビンテージワインが数百万本送られて来たらどうすると思いますか」
「なるほど其れを掠め取ろうとする訳ですか」
「ケスラー正解ですよ。小役人が自らの懐を暖める為に掠め取るでしょう」
「しかし其れが罠じゃと言うのが解せんが」

「お父様そこです、俘虜交換をしてワインが配給されたかを調べて、数が合わないなど判れば、叛徒共は共和主義自由主義は平等な世界と言いながら、
俘虜の生活品まで掠め取る盗賊と変わらない集団だと、
幻想を抱いている臣民に現実を見せることが出来ます。」

「なるほど凄いことじゃの」
「それなら臣民に対する強烈なインパクトになります」
みんなも驚いてるね。

「ではその2、俘虜交換による帰還です、
普通であれば俘虜は不名誉な者ですが今回お父様の戴冠23周年とイゼルローン勝利の恩赦として、
帰還兵恩赦を行います、彼らは確かに叛徒共の主義に毒された者もおりましょうが、
純粋に帝国を思う者達が多いはずです。
それに皇帝陛下の慈悲を受けて恩赦されて社会生活に戻れると成れば臣民の忠誠度も上がります。
また生活品を掠め取られたと知れば叛徒共に対する幻想もきえるでしょう」

「なるほどのそう言う見方もあるのじゃな」

「俘虜のデーターを見たのですが、エコニアに第二次ティアマト会戦で俘虜になった、
ケーフェンヒラー大佐と言う方が未だに抑留されています。もう４１年も抑留では気の毒なので是非帰還させてあげたいです」

「テレーゼ様俘虜交換数ですが如何ほどをお考えでありますか」
まあ其れを考えるよね。
「３０万ほどを計画しています」
「３０万とな」

「最低でもその位じゃないと罠になりませんから、
それから、救恤品と俘虜の受け渡しはイゼルローンで行った方が良いかと」
「なぜじゃフェザーンで良いのではないか？」
「フェザーンだと機密がばれる可能性や何か仕掛けられる可能性が有ります」
「うむそうじゃの、ケスラーそうせい」
「御意」

「その３です、昨日話したように恩赦をうるさ方から霞ませる為に、
お父様の戴冠２３周年でイゼルローン防衛で活躍したミュッケンベルガーに子爵位と所領を下賜します、更にグリューネワルト伯爵夫人の弟に男爵を下賜します、
これで恩赦は完全に霞みます。
ミュッケンベルガーはお父様に感謝するでしょう」

「そうじゃのミュッケンベルガーはよく働いてくれるからの」
「そうですよ、ミュッケンベルガーには、非難は少ないはずです。
グリューネワルト伯爵夫人の弟は徹底的に非難されるでしょうね。

特にフレーゲル男爵辺りは激高しそうですよ」

「ハハハ確かにあの者は激高しそうじゃの」

「陛下目に浮かぶようですな」

「全くじゃ」

笑いが発生していますが、そんなに可笑しいかな。

「こんな感じかですか『伯父上あのようなげせんの者が私と同じ男爵ですと！』言いそうですね」

「爵位を与える時グリューネワルトを使うというがどの様な感じじゃ？」

「ケスラー、伯爵夫人の所にも潜り込んいるのでしょ？」

「御意」

「それに噂を流させます。幼年学校で弟が爵位がないと虐められていると、

そしてそのことで喧嘩をして放校されるかも知れないと」

「なるほど」

「そして、お父様がお渡りになってこう言うのですよ。

『そちの弟の事じゃが、この所幼年学校で爵位も持たぬ小僧となじられておるそうじゃ、

そこでじゃ、そちの弟にグリューネワルト伯爵家の家門で断絶している、

シェーンヴァルト男爵位をやろうと思うがどうじゃ？』と。

「なるほどのいい手じゃ」

「後今思いついたのですが、あの一緒にくっついている赤毛の者の

親を帝国騎士に叙勲したらどうでしょうか、あの者の親は司法省の下級官吏のようですね、
今では帝国騎士はたいした価値はありませんから、
永年勤続かなにかで褒美に叙勲してしまうと良いのでは思うのです」

「ふむ其れぐらいであれば文句も出ぬまい」

「それでは、ケスラー準備をお願い、
お父様は国務尚書と軍務尚書に俘虜に対する事と叙勲に対する事を、
そしてミューゼルの噂が流れたら伯爵夫人の元へお願いします」

「御意」
「うむテレーゼ任しておきなさい、演技は得意じゃからな」
「確かに陛下の演技は子供の頃からですからな年期が違いますな」

第三十一話　大いなる罠（後書き）

ケーフェンケラー→ケーフェンヒラー修正しました。

改訂しました

そちの弟にグリューネワルト男爵位をやろうと思うがどうじゃ？』

そちの弟にグリューネワルト伯爵家の家門で断絶している、シェーンヴァルト男爵位をやろうと思うがどうじゃ？』

グリューネワルト男爵家→シェーンヴァルト男爵家

第三十二話　皇帝の忙しい１０月（前書き）

シーンが何回も変わるので分割。
陛下が演技します。
お茶目に３０万から１００万へ増えた。

第三十二話　皇帝の忙しい１０月

帝国暦４７８年１０月１０日

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　謁見室　クラウス・フォン・リヒテンラーデ

陛下から午前９時に謁見室に参内せよと前日に連絡があったが何であろうか。
ここ数年陛下が真面目に執務を取られる事があるのでその事であろうか。
謁見室に行くと既に陛下が待っていらっしゃった。
陛下は私に驚くべき事を仰った、酔っておるのでは無いかと疑った物じゃ。

「国務尚書ご苦労」
「皇帝陛下にはご機嫌麗しく」
「うむ今日呼んだのは他でもない、叛徒共に囚われておる我が臣民の事じゃ」
「と申しますと」

「うむ臣民達が叛徒共に囚われ窮乏しておろう、そこでじゃ救恤品を送りたいと思うてな」
何を言うのじゃ陛下は叛徒に囚われた者など捨て置けばよい物を。
「恐れながら皇帝陛下囚われし者共は陛下に対しての忠誠心が足らぬからみすみす叛徒共に囚われたのですぞ」

「国務尚書、卿は皇帝より偉いのか？」
「滅相ございません」

陛下お怒りなのか。

「では予が良いと申しておるのじゃ囚われし者に救恤品を送る事にするのじゃよいな」

「お任せ下され皇帝陛下」

「うむ入れる品は三長官を呼んで有るので此から話そうぞ」

うむ仕方が無かろうグリューネワルト伯爵夫人が来られてからの陛下はお変わりに成られた。

「三長官をこれへ」

エーレンベルク、シュタインホフ、ベヒトルスハイムが入室してくる。

「皇帝陛下にはご機嫌麗しく」

「皇帝陛下にはご機嫌麗しく」

「皇帝陛下にはご機嫌麗しく」

3人が同じように挨拶を行う其れを見て陛下が。

「三長官ご苦労」

「さて既に国務尚書には伝えたが叛徒共に囚われた者達に救恤品を送る事にするのじゃよいな」

「恐れながら皇帝陛下囚われし者共は陛下に対しての忠誠心が足らぬからみすみす叛徒共に囚われたのでございます、忠誠心有れば自決して憚らないかと愚考いたします」

ベヒトルスハイムの阿呆が先ほど儂が行った事と殆ど同じではないか、陛下がお怒りになるぞ。

「ベヒトルスハイムよ卿は予より偉いのか？」

「いえその様な事はございません」

「予が良いと申しおるのじゃ、その旨承知せよ」

皆驚いておるわ、儂も驚いたわ。
「「「御意」」」

「そこでじゃ叛徒共に囚われている者達は１５０万程じゃそうだな」
エーレンベルク知んようじゃな。
「よいわ後で調べよ」
「御意」

「そこでその者全員に帝国の食料品、衣類下着など、そして此が一番大事じゃ４６３年物のビンテージワインを1本ずつ袋に入れ送るのじゃ」
なんじゃと陛下血迷われたか、俘虜などにワインしかもビンテージワインじゃと。

「恐れながら陛下」
「何じゃ国務尚書」
「俘虜ごときにワインを与えるしかもビンテージなど贅沢の極みでございます」
「尚書よ！2度と聞くまえ、卿は予より偉いのか！」

陛下のお怒りじゃ。
「滅相もございません」
「では良いなしかと申しつけるぞ、
来年の1月までに俘虜に届くように致せ、中身も変えるでないぞ」
「「「「御意」」」」

「其れとじゃこの度救恤品を送る事と共に叛徒共と俘虜の交換を致す」
「良いのでありますか」
「で如何ほどの人数を」

「帝国にいる叛徒共の俘虜はいくらおる？」
やはり判らんか。
「判らんのであれば、直ぐにでも連絡せい」
「御意」
エーレンベルク慌てて連絡するのか。
「陛下しばしお待ちを」

「うむ判ったわ」
「陛下早急に調べさせております故暫しご猶予を」
しばし休息かの。
女官が御茶を持って参った。
御茶を飲み終わる頃陛下がまた話された。

「話は変わるが、先頃の叛徒共のイゼルローン襲撃を撃退し誠に見事じゃった」
「「ありがたき幸せにございます」」
「聞くところによると増援部隊指揮官ミュッケンベルガーは水際だった指揮だったそうじゃが、
駐留艦隊司令官の指揮は酷かったそうじゃの、
しかも駐留艦隊司令官と要塞司令官が常日頃から喧嘩をしているそうじゃな」

「御意そういう報告が来ております」
「エーレンベルクよ2人を交代させよ、上級大将に昇進させ軍事参議官に親補せよ」
「ベヒトルスハイムよ、ミュッケンベルガーは上級大将に昇進させ宇宙艦隊副司令長官にいたす良いな」
「「御意」」

うむかなりの人事じゃな。
エーレンベルク連絡が来たようじゃな。

「陛下お待たせいたしました。叛徒に囚われし帝国の俘虜１５５万ほどだそうでございます、叛徒共の俘虜は２２０万ほどだそうでございます」
「ご苦労じゃ軍務尚書」
「ありがたき幸せ」

「では救恤品は１６０万個用意いたせ、多い方が良かろう」
「「「御意」」」
「俘虜の交換は１００万の俘虜を受け取ろうぞ、叛徒の俘虜も同数送り返すのじゃ」
「其れは余りにも」
「予が良いのじゃ判ったな」
「「「「御意」」」」

「国務尚書連絡はフェザーンの弁務官事務所から叛徒共の事務所へ連絡させ決めさせるのじゃ。
まずは1月までに俘虜に届くように救恤品を送るのじゃぞ、その後4月までには俘虜交換じゃ。
努々間違えるでないぞ此は勅命じゃ」

「御意」
陛下が恐ろしゅう成ったわ。
しかし最近陛下は覇気が在られる、儂も仕え甲斐が有るという物じゃ楽しみになってきたの。

「典礼尚書をこれに」
ん典礼尚書となあの老いぼれに何の用じゃ？

「皇帝陛下にはご機嫌麗しく」
「うむアイゼンフートよ、先頃のイゼルローンの戦闘は知っておろう」
「勝ったと言うだけでしたら」
「うむそこでミュッケンベルガー伯爵の弟が司令官として活躍してな」
「ほうほうして如何致すのですかな」

何を為さるんじゃ陛下は？
「今その者は分家して帝国騎士でな若かりし頃より帝国の為に活躍したのじゃ、
今回上級大将に昇進させ、宇宙艦隊副司令長官にする、
その功績を称えて子爵と所領を下賜することにしたい」
ふむミュッケンベルガーであれば、伯爵家の出ゆえ反対もさほど無かろう。

「してどの家門を下賜いたしますか」
「うむエッシェンバッハは絶えて久いの」
「さようでございます」
「ではそれにいたそう」

「御意」
「皆の者ご苦労で有った」
「「「「「御意」」」」」

ふうやっと終わったわ、しかし此から大変じゃ。
1月では今月中に準備を整えねばならんな、まずはフェザーンじゃな。

帝国暦４７８年１０月１０日

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　グリューネワルト伯爵夫人邸

アンネローゼ・フォン・グリューネワルト

里帰りしていたメイドのハンナ帰ってきました、
ハンナの弟が幼年学校の生徒だと聞いて弟とジークの事を知らないかと尋ねたのですが、
あんな事を聞くとは思いませんでした。

「ハンナお帰りなさい」
「伯爵夫人ただいま戻りました」
「実家は良かったですか」
「はい」

「所でハンナの弟は幼年学校の生徒なのよね？」
「そうでございます」
「それなら弟の話とか知らないかしら」
「え・・・・」

「どうしたのハンナ」
「いえ・・・・・」
「言いにくい事なの？」
「いえ、あくまでも弟からのまた聞きでございますので、お許し下さい」

「いいのよ教えてちょうだい」
「はい、ラインハルト様は幼年学校で爵位がない貧乏貴族と虐められているとの事です、
そしてそのことで喧嘩をして放校されるかも知れないと、あくまで弟から聞いた話でございます」
「・・・・・・・・・ラインハルト・・ジーク」

「お許し下さい伯爵夫人」
「ハンナ良いのよ教えてくれてありがとう、
疲れたでしょう今日はもう良いわ」
「では失礼いたします」

ラインハルト、ジークあれだけ無茶をしないでと言ってるのに、なぜ判ってくれないの。
あの子達が遠くへ行ってしまう様だわ。

帝国暦４７８年１０月１２日

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　グリューネワルト伯爵夫人邸

アンネローゼ・フォン・グリューネワルト

陛下が来て下さった、昨日一日ラインハルトとジークの事を考えていて悲しくなってきました、
其処へ陛下が来て下さった。
「陛下ご機嫌麗しく」
「そちは疲れておるようじゃの」

判るのですね。
「どうしたのじゃ」
「陛下大したことではございません」
「弟の事じゃな」
陛下も知っておられる。

「陛下そうでございます」
「予も先ほど聞いたのじゃ、そちの弟が爵位もない貧乏貴族と虐められているとか、その為に放校処分寸前とか」
「陛下」

「アンネローゼよ予に任せよ、爵位がないというのであれば予が下賜しようぞ」
「陛下其れでは他の方が」
「心配するでない予が良いのじゃ、国務尚書には言わせん」
「陛下」
「幼年学校も心配するでないぞ、アンネローゼ予に任せよ」
「陛下もったいお言葉です、弟に代わり御礼いたします」
「ハハハよいよい」

第三十二話　皇帝の忙しい１０月（後書き）

リヒテン爺さん達完全に陛下の変化をグリューネワルト伯爵夫人のせいだと思ってます、その為テレーゼは安全に。

第三十三話　同盟も慌ただしい１０月（前書き）

話す人がころころ変わり慌ただしいです。

第三十三話　同盟も慌ただしい１０月

帝国暦４８７年１０月１１日

■オーディン　軍務省　　軍務尚書室　　ハーロルト・フォン・エーレンベルク

俘虜の交換についてリストを制作すべく部下達に指示をしていたところ、陛下からご連絡があり早速人払いをして応対した。

「エーレンベルクよ」

「皇帝陛下にはご機嫌麗しく」

「そちに頼みがあってな」

「何なりと御命じ下さい」

「叛徒の収容所でエコニアなる所が有るそうでな、其処におる全員を帰還させるのじゃ、

其処に第二次ティアマト会戦で俘虜になったケーフェンヒラーと言う男爵が居るそうじゃ、

その者も必ず帰還させるのじゃよいな」

「その者は何か有るのでしょうか？」

「いや、テレーゼが４１年間も囚われて可哀想だと申すのでな、

それに昔の時代の事を色々聞いてみたいそうじゃ、その者の帰還をするようにせい」

「御意」

ふう、殿下の気まぐれか、しかし陛下のご命令だ確りやらねばならんな。

帝国暦４７８年１０月１１日

■オーディン　国務省　　国務尚書室　　クラウス・フォン・リヒテンラーデ

昨日から俘虜の対応で忙しくなってきた、ハタと思うとその費用は如何するか聞き忘れたわい、
早速連絡しようとすると、先に陛下からご連絡があった。

「国務尚書ご苦労」
「皇帝陛下におきましてはご機嫌麗しく」
「うむ」
「今日は如何様な事でございましょう」
「それよ、昨日予算に付いて言わなかったのでな」

陛下も忘れていたのじゃな。
「今回の予算じゃが予のポケットマネーから出す事にする」
「陛下、平民から取りたてれば宜しいかと存じますが」
「予がしたいのじゃそのようせい」

無駄じゃな此処は陛下の考えにのろうぞ。
「御意にございます」
「其れとじゃ、救恤品と俘虜の受け渡しはイゼルローンかエル・ファシルで行うようにするのじゃ」
「御意」
「うむ頼んだぞ」

さてフェザーンのシューレンブルクに連絡じゃな。

でおったか。
「久しぶりじゃのシューレンブルク伯」
「リヒテンラーデ侯もご機嫌麗しく」
「うむ」
「本日はどの様な事でしょうか」
「其れより会話は漏れぬか？」
「大丈夫に御座います」

「では良いな。
良いか恐れ多くも皇帝陛下が叛徒共の俘虜となっている臣民共に救恤品を下賜なさる。
其れが1月までに俘虜の元へ届くように致す、
叛徒共の政府の代表者とその方が交渉せよ。
その後俘虜の交換をする、其れが4月までには交換できるように交渉するのじゃ。
言うておくが、陛下から直接指摘された事じゃ必ず救恤品が先、俘虜交換が後じゃ、
受け渡しはイゼルローンかエル・ファシルじゃ。シューレンブルク伯よいな」

「リヒテンラーデ侯、陛下はなぜこのような事を」
「陛下の思し召しじゃ」
「御意」

宇宙暦７８７年１０月１３日　帝国暦４７８年１０月１３日

■フェザーン　自由惑星同盟高等弁務官オフィス　ラファエル・ラ・フォンテーヌ

昨日突然帝国の高等弁務官事務所から、会談を持ちたいとの連絡があった、
不倶戴天の敵であるが、以前サイオキシン麻薬摘発では共同行動を取った事もあり、
政府に連絡を入れ指示を待った。
数時間後やっと政府から会談せよとの命令が下った。

秘匿回線のホットラインで話し始めるシューレンブルク伯の提案内容は驚愕を持つ物であった。
「恐れ多い事なれど皇帝陛下は敢闘むなしく、
貴勢力によって囚われの身となっている我が臣民全員に、
格別なる慈悲を持って救恤品を下賜なさるとの思し召しでございます」

何だと、帝国は捕虜になった者は忘恩の徒として処罰していたのではないのか、
いきなりのこの仕打ちはどんな変化なのだ。
「なるほど、其れを政府に伝えて欲しいという訳ですな」
「左様、恐れ多くも皇帝陛下が臣民の苦しみをお聞きになり、哀れに思いお手を差し伸べられたのです
、その為其方に囚われている臣民の詳しいリストをお願いしたいのです」

ふん民衆を搾取してるのがお前らだろう。
「更にその臣民達を帝国へ帰還させよとの思し召しで御座いましてな」
捕虜を帰せと言うのか、只帰すだけではなく此方も帰して貰わないと。

「しかし只帰せと言ってもそう旨くは纏まりません」
「帝国の臣民１００万を其方が返還して頂けるなら、
帝国が捕らえている其方の将兵１００万を返還いたします」

うむ捕虜交換という訳か、先頃の第四次イゼルローン攻略の失敗で
軍は８０万近い戦死者を出している、
帰還兵全員が復帰する訳では無いが１００万は魅力的だ、しかし自
分の一存では出来ない其れが民主共和制だ、ハイネセンに連絡し指
示を受けよう。

「ただ第1に救恤品の下賜此は来年1月までに下賜して頂きたい、
其れが臣民に行き渡って身支度が出来たら4月までに返還をお願い
したい、
返還場所はイゼルローン或いはエル・ファシルでお願いしたい、
此は皇帝陛下の勅命ですので変える訳にはいきませんのじゃ」

「シューレンブルク伯、非常に魅力的なご提案ですが、
政府に連絡をし指示を受けねばなりませんので次回にご連絡いたし
ます」

「判ります、なるべく早い返答をお待ちしております」

ハイネセンに早く連絡しなければならん１００万の帰還なら大事
だ。

宇宙暦７８７年１０月１３日　帝国暦４７８年１０月１３日

■自由惑星同盟ハイネセンポリス　最高評議会　最高評議会議長
ディオニシオ・エンリケス

フェザーンの高等弁務官フォンテーヌから一度目の連絡があり、帝国が対話を求めていると聞き、委員達を集め評議した結果、提案内容が何かを聞くようにと言うまで3時間もかかるとはな。

命令を出して2時間、フォンテーヌより帝国からの提案が知らされたとき、
我々は驚きを持って其れを聞いた。

帝国が捕虜交換を求めている、それ自体は以前にも何度もあった。しかし今回は１００万単位での交換だと言う、僅か一月前にイゼルローンで８０万近い戦死者をだした為、

我々の支持率は低下気味だが、此処で４月までに１００万の捕虜が帰還できるなら支持率だけでなく家族も含めて２００万票以上の票が計算できる。
財務委員長などは『捕虜には只で喰わさないと成らないが、市民なら逆に税を納めてくれる』と積極的だ。

国防委員長も『軍の再建に帰還兵が使える』と賛成のようだ。
他の委員も自分の支持率のＵＰにつながるならと賛成の意向だ。
評決を取ることなく賛成で終わりそうだ。

もう一つの皇帝からの救恤品の下賜とは何が起こったのか、フォンテーヌによれば皇帝の慈悲らしいが、帝国はよく判らない国だ。
此についても財務委員長は『財源を掛けずに済む』と言う。
情報交通委員長だけは、『各収容所に配るのに時間がかかり混乱が

生じるのではないか』と言う、
国防委員長は『先に捕虜交換では駄目なのか』と言うが、勅命では変える事はできんだろう。
他の委員の反対はないようだ。

そうしていると人的資源委員長から、『我が軍の捕虜に救恤品を送らないのか』と提案が出た。
国防委員長が『帝国に送っても兵には届かんよ』と言う。
理由を訪ねると『皆途中で貴族共に搾取されてしまうようだ』とのこと。
財務委員長が『予算的にみすみす届かない物に掛ける予算は出せない』と言う。
此は反対意見が多いので却下だな。

帝国は捕虜交換をイゼルローン或いはエル・ファシルでで行いたいと言うが、
イゼルローンでは行った瞬間トールハンマーで焼かれるのではという罠説が多く
エル・ファシルでの交換を強く求めようと委員会で議決を行った。

宇宙暦７８７年１０月１４日　帝国暦４７８年１０月１４日

■フェザーン　自由惑星同盟高等弁務官オフィス　ラファエル・ラ・フォンテーヌ

ハイネセンからの帝国による提案受諾の連絡があり早速シューレンブルク伯へ連絡を取った。
「これはシューレンブルク伯、今日は良い天気ですな」
「誠に良い天気です、其れですと受諾できましたかな」
「自由惑星同盟政府は帝国の捕虜交換と救恤品について受諾します、

尚受け渡し場所はエル・ファシルを希望します」
返答が遅いな、やはりイゼルローンでないと駄目なのか？
「判りました、帝国政府は貴官の提案を受ける事とします」
「では詳しい話し合いを行いましょう」

帝国暦４７８年１０月１４日

■オーディン　国務省　　国務尚書室　　クラウス・フォン・リヒテンラーデ

フェザーンのシューレンブルク伯より連絡があり叛徒共が受諾したとの連絡をしてきおった、
交換場所は案の定エル・ファシルじゃトール ハンマーを撃たれる恐怖があろうからな、
早速陛下にお伝えしなければならん。

ノイエ・サンスーシに連絡を取り陛下にお伝えする。
「皇帝陛下におきましてはご機嫌麗しく」
「うむ国務尚書いかが致した」
「かねてより行っておりました俘虜の交換と救恤品についてエル・ファシルで交換と受け渡しを行う事を受諾いたしました」
「うむ国務尚書ご苦労で有った、シューレンブルク伯もご苦労で有ったと伝えよ」
「御意」
「此からも頼むぞ」
「御意」

第三十四話　アンネローゼ怒る（前書き）

ヤン初登場

第三十四話　アンネローゼ怒る

帝国暦４７８年１０月３０日

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　小部屋　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

同盟から受諾の返事が来てリヒテン爺さん達があたふたしているのを見ながら、
暫くは皆の所へ行ったり遊んだり勉強もしたり。
お母様やお父様と出かけたりしまし。

そしてお父様はお母様はとても仲が良いです、
えーと子供には目の毒ですんで早く寝ました。
お渡りの日を聞いたらお母様４日、他の何人か居る側室２日、アンネローゼ１日だそうです。

そんなこんなで日を待つ事２週間ほどたった、
一昨日リヒテンラーデ侯から救恤品の準備が出来たとの報告を受けた為、
密かに集まり密談です、参加者は何時ものようにお父様、私、爺様、ケスラーです、
部屋の外や床下屋根裏には爺様の部下が隠れて防衛しており、
部屋自体が戦艦艦橋用の遮蔽装置で音漏れナシです。
科学ってすごいね。

「早かったですよね、もう少しかかるかと思ったのですけど」
「国務尚書達には儂が発破を掛けたからの」
にこやかですね父様。

「陛下あれは傑作でしたな、裏から見ていて可笑しゅうて堪りませんでしたわ」
爺様も笑ってます、真剣なのはケスラーだけだけどケスラーも苦笑いに近いぞ。

「それで中身は大丈夫なんですか？」
「確りとした監視を付けて納品から箱詰めまで監視した後、帝国財務省の札を貼りたかったのですが、財務尚書があの男では逆に略取されかねない為、恐れ多い事ながら皇帝陛下御財貨と言う札を貼らせて頂きました」

「ハハハそうじゃな、あの財務尚書ではやりかねん、ケスラー気にせずとも良い、ようやってくれた」
「ありがたきお言葉」
あのカストロプ公か確かにやりかねないや。

「イゼルローンへの輸送は誰がやるのですか、なまじ門閥貴族のどら息子とかだと事故とかと称して盗むんじゃ無い？」
「ホッホッ全くその通りですな」

「うむ儂の筆頭侍従武官のケッセリング少将を臨時の輸送指揮官に当てるつもりじゃ」
「ケッセリングならば生真面目ですし確と任務を遂行いたしましょう」
「艦隊には手の者も参加させ、荷物が確り叛徒共に渡るまで監視しいたします」

「ＴＶクルーも乗せないと駄目ですね。
此を帝国全土に流して平民や下級貴族に慈悲深い皇帝陛下というイ

メージを持たせないと」
「そうじゃの忘れるところであったわ」
危ない危ない。

「それから儂の愚息も参謀長として参加させますの」
へー爺様の息子って普段は領地に引きこもってるんじゃないの。
「ほうマンセルが来るのか、久しぶりじゃな」
「普段は裏方をさせておりますからな、このような時こそ役にたちましょう」
なるほどね裏の仕事か流石だね。

「ケッセリング少将だと作戦に問題が有る可能性があります」
「ではケスラー如何致す」
「参謀に全体を見下ろせる者を付ける事でございます」
「ふむ誰か心当たりでも居るのか」

「はっ小官が4年の時ルームメイトだった2期下の、
エルネスト・メックリンガーという者で有れば役に立つかと」
えーーー芸術家来たー！
「してその者は今何処に居るのじゃ」
「統帥本部作戦課に配属されております」
「ではシュタインホフとエーレンベルクに連絡し艦隊へ配属させよう」
「御意」
メックリンガーがゲットできるチャンスかな、
けど取りあえずケスラーの知り合いならいずれ引っ張れるでしょう、
それよりは門閥貴族だね。

「所でブラウンシュバイツ公とかの門閥貴族の方々に正式に発表するのは叙勲式で良いのですよね？

噂が流れて混乱は無いのでしょうか？」
「テレーゼ様其処はお任せ下さい。噂とは少しの真実に多くの嘘を混じらせれば必然的に霞む物でございます」
「なるほど、ケスラーに任せておけば心配ない訳ですね」
「そういうことじゃの」

「品物は既に輸送艦に積み込みを終了しておりますので、明日出立いたします。」
「海賊や海賊に扮した者達への対処は如何ですか？」
「千隻の護衛艦隊を用意いたしました」

「なるほどね、イゼルローンまで４０日ですね、着くのは１２月１０日ぐらい其処からエル・ファシルまで４日と言うところですね」
「そうでございます、受け渡しは不慮の事故等を考えまして１２月２０日前後を予定しております」

そうするとユリアンが１６日でイゼルローンハイネセン間を移動しているから同じぐらいだとして、
１月１０日前後にハイネセンに届くか、何処かで中を調べて１０日ぐらいはよけにかかるとしたら。
エコニアには１０日ぐらいでギリギリ１月中には届くな。

「楽しみですね俘虜の皆が喜ぶでしょうね」
「そうですな」
「そうじゃの」

帝国暦４７８年１１月１日

■オーディン　宇宙艦隊第2宇宙港　　レオポルド・フォン・ケッセリング

皇帝陛下から絶大の信頼を受けて小官は今日宇宙へと旅発つ。
叛徒共に囚われいる同胞の為に陛下自ら救恤品を下賜なさるとは、なんと陛下はお優しいのであろう、その輸送の任に小官を抜擢して頂くとは一生の譽だ。

陛下自ら小官に対して『ケッセリング、卿に叛徒に囚われている者達への救恤品を届ける指揮官を任せる』とお言葉を頂いたのだ。
我がケッセリング家末代までの譽だ。

陛下のご心配もお聞きし絶対に海賊達から守り抜こうと肝に決めた。
小官の参謀長には陛下の嘗ての侍従武官グリンメルスハウゼン子爵令息のマンセル・フォン・グリンメルスハウゼン准将だ。
彼は荷物のお目付役らしいので。
本来の作戦を立てるのは、若干２４歳なれど小官よりよほど出来の良い大尉である。

数日前彼に会い話を聞いて自分より遙かに優れた人物で有ると知って、
全般的な作戦指揮を任せる気になった。

晴れの舞台だ皇帝陛下と皇女殿下臨御の中の出立とは、まさに末代までの譽だ。
皇帝陛下必ず送り届けます。

■オーディン　宇宙艦隊第2宇宙港　　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

ケッセリング少将の艦隊を見送りながら、寒さに震えて耐えてます。
此で種は蒔きました、後はどう育つか楽しみですね。

帝国暦４７８年１１月１日

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　グリューネワルト伯爵夫人邸

アンネローゼ・フォン・グリューネワルト

今日弟とジークがやってくる、
皇帝陛下の思し召しで年４回だった面会日が年１２回に増えてとても嬉しいわ、
陛下が私たち姉弟をよく思っていてくれるのはありがたい事です。
けれど今日はラインハルトに一言言わなければ成りません、
陛下のお陰で放校処分だけは撤回して頂いたそうですので、
此から暴力を振るわない様にきつく叱らなければいけません。

ジークはラインハルトに迷惑しているのでは無いでしょうか、
あの子は優しい子ですから、巻き込まれているのではないのかと。
ラインハルトとジークが来たようですね。

「姉上」
「アンネローゼ様」
無邪気に来ていますが、今日はお説教です。

「ラインハルト貴方は学校で暴力ばかり起こしているそうですね！」
「姉上いきなりなんですか」

「アンネローゼ様ラインハルト様はアンネローゼ様の為に」
「ジーク今は黙りなさい」
「姉上？？」

「私があなた達が学校で孤立し暴力沙汰ばかりで、放校処分寸前だと聞いてどれだけ悲しんだか判りますか！」
「しかし奴ら姉上の悪口を」
「お黙りなさい！」
「悪口を言われたからと暴力振るう人がいますか、私は貴方をそんな子に育てた覚えはないです」

「良いですかラインハルト此からは暴力は止めなさい、そうしないと今度こそ放校処分になってしまいますよ」
「姉上」
「今回の事も皇帝陛下が事態の打開を図ってくださらなければ、放校処分だったのですよ」
「・・・・・・」

「貴方が虐められる原因が爵位がないと言う事だからと、陛下が貴方に男爵を授けてくれるのですよ」
「・・・・・」
「ラインハルト様が男爵に」
「姉上」
「ジークもラインハルトに迷惑しているのなら教えてね」
「アンネローゼ様その様な事は御座いません」

「じゃあこの話はおしまいね、シュホンケーキを焼いてあるから食べましょう」
「姉上」
「はいアンネローゼ様」

宇宙暦７８７年１１月１日

■自由惑星同盟ハイネセン　　統合作戦本部記録統計室
ヤン・ウェンリー

古い資料を読みながらのシロン産紅茶は格別だね。
この所同盟は捕虜の帰還話で持ちきりだ、数週間前まで第四次イゼルローン攻略の失敗で騒がしかったのに今は帰還話だ。
１００万人が帰ってくる、この時期になぜいきなり帰すのか、スパイでも送り込むのだろうか。
或いは不満分子にクーデターを起こさせるとか、まあ考えすぎか。
紅茶が無くなったな煎れてこよう。

第三十四話　アンネローゼ怒る（後書き）

今回はメックリンガー登場が強引すぎた。

第三十五話　サルベージ大作戦（前書き）

今回はワイン船が届くまでの時間があるので、
以前話に出た秘密工場設立物語なので、ロイとかでません。

第三十五話　サルベージ大作戦

帝国暦４７８年１１月２５日

■メンヒェングラトバッハ星系　デュイスブルク星　　ハンス・ノイマイヤー

畜生！また転勤かよ！此で４度目だ！何で俺が此処まで田舎を転々としなきゃならんのか、全部シャフトの野郎の差し金だ！

思い起こせば９年前オーディン帝国大学機械工学科を優秀な成績卒業した俺は一兵卒として徴兵されるのが嫌で軍の技術士官に志願したのに、なぜかシャフト大将に嫌われて僅か２月でイゼルローンの修造敞へ転勤させられた。

其れから来る日も来る日も修造の繰り返し、３年経って移動の時機になったら今度はマールバッハ星系の浮きドックへ飛ばされた、いい加減頭に来たので退職願を出したが却下され、更に田舎のアルメントフーベル星系の補給敞へ飛ばされた。

１０月２９日の定期異動で異動先を聞いたとき何処だ其所はっておもったが、
こんな誰も来ないような海ばっかで産業が海産物養殖と加工だけの星かよ！
しかも直通定期航路がないから乗り継ぎに継ぐ乗り継ぎで３週間もかかった！

しかも辞令が、軍用缶詰工場の主任だと！！もう我慢できないと人事部に直接退職願を送ったが、そのまま送り返して来やがった。

くっそー！俺は技術屋だぞ、缶詰機械のメンテをしろって言うことかよ！！

　取りあえず宇宙港からバスへ乗って工場へ、
正門には装甲擲弾兵の様な体の守衛が居る。
誰何され転任命令書と認識手帳を見せると連絡してくれた、
直ぐに連絡があり工場長室へ来る様に言われ守衛が場所を教えてくれた。

工場長室に行くと、５０代後半ぐらいの疲れたような禿げたオヤジがよく来たと挨拶してくれた。
ああー俺もこんな感じになっちまうのかと心が沈んだもんだ。
工場長は明日から頑張ってくれと言ったが頑張る気が起きないよな。

翌日から毎日毎日缶詰機械を見るだけの仕事、
他の工場にも同じような奴らが居て食堂で会って話を聞いたら。
同じようにシャフトに飛ばされた奴や、軍内部で非主流派に属する奴とか、

みんな端弾きな連中ばかりだった。
ああ此処は刑務所みたいなもんだ、睨まれた連中が収容される辺境の牢獄だ！
守衛が装甲擲弾兵みたいな奴なのは俺たちの脱走防止の為かと噂し合った。

帝国暦４７９年1月８日

　新年に成ると数人が転勤していった。
この牢獄から出られるとはうらやましいことだ。

俺も出られる日が来るのだろうか。
相変わらず退職願は却下されている。

仕事始めの日、職員全員が講堂へ集められた。
暫く待っていると突然講堂の床が沈み始めた！
多くの職員が驚いているが、幹部連中や警備員は涼しい顔をしている。

部屋全体がエレベータのように下がっていくザワザワと皆が騒ぎ出すが、
あの貧相な工場長が眼光鋭く『静かにせよ』と一括した。
皆驚く一気に静まる講堂内。
そうこうしている間に床が止まり、目の前に巨大な空洞が現れた。

ライトが付くとなんと中に軍艦が鎮座している。
見たことのない軍艦だ、我が軍の物と違う気がする色も緑色だ、
なぜ工場の下に軍艦が、皆も驚きの余り無口になっている。

工場長がニヤリと笑いながら話し始める。
「諸君帝国軍工部敞へようこそ」
工部敞だってそんな組織があったか？
皆顔を見合わせながら不思議がる。

「此処に居る者達は、有る者は科学技術総監にパージされた者、無能な上司に疎まれた者など実力はあるが疎外された者達だ」
そうかだから一癖も二癖もあるよな奴らばかりなのか。

「諸君には、此処でそれぞれの得意分野の研究をして貰う、無論拒否も可能だ」
うそこけ、秘密守る為に拒否したら行方不明とかだろう、

そうじゃなきゃあんな装甲擲弾兵のような守衛がいるかよ。

勇気のある奴が質問をする。
「済みませんが、質問良いでしょうか？」
「官姓名と前所属を名乗りたまえ」
「造兵大佐グリュザンテーメ・グリュツィーニエ、ガイエスブルク要塞造修敞です」
「宜しい質問は？」

「此処の目的は何ですか？」
「目的かね、此からの帝国軍の戦略戦術戦法造兵などの新規開発研究を行うことが目的だ」
「しかしそう言うのはそれぞれ専門部署があるのでは？」

「貴官らが思う事はもっともだ、しかし現在の科学技術部や艦政本部等の研究等はまともだと言えるかね？」
「確かに恣意的な事も多いですが、それでも別組織というのが不審です」
「だろうな、この組織はさるやんごとなき御方が現状に憂いで組織したのだよ」

さるやんごとなき御方って相当偉いってことか、
これだけの秘密基地を作れるほどの組織の親玉か、
何処ぞの大貴族か皇族か？

「なるほど、では研究について自由度はあるのですかね？」
「テーマはあるがそれ以外は自由だ」
皆がざわつく。

「諸君らを観察してきて、このチャンスを断らないと断言できる。

断るような者は既に返したからな」
そう言うことか転勤者は御眼鏡に成らなかった奴らか、面白いじゃないか！

「諸君どうだね、悔しくないのか！」
皆拳を握りしめたり頷いたりしている。
すると1人が叫んだ。

「俺はこの仕事やるぜー！」
その言葉が発端で次々に歓声が上がる。
「俺もだ！」
「おー」
「私も！」

工場長がまじめに『全員が賛成のようだな君たちを歓迎する、自分は帝国軍中将ユストゥス・エーベネだ』

あの工場長が中将閣下かよおどろいた。

「貴官らは此より小官の旗下入るが所属は今まで通り缶詰工場だ。家族を呼びたい者は呼んでも良いが、秘密は絶対だその点だけは肝に銘じるように、
今日はご苦労だった解散」

こうして俺の秘密基地での仕事が始まったのである。
けど普段鯖缶作る作業してたら、鯖が嫌いになっちまったんだよな。

第三十五話　サルベージ大作戦（後書き）

人材のサルベージ。
ワイン作戦はおそらくは三十六話から書けるはずです。ワイン、捕虜、ロイ、エル・ファシルって順番ですかね、
けどテレーゼが何かやらかすと変わるんですよね。

第三十六話　領地を貰おう（前書き）

職場で休み時間にＵＰ

第三十六話　領地を貰おう

帝国暦４７８年　１１月２０日

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　小部屋　　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

本日も密談中。
父様相変わらずのしたり顔、爺様にやにや、ケスラー苦笑い。
ケスラーの髪が白くなるのはこの老人２人のせいだったのか！
いや今回は私のせいで禿げたりして。

「輸送隊は無事イゼルローンへ向かっているそうです」
「それは重畳じゃな」
「全くじゃの」

まあメックリンガーが実質仕切ってるわけだから大丈夫でしょう。
そう言えばそろそろミュッケンベルガーとロイエンタール達の帰還の時期だけど、
ロイエンタール帰って来たくないって言ってるんだよね。

「テレーゼやどうした」
「お父様、新規士官で目を付けた者がそろそろ研修期間が終わるのですが、
オーディンへは帰りたくないと、イゼルローンに居たいそうなんです」
「ロイエンタール少尉ですな」
「ふむマールバッハの甥じゃな」

さすが父様よく知ってる。
「相当イゼルローンが住みやすいようです」

こらケスラーこっち見て苦笑いしながら言うんじゃない！
まあ今ロイエンタール弄り他のことが忙しくて出来ないし、
しばらく羽を伸ばさせようかな。

それで来年にミッターマイヤーをロイエンタールの下に付けて双璧を作るか。
「お父様思うのですが、どうせ人事異動で動くのですから、今回新規研修でイゼルローンにいる士官達にアンケートを取り、イゼルローンへ残るか、オーディンへ帰るかを聞いて残りたい面々をイゼルローン配置ししたらどうでしょうか」

「ふむ良い手かもしれんな」
「面白いてですな」
「ごく一部の士官は確実に残ります」
だからケスラーいっそ言ってよ、ロイエンタールだって。
みんな吹き出しそうにしてるじゃない。

「うむそれではその旨を軍務尚書に伝えよう」
「お父様お願いします」

あとは帰還兵だよね、このまま帰ってきて恩赦をしたとしても、今はラングじゃ無いけど社会秩序維持局がしゃしゃり出てきて、１００万人を検挙しかねないんだよね。

あーラング達死んでくれればいいのに。
ああゆうゲシュタポみたいな連中を纏めて同盟に進呈したいね。
向こうも迷惑だろうけど。

トリューニヒト辺りなら使いこなしそうだけどね。

んー皇帝直轄領の惑星に家族ごと移住させて其所で守るかな。
社会秩序維持局が狙ってる可能性があると教えれば、移住もスムーズに進むし、
皇帝陛下の慈悲で自分たちは助かるとわかり益々尊敬度が上がるだろう。

悪いのはすべて社会秩序維持局というシナリオでいける。
門閥貴族にはまた父様の気まぐれに映るから問題なしですね。

帰還兵達はエコニアとかで民主共和制を知った連中も居るから、
ある程度知識もあるだろうから、
ブラッケやリヒターとかの手本に成るかもしれない。

皇帝直轄領は基本全部皇帝陛下の財物だから、
何処の組織も手を出せない。
守るのは帰還兵と爺様の組織だから出来るね。

「テレーゼ様眠くなりましたかの」
「いいえ考え事をしていました」
「どのような事じゃな」
「お父様、帰還兵のことです」
「ふむふむ」

「思うのですが、帰還兵は民主共和制に毒されている可能性があります。
そう言う風に考える組織がありますよね」
「社会秩序維持局ですな」

「そうです、彼らはお父様が恩赦をしたからと言って、放置するでしょうか？」
「確かに何か理由を付けて連れ去るじゃろうな」
「そうなのです、帰ってきて恩赦を受けても結局は家族諸共辺境の流刑星送り、
これでは帰還兵が安心して帰れません、
それにお父様のお慈悲が上辺だけの物と平民達に思われてしまします」

皆かんがえてるです、社会秩序維持局の連中は屑ですから、やりかねないと。

「テレーゼどうすると言うのじゃ」
「お父様、此所は組織の力で帰還兵や家族に社会秩序維持局が勝手に動く可能性がある、
皇帝陛下は憂慮している、もし良ければ皇帝陛下直轄領へ移住を勧める、

そうなれば、悪いのはすべて社会秩序維持局で皇帝陛下は、
なんてお優しいお方なのだと平民は思うでしょうね。
そうゆうシナリオはどうでしょうか」

皆絶句ですね。
「テレーゼ様非常に素晴らしい御慧眼でございます」
「ケスラーの言う通りじゃ素晴らしい」
「さすがテレーゼ様ですの」

皆明るくなりました。

「そうなるとどの星が良かろう」

「ある程度の生産力のある星でないといけませぬな」
「テレーゼはどこか候補はあるのか」

よっしゃ来ました、此所は後々のフラグへし折りの為にね。
「ローエングラム星系は如何でしょうか、
あそこなら家が絶えて久しいですし、
いい距離に有りますから管理もしやすいかと」

さあどうだ。

「うむ確かにそうじゃな」
「管理し易いと後々よいですから」
「ローエングラム星系で決まりじゃ」

よっしゃこれで決まりだ。
「お父様直轄領の管理運営に新進気鋭の若手官僚や、
ケスラーに調べさせている有能な者に運営を学ばせたいのですが、
如何でしょうか？」

「テレーゼの好き気にするがよいぞ」
「お父様ありがとうございます」

「そうじゃ、テレーゼよ」
「はいお父様」
「ローエングラム星系を皇帝直轄領兼テレーゼの化粧領にいたす」

えええええ、領地ですか、いきなり星持ちですか！あわわわ。
皆を見るとにやにやしてる、虐めですか。

「お父様いいのですか？」

「良いのじゃこの方が動き易かろう」
「判りました謹んでお受けします」

「誕生日プレゼントと言うことで2月に発表いたす、皆もそのつもりでな」
「ほほ陛下わかりましたわい」
「御意」

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　小部屋　フリードリヒ４世

テレーゼが日増しに逞しくなっていき父親として非常に嬉し物じゃ。
最初はあの者を使い儂の夢を果たそうとしたが、
娘の素晴らしさ、儂をしのぐ韜晦さ。

そして、グリンメルスやケスラーをも唸らせる謀略の冴え、
何処をとってもルドルフ大帝に対抗できる娘じゃ。
今回の事も幾つもの策を纏めて仕掛けるとは、
此があの者であったら儂の命も無いであろう。

ほんによう出来た娘じゃ、
ただローエングラム領を遣わすと言ったときの顔は子供らしく非常に可愛かったわ。

願わくば無事に育って欲しいものじゃ、
グリンメルスよケスラーよ娘を頼むぞ。

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　小部屋　リヒャルト・フォン・グリンメルスハウゼン

テレーゼ様は会うたびに成長為されておる、
今回も俘虜を使うやり方といい、儂にも真似できない事ばかりじゃ、
まさに謀略の天才じゃ。
儂に持つ全てをテレーゼ様へお教えし継いでいただきたいものじゃ。
余生が益々楽しくなったわ。

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　小部屋　ウルリッヒ・ケスラー

先ほどのテレーゼ様のご意見は驚きに値する物であった。
俘虜への救恤品を使う、帰還兵平民へのプロパガンダ。
其れだけではなく、其れを利用した同盟への不信感を増やすやり方。
帰還兵と家族に対しての社会秩序維持局の暗躍を利用し返って陛下に対する忠誠度を上げる方法、
そして其れを運営する為、若手や新進気鋭官僚の発掘など、我々では思いつかないような発想をして下さる、天賦の才　としか言いようがない。
このようなお方にお仕えでき、これからも益々努力したいものだ。

帝国暦４７８年１１月２１日

■オーディン　軍務省　軍務尚書室　ハーロルト・フォン・エーレンベルク

本日陛下からご連絡があった。
内容は、今イゼルローンに研修に行っている新規士官にオーディンへ戻るかイゼルローンへそのまま残るかを調査して残りたい者はそのまま配置せよと事であった。

確かに一度戻りまた行くのも面倒であろうし、
残りたい者が居るならその意志を汲んでやらねばならんだろう。
早速部下に命じてその旨を書類にしてイゼルローンへ連絡させた。

陛下も細かきことに気をお遣いに成られるようになり些か大変じゃが、
それはそれで働きがいはあるの。

第三十六話　領地を貰おう（後書き）

増補しました

第三十七話　盗賊と義侠の差　（前書き）

第三十六話に増補しました。

帝国マルクと同盟のディナールのルートが判らないので、値段についてはあやふやになります。一応１マルク＝１００円　１ディナール＝１００円で考えていますが間違っていたら済みません。

第三十七話　盗賊と義侠の差

帝国暦４７８年１２月１日

■イゼルローン要塞　　オスカー・フォン・ロイエンタール

そろそろ半年イゼルローンでの研修も終わってしまう。
オーディンへは帰りたくない、いや帰らない！
とは言えイゼルローンの繁華街に隠れるわけにもいかずに、
悶々とする今日この頃だ。

レテーナが優しくしてくれるのも帰りたくない理由の一つだが、
最大の原因は帰ればまた鬱陶しい噂が有るのではとの心配だ。
あの伯父がまたぞろ何か企まないか不安で成らん。

あの一族は俺を生んだあの女と同じで俺に災いだけを運んでくるのだから。
縁を切りたいが血のつながりはどうしようもないわけだ。
ああまた敵が来れば帰還が有耶無耶になるのに残念だ。

１２月３日

嬉しい知らせがあった。
人事異動の一環として我々新任士官の内で希望する者をイゼルローン配置にするとのことだ、
俺は一二もなく希望届けを出した、同じように出したのは鶏冠頭（ビッテンフェルト）と数人だけで、

後はオーディンへ帰還するらしいワーレンは新妻との生活のために帰るそうだ、
しかし普段勇ましいことを言い、家柄自慢をしている貴族のボンボン達は全員帰還だ、
やはり門閥貴族の連中は根性なしばかりだ。

ミュッケンベンガー司令官も皆と帰還の途に就くそうで、
同時に新任士官も帰還の途に就くそうだ、
帰還予定日は１２月１２日と発表された。

１２月１０日
皇帝が叛徒の俘虜になっている連中の為の救恤品輸送艦隊が入港してきている、
１０００隻の艦隊とは些か大げさだが、其れだけ大事な品なのであろう。
指揮官が皇帝の筆頭侍従武官と言うだけで重要度が判るというものだ。

帝国暦４７８年１２月１０日

■イゼルローン要塞　駐留艦隊軍港　　レオポルド・フォン・ケッセリング

無事イゼルローンへと到着した、実に１５年ぶりだあの頃と全く変わっていない、
航海中はメックリンガー大尉に大変世話になった、
冷静沈着で安心して航海を任せられた、
しかしここからが本番だ叛徒の領域へ進入するのだから。

今日明日はイゼルローンで英気を養わせ１２日に出港する予定だ、
今晩はミュッケンベルガー大将がオーディンへ帰る前に皆で飲もう
と誘って下さったので飲みまくるつもりだ。

１２月１２日
いよいよ未知の領域へ進行だ、イゼルローンでこの方面に何度も進
入している、
駐留艦隊の航海参謀のビュルクナー大尉が水先案内に乗艦し午前９
時、
オーディンに帰還するミュッケンベルガー艦隊の見送りを受け未知
の宙へと進発した。

アルレスハイム、パランティアと危なげなく進む。
１２月１５日アスターテ星系に於いて叛徒側の水先案内の為の１０
００隻ほどの艦隊と合流した、
妙な気分だ普段ならそのまま戦闘に入る艦隊同士が同行しているの
だから。

向こうの艦隊司令官はロックウェル少将と言うらしいが、
何か落ち着かない様子で此方を値踏みするようだ、
まあ向こうも妙な気分なのだろう。

１２月１６日
何事もなくエル・ファシルに到着した。
同行した艦隊と駐留艦隊の合計２０００隻に並ばれると余りいい気
がしないが、
これも皇帝陛下の御為であるから苦には成らない。

旗艦ミュルハイムから輸送艦エーアトベーレへ移動する、
１０時に大気圏に突入しエル・ファシル宇宙港へ入船した。

向こうの代表者は国防委員会副委員長カンナバッチュオロと名乗った。

簡単な式典中にも輸送艦からコンテナを搬出し１４時には全てのコンテナを渡し終えた。
目録を渡し１６０万セットの救恤品の受け渡しは無事終了した、
早く同胞に届く事を願う物だ。

１５時挨拶の後宇宙港を出発し上空待機中のミュルハイムに乗り換え、
向こうの艦隊にエスコートされ帰路に就いた。
皆緊張している、其れはそうだつい数ヶ月前に戦っていた相手であるからだ。

アスターテでそれぞれの艦隊が発光信号で航海の安全を答礼し二たてに別れ我々はイゼルローンへ向かう進路に就いた。
そのまま何もない状態で１２月２１日午後7時にイゼルローンへ到着し緊張の旅は終わりを告げた。
後は整備と休養を行い3日後にオーディーンへ帰投する。

宇宙暦７８７年１２月

■エル・ファシル星系　　ジェームズ・ロックウェル

捕虜交換に関する救恤品の受け渡しのエスコートを命令されたのは、
俺が国防委員長に近いからだ箔を付けてくれると言う事らしい、
主役は副委員長のカンナバッチュオロ氏で選挙の為に志願したよう

だ。

アステーテで帝国軍に遭遇したときは生きた心地がしなかった、一発間違えれば戦闘だからだ、杞憂だったがね。

エル・ファシルへ到着しホッとしたものだ。

荷物の受け渡し後アステーテまで送りそこで分かれてエル・ファシルへと帰投した。

12月17日

■エル・ファシル本星　宇宙港倉庫ブロック

160万セットに及ぶコンテナの群れをみてエル・ファシル駐留軍の兵達は早速作業に入った。

何しろ帝国からの荷物である、万が一危険物が混じっていては大問題になる、

その為陸戦部隊5千人がコンテナの中身を確認する作業に入った。

彼方此方から歓声が上がる。

「おっ此はワインだぜ」

「よせよ確認しろよ」

「良いって事よ、1本ぐらい無くったって判りゃしないさ」

「つまみも有るし後で飲もうぜ」

「帝国は贅沢してやがるな」

「噂じゃ仲間は矯正区とか言う地獄の様なところへ送られてるって言うのに」

「自分らの仲間には贅沢な品物を送りやがって」

「貴様ら！何をしておる、仕事をせんか！」
「軍曹殿」

「なんだ」
「敵はこのように贅沢な物を食っているのに、我々の仲間は塗炭の苦しみです」
「でなんだ？」

「敵の物資です、少しぐらい損耗しても仕方がない事です」
「なるほど確かにそうだな輸送における損耗は多々有る物だ、どれだけ損耗していたのだ？」
「５千ほどです」

「いやコンテナを開けるとき壊れたからな１万個ほど損耗だな」
「いいか、お前等損耗は１万だ判ったな」
「イエッサー」

１２月２０日
コンテナはエル・ファシル星系より後方のジャムシード物資集積所へと送付された。
輸送艦バロット？の艦内では、船員達がコンテナの１個を開け中身の物色を行っていた。
「おーワインだぜ、こりゃあ上物だぜ」
「箱ごと無くなるとやばいからな、少しずつ抜いておこうぜ」
「役得役得」
「正規艦隊は贅沢してるんだ、彼奴等フルコース喰ってるんだぜ」
「俺たちゃフィッシュ＆チップスだぜ」
「そうだそうだ」
「着いたら飲もうぜ」

「おー！！」

宇宙暦７８８年1月3日

■自由惑星同盟　ジャムシード星系　同盟軍補給敞　パーヴェル・コヴァリスキー

帝国軍捕虜への救恤品が届き倉庫へと保管が終わった。
此から各収容所へ分割する訳だが１５５万１１４３名に分ける訳だ。
新年明けから数日は徹夜だな。

1月6日いよいよ開始だ、余り気が乗らんがね敵に対しての補給というのが気に入らんが仕事だから仕方がない。

1月7日国防委員会の委員達数名がお忍びで訪問してきた、
何でも今回送られて来たワインは４６３年物で帝国でも相当なビンテージワインらしい、
同盟では２０００ディナールの値段らしい、
つまりは捕虜に飲ませるのは勿体ない少し回せという事らしい。

しかし数が足りなくなれば配れなくなるのではと言うが、
委員達は上の者達も黙認しているし足りないのならば、
安いワインで代用すれば良いと囁く、
上の者達、評議会も一枚噛んでいるのか。

売れば２０００ディナール俺の給料の二分の一にもなる、
委員共も悪いようにはしないと囁いてくる、
息子や娘の学費や老後の蓄え・・・・・
悪魔が囁く・・・・・・・・・・

俺は俺は・・・・・・・・・

負けた・・・・・・・

密かに２０万個を腹心の部下１００人と共に軍用ワインと交換した。

委員共は大喜びだ、１０万個を送るようにと言い帰って行った。

俺たちも密かに裏マーケットの者に連絡し売り渡した。

金額は2分の1に成ったが彼奴等は口が堅いから大丈夫だ。

我々の儲けは1億ディナールになった。

1人頭１００万ディナールだ、大佐の退職金が３０万ディナール、

誰がこの機会を逃すだろうか、俺は悪くない所詮飲むのは敵じゃないか！

1月１2日から順次救恤品が送り出され始めた、

ばれるのではないかとビクビクしたが2カ所に纏まるように送った為、

ばれる事はないだろう、いざとなれば国防委員会が守ってくれるはずだ。

ネプテス１2万３５４５個、カッファー7万８２００個で２０万１７４５個入れ替えた

エコニア５万５４００個、ケリム５2万８７００個、マーロヴィア６０万３８００個、

ハダト１６万１５００個

に分けたのだ、あとはなんとかなるだろう。

1月２０日ネプテイス捕虜収容所

「おいお前等皇帝からのプレゼントだとよ」
「陛下からだってまさか」
「そんはず無いじゃないか、俺たちゃ帰れば反逆罪だぜ」

「そう言わず見てみようぜ」
「ああそうだな」
ザワザワ集まる捕虜。

「順番に並べ」
「並ばんと渡さんぞ」

「救恤品て何だ？」
「さあな」
「いいから明けてみようぜ」

「おーーワインだぜ」
「缶詰も有るぞ、しかもソーセージだ！」
「こっちはプラムだぜ」
「雑誌もあるぞ」
「タオルに下着もだ」
「ザワークラウトがあったぜ」
「おーー」

「皇帝陛下は俺たちをお怒りじゃないのか？」
「毒でも入ってるんじゃ無いか！」
「えっ」

「もう喰っちまったぜ」
「何ともないのか」

「ああスゲー旨い、ふるさとの味だ」
「俺も俺も」
「ワインは酸っぱいだけな、馬のしょん便みたいだ此は不味いな」

「まあ良いじゃないか、皇帝陛下万歳」
「皇帝陛下万歳」

1月28日

■マーロヴィア星系　駐留艦隊本部　　アレクサンドル・ビュコック

昨日捕虜に対する救恤品が運ばれてきた、
調べると463年物のワインが入っているという、
同盟内では2000ディナールするらしく、
馬鹿共が捕虜に飲ませるのはもったいと話してきたが、
儂は一喝してやった。

仮にも自由惑星同盟軍に所属する将兵ならば誇りを持て、
捕虜に送られて来た救恤品を掠め取る盗賊まがいの行為をするなら、
儂が1人残らずマーロヴィアの太陽に投げ込んでやる、
と怒鳴ってやったわ。

流石に恒星に焼かれるのは嫌らしく碓り捕虜に配りおった。
全く近頃の若い者は我欲が多くていかん。

1月30日

■タナトス星系惑星エコニア捕虜収容所　　バーナビー・コステア

　昨日捕虜にと港に届いた救恤品だが、調べると中に４６３年物のビンテージワインが入っていた、
調べると1本２０００ディナールだ。
此はチャンスだ今まで散々公金をチョロまかして貯めた金が３６０万だ、
しかしこのワインは裏取引でも５５４０万ディナールになる、
俺の貯めた１０倍以上だ、こんなチャンスはない旨く出来ないか。

そうだ未だジェニングス達は知らん、知っているのは横流しの仲間だけだ半分を抜いて2人で1本にすれば２２９０万ディナールだ、
行けるいけるぞ。
こんなチンケな収容所からもおさらばできる、さっさと退職してフェザーンにでも逃げればいい。
よしやるぞ。

2月4日

■タナトス星系惑星エコニア捕虜収容所　　クリストフ・フォン・ケーフェンヒラー

　なにやら、皇帝陛下から儂等に救恤品が送られて来た。
懐かしい物ばかりだが、良い思い出もない物も多い、
ワインは４６３年物かこの年はティアマト会戦から２７年の物か、
皇帝陛下は何をしたいのやら、いきなりの事だがプレスブルグは感動して居るがな。
『皇帝陛下は我々をお見捨てにならない』と言っておったわ。

なにかするつもりか。面白い事がおきそうだ。

第三十七話　盗賊と義侠の差　（後書き）

やっぱりやった同盟、ご都合主義じゃなく原作でもやりそうですからね。

ワインの値段はフランスワインの１５年物値段が二万円ぐらいでしたので、流通のない同盟では１０倍ぐらいに跳ね上がるのではと、値段きめました。

よくでる秘蔵の４１０年物だいたい８０年前物だけどフランスワインだと１本７０万以上するみたいですね。

第三十八話　エヴァンゼリンの危機（前書き）

今回はミッターマイヤー家の話です。

第三十八話　エヴァンゼリンの危機

帝国暦４７９年1月3日

■オーディン　ライニッケンドルフ地区　　ウォルフガング・ミッターマイヤー

新年を迎えいよいよあと半年で任官だ、
正月ぐらい家で過ごせとの士官学校の計らいで家に帰ってきたのが１２月２９日
クリスマスも終っていたが、市内の店で親父とお袋、
そしてもっとも大事なエヴァにプレゼントを買って帰った。

まあ士官候補生だから親父とお袋へのプレゼントはたいした金額じゃなかったが、
エヴァへのは何を買おうか迷ったあげく、
可愛い人形を買っていった。

エヴァは非常に喜んでくれたが、
俺はもう一歩踏み出せず、
卒業したら結婚してくれと言えなかった。
俺の意気地なし。

翌日は遅めのクリスマスパーティーだった、
お袋とエヴァが腕によりを掛けて作ってくれた料理は絶品で、
コッソリ持ち出した親父秘蔵のワインを開けて飲んだら親父が泣きそうになったが、

お袋が『貯めておいてもキャビネットの肥やしよ』と笑いながら飲

んでいた。
親父もグラスをひったくって飲み始めていた。
エヴァはにこやかにその姿を眺めていた、

良い雰囲気だ、此こそ家族というものだよ、
俺とエヴァと両親が４人仲良く暮らす。
この時間がずっと続けばいいと思った。

新年が明けて親父と話したりエヴァとお袋と一緒に買い物の行ったりしながら、
休暇を過ごし幸せな日々を送っていたのだが、
思いがけない事が起こってしまった。

１月３日朝食を取りながら親父と話していると、
家の前に黒塗りの超高級だと判る重厚な地上車が止まり、
中から立派な身なりをした男が降りてきた。

俺は嫌な事を考え始めていた、
親父も同じ考えのようだ顔色が悪い。
ほんの数年前同じような事が下町で有った事、

皇帝陛下の寵姫を探す為に宮内省の役人が年若く可憐な少女を求めていった事、
そしてその少女が現在は皇帝陛下の寵姫としてグリューネワルト伯爵夫人と呼ばれている事。
そして献上した役人は大変な褒美を貰い伯爵夫人の執事に成って出世した事を俺も知っている。

今年度幼年学校から士官学校生徒になった者達から聞いた話を思い出した。

噂によると伯爵夫人の弟は大変な乱暴者で何度も問題を引き起こし放校寸前に何度も成りながら、
その度に伯爵夫人の懇願で許されているらしい。

極点的な成り上がり者のパターンだと、
貴族の生態に詳しい、
親父に話したらそう解説してくれた。

自慢ではないがエヴァは町でも噂の美少女だ、
しかも今年１５歳、グリューネワルト伯爵夫人が寵姫になった年齢と同じだ。
宮内省の役人がエヴァの噂を聞きつけて奪いに来たのか！

台所にいたエヴァもお袋も俺と親父の異様な雰囲気が判ったのか心配そうに覗いてくる、
馬鹿エヴァ顔を出すな！隠れていてくれ！
俺は叫びたくなった、エヴァが奪われる俺が誰より愛しているエヴァが遠くへ行ってしまう！

お袋は俺と親父の顔を見てそして外を見て驚愕の表情をしている、
エヴァはいきなりの事で未だよく判らないようだ、
あの事件の時エヴァは未だ子供だった詳しくは知らないのだろう、

頼むエヴァ直ぐに部屋に逃げ込んでクローゼットに隠れてくれ！
俺はそう叫びたかった。
親父も同じような顔をしてエヴァを見ている。

お袋はエヴァの腕を握りしめ真っ青な顔をし始めている。
この異様な雰囲気にやっと解り始めたのか、
エヴァの顔から笑顔が消え、俺に縋るように泣き顔になっていった。

エヴァが連れ去れれるなら、
何もかも捨てて叛徒の元へ亡命してでもエヴァを守る！
俺は最早そう考えるようになっていた。

４人での逃避行だ無事たどり着けるか判らない、
親父が悟ったように『ウォルフ２人で行くんだ』と俺に言ってきた、
お袋も同じように頷いている、

親父とお袋を捨てて俺たちだけで逃げる訳には行かない、
きっと２人とも不敬罪で処刑されるだろう、
そんな薄情な真似は出来ない、逃げるなら４人一緒だ！

そうしているうちに、玄関のベルが鳴り響いた。

■オーディン　ライニッケンドルフ地区　　エヴァンゼリン・ミッターマイヤー

母が亡くなったあとたった１人で育ててくれた父が戦死し一人ぼっちになった私を親戚のお家で引き取ってもらえるなんて嬉しかった。
新しいお父様もお母様も凄く優しくて、本当の両親のように慈しんで頂いた。

ウォルフ様にお会いしたのが１２歳の時ウォルフ様が士官学校のお休みでお家へ帰ってきていらっしゃった時でした。
あの日以来私はウォルフ様に恋していたのです。
ウォルフ様とお会いするのが何時も楽しみでした。

けどこんな日が来るなんて・・・・

ウォルフ様が新年休みでご帰宅なさると聞いてお母様と腕によりを掛けて料理を作りました。
ウォルフ様もお父様も喜んでくれて凄く嬉しかったです。

新年をウォルフ様みんなと楽しく過ごしていた、
1月3日朝台所で朝食の準備をしていたとき、
家の前に止まる地上車の音を聞いたのです。

何かと思ってお母様と覗くと、
ウォルフ様とお父様が真っ青な顔をして此方を見ているのです、
私はいったい何が起こったのかさっぱり判りませんでした。

ウォルフ様もお父様も私に何か言いそうな雰囲気で、
お母様は私に腕をギュッと握ってその手が震えています。
私もその異様な雰囲気にだんだん不安になり泣きそうな顔でウォルフ様のお顔を見続けていました。

お父様がウォルフ様に真剣な表情で何か仰っています、
お母様が頷いて、其れを見たウォルフ様はとて悲しそうな顔なさいました。

そうしているうちに、玄関のベルが鳴り響いたのです。

■オーディン　ライニッケンドルフ地区　　ロベルト・ミッターマイヤー

私は造園技師。自慢じゃないが、腕は一流だ、
この階級社会腕に職を付けて働いた方が遙かに良いと、

この世界に飛び込み早２０年今じゃ町の金持ちや貴族からも仕事が舞い込む様になった。

私には息子がいて今年２０歳だが私と同じように職人になってもらいたかったのに、
よりによって職人は職人でも職業軍人になっちまった、
軍人になると聞いたときはガッカリしたね、期待していたんだよ親子で庭を造ることを。

そうこうしているうちに、新しい家族が増えたんだ。
別に子供が生まれた訳じゃない親戚の子供が１人になったから引き取ったんだ、
エヴァンゼリンて言って可愛い１２歳の少女だった、

私も妻も娘が欲しかったから、愛情を込めて接したんだ、
エヴァンゼリンも私たち夫婦に大変なれてくれて、
実娘と思えるんだよ。

息子のウォルフが初めてエヴァンゼリンと会ったとき絶句していたが、
私から見ればあれは恋したなとおもったものだ。
少しずつ近づいていく２人を見てほほえましくも焦れったく思えたものだ。
妻もウォルフと娘は結婚すると言っていた。

その平穏な日がいきなりの地上車の音でかき消されつつあるとは、
私もグリューネワルト伯爵夫人の話は知っている、
貴族や上流市民の間では有名な話だから。

何たって夫人の弟が乱暴者で何人ものけが人を出して時には石で殴

るって可笑しいだろう！
その度に伯爵夫人の懇願で皇帝陛下が不問にしてるって言うんだからどうしようもない。
息子も同じ話を後輩から聞いたらしい。

俺もお得意さんから茶飲み話で聞いていたんだが
余りに目に負えない状態で心配した連中が、
新たな寵姫を見つけようとしていると聞いていたが、

まさか家の娘がそのターゲットになるとは夢にも思わなかった。
青い顔をする妻と娘と息子そして俺もきっと顔は青いだろう、

何とか出来ないのか、息子が思い詰めた表情をする
亡命か、しかし寵姫を断り亡命など中々出来るはずがない。
皇帝陛下の横っ面を張り倒して逃げるようなものだ、

草の根分けても探されて不敬罪と反逆罪で処刑だろう。
恐らく息子は４人で逃げる事を考えているんだろう、
しかし無理だ俺は息子に『ウォルフ２人で行くんだ』と言い、

妻を見ると妻も頷いていた、済まんなお前と共に死ねる事だけが最後の幸せだ。
息子よ娘よ新天地で幸せになってくれ。

そうしているうちに、玄関のベルが鳴り響いた。

■オーディン　ライニッケンドルフ地区　　アデーレ・ミッターマイヤー

家には2人子供がいる、長男のウォルフガング、長女のエヴァンゼリン。
エヴァンゼリンは養女だけど実の娘と変わらないぐらい私も夫も可愛くて仕方がない。
ウォルフは士官学校生徒で勉学に励んでいる。

息子と娘はお互いに惹かれ逢ってるんですが、
あの子達不器用だからちっとも進展しないと夫が覗き見しながらぼやいてました。
この日も新年休みで帰省した息子だらしなさを、

呆れながら娘と朝食の準備をしていると、
自宅前で何かが起こりつつある様な気配で、
娘と共にリビングへ向かうと其処には真っ青な顔をした、

夫と息子が居たのです、二人の視線の先には、
高級な地上車があり其処から立派な身なりの男性が降りてくるところでした。
私は此と同じ話を以前聞いた事を思い出しました。

皇帝陛下の寵姫グリューネワルト伯爵夫人が見初められたときもこのような状態だったと、
まさか娘がそんな目に遭うなんて、
私は目の前真っ暗になり娘の腕をきつく握りしめました。

娘も事態を察したのか段々と泣き顔になっていき、
私の手をぐっと握りしめて来ました。
息子を見ると真剣な表情をして私たちを見てきます、

夫が私を見ながら息子に『ウォルフ2人で行くんだ』と言い

私に済まなそうな目をして来ました。
何年一緒にいると思ってるんですか、

貴方の考えている事なんかお見通しですよ、
２人が逃げられるなら喜んで死の花道をくぐりましょう貴方。

そうしているうちに、玄関のベルが鳴り響いのです。

第三十八話　エヴァンゼリンの危機（後書き）

グリンメルスハウゼン爺様の間者が彼方此方に噂を流しています。

第三十九話　エヴァちゃんは無事（前書き）

前回はしつこくしかも酷い文章で済みません、
ご免なさい。

第三十九話　エヴァちゃんは無事

帝国暦４７９年1月3日

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　小部屋　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

朝餉をお母様と楽しんだ後、お父様に新しく作ろうと思う庭園の設計図を見せる為、
宮殿の何時もの部屋へ行ったところ、お父様と爺様だけでケスラーが居なかった。
2人とも何時もと違って真剣な表情で話し合っていた。

「お父様ご機嫌麗しく」
「テレーゼ大変な事が起こった」
「テレーゼ様がスカウトする予定の、
ミッターマイヤーの家族に危害が加えられる恐れが出てきました」

は？　ミッターマイヤーが危機になるのクロプシュトック侯爵討伐の時だよね、
未だ士官候補生で早すぎない？
そんだけ敵を作る生真面目なのか？

「誰かに情報が漏れたのですか」
「いいえ伯爵夫人の悪評のせいで新たな寵姫を見つけようとする勢力が現れ、
ミッターマイヤーの妹に目を付けたのでございます」
「そうじゃ予は新たな寵姫などいらんのに勝手に勧めようとする輩がおるのじゃ」

ぐわ、ラインハルト対策が裏目に出てエヴァちゃんに迷惑が掛かってしまう、
このままだとエヴァちゃん嫌々寵姫にされて、
ミッターマイヤーが間違えなく復讐の鬼になってラインハルトと組んじゃうよ！
そう言えばケスラーが居ない。

「それでケスラーは？」
「ケスラーは大至急ミッターマイヤー家に向かっております」
3人とも真剣な表情でお父様も爺様も苦虫を噛み潰したような状態です、
私も眉間にしわ寄せてますよ、くそっ何処の馬鹿役人だ死ね！！！

「どんな状況なのですか？」
「テレーゼ様が指摘された人材及び家族には我らの部下が張り付いております。
その者がミッターマイヤー家に宮内省の下級官吏が家に訪問するのを発見し緊急連絡してきたのです」

十中八九アンネローゼの時と同じだ。
「でケスラーが向かったと言うわけですね」
「そうじゃ向かわせた、あのような無体はアンネローゼで終わりにしたいのじゃ」

けどお父様の少女趣味（ロリコン）が元々の原因ですよ！
無理矢理連れてくるようならミッターマイヤーが何をするかわからない。

「ケスラー早く着いてお願い！」

■オーディン　ライニッケンドルフ地区　　ウォルフガング・ミッターマイヤー

　玄関のベルが鳴り響き、姿を既に見られている為出ないわけにも行かず親父が青い顔をしてドアを開けに行った。
玄関を開けると、４０代の頭の禿げた脂ぎった不快な男がこれまた不快な笑みを浮かべて立っていた。

親父が根性を見せて、どなた様ですかと多少苛つきを隠さぬ誰何を行うと、
その男が『喜びなさい貴方のお嬢様は、幸運にも、
比類なく高貴なおかのご寵愛を受ける事とになったのだ、
家族の者もそのおこぼれに預かることができるだろう』と言い、
迎えに来るのは一週間後だと言って帰って行った。

みんなの顔は真っ青だ、エヴァは泣き出してしまった、
親父は壁を殴って叫んでいる、
お袋は泣いているエヴァを抱きしめながら自ら涙を堪えている、
俺は行き場のない怒りに震えていた！

エヴァエヴァエヴァどうしてこんな事になるんだ！
皇帝だってチクショー馬鹿にしやがって、
なんでも自由に出来るのかよ！

親父が俺の怒気を感じたのかそっと肩に手を伸ばしてきた。
親父は俺の顔を見ながら、準備をしようと言ってくる。
長いものには巻かれろって言うのかと親父の手を振り払ったが、

親父は首を振って、フェザーンへ逃げるんだと言ってきた。
俺は先ほどの『ウォルフ2人で行くんだ』を思い出し、
4人で一緒だと強調した。

その直後、また自宅の前に地上車が止まった、
俺は身構えたが車を見ると宅配の車だ、
中から宅配の制服を着た若い男性と女性が出てきた、

車から大きな荷物を2人で持って玄関へやってくる、
玄関のベルが鳴る、こんな時に宅配かと思うが出ないわけには行かない、
親父が玄関を開けると、宅配員が大きな品物を持ち立っていた。

『クリムバッハ様よりミッターマイヤー様にお荷物なんですが』
この悲壮な空気を気にしないような明るい声で女性が話す。
親父の仕事仲間の名前らしい、仕方なしに親父は家に荷物を入れるように話す。

宅配員が親父の耳元で話す、すると親父の表情が明るくなっていくのが判る、
いったい何なのだ?
親父がいきなり『新年早々お疲れ様です、寒いでしょう御茶でも飲んで行きなさい』と言い始めた。

親父気でも狂ったかと俺は思い、お袋やエヴァは驚いた表情をしている。
俺は親父に意見しようとしたが宅配員が『お言葉に甘えてご馳走になります』とにこやかに話した。
親父はお袋に御茶を持ってきなさいと言う、

お袋は何か感じたらしくエヴァと共に台所へ行く、
親父が宅配員を部屋中央へと招く、そして俺も手招きする。
俺は何かと行くと少壮の弁護士風の男が俺の耳元で驚くべき話をし始めた。

『ミッターマイヤー候補生、
小官はさるやんごとなきお方にお仕えする者です、
今回の事は陛下はあずかり知らぬ事、
あの者が勝手に行いし行為で其れを知った、
そのお方が阻止する為に私を使わしたのです』

驚いた恐らく親父のように俺も驚いた顔をしているのだろう、
俺は縋るような目でその男を見る、
真剣な表情と真剣な目、
嘘を言っているようには見えない、

俺は闇夜の中に一条の光を見た気がする。
お袋とエヴァが御茶を持ってきたが相変わらず顔色が悪い、
お袋とエヴァが俺と親父の顔を見ると不思議そうな顔をし始めた、

親父も俺も少しずつにこやかな顔になっていたらしい、
親父がお袋とエヴァと俺を呼んでその男性が小声でさっきと同じ話をする、
お袋もエヴァも驚きの後、安堵し始めた様に感じた。

ゴトゴトと持ち込んだ箱が動く、驚いてみていると中から人が出てきた、
話していた男とよく似た男である、
2，3言葉をその男は少壮の弁護士風の男と話した後、
女と共に『ご馳走様でした、またよろしく』と玄関から出て帰って

行った。

家に残ったのは少壮の弁護士風の男で、
みんな話を聞きたがっている、
男は集まるようにと話してきた。
俺たちは早速男の前に集まった。

男はまず深々とお辞儀し
『この度は宮内省の一部役人が勝手な行為を行いあなた方に迷惑を掛け申し訳ない、
これ以降は我々があなた方の安全を守ります』と話してくれた。

俺たちは半信半疑だったが男が胸元から出した書類を見て、
親父が驚いた、俺たちには何か判らないかったが、
その書類を親父は押し頂いて大事そうにしている。

俺は何かと見てみるとその紙には、
皇帝陛下御用の金文字と堂々たるサインが書いてあった。
親父に聞くと、貴族の屋敷で見せてもらった皇帝陛下の御辰筆と同じらしい。

皇帝陛下を怨んだ俺としては複雑な気分だったが。
親父が言うには、此が有ればあんな小役人ぐらいの命令は何の意味も持たないそうだ。
俺たちはやっとホッとしてきた、エヴァもお袋も笑顔が見えてきた。

少壮の弁護士風の男はいずれ責任者とミッターマイヤー候補生を引き合わせますので宜しくと言い、
エヴァには『皇帝陛下は決して貴方を連れて行くような事は致しません』と話し、

お袋には『あのような者が居る事を恥に思いますお許しを』と話す、

そしてこの事は誰にも言わないようにお願いしますと言われ、」
更に絶対お守りするので軽挙妄動はお慎み下さいと言われた。
亡命の事かと思ったが、エヴァの安全が守れるのなら敢えて危険な道を進む事はない。

その男の言う事にはグリューネワルト伯爵夫人も、
同じように役人が勝手に連れて来て押し付けたそうだ
来てしまった以上は追い返すと夫人の命が危ないので仕方なしに住まわしたそうだ。
其れを勘違いして弟がやりたい放題だそうだ、

そいつの為に危うくエヴァが奪われる事になるところだった、
親父も同じような事を聞いた事が有ると思い出しながら言ってくれた、
何だそのクソ餓鬼は!!ふざけるな!!

先ほどの宅配の車が来た、今度は手ぶらだベルを鳴らし今度は俺が出る、
『済みません宅配先を間違えましてご迷惑おかけしました』
なるほど此で帰える訳か、俺は『其れはご苦労様』と言い迎え入れた。

もう一人の男が箱に再度入り、少壮の弁護士風の男と女で箱を担ぎ
『申し訳ございませんありがとうございました』と声を立てて帰って行った。

俺たちは力が抜けてぐったりしながら僅か三時間余りに起こった事を考えていた。

本当に安全なだろうか俺は思う隣に座るエヴァもだろう俺の手をぐっと握り離さない、
俺も握り替えし離さない。

よし俺の言葉を言おう、今の心をエヴァにぶつけようウジウジしていられない。
俺はエヴァの方へ向き、顔をじっと見て話す。
エヴァも俺を見つめている。

確りしろウォルフ、此処で後悔するより今の気持ちを伝えるんだ。
「エヴァ」
「何ですかウォルフ様」
「エヴァ、すっ好きだ愛している、俺と俺と・・・・・けけけ結婚してくれ！！」

シーンとしているエヴァは何も言わない。
駄目か駄目なのか、俺は振られたのか・・・・・。
するとエヴァが涙を流しながら俺に抱きついてきた。

「ウォルフさま私も好きです愛しています嬉しいです、私をウォルフ様のお嫁さんにして」
「エヴァー」
「ウォルフさま」

エヴァを抱き寄せキスをした、長い長いキスだった。
はっと辺りを見ると親父とお袋がニヤニヤしながら俺たちを見ていた、
2人して真っ赤に成ってしまった。

早く安全が来て欲しいものだ、エヴァ必ず守るそして幸せにするぞ。

■オーディン　ライニッケンドルフ地区　　エヴァンゼリン・ミッターマイヤー

私を寵姫に絶句しました。ウォルフ様と引き離されるそんなの絶対嫌、
けど我が儘を言えばウォルフ様、お父様、お母様に迷惑を掛けてしまう、

そうして悲しみに震えていると宅配便が来た、
こんな時にも来るんだと遠いところを見る感じでお父様を見ていたら、
いきなり明るい顔になっていった、どうしたのでしょうかと思うと、

『御茶でも飲んで行きなさい』と宅配の人達を家に御上げていました、
お父様が私と母に御茶を持ってきてと言ったので何故と思いながらお母様と一緒に、
キッチンへ色々考えていましたが纏まらずに出て行くと、

お父様が私たちを集めてその宅配員が驚きの話をしてくれたのです。
「今回の寵姫話は全くの嘘であの嫌な男が勝手に行っていたと、
その為偉い人が私たちを守るように言ったと」

けど私たちそんな人の知り合いは居ないのに不思議に思うと。
『陛下ご自身がその様な行為を行うのを嫌がっていらっしゃるのです』
と言い此は絶対に秘密ですと言って帰りました。

その後ウォルフさまから嬉しい恥ずかしいプロポーズされました、

もう一生離しませんからね、あ・な・た。

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　小部屋　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

イライラしながら待つ事3時間ケスラーから連絡が有った、
ミッターマイヤー家は無事此より保護を続けると、
エヴァちゃんは無事だった、よかったよー涙が出てきた嬉しいよー。

後はケスラーが帰ってきてからだ。

クソ小役人め！！目に物見せてくれる！！！

第四十話　休暇の終焉（前書き）

エヴァンゼリンの後日談はまたあとです。

第四十話　休暇の終焉

宇宙暦７８８年　帝国暦４７９年　１月１日

■自由惑星同盟ハイネセンポリス　最高評議会　最高評議会議長
ディオニシオ・エンリケス

１２月２４日のクリスマスプレゼントとして帝国と同盟間の捕虜交換が発表されて以来，
我々の支持率は１５ポイントも上昇した、此で次の選挙も安泰だ。
あとは帰還兵１００万を待つばかりだ。

新年のパーティーは国防委員長が持ってきた、帝国産４６３年物ワインを飲み、
帝国産高級品趣向品で彩られた山海の珍味で舌鼓を打つ。
実に愉快な新年だ、市民は扱いやすいモノだ。

これで長期政権になるだろう。

宇宙暦７８８年　１月１日　　ハイネセンポリス　　ある少年の日記

去年のクリスマスは生まれてから最高のプレゼントを貰えた。
お父さんが帰ってくる、帝国との戦いで捕虜になっていた、
お父さんが生きて帰ってくる、帝国人は捕虜に酷い目を逢わせるので心配したけど、

軍隊のお姉さんが家にやって来て今度お父さんが帰ってくるって教えてくれた、

今僕はお爺ちゃんお婆ちゃんと暮らしている、お母さんはお父さんが行方不明になると、
知らないおじさんとどっかへ行ってしまった。
けどお父さんが帰ってくるから悲しくないよ。
早く4月にならないかな。

■銀河帝国　アルタイル星系第7惑星の矯正区　　2月1日　ヴィットリオ・エマニエール

　また昨日仲間が死んだ、此で31人目だ、明日は俺かも知れない。
死体は穴に埋めるが死んだ事は届けない。
届けるとその分食料を減らされるからだ。
食料は慢性的に不足している、強い物が沢山喰い弱い物は衰弱していく、
喰える物なら何でも喰う、穴モグラはご馳走だ、木の皮や草まで喰って餓えに耐えている。
中には死んだ仲間の肉を食う奴らも居る、脳みそが一番旨いらしいが、
其処まで俺はしたくない、薬もなく体の弱い者や病気の者はバタバタと死んでいく。
此処は地獄だ敵は俺たちをこの土地に放置しているだけだ。
監視は食料を配る時だけ現れる、此処には秩序なんて無い上官も部下もない、
あるのは人望と腕力で他人の尊敬を受けるか支配するかの差だ。
同盟で威張り散らしていた上官がある朝見るとリンチで死んでいる

事など日常茶飯事だ、
敵は俺たちを叛徒と言い懲罰で此処へ放置していると言うのだ、

もう二度と帰れないと思っていたが、
今日驚くべき話があった、同盟に囚われている捕虜と俺たちを交換するらしい、
１００万人帰れる、其れを聞いた者達の間で牽制が始まっている、

誰でも帰りたいのだ、此では殺し合いが始まるだろう、
帰れたなら二度と軍隊なんか入りたくない。
こんな地獄へ送り出した、政治家と軍上層部に怒りを覚える。
早く妻と娘の元へ帰りたい。

■自由惑星同盟ネプテイス捕虜収容所　２月５日　アルフレート・ミュールマイスター

パトロール中のアルレスハイム星系で叛徒の奇襲を受け、
乗艦は大破し艦長副長も戦死し生き残りの最先任だった俺は、
玉砕を主張する部下達を抑えながら、

たった一人になってしまう１２歳の愛娘を思い出しながら此処で死ぬわけにはいかないと、
卑怯者になっても生きながらえたいと、俺が全責任を取ると部下達に話して降伏した。
それ以来３年此処で娘の事と一緒に巻き込んだ部下達の事を思いながら過ごしてきた。

１月２０日に皇帝陛下より救恤品が送られて来たのは驚きであった。

娘の作る物よりは劣るが、ザワークラウトの旨かった事、
古里と娘を思い出しながら、その日は涙に咽せたものだ。

2月5日本日収容所所長から此処の収容所全員が国へ帰る事になると発表された。
その瞬間、不安と期待の入り交じった気持ちと成った。
娘の元へ帰れる、部下を家族の元に返す事が出来る。

しかし俺が責任者だ、国に帰れば反逆者として処罰されるだろう、
俺だけなら良い娘も巻き込んでしまう、
巻き込むのが嫌だから戦死した様に見せたのだから。

しかし話を聞いていくうちに、皇帝陛下はお怒りではない、
帰還しても反逆者としては罰しないとお言葉が有ったそうだ。
本当だろうか、それならば娘の元へ帰れる。

皆次第に興奮し喜びを見せながら涙を流しながら咽せている。
帰れる、帰れる、帰れる。

■タナトス星系惑星エコニア捕虜収容所　　クリストフ・フォン・ケーフェンヒラー

昨日皇帝陛下から儂等に救恤品が送られて来た。
なにやら皇帝陛下も企んでいるのか判らんが、
此処の収容所全員を帝国へ帰すらしい、

儂はミヒャーゼン、ジークマイスター、アッシュビーの繋がりを追い続けてきたが、
此処で一端終了かもしれんな、

余り帰りたくはないが、所長のコステアは特に儂を帰したいらしい、まあ奴は色々しているようだからな。

第四十一話　疾風ゲット！（前書き）

前回鬱気味な話でした、不快感を与え申し訳ありません。

今回はエヴァンゼリン事件の後日談です

第四十一話　疾風ゲット！

帝国暦４７９年1月3日

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　小部屋　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

ケスラーから連絡が有って2時間後、ケスラーが秘密通路から現れました。
爺様がケスラーに労いの言葉を懸けます。
「ケスラーご苦労じゃな」
「ありとうございます」

「ケスラーして首尾はどうじゃ」
「はっミッターマイヤー家の皆は落ち着いてくれました、
相当思い詰めた様子でしたので、
最悪の場合亡命或いは一家心中もあり得たかも知れません」

うわ最悪あの疾風ウォルフを其処まで追い詰めるなんて、
エヴァちゃん死んじゃったらどうするつもりじゃ！！
超ムカムカ更にしてきたぞ！！
木っ端役人め絶対許さんぞ！！！！

「それは気の毒な事をしたものよ」
「真許せませぬな」
「許せないです！」

「ケスラー此からの事じゃが、あの文だけでは安心せんじゃろう」
「御意、ミッターマイヤー候補生には近いうちに責任者と会わせる

と伝えておきましたので、
そこで話をすれば安心すると存じます」

みんな頷くね、けど責任者って誰になるんだろう、
事件の責任者なら宮内尚書のノイケルンだけど、
部隊の責任者は爺様かケスラーだけど誰が会うんだろう？

「ほーでは予が会うとするか」
お父様其れは余りに凄すぎるのではありませんか、
ケスラーが絶句してますよ。
爺様は涼しい顔ですけど、
私も驚いてますよ。

「陛下お戯れが過ぎます」
「忍びで会えば良かろう」
「儂が会いましょう」

「ふむグリンメルスよ今回はそちに任せよう」
「判りましたぞ陛下」
「ケスラー早速ミッターマイヤーとの密会準備をいたせ」

「御意」
「お父様、私もミッターマイヤーとの密会に参加したいのですが」
「テレーゼ様それは危険です」

いや此処で父様の代わりに出ればミッターマイヤーの不安を消し去れるだろう。
皇女自らなら信用するはず、打算だが信用して貰えれば此方へ引きずり込み安くなる。
此処は一戦するべし。

「お父様、お願いします此処で私が会えばミッターマイヤーは信頼してくれるでしょう、
今こそ陣頭に身を曝さなければならないのです」
「うむ、其処までしないと駄目か」
「駄目です、お願いします」

「判ったグリンメルス、ケスラー、テレーゼを頼むぞ」
「お任せ下さい絶対にお守りいたします」
「任せて頂きますぞ」

「それでエヴァンゼリンやミッターマイヤー家に対する保護はどうするのですか」
「ミッターマイヤー家に守護を行いエヴァンゼリン嬢にはしばらくの間影を付けます」
「重畳ですね」

「あの役人達は？」
「今回の行為を行った者への監視と共に宮内省の監視も強化いたします」
「お父様宮内省だけでなく内務省も監視しましょう、
此でいずれは膿を出し切りましょう」

「やらねばならんな」
「グリンメルス、ケスラー頼むぞ」
「御意」
「陛下わかりましたぞ」

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　小部屋　フリードリヒ４世

ケスラーからの話を聞き儂も些か感に障ったわ、
役人共の独善は儂のせいじゃ、
此処は儂自らその者に非礼を詫びねばならんと言ったのじゃが、
反対されてしもうた、

致し方ないグリンメルスに任せようと思うたら、
テレーゼが自ら会いに行くと言ってくれた、
心配じゃったし単なる好奇心だと思ったが、

話を聞くと納得する話じゃった。
此処まで成長したかと嬉しく思うた。
頑張るのじゃテレーゼ。

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　小部屋　　ウルリッヒ・ケスラー

ミッターマイヤー家の保護を命令し帰還し陛下の元へ参内した。
細評を伝えたあと、グリンメルスハウゼン閣下に出て貰うつもりで、
責任者との会談を行うと伝えたところ、
陛下自らお会いすると仰ったので驚いてしまった。

結局其れはやり過ぎである諦めて貰ったが、
こんどはテレーゼ様が会談に参加すると仰った、
遊びではないのだが、話を聞くとなるほどと思い、
陛下自ら了解をしたため、安全を第一に考え会談をセットすることにした。

帝国暦４７９年1月４日

■オーディン　ライニッケンドルフ地区　　ウォルフガング・ミッターマイヤー

昨日は悲喜交々の一日だった、けど今は幸せだ未だ多少の不安はあるが。
隣にはエヴァが寝ている。可愛い寝顔で寝息をたてている。
俺はエヴァの寝顔を見ながら益々守り抜くと力強く心に決めた、

エヴァを守る為なら何でもしようそう思う。
エヴァが起きたようだ。
「エヴァおはよう」
「ウォルフさまおはようございます」

にこやかに挨拶してくるエヴァ、そのまま抱き寄せキスをする。
幸せを感じる瞬間だ。
時計を見ると既に午前１０時を廻っている、
寝過ぎだなしかしエヴァと一緒だったから寝坊も幸せだ。

身支度をしてリビングへ降りると親父とお袋がニコニコしながらてか親父ニヤニヤするなよ。
迎えてくれた、エヴァも俺も真っ赤になってしまった。
親父が先ほど昨日の少壮の弁護士風の男から連絡有り此処へ連絡してくれてと電話番号を渡された。

早速連絡すると、昨日の男が出て挨拶をした。
俺も挨拶した、男は今日責任者と会わせるが用事があるかと聞いてくる。
此処で会っておかねばなるまい、エヴァと家族の安全な生活の為だ、
俺は受諾と言い、向こうからは１５時に迎えが来ると伝えられた。

１５時丁度家の前に地上車が到着した、昨日来た女性士官服を着て降りてきた、
玄関で挨拶し1人で行こうとしたが、エヴァが離れたくない一緒に行くと泣いてきた、
万が一の時にエヴァを連れて行けないと言うが嫌ですと言う、

女性士官が困った顔をしながら、『仕方有りませんがご同行を許可します』と言い
エヴァの同行を認めてくれた。
親父とお袋が門まで来て送ってくれた。

自宅から1時間ほどで立派な屋敷に着いた、
立派な門から車は入り見事な庭を進むと車止めに車が到着した。
玄関には少壮の弁護士風の男が待っていた。

彼は俺に挨拶し中へ招かれた、彼がこの館の主人なのだろうか?
エヴァは俺の腕を握って離さないで一緒に歩く。
広い屋敷だ俺の家が何百軒はいるだろうか、

廊下の突き当たりに重厚なドアがありそのドアが音もなく開く、
その部屋へ入ると非常に広い部屋だった長いテーブルの向こう側に、
1人の老人と少女が見えるエヴァより遙かに年下の少女だ、
少女を見た事で俺もエヴァも緊張感が無くなっていった。

老人が挨拶してくる。
『この度はミッターマイヤー家には大変なご迷惑をおかけしました、
私は当家の主人子爵リヒャルト・フォン・グリンメルスハウゼン
と申します』

驚いた、貴族様が俺達に謝っている、俺もエヴァもあっけにとられている。
俺は慌てて、「いえどういたしまして」へんな返事をしてしまった。
少壮の弁護士風の男が此方へどうぞ言い俺たちを案内した。

老人と少女の前に座り、話が始まった。
今回も行為は宮内省の一部が勝手に行った事、
陛下が俺たちに対して申し訳ないとのこと、
俺たちの安全は完全に守られる事、

俺は驚いてしまう、皇帝陛下が一平民の俺に其れだけのお心遣いをしていただける、
エヴァも同じ考えなのだろう、感動しているようだ。
少女は一々頷きながら俺たちを優しい目で見ている、
何処かで見た気がするが気のせいであろうか？

子爵は若い頃皇帝陛下の侍従武官だったそうで、
今でも現役の中将だとのこと、
少壮の弁護士風の男はウルリッヒ・ケスラー少佐だと名乗ってくれた。

緊張する俺たちに対して少女がにこやかに笑いながら、
『私はテレーゼて言います、ウォルフガングさんエヴァンゼリンさん宜しくね』
と挨拶してきた。

お孫さんだろうか？俺たちもご挨拶をした。
横でケスラー少佐とグリンメルスハウゼン子爵が苦笑いしている、
いったい何なのだろう？

中将が『テレーゼ様そろそろお話をした方が宜しかろうと存じます』
と丁寧に話し始めた。
テレーゼ？？んまさか、士官学校のシーンを思い出す、一年前だが
面影がある。
しかしこんな所に来るのか？
困惑する俺をみてエヴァが不思議そうな顔をする。

「そうねミッターマイヤー候補生、直接会うのは初めてですね、
士官学校では教室でお会いしたはずです」
やはりそうだ、テレーゼ様皇帝陛下の皇女様だ！！
テレーゼ様はにこりとして。

『思い出してくださいましたね、
わたくし銀河帝国皇帝フリードリヒ４世第三皇女テレーゼ・フォン・
ゴールデンバウムと申します』
『この度はエヴァンゼリンさんにご迷惑を掛け済みませんでした』

俺もエヴァも絶句してしまった。
皇女殿下が平民の俺たちの前に居る。
しかも俺たちに謝っている。
２人とも何も言えずに目をパチクリさせる。

確か皇女様は８歳ぐらいにはず、
其れなのにこの受け答えには一言一言重みがある。
『お会いする機会は少ないですが、エヴァンゼリンさんとはお友達
になりたいです』
驚いた皇女様がエヴァと友達になりたいなんて、エヴァも驚いてい
る。

『是非ミッターマイヤー候補生もお友達になって下さいね』

俺はどう言って良いか言葉がでない。
皇女様はにこやかにお笑いになる。

中将閣下とケスラー少佐を見るとニコニコしている、
つまりは全て任せろと言う事か、
そうこうしていると、エヴァが話し出した。

『皇女殿下私のような者を友達なぞ恐れ多い事です』
『エヴァンゼリンさんはお姉さんみたいだから、
たまに会うだけでも良いからお願い』

ここまで言われたら受けざるを得ないだろう、
それにエヴァを救ってくれた皇帝陛下の皇女様だ、
可愛い方じゃないか、エヴァも笑顔になっていった。

「皇女殿下わたくしウォルフガング・ミッターマイヤーは殿下にお仕えいたします」
エヴァも其れを聞いて、
「皇女殿下わたくしエヴァンゼリン・ミッターマイヤーは殿下にお仕えいたします」

皇女様はえっと言う顔をして、
『ミッターマイヤーさん、エヴァンゼリンさん家臣じゃなくて友達ですよ』と仰った。
『お友達の為にエヴァンゼリンさんとミッターマイヤーさんは守ります、
絶対変な人が来ないようにさせます』と仰っていただいた。

聡明な皇女様だと感動した。
俺達のように只の平民に優しくしてくれて、友達になってくれと仰

る。
皇女様の様なお方が真の皇族と言うのだろう。
何処ぞの寵姫のクソ餓鬼とは大違いだ。
あのような成り上がり者と全く大違いだ、エヴァも感動しているようだ。
皇女殿下にお仕えする事が楽しみになってきた。

我が忠誠を捧げるのはテレーゼ皇女殿下しか居ないとこの時、
大神オーディンに誓った。

その後夕食をご馳走になり、エヴァの料理の方が旨いけどね、
皇女殿下からエヴァに銀のペンダントを賜され、
俺には銀時計を賜された、

お友達の印だそうだ。
エヴァ共々大事にしよう。

夕食後、皇女殿下はお帰りになり。
俺達はケスラー少佐に応接室で話を聞いた。
『皇女様は敵に狙われやすいのです、
ですから今日の事は人に言わないで下さい』

なるほどあれだけ聡明なら敵もいるかも知れん、
特に他の寵姫達から狙われるかも知れないと言う訳か。
あのクソ餓鬼の姉なんかは一番怪しそうだ。

あのようにお優しい殿下を害する奴はゆるさん。
「判りましたエヴァンゼリン共々皇女殿下の事は話しません」
エヴァも同じように頷く。

ケスラー少佐から『ミッターマイヤー家にはSPを張り付けてあるので安心してくれ』
其処までしてくれるのか、ありがたい益々皇女殿下への忠誠心が増えていった。
その後エヴァと共に迎えに来てくれた、女性士官に送られ家に帰ってきた。

親父とお袋が心配して門まで迎えに来てくれた。
俺は親父に「もう大丈夫心配ないと言い」
エヴァも「お父様お母様心配懸けましたけど大丈夫です」
と言った。

親父もお袋も最初は心配そうだったが俺達の顔を見て安心してくれた。
皇女殿下の事は言えないので、言って良いと言われた去る子爵が守ってくれたとごまかした。

その夜もエヴァと2人で寝たが昨日のような不安は全くなかった。
エヴァ愛してるよ。

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　ベーデミュンンデ侯爵邸　テレーゼ・フォンゴールデンバウム

今日のミッターマイヤーとの会談は成功かな、
誠心誠意の対応したし最後はミッターマイヤーが忠誠を尽くしてくれるなんて、
嬉しすぎる誤算でした。

エヴァちゃんともお友達に成ってもらったし、仲良くしたいですね。
ミッターマイヤーとエヴァちゃんの結婚式は何時だか判らないけど、
お忍びでも参加したいですね。

エヴァちゃんとミッターマイヤーの子供も見たいから、
いずれ産婦人科の大家を紹介しようかな。
量産型エヴァ・・・・なんてねｗ

そして爺様とケスラーはエヴァちゃんとお家を守るようにＳＰ配置
したらしいから安全ですね。
後は宮内省のクソ小役人を何とかしましょう。
ケスラーが何とかしてくれるんでしょうがね。

第四十二話　叙爵への道（前書き）

今回は短いです。

■オーディン　　幼年学校寄宿舎内の会話は、田中芳樹先生の原作から流用していますので、書き方は先生の書き方です。

外伝千億の星、千億の光　第六章　伯爵家後継候補より

第四十二話　叙爵への道

帝国暦４７９年1月7日

■オーディン　宮内省　　宮内尚書室　　ミヒャエル・フォン・ノイケルン

昨日皇帝陛下から急のお呼びがあり、
当初は今回後宮に上がる新しい寵姫についての事かと思ったが、
陛下が直ぐに参内せよとのお呼びがあり、
いったい何が生じたのかと慌てて参内すると、
謁見の間において、皇帝陛下が既にお待ちであった。
普段の飄々としたお姿と違い、今日の陛下は怒気が見えるようであった。

一瞬ルドルフ大帝が目の前に降臨したかの如くであった。
陛下は私にむけて『卿の部下が予の股肱の臣たるグリンメルスハウゼンの孫娘を無理矢理連れ去ろうとしたそうじゃ、おぬしの差し金か？』

私は驚きをもって話を聞いた、
確か数日前部下から皇帝陛下の新たな寵姫を見つけましたと、
押しつけがましく報告した者が居たものだが。

あの男か、よりによって陛下の知己の令嬢を連れ去ろうとするとは、
私の監督責任が問われるではないか。
此処まで出世したものを、あんな小役人風情に足を引っ張られるとは。

陛下が目を細めながら私を睨む、肝が冷え身が縮まる。
陛下の最近の御変わりようは、
グリューネワルト伯爵夫人が寵姫に上がってからだと、もっぱらの噂であった。

『宮内尚書あの娘の母親は、グリンメルスハウゼンが外に作った子でな、
予もよう知っている娘なのじゃ、その娘を予の寵姫にしようとするとは、
グリンメルスハウゼンの孫は予の孫と同じと考えよ！』

余りの話に膝が震えだした、陛下の孫同然の少女を危うく献上する所であった。
陛下お怒りの中、私はあの男をどうしてくれようと考えていた。

帝国暦４７９年1月２２日

■オーディン　　幼年学校寄宿舎

「キルヒアイス、宮内省と典礼省から俺の叙爵に対する書類が送られてきたぞ」
「其れはおめでとうございます、ラインハルト様」
「姉上のグリューネワルト伯爵家の一門で断絶していた、
シェーンヴァルト男爵家の名跡を下賜されると書かれているぞ」

めずらしいといえば、この皇帝の好意を、ラインハルトが素直に喜んでいるらしく、
キルヒアイスには見える。

つねであれば、皇帝の恩寵にたいして、曲線的な感受性の表現でむくいるのだが。

「ラインハルト様はミューゼルという姓を棄てるのですか？」
それほど深い意図もなく訊ねたのだが、
一瞬でキルヒアイスは、蒼氷色にきらめく雷光に直面することとなった。

「ミューゼルというのはな、キルヒアイス、自分の娘を権門に売った恥知らずな男の家名だ。
こんな家名、下水に流したっておしくない！」

ラインハルトの感性の熾烈さに、キルヒアイスは目をみはらずにいられない。
自分はまだまだこの方の気質をすべて把握することができずにいる。
そのことを、キルヒアイスは、自省せざるをえなかった。

帝国暦４７９年1月２２日

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　謁見の間　　グレゴール・フォン・ミュッケンベルガー

昨日イゼルローンより帰還し諸処の仕事を終えると宮廷から明日参内せよと連絡があった。
朝９時に宮殿へ侍従に先導され緊張しつつ謁見の間へ、
部屋に入ると直ぐに皇帝陛下がおいでになった。

皇帝陛下は小官に『ミュッケンベルガーよ、この度の叛乱軍との戦い見事であった』と仰り。

『そこでじゃ長年にわたり叛徒との戦いに活躍した卿に爵位を与えようと思うてな』
私に爵位を、皇帝陛下のお言葉に胸の奥から燃えるような思いが沸き上がってきた。

『2月に予の戴冠23周年とイゼルローン戦勝の宴を行う、その時卿の叙爵を行う、そこでじゃ其れまでは他の者に言わぬように』
「御意」

謁見の間を退出し、軍務省へ軍務尚書室へ通され軍務尚書エーレンベルク元帥と面談する、
尚書室にはエーレンベルク元帥と人事部長ハウプト中将が居た、
エーレンベルク元帥は小官が上級大将に昇進する事、
今回戦闘に参加した全員が一階級昇進する事と教えてくれた。
その場でハウプト中将から上級大将の諸種書類を受け取り尚書室を退室した。

軍務省を退出し、今回は宇宙艦隊司令本部へ戻り、
宇宙艦隊司令長官室へ入り、司令長官ベヒトルスハイム元帥に面談する。
元帥から卿を宇宙艦隊副司令長官に任ずると話であった。
元帥は既に57歳小官が跡継ぎという言う訳か。

父上大叔父上やりましたぞ、敵の一部でも討てました。
そして爵位までなんとありがたい事だ皇帝陛下の御心が身に染みるようであった。

帝国暦479年2月1日

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　謁見の間　レオポルド・フォン・ケッセリング

救恤品の輸送を無事終えオーディンへ帰還し諸処の仕事を終えると宮廷から明日から侍従武官として再出仕せよとの連絡が有った。
やっと帰国し自宅へ帰り妻と子供達と団らんを楽しんだ。

翌日早速宮殿へ出仕し武官公室へ入室した、
実に三ヶ月ぶりの部屋は別に変わっておらず、
入室すると次席武官のシェーンシュテット准将が迎えてくれた。

「ケッセリング少将閣下ご無事のご帰還お疲れ様でした」
「シェーンシュテット准将留守の間ご苦労さまでした」
「2時間後謁見の間に皇帝陛下がお呼びでございます」
「判った準備いたそう」

2時間後謁見の間へ自分がこの扉から入るとは思っても見なかった。
普段であれば皇帝陛下の御側でお守りするのが仕事の俺がこの扉をくぐるって入室する。
入室し直ぐに皇帝陛下がお出ましに成られた。

陛下がにこやかに『ケッセリングよ、ようやってくれた、予も嬉しく思うぞ』
陛下のお言葉に胸が熱くなり感動の嵐になる。
『卿は今回の武勲で中将とする』

私が中将か身に余る光栄だ此ほど陛下からのご期待を受ける以上更に陛下にお仕えすると誓った。
「ケッセリングよ此からも頼むぞ」

「御意」

第四十二話　叙爵への道（後書き）

エヴァちゃんをグリンメルスハウゼン爺さんの孫と嘘で守ってます。
陛下と爺さんはお茶目。

第四十三話　男爵ラインハルト（前書き）

今回もテレーゼがむっちゃ黒いです。

第四十三話　男爵ラインハルト

帝国暦４７９年２月２０日

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　黒真珠の間

銀河帝国皇帝フリードリヒ４世の戴冠２３周年記念と叛徒軍撃退記念の宴がこの日行われていた。

美しく着飾った紳士淑女が集まる、
その数１万人以上という帝国中の貴族、高級軍人が集まっている。

フリードリヒ４世が皆を見ながら、国務尚書リヒテンラーデ侯に目配せする。
リヒテンラーデ侯が陛下のお言葉であると言うとざわめきがスーッと消える。
フリードリヒ４世が徐にマイクの前に立つ。

「今日は予の為よう来てくれた、卿等の忠誠を嬉しゅう思う」

多くの貴族軍人が一斉に言う。
「皇帝陛下の御為に」

その言葉を聞きながら陛下が話す。
「そこで、今宵は長年にわたり帝国の為に叛徒共と戦いし者達に褒美を取らそうと思う」

会場がざわめく、誰が褒美を貰うのだろうか気になるところなのだろう。

彼方此方で話し合う為に固まりが作られ、ヒソヒソ話が行われる。

「ミュッケンベルガー上級大将を此へ」

「はっ」

ミュッケルベルガーが打ち合わせ道理、直ぐさま陛下の前で跪く。

「ミュッケルベルガーよ、卿は長年にわたり叛徒との戦いで多大なる功績を挙げた、

よって予は卿に帝国貴族たる、エッシェンバッハ子爵位と所領を下賜する」

「身に余る光栄、臣は皇帝陛下に永遠の忠誠をお誓いいたします」

「よいよい、卿は今より、エッシェンバッハ子爵じゃ」

「御意」

彼方此方からざわめきが聞こえるが、

悪口や不満じみたモノは殆ど聞こえない。

むしろ叙爵を賞する声の方が多いようだ。

ミュッケルベルガーも御前から下がったあと、

知り合いの貴族や、同僚の提督達から口々に祝いの言葉を浴びている。

『ミュッケンベルガーおめでとう』

『違うだろう、エッシェンバッハ子爵だろう、おめでとう』

ミュッケンベルガーも夫人も照れくさそうだ。

続いて陛下がお言葉をお話しした。

「さて此だけではなく功績を挙げし者には階級の昇進と一時金を下

賜する」
頷く軍人達。
「さらにじゃ、この度叛乱軍に囚われし我が臣民を１００万帰国させる事とした」

会場がざわめく、それは犯罪者を連れ戻すようなモノではないかと言う声も聞こえる。
「よいか、囚われし我が臣民を予の戴冠２３周年記念と叛徒軍の撃退の記念をもって恩赦といたす」
ザワザワとなる黒真珠の間。

「１００万の兵の恩赦は予の決めし事じゃ意見はならぬぞ」

ここまで言われ、何かを言う貴族軍人はいなくなった。

「其れとじゃ、テレーゼも８歳じゃ、其処で今回所領を与える事とした」
この話には色めきだつ貴族が多く出た、
先ほどの事など消し飛んだように明るい話が始まっている。

打ち合わせ道理に、リヒテンラーデ侯爵が陛下に尋ねる、
「皇帝陛下、皇女殿下におきましては、どちらの御料地をお与えなさるのですか？」

「うむ、国務尚書、ローエングラム領を与えるつもりじゃ」
またざわめきが聞こえる、ローエングラム領は豊かな星系だ。
しかもローエングラム伯爵家は銀河帝国開闢以来の名門、
その門地を皇女殿下に御継がせあらせらる。

それはつまり皇女殿下の配偶者がローエングラム伯爵と成ると言う

事ではないかと、
多くの者が程度の差はあれど思いつくのに時間は掛からなかった。
多くの者から祝福の声が上がる。

「おおこのランズベルグ伯アルフレッド感嘆の極み、
皇女殿下の為に詩を捧げまする」

相変わらずの大げさなランズベルグ伯アルフレッド。
実は前日、陛下より内々に皇女に所領を与えると、
聞きその為の詩を作ってくれるようにと頼まれていたのである。

陛下より直々のお願いに、
感動したランズベルグ伯アルフレッドは、
その夜一晩考え下手な詩を作って居たのである。

ローエングラム伯爵家一門は少々不満そうだが、あからさまには顔に出さない。
「ローエングラム領を与えると言うても、予の直轄地とし其処からテレーゼに、
与えると言う事じゃ、ホンに与えるのはもう少し後じゃな」

皆納得したような顔をし始めたり、
それでも目出度いとなにやら算段する者達も多く見られた。

フレーゲル男爵は、ブラウンシュヴァイク公に話しかけている。
『伯父上、此でわたくしもローエングラム伯爵ですぞ』
なにか勘違いしているフレーゲル男爵、
もう既にテレーゼの婿になる気満々である。

「それとじゃ、各省庁に勤め功績を上げし者に帝国騎士位を下賜す

るものとする」
其れの関しては殆どの貴族が気にとめない様子であった。
今更価値の殆ど無い帝国騎士を誰が貰おうと些かも関係がないからであった。

所がである、皇帝陛下の次のお言葉に黒真珠の間に大いなるざわめきを巻き起こした。
「予の寵姫グリューネワルト伯爵夫人の弟が幼年学校に行っておってな」

皇帝に言葉に何が始まるのかと聞き耳を立てる貴族や軍人達。

「その者が幼年学校で爵位も持たぬ貧乏人めと言われたそうじゃ、仮にも予の義弟じゃ、その様な事をアンネローゼが言いおっての、予としては彼の者に男爵を授けるつもりじゃ」

ざわめきが大きくなる、
フレーゲル男爵などはブラウンシュヴァイク公爵に、
『伯父上、あの金髪の成り上がりモノの下賤の餓鬼が私と同じ男爵ですと！！』
と怒り狂っている。

小声ではあるが、他の貴族や軍人も一様に困惑や文句を述べている。

勇気を持ったヒルデスハイム伯爵が皇帝陛下に質問をぶつける。
「皇帝陛下におかれましては余りにもお戯れが御過ぎでございましょう」
見事に引っかかる馬鹿貴族。

宮内尚書ノイケルン辺りは、あの馬鹿なんて事を言うのだという顔

で見つめている。

陛下が怒気を露わにヒルデスハイム伯を睨む。
「予に意見するとはヒルデスハイム、
卿は予より偉いのか、どうなのじゃ！」

黒真珠の間の貴族軍人間に緊張が走る。
ヒルデスハイム伯は後ずさりする。
「どうなのじゃヒルデスハイム伯」
「申し訳ございません、平に平にご容赦を」

「うむ判ればよい」
ホッとするヒルデスハイム伯

黒真珠の間に安堵の空気が流れる。

しかし、グリューネワルト伯爵夫人は煽情の極みじゃと言う声も聞こえる。
幼年学校生徒の親であろうか、ラインハルトの所業を話す貴族や軍人もいる。
皆一様に悪感情を抱いているようだ。

『陛下はあの女に誑かされておるのじゃ』
『帝国騎士出身が伯爵夫人だしの』
『下賤の分際で男爵だと』
『煽情の極みじゃ』

逆にこの所大人しく静かに暮らしている、
ベーネミュンデ侯爵夫人に対して社交界に出ない事を惜しむ声が多々聞こえている。

『ベーネミュンデ侯爵夫人であればあのようではなかった』
『自らの一族の栄達を求むような事はしなかった』

『やはり子爵家のご令嬢だけの事はある』
『テレーゼ様を慈しみお育てしておるのじゃ、お優しきかたじゃ』
『社交界にまた来て頂きたいですな』

等々好意的な話が話されていた。

こうして宴は過ぎていった。

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

お父様の演技は完璧でした、ケスラーと指導した甲斐がありました。
彼処まで怒気を出せばみんな驚きますし、
アンネローゼの話で、アンネローゼが色々とお強請りしているように見せる事も、
成功したようです。

爺様の関係者も色々話を誘導してくれました、ご苦労様でした。

前日から煽てておいた、ランズベルグ伯アルフレッドは、
見事なタイミングで合いの手を入れてくれたしね、
本当下手なへぼ詩人も使いようだね。

人間に使えない人間なんて居ないんだよ、
ラインハルトやキルヒアイスは自分の基準で、

ラインハルトに役立つ人間以外は無視するけど、

たとえノルデン少将でも使い方はあるんだよ。
其れを考えずに只嫌い役に立たないと排除や無視すれば、
後に残るのは悪感情と憎悪なんだよ。

アホのヒルデスハイム伯だって使い方次第で、
父様の本気度を見せる為に、
見事に引っかかってくれたしね。
そしてラインハルト叔爵で、恩赦については有耶無耶になった。

見事にみんな踊ってくれたね、悪いのはラインハルトとアンネローゼに成ってるね。
アンネローゼは気の毒だけど、危ない弟を持ったと諦めて下さい。
お母様の好感度ＵＰです、よかったです。

■オーディン　某所

「本日の宴如何でございましたか？」
「うむミュッケンベルガーが叙爵されたわ」
「それは大したことではございませんな」

「そうよ、あとは俘虜１００万を帰還させ恩赦するそうだ」
「犯罪者ではございませんか、其れを野放しにするとは」
「そうよ、内務省や社会秩序維持局が動けるようにせねばな」

「御意にございます」
「帝国騎士叙爵もあるそうじゃがあのようなモノ今更役にたたんじゃろう」

「そうでございますな、以前ならいざ知れず今は特典はありませんので」

「そうそうあの女の弟が男爵に叙爵されるそうじゃ」
「なんと男爵でございますか」
「あの女が強請ったらしい」

「危険やもしれませんな」
「そうじゃな、今は身内の事だけを強請っておるが、その弟が成人し権力を欲して姉に強請らせたら、陛下は与えるやもしれん」

「非常に危険な兆候ですな」
「あの女と弟の監視を強化せよ」
「御意」

「そうじゃあの娘が所領を貰うそうじゃ」
「ほう、してどちらを」
「ローエングラム領だそうだ」

「なるほど陛下も娘可愛さですか」
「そうなるじゃろうな」

「娘は無邪気なだけじゃ、どうせあと8年したらローエングラム領を持参金に何処の門閥貴族へ降嫁するのだからな、ほうっておいても何ら脅威ではない」

「母親は如何でありましょうか、最近陛下が4日ほどずつ通っているようでございますが」

「あれも大丈夫じゃ、この前の出産で体をこわして妊娠出来ないそうじゃ、
これ以降あの女に子が出来る事はない」

「なるほど」
「それにじゃ、陛下が通うわけは、あの女を励ます為と、娘に会う為じゃ」
「そうなりますと、如何致しますか？」
「ふむ伯爵夫人に重点を置け、侯爵夫人はほぼ無視で良かろう、娘の分の人数を伯爵夫人に回すのじゃ」
「御意」

第四十三話　男爵ラインハルト（後書き）

フレーゲルの話と爺様工作員を増補しました。

黒幕増補、

煽情の極みじゃはわざと使ってます。

第四十四話　スパイ大作戦（前書き）

今夜は夜勤で居ない為ＵＰ出来ない為、いまＵＰします。

更に真っ黒テレーゼ。

第四十四話　スパイ大作戦

帝国暦４７９年2月25日

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　小部屋　　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

２０日に行われた、父様戴冠２３周年記念と叛徒軍撃退記念の宴は、
思惑道理首尾良く終了した。

本日も定例連絡会、相変わらず皆がバラバラに集まる。
父様が開講一髪話をし始めた。

「先だっての宴での儂の演技はどうであったかな？」
「お父様素晴らしい演技でしたわ」
「はは、陛下ババリア映画村で俳優が出来ますぞ」
「陛下の御演技、誠に素晴らしく存じました」

みんなニヤッとしながら話していく。

「さてテレーゼのアイデアを元に今回の謀を行ったが首尾はどんなモノじゃ？」

ケスラーが厚い資料を捲りながら応対です。

「僅か４日間でございますが、非常に興味深い動きが多数有りました」
「第一に内務省と社会秩序維持局が帰還予定兵のリストを手に入れ

ようと暗躍を始めました」
「第二に諜報部門が叛徒俘虜の身体的特徴、家族構成等を調べ始めています」

「第三に救恤品下賜と帰還兵に対する恩赦の話が軍及び市井に流れ始めております」
「第四に皇帝陛下のお慈悲に感謝する流れが出来ております」
「第五に官吏に帝国騎士叙爵の話が流れております」

「第六にテレーゼ様の自称婿候補として数人が名乗りを上げております」
「第七にグリューネワルト伯爵夫人と弟に対して貴族、軍の間で非常に悪い噂が流れまくっております」
「第八に市井においてもグリューネワルト伯爵夫人と弟の悪い噂が流れております」

ちょー、気になる話もありますが、だいたい予想した通りの動きが始まったようです。
一番は最初から予想していたモノで帰還兵と家族は、
殆どはローエングラム領へ移住させて安全を守ります。

そして父様の勅命を守らずに恩賜を無視して動いた、
内務省と社会秩序維持局（ゴキブリ）の首根っこを押さえられるので、
後々に両組織を牛耳る為の準備と成ります。

二番は判りますよ、帰還兵の中から死亡者や亡命希望者に成りすまして、
諜報員（スパイ）を紛れ込ませて行こうって腹ですね。
原作でも実際に同じ事していますから、其れは普通なんですけどね、
今回はご遠慮願いたいです

第三と第四は予定道理、父様の優しさを下級貴族や平民に見せてフリードリヒ４世は下々の事を考えて下さるお方だと、刷り込みすればラインハルトが、
いずれ何かしても下級貴族や平民の支持を得られないからね。
此は第五と第八も関係してくるからね。

まあ第五はぶっちゃけキルヒアイス対策なんだけどね。
身分が違うからアンネローゼと釣り合わないと思う、
しかし自分が貴族だったら釣り合うんじゃないかと、
淡い期待を心に持ちながらもだえ苦しむキルヒアイス絵になるじゃないですか。
しかもその事で、ミスを起こす可能性も出てくる訳です。

第七は私と母様に対する危険度を減らす為です、
更にラインハルトに協力する貴族が出た場合でも原作より少なくなる可能性が高くなる事。
ラインハルトに対する敵意が凄まじくなりますね。

第六はまあ何とも言えませんが、味方を多く作っておけば其れなりに役に立つと言う事ですね。

さて父様や爺様、ケスラーの話を聞きながら、考えを纏めたので発表しますかね。

「お父様宜しいでしょうか？」
「テレーゼどうした、ケスラーの報告に何か有るのか？」
「はい、先ほどの報告を元にして、お聞き頂きたい事がありますのでお願いします」

皆聞く準備を整えましたね、ケスラーはメモの用意をしましたね。

「三、四、五、七、八については、そのまま現在の方向で動けば良いと思います」

「六についてはまあ、いま8歳ですから追々と言う事で」

「歯切れが悪いの」

父様、じい様、ケスラー笑いを堪えてるじゃないですか。

笑うなら笑って下さい。

「もっとも注意すべきは二番です」

やはり、一番が大事じゃないのかと見てますね、違うんですよ今回はね。

「一番ではないのかの？」

「違います、軍や諜報部門そして此処もですが動きを見るに、叛徒共に帰す俘虜の中に諜報員（スパイ）を紛れ込ませようとしているようですね。

其れを全て止めて下さい。

１００万人１人残らず叛徒共の俘虜にして下さい」

「テレーゼ様俘虜交換は双方が工作員や諜報員を進入させるチャンスなのです」

そう思うよね、けど敵も同じ事考えてるなら、捕まる確率も上がるじゃない。

「確かにそうでしょう、しかし捕まる可能性が有るのです」

「以前のような少数であれば捕まりますが、今回は１００万人です紛れ込むのに容易と存じますが」

ケスラー確かにそうだよ、けどね今回は駄目なんだよ。

「そうです其れは判ります、だからこそなのです、

今回の俘虜交換の大儀を考えて下さい」

皆考えてますね。

「もしや陛下のお慈悲として陛下の人間性をアピールなさると言う事かな」

爺様正解ですよ、頷きます。皆判ったみたいです。

「つまりです、折角お父様がお慈悲を持って救恤品下賜と俘虜交換で帰還兵を恩赦するのにもかかわらず、其れを諜報員潜入の手段としてつかったと判れば折角の努力も水の泡です、下級貴族や平民の支持を受けられなくなります」

考えて無かったような顔してますね。

「そして此は大事な事ですが、叛徒共の俘虜の生活は悲惨きわまりないそうですね」

「ご存じでしたか」

原作知識で知ってるんだけどね。

「ええ、この為に調べました、叛徒の俘虜は食料も少なく死者が出ても食料を減らされるのを嫌がり、

死者を生きている事にして誤魔化しているようですね、

其処へ１００万人帰れるとしたら、そして死んでいる者が帰還リストに載っていたら、

彼らはどうするでしょうか？」

「死者に成りすます訳じゃな」

「お父様正解ですわ、死者に成りすまし帰還する、

当然帰還後に行われる、ＩＤや網膜チェックに引っかかりますよね、

すわ思うでしょう此奴等こそ諜報員だと、

そして取り調べをしても元々諜報員では無いので何も出ません、

出るのは嘘をついて帰国したけと言うだけです」

「必死に帰ってきた帰還兵はどう思うでしょうか、自国民すら信用しない政府や軍、
きっと彼方此方で話すでしょうね、向こうには言論の自由とやらがあるらしいので、
新聞等に書きまくられるでしょう、そうすれば叛徒共にジワジワとダメージを与えられるのです」

まあ同盟も検閲をしてるから、握りつぶされるのが関の山だろうけどね。
アッテンパパ辺りならスッパ抜きそうだけどね。
やらないより遣った方が良い。

「その為にも、わざと死者が名簿にいるように工作をして下さい、
恐らく俘虜達は思った通りに動いてくれるでしょう」

「なるほどそう言う手もあるのじゃな」
「中々に面白き手だと存じます」

「更に其の策が効いてくるのが、
その後です叛徒が我々の帰還兵の中に諜報員を入れてくるのはほぼ確実です」
「そうでしょうな、１００万ならば確実に入れてきます」

「そして第一が絡まってくるのです、帰還兵は恩赦を受けたのも関わらず、
内務省と社会秩序維持局により家族諸共拘束の可能性有り、
魔の手から守る為に奴らが手が出せない、ローエングラム領へ移住させる」

「うむうむ」
「そうすれば一カ所に固まる為に監視がしやすくなります、
その結果ローエングラム領より外へ出ようにも直ぐに判ってしまします、
諜報活動しようにもローエングラム領では最新技術等は手に入りません、
その結果どうしてもローエングラム領から出るか、
最初からローエングラム領へ行かないかの選択になります」

「そうすれば、オーディンに居ても監視が非常にしやすい人数になるでしょう。
また内務省や社会秩序維持局が不安分子だと喜んで捕まえてくれるでしょう。
こういう時に利用しないで、何の為に俸給を払っているのか判らなくなります」

「内務省と社会秩序維持局まで利用するとは天晴れじゃ」
「そしてです、救恤品を叛徒上層部がネゴババしたとしても、
『其れは現場が勝手にした事です』と言い逃れをしてくるでしょう、
逆に諜報員が帰還兵に混じって居た場合、明確な敵対行為です、
此により懲罰行動をとれるのです、
更に以前言ったように臣民に叛徒共への幻想を打ち砕く事と成りましょうし、
叛徒共にも政府と軍の真義を踏みにじった行為は幻滅に値するでしょう」

まあ恐らくは偽諜報員をだして誤魔化すか言論統制すんだろうけどね、
此方の臣民に対するパフォーマンスと同盟に対する幻想を薄れさす

のがメインだからね。

「最終的には叛徒に懲罰行為を行うに値する理由付けが出来、内務省と社会秩序維持局の首根っこを押さえる事が出来るわけです、なんと言ってもお父様の勅命を無視するのですから、大逆罪や反乱罪も十分適用できますよ」

おー皆唖然と取られています。

「なるほど聞けば聞くほど恐ろしい策じゃ、テレーゼが我が娘であって良かったぞ」

「ホッホ、テレーゼ様はルドルフ大帝以来の大器かも知れませんな」

「この策は自分は行われたくありません、勝てる気がしません」

皆私をもて笑ってます、ええそうですよ、性格超悪いですよ、腹黒です。

まあ同盟よある意味ご愁傷様。

■オーディン　　ウルリッヒ・ケスラー

本日の定例会議でごく普通に時間が過ぎるはずが、テレーゼ様の策略を聞いて自分の策略は未だ未だ全然敵わないと身に染みて自覚した。

通常の捕虜を使うのではなく、彼処まで叛徒を落とし入れるとは、テレーゼ様を敵にした叛徒共が些か気の毒に感じてきた。

内務省も社会秩序維持局も良い面の皮だ、

我々を出し抜いたつもりが、完全に首根っこを押さえられるのだから。

とても私には彼処まで真似できない、テレーゼ様こそ謀略の天才と言えよう。

第四十四話　スパイ大作戦（後書き）

同盟涙目。

第四十五話　帰還への道

宇宙暦７８８年　帝国歴４７９年３月１日

■自由惑星同盟統合作戦本部諜報部　　チャールズ・ブロンズ

昨年１２月より上司の情報部長、サミュエル・シャントルイユ中将から命令を受けていた、
捕虜交換時に送還捕虜に紛れて帝国内に進入をさせる諜報員の選抜が終了した。
潜入させる諜報員の数は今までと比べものにならない１００名であり、
いずれも腕利き揃いである。
早い者では数年前から収容所内で活動し内部にとけ込んできた。

今までであれば、帰還兵は反逆者等に問われ社会秩序維持局による拘束を受けたが、
今回は皇帝の恩赦で自由の身である、その結果安全な潜入が行える。
このチャンスに潜入させねばどうなるのであろうか。

数年にわたり、死亡者や亡命希望者と入れ替わり１００名を潜入させた、
あとは、交換を待つばかりである。

さらに前回の様に帝国も諜報員を我が方と同じく多数潜入させて来る事は自明の理である。
それら諜報員を燻り出す準備も順次終了してきている。
我が方の諜報能力の方が優れていることを帝国に知らしめてやる。

帝国暦４７９年３月１日

■オーディン　統帥本部　情報部　ヨアヒム・キューバウアー

俘虜交換に対して情報部は腕利きの諜報員を叛徒の帰還兵に紛れ込ます為、
人材確保、経歴調査、叛徒語の完全なマスター、スラングや生活環境などのレクチャー、
諜報員のなりすました帰還者名簿等の準備を行ってきたのであるが、
昨日統帥本部長シュタインホフ元帥から帰還兵に諜報員を混ぜ忍び込ますことを、
すべて中止せよと命令が下った。
我々はこの日の為に長い年月諜報員潜入準備を行ってきたにもかかわらず、
いきなりの中止命令、全員が納得がいかずにシュタインホフ元帥に意見を述べに行ったが、
この中止命令自体が皇帝陛下の勅命で行われたと知り驚いてしまった。

皇帝陛下が何を考えているか判らないが、
折角のチャンスだ無視してでも潜入させようと準備を続けようとしたが、
シュタインホフ元帥が万が一にも諜報員を潜入させた場合、
いかなる理由があろうと、
関係者全員を不敬罪及び反逆罪に処し一族連座により悉く死罪となると真剣な表情で独白した。

あの様な真剣な元帥は見た事もなく我々もこのまま続けた場合の末路を想像できた為、
今回は断腸の思いで諜報員潜入を中止する事とした。

さらに帰還予定兵の名簿作成に於いて、一定量の死亡者をそのままリストに入れるように命令された。
此にはどの様な意図があるか判らないが、此も勅命だとのことであるから黙々と進めよう。

帝国暦４７９年3月1日

■オーデイン　ノイエ・サンスーシ　小部屋　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

緊急の事だった為、ケスラーのみが来られた為ケスラーに連絡です。

「俘虜交換時のことですけど、
帰還する臣民の健康状態を確認し病気等が有った場合直ぐに治療できるように、
出来る限る多数の病院船を随伴させましょう、
あらゆる病気心臓病などの専門医も乗せて下さい」

主にケーフェンヒラー爺様の心臓疾患に対する為だけど。

「了解しました、此も陛下のお慈悲の為ですか？」
「ええ其れもありますが、帰還臣民の健康診断も行います、
形態上健康診断でお父様が臣民の為に行うように見えますが、
実際は健康診断にかこつけ全員の身体的特徴と全身のＣＴスキャン、
網膜パターン、血液、ＤＮＡ、整形などを記録します」

「諜報員をあぶり出す為ですか」
「ケスラーその通りです、さらに帰還兵の血縁のある親族ＤＮＡを検査しその帰還兵ＤＮＡと照合します、そうすれば一気にあぶり出せますよ、
いくら整形や網膜パターンを模倣してもＤＮＡは変える事は出来ませんからね」

「ＤＮＡ検査ですか、此方では余り行われない方式です」

劣悪遺伝子排除法の影響か此は困った。
フェザーンからＤＮＡ検査キットを輸入できないかな？
独立商人なら儲け話に乗ってくるはず。

「それでは、緊急にフェザーンから検査キットを輸入できませんか？」
「自治政府がどうでますか」
「其処で独立商人をつかい密輸させます、ある程度の金額を出せば喜んで持ってきてくれるでしょう」
「確かにそう思えます、判りました早急に今回の事準備させます」
「ケスラー出来れば３００万セットお願いします」
「お任せ下さい」

宇宙暦７８８年　帝国暦４７９年３月１０日

自由惑星同盟ネプティス捕虜収容所　　アルフレート・ミュールマイスター

いよいよ今日が来た、皆ソワソワしている帰れるのだ帝国へ、

皆この日を待っていたのだ。皇帝陛下のお慈悲により家族の元へ帰れる、
大多数の兵達は喜んでいるが一部は未だに、
『信じられない、帰国したら殺される』と騒ぐ者が居るが俺は皇帝陛下を信じる事にした、
社会秩序維持局は恐ろしいが、、まさか陛下の勅命を無視する訳がないはずだ。
荷物の準備は既に終わり、宇宙港へ向かうだけだ。

娘ももう１５歳か無事でいてくれればいいが、
あの娘は母親に似て菫色の瞳、クリーム色の髪の美人だから、
変な男に騙されていなければ良いのだが其れが心配だ。
しかしあの子の身のこなしは、燕のようだから逃げ切れるだろう。

いよいよ出発だ、多くの兵が自発的に皇帝陛下万歳を言い始め、
看守に怒鳴られているが、その声は我々の心に染みいっていった。
さあ帝国へ帰ろう。

宇宙暦７８８年　帝国暦４７９年３月１０日

■銀河帝国　アルタイル星系第７惑星の矯正区　　ヴィットリオ・エマニエール

なんとか生き残った、あの日以来何時寝首をかかれるか判らない日々だった、
彼方此方で帰る為に他人を落とし入れる事が日常的に行われてきた、
隣の奴も信用できない、信用できるのは自分だけだった。
其れも今終わる、矯正区から宇宙港へ１時間の旅らしい。

３日前に帰還者リストが発表された後、
帰れる奴帰れない奴の間で凄まじい睨み合いが続き一触即発の状態であった、
その夜からおぞましき事件が多数発生した。
思い出すのも震えが出る、あの日からの事は二度と口に出さない思い出したくない。

リストには死んだ人間の名前も入っていた、そうだろう俺達が死んだと届けなかったのだから、
その話が伝わると、集めておいた死者の認識票を持って成りすます者達も続出した。
そして多くの者が自分の名前を棄て死者の名前を名乗っていった、
此処に居るぐらいなら、死人を使っても良心は痛まないのだろう、
俺もその立場なら同じ事をするだろうから。

宇宙暦７８８年　帝国暦４７９年３月１０日

■タナトス星系惑星エコニア捕虜収容所　　クリストフ・フォン・ケーフェンヒラー

結局は此処を追い出される、所長のコステアが俺を帰還者リストに無理矢理載せたのだから、
儂としては此処で骨を埋める気満々だったが、そうも如何のが人生か面白いわ帝国に帰りたくはないが、
皇帝陛下の企みを知るのも余生の楽しみやもしれん、調べてみるかの。

蔵書も全部持って行けと言われたが、この量は大変じゃ若い者が手伝ってくれるから助かるの。

プレスブルグは相変わらず元気な奴じゃ、皇帝陛下万歳ともう３０分も叫んでおる、
五月蠅くて仕方がないの。
さて帰国の時間かどの様な事が待っているのか、楽しみじゃ。

第四十六話　勇者達の帰還（前書き）

フリードリヒ４世の演説はテレーゼがラインハルトのを参考に作成し、
ケスラーが校正。

第四十六話　勇者達の帰還

帝国暦４７９年3月１２日

■オーデイン

臣民の帰還と称する捕虜交換式典代表者を誰にするか帝国側は決めかねていた。
叛徒との式典自体が異様なのである、通常の精神の持ち主では敬遠するのが当たり前であった。
フリードリヒ４世やルードヴィヒ皇太子が行啓するわけにも行かず。
ましてやテレーゼ自身が発案者だと言っても裏方に徹している事、また8歳という年齢やベーネミュンデ侯爵夫人の反応を考える以上論外であった。

各尚書とて同じである、直接的責任者は軍務尚書のエーレンベルク元帥だが７０歳という年齢が長距離移動に不安を感じさせる上に旧態依然な軍人で有り、陛下の御心を理解できない場合が有る為除かれた。
既に叛徒の俘虜を乗せた輸送艦及び病院船が各地を発進しイゼルローンへ向かいつつある。

結局の所、皇帝陛下の鶴の一声で特命全権大使に帝国侯爵にして帝国軍中将である、
レギナルト・フォン・ケルトリング侯爵が親補され、皇帝陛下より臣民に向けた詔を受けたのである。
ケルトリング中将はこの年４５歳であった。

護衛艦隊１０００隻の指揮官として祖父が第二次ティアマト会戦で勇戦し、
先頃の第四次イゼルローン攻防戦で活躍した、
帝国男爵にして帝国軍少将である、クリストフ・フォン・シュタイエルマルク男爵が親補された。

また俘虜交換の実質的な責任者として、グリンメルスハウゼン子爵令息のマンセル・フォン・グリンメルスハウゼン少将が親補された。
また今回もエルネスト・メックリンガー少佐が参謀として参加することも決まった。

病院船にはグリンメルスハウゼン旗下多数の組織員がＤＮＡ検査の為乗り込んでいた。
輸送艦には許可を受けた諜報部が見張りを行う為に乗り込んだ。

３月１５日、皇帝陛下、皇女殿下御臨席の中、レギナルト・フォン・ケルトリング中将指揮下の艦隊が宇宙艦隊第２宇宙港から出立した。
４月２０日艦隊はイゼルローン要塞にて先発した輸送艦病院船と合流１２００隻の艦隊と成り、
前回同様駐留艦隊の航海参謀のビュルクナー少佐が水先案内に乗艦しエル・ファシルへと向かった。

前回同様、アルレスハイム、パランティアと危なげなく進む。
４月２３日アスターテ星系に於いて叛徒側の水先案内の為の１００隻ほどの艦隊と合流した。

翌２４日艦隊は何もなく無事エル・ファシルへ到着した。

宇宙暦７８８年３月１０日

■自由惑星同盟ハイネセン　　統合作戦本部記録統計室
ヤン・ウェンリー

資料を読みあさっていたら、室長のオスマン大佐から人事局へ行くようにと言われたので飲みかけの紅茶を飲んでから出頭した。
人事課長からエル・ファシル警備艦隊へ幕僚として赴任するように辞令を受けた。
どうやら古い資料ばかり読みあさっていたので、厄介払いされたらしいな。
１５日にエル・ファシルで行われる捕虜交換式に参加する艦船が出るからそれに便乗して行けとの事だった。
はっーぁ・・・折角天国の様な職場だったのに、エル・ファシルなんて前線じゃないか。
世の中やっても駄目な事ばかり、今日は早く帰って酒飲んで寝よう。

宇宙暦７８８年3月１５日

■自由惑星同盟　　ハイネセンポリス

ハイネセンでは今熱狂のうちに捕虜交換式に向かう政府高官、軍首脳、各社マスコミそして其れも見送る市民達でごった返していた。
一部のマスコミや市民は今回の捕虜交換が弱腰外交だ全員を取り返せと声を上げていたが、
そう言った声は、憂国騎士団等の組織による襲撃や嫌がらせを受け、表には殆ど知られなかった。

今回政府側代表者として国防委員長ティボールド・フランクリン以下４０人の評議会委員が随員として付き添った、随員を決める際か

なりの駆け引きが生じて結局４０人という大人数と成ったのである。
さらに正式な随員ではない、軍人や家族の票を基盤とする“国防族”とかいう政治家達もなんやかやと理由を付けて随伴していくその数１００人以上。
そのうち元軍人が半数以上を占めていた。

別に彼らが、自分達が送り出した為、捕虜に成った者達への贖罪で随員になったわけではなく、
この一大イベントで顔を売り名を売れば次回選挙での票数獲得に多大なる恩恵を浴びる為だけであった。

随伴するマスコミも政府の紐付きや癒着している所が優先的に招待され特別便でエル・ファシルへと向かうのである。

最高評議会議長　ディオニシオ・エンリケス以下最高評議会議員が見守る中、
マスコミのフラッシュを浴びながら、ティボールド・フランクリンは手を振りながらタラップを昇りシャトルへと消えた。

軍側代表者は統合作戦本部次長ミハイル・ブルドゥコフスキー大将以下３０人の随員で編成されていた
また捕虜監視や帰還兵のアフターケアー職員、
そして諜報部の腕利き尋問官も混じって居た。

更に一番目たない所から飛び立つシャトルには、
今回の件には関係がない便乗者達が集まり出発していった、

既にエル・ファシルへ向かっている軍用輸送船を追いかけるように出発して居いった。

途中何の障害もなくシヴァ星域にて合流を果たし、
不慮の事件や帝国がだまし討ちを行う可能性を示唆し、
演習の為と称してこの星域に留まっていた、
第７艦隊と合流し進発した。
その後は順調に航海を続け、４月２２日にエル・ファシル星域に到着した。

帝国軍到着が２４日の予定の為、捕虜達は地上に特設された収容施設に移され監視された。

宇宙暦７８８年　帝国歴４７９年４月２４日

■エル・ファシル

帝国側が僅か１０００隻の護衛しか連れて来なかったにもかかわらず、
同盟側は帝国が今ひとつ信用できない為第７艦隊以下１７０００隻で出迎えるという、
威圧的な状態であった。
その映像を随伴した組織員やＴＶクルーが撮影を行っていた。

到着した帝国軍輸送艦、病院船２００隻は大気圏に進入しエル・ファシル宇宙港へ降下した。

ケルトリング中将旗艦ウィボイクザームのハッチが開き帝国軍の代表者たる、
ケルトリング中将以下随員が生身の姿を見せたとき、
興奮の囁きがわき起こった。

マスコミのフラッシュ攻勢に曝されながら嫌な顔をせず堂々とタラップを降りてくる。
そして捕虜交換式を行う準備が始まった。

両国の国歌ではなく、両軍の軍楽曲が響く中、
フランクリン国防委員長がケルトリング特命全権大使を出迎え、
握手を交わすと無数のフラッシュが閃いた。

二人は会場内を歩いて、中央のテーブルに歩み寄った。
其処に捕虜のリストと交換証明書が置かれていて、
二人のサインを待っている。

それぞれの前に置かれた二通の証明書に、
二人はサインをし公職の印章を押す、交換して再びサインをし印象を押す。
時間にして二分とはかからなかった、
此で両軍併せて２００万の兵士が故郷に帰れる事になったのだ。

■エル・ファシル　帝国側捕虜収容エリア

ケルトリング特命全権大使以下随員が帝国側捕虜の収容されているエリアへ行き、
全捕虜の前で皇帝陛下の詔を読み上げた。

『勇戦虚しく敵中に囚われた忠実なる兵士達に、予は名誉に懸けて次の事を約束する。
卿等全員を名誉ある臣民として遇する。
俘虜になりし事が罪であるがごとき事は此を行わさせぬ。

帰国した兵士全員に此までの俸給と共に一時金を支給し休暇をあたえる。
軍に復帰を希望する者には全員一階級昇進させる。
復帰を希望しない者にも一階級昇進させ、新たな階級を持って恩給を与える。

我が兵士、我が臣民よ、卿等が恥ずべき事は何もない、
卿等は勇戦奮闘したのだから。
胸を張って帰国せよ、予は卿等の帰りを待っておるぞ。

銀河帝国皇帝フリードリヒ４世』

この詔を聞いた帝国軍捕虜は最初呆然としていたが次第に意味がわかると、
大歓声がわき起こった、そして誰とも無く皇帝陛下万歳、帝国万歳の大合唱が起こっていった。

興奮やまぬ中名簿順に順次輸送艦病院船に規律を持って乗り込んでいく帝国軍兵士達、
彼らの顔には希望や嬉しさが見えている、
皆がにこやかである。

乗船すると美人の女医や看護婦達による健康チェックが行われはじめた、
その話を聞き、多くの兵が我先にと検査を受けに来て女医や看護婦に見とれながら、
レントゲンやＣＴスキャン血液検査などが行われたのである。
そして病気を持つ者は病院船へ移されて治療を受け始めたのである。

実際此はテレーゼが人間心理を考えて女医を配置したのであり、
それでも中々来ない人間は注意するようにしたうえ、
血液検査にかこつけ、フェザーンの独立商人コーネフ氏から密かに
買い込んだ、
ＤＮＡ検査キットにより詳しい親族チェックが進んでいたのである。

そんな中、クリストフ・フォン・ケーフェンヒラー大佐は心電図に
異常が見られた為、
病院船へ移り詳しく検査した結果、
心筋梗塞に成りつつある事が判明し早急な処置を行われる事と成っ
た。

■エル・ファシル　　同盟側帰還兵収容エリア

同盟軍の帰還兵達は幽鬼のような兵達が多数であった、
地獄を生き抜いた者達は、隣同士でも唾み合い、
中には既に掴み合いをする兵すら居る。
その者達をＭＰが厳しく取り締まるが、
兵達から『安全な内地にいる犬っころ野郎共』と罵声が飛ぶ。

その喧噪の中、国防委員長が現れ長い訓辞を話し始めた、
苛つく帰還兵達、騒ごうとするがＭＰが銃で威嚇を始めている。
『俺達は国の為に働いたのにこんな仕打ちかよ』
多くの兵が苛つきを隠せない。

やっとの事で国防委員長以下の長い演説から解放されたが、
今度は国防族が兵達に万年筆や靴下とかタオルとか時計を配りだし
た。
そういった品物にはなんと委員個人の名前や政治団体の名前が記入

してある。
早速１００万の有権者にたいして選挙運動をし始めているのである。

帰還兵達は口々に『俺達を戦場に送り出して、謝罪に来たかと思ったら選挙運動かよ、巫山戯けんな！』
『てめーらは、ハイネセンでぬくぬくしやがって、矯正区で地獄を見やがれ！』
など口々に罵声を浴びせ始めた。

その声を聞いたある議員が、
『君達が帰れたのは私たちの努力のたまものなのです。
感謝こそされても罵声を浴びるような事はしておらん！』
などと火に油を注ぐ状態になりＭＰが割って入る始末であった。

帰還兵は順次取り調べを受け、少しでも怪しい帰還兵は別室へ連れられ監禁された。
此は諜報員の侵入を防ぐ為のモノであるが、
取調官の余りの態度にキレる兵が続出し大変な混乱と成っていった。

また、疑いのない兵達は解放された喜びから、
なんかと箍をはずして行動し、彼方此方でトラブルを起こしまくっていた。
酒を飲み、基地内の兵士やエル・ファシル市街へでて喧嘩をする。

女性にからんだり襲ったりする。
町中や通路で立ち小便をしたり器物を損壊したりする。
その他数え切れない事を次々に行っていった。

駐留部隊幕僚のヤン中尉もその取り締まりに参加させられ、
一発殴られ気絶する有様であった。

■エル・ファシル捕虜収容施設

帰還兵の中で網膜パターンの合わない者、怪しい者が４８５７人も居た為、
彼らこそ諜報員だと判断し全員をエル・ファシルからハイネセンの諜報部へと移送する事になり、特別な輸送船により一足早く出発した。
そして航行中も厳しい尋問が続いたのである。

結局大半の兵が帰りたいが一心で死亡者の認識票を利用しその者に成りすまして帰国した事が判ったのはハイネセン到着前日であった。
軍上層部はその成りすましに対して確固たる態度で臨む事を決め、兵達は軍法会議に掛けられる事と成ったのである。

諜報部としては４８５７人全員がＤＮＡと網膜パターンにより実在の人物と判った為、
諜報員として帝国側に寝返った者が居ると断言した。
さらにメンツの上でも１００万人の帰還兵を監視できるように部署を特定し調べるように提案した。
同盟内部では疑心暗鬼の芽が発生していたのである。

第四十六話　勇者達の帰還（後書き）

増補しました

第四十七話　引っ越しはローエングラム（前書き）

グタグタかも。

第四十七話　引っ越しはローエングラム

帝国暦４７９年４月２８日

■銀河帝国辺境星域

帰還中の帝国兵に対して、再度救恤品が配給されたが、
今回はワインが入ってない為に失望する者と、
あんな不味い酒は飲みたくないと言う者に分かれていた、

何処の船もほぼ同時に噂が流れた、
皇帝陛下の救恤品には４６３年物のワインが一人１本ずつ挿入されていたと。
何人もが騒ぎ出す、『俺達はワインなんか飲んでない』
『あんな不味いワインが４６３年物だって嘘付け』
『１人一杯ずつだったぞ』
『俺達はちゃんと旨いワインを１本ずつ貰ったぜ』

皆バラバラである。
その騒ぎに先任下士官が現れ、正式な話をグリンメルスハウゼン少将がすると教えていった。
固唾をのんでモニターに喰いいるなか少将から、
皇帝陛下の救恤品の中身が教えられた。

多くの兵が自分が受け取った品が少なくなっていた事に気がついた、
特にワインはかなりの兵が無くなっていた事が判った、
憤慨する兵達、すると『叛徒共がネコババしたんだ』と言う声がどこからとも無く沸き上がり、
その声はたちまち艦内に木霊したのであった。

『あいつら向こうは平等だとか言いながら俺達の物を盗んでやがるんだ！』
ヒートアップしていく兵達。

其処へ今度はケルトリング中将がモニターに現れ。

『皇帝陛下が折角卿達を慰めようと送ったワインが叛徒共に掠め取られていたとは、
小官も非常に憤りを感じるモノである、
奴らは皆が平等と言いながら他人の物を平気で盗む盗賊の集団である。
卿等の無念を思うと胸が痛む、よって今より各艦にある酒類の飲酒を自由とする、
皆楽しんでくれ以上』

話が終わると多くの兵達が食堂へ向かった。
食堂では食事はバランス良く豪勢な食事が支給されていた、
また酒類も飲み放題でになり、飲兵衛連中には堪らない状態であった。
そして各艦の監視モニターが一部始終を記憶しているのであった。

5月5日、捕虜交換により帰国中の帰還兵の中で同時進行的に奇妙な噂が流れ始めていた、
噂の出所は噂好きの看護婦達であったが、
何かにつけて診療施設に入り浸りたがる兵達が噂を聞いてきたのである。

噂によると皇帝陛下が帰還兵の恩赦を決め無事に臣民として遇すると仰っているのにも関わらず、
社会秩序維持局が皇帝陛下の勅命を無視して動こうとしているとの

事であった。

多くの兵達は皇帝陛下の勅命を無視する訳がないと安堵していたが、
輸送艦と病院船がオーディンへ近づくにつれて噂が噂を呼び次第に
不安になる者達が増えていった。
オーディンまで数日の決定的な噂が流れた、社会秩序維持局が帰還
兵家族の身辺調査を始めていると、

しかもその噂の出所が、艦隊の高級幕僚から聞いたと、
しかも幕僚の愛人である看護婦から話が流れた為、
事実として艦隊内に流れ、大騒ぎになっていった。

青ざめる者、絶望に沈む者、家族を心配する者、途方に暮れる者、
怒りに震える者、多くの兵がパニックに成りつつあった。

その時である、ケルトリング中将による放送が流された。
『オーディンまであと数日であるが、恐れ多くも皇帝陛下の御心を
無視した、
社会秩序維持局が卿達と卿達の家族を政治犯として収容しようと画
策している事が判明した、
皇帝陛下の御心を土足で踏みにじる行為を行おうとしている、

社会秩序維持局はその詔を曲解し卿達の家族親族を政治犯として検
挙し、
連座として卿達を捕らえようとしている、
皇帝陛下はお怒りであるが、その様な行為を行われては卿達の家族
数百万を守りきれるものではない。

皇帝陛下が御心をお痛めになり、なんとしても卿達と卿達の家族親
族を守る為に、

先頃皇女殿下の所領と成った、ローエングラム領に家族共々移住を進めるとのお心である。
卿達の古里から離れる事は断腸の思いで有ろう、

其処で皇女殿下にお話になり、卿等家族共々移住を殿下自ら快諾なさって頂いたのである。
皇帝陛下は卿等の忠誠心を忘れはしない、皇帝陛下は卿等を決して見捨てはしない、
見知らぬ土地へ向かうのは辛かろうが、皇帝陛下と皇女殿下の御心を信じて貰いたい』

この放送が流れると、今までのドンヨリとした空気が晴れ始めたと同時に、
誰が叫んだか判らないが、皇帝陛下万歳、皇女殿下万歳の歓声が響き始めた、
『皇帝陛下万歳、皇女殿下万歳』

そして逆に社会秩序維持局（ゴキブリ）に対しての怒声と怨嗟の声が響きまくったのである。
『くたばれゴキブリ野郎!!』

帝国暦４７９年４月

帝国臣民に、皇帝陛下がお慈悲を持って叛徒に捕らえられた臣民に救恤品を下賜し、
さらに１００万人もの兵を帰還させるそして兵達は一切の罪に問われないと知らされたのは、
４月２０日の事であった。

貴族や政府関係者はまたぞろ陛下の我が儘が始まったとあきれ顔で

あり、
軍部は渋い顔であったが、陛下の勅命では仕方ないと諦めていたが、
臣民の考えは違っていた、此で家族が帰ってくるかも知れない。
皇帝陛下のお慈悲が嬉しいなど、好意的に取られる方が多かったの
である。

5月に入ると帝国では市井において、
ある噂が流れて始めていた。
『皇帝陛下が帰還兵の罪を問わないと言うのに反発した社会秩序維
持局が、
勅命の盲点を突いて家族や親族を反帝国活動として捕らえ、
連座として帰還兵を拘束する』

まことしやかに流れたのである。
人々は社会秩序維持局の怖さを知っている為、確実にあり得ると震
え上がっていた。
そして誰が帰還するのか、戦々恐々に家族達はおびえていたのであ
る。

そして5月12日帰還兵のリストが公表されると、
喜ぶ者より不安がる者が増えていったのである。

帰還兵の家族や親族は毎日が不安になっていった、
人影が見えると身構えてしまうのである、
社会秩序維持局の局員では無いかと。

そんな中、帰還兵家族親族に接触する者が増えていった、
グリンメルスハウゼン旗下の特殊宅配便部隊である。

時間がかかるが、彼らは宅配便として帰還兵の無事と、

社会秩序維持局が狙っている事、
そしてそれを逃れる為に、ローエングラム領への移住を勧めてきたのである。
またその際に移住する場合のＩＤカードを作る為と称して少量の血液を貰う事も行った。
無論其れはＤＮＡ鑑定の為であった。

多くの家族親族は躊躇したが、ローエングラム領では十分な生活保障を受けられると聞くと、
好意的に考える者達が増えていったし、
家の廻りに怪しげな人物が蠢き始めるのをひしひしと感じていった為、
移住を行う気になる人々が多数出てきた。
決定的なのは、有る士官の家族が社会秩序維持局に捕らえられたという噂が流れた事であった。
此により殆どの家族親族が移住を行う事と成った。

実は社会秩序維持局もこの頃動き始めていたが、合法的にリストを手に入れれれず、
軍務省から手に入れたのは、実在しない偽リストで合った為、
全く動き損ねていたのである。

実は捕らえられた士官の家族と言うのは存在しておらず、只流された噂であった。
つまり家族の元にいた怪しい影は、殆どが勘違いかグリンメルスハウゼンの部下達だったのである。
社会秩序維持局が正式なリストを手に入れた６月には、
既に帰還兵の家族親族はローエングラム領へ引っ越しを終えた後であり、
全く手が出せない状態だったのである。

その後市井の噂で、皇帝陛下が社会秩序維持局が行おうとした陰謀を自ら潰し、
犠牲になりそうだった臣民を皇女殿下の領地のローエングラム領へ逃がしてくれたと、
その数４００万人以上だと、其れを聞いて多くの臣民が皇帝陛下の慈悲を感じ始めていた。

帝国暦４７９年5月３０日

■オーディン　宇宙艦隊第3宇宙港

この日オーディンの空は青空に澄んでいた、
帰還兵１００万を乗せた輸送艦病院船が相次いで到着したのである。

皇帝陛下、皇女殿下ご臨席の中、
まずケルトリング中将がタラップから降りてくる。
そして、輸送艦病院船から次々と帰還兵が降りてくる、

当初は不安げな顔をした帰還兵達も、皇帝陛下、皇女殿下の姿を見ると、
明るくなり興奮したように『皇帝陛下万歳、皇女殿下万歳』と言い始めた。

皇帝陛下と皇女殿下はにこやかに手を振り始めた。
１００万人が広場に降り立つまで実に二時間以上かかったが、
その間皇帝陛下と皇女殿下はにこやかな笑みを絶やさずに見守り続けた。

その姿に感動する帰還兵達と現役の将兵達。
『皇帝陛下万歳、皇女殿下万歳』が響き渡る。

帰還兵１００万が整列し終わると、皇帝陛下からのお言葉が述べられた。

『我が親愛なる臣民達よ、よく帰ってきた、
予は卿等の忠誠を決して忘れはしないそして卿等と卿等の家族を守ろう』

すでに兵達には家族がローエングラム領へ移転した事が知らされていた為、
安堵した声が聞こえ、社会秩序維持局に対する怒りが上がっていた。

皇帝陛下と皇女殿下が退席の後、
ケッセリング中将からは、家族のビデオメールがそれぞれにあるから、
名簿順に順次受け取るようにとの話があり皆喜んでいた。

傷病兵は速効で軍病院の特別病棟に入院し、
確りと守られたのである。

その他兵士は、その日から3日間は宇宙港の宿泊施設に泊まり、
3ヶ月の休暇と俘虜に成った時間分の俸給と一時金を受け取り、
希望する者から順次家族の待つローエングラム領移動して行ったのである。

大半の将兵は3日目にはローエングラム領へと旅だったのにもかかわらず、
一部将兵がオーディンに残る事を申告した、大半が身寄りのない兵

達であった。
結局残った兵は２０５名であった。

その中に多数の諜報員が紛れ込んでいた。
同盟は帝国が劣悪遺伝子排除法により遺伝子研究がおざなりになっている事、
ＤＮＡ鑑定を殆ど行われて居ないことで、

血液検査自体を余り気にしていなかったが、
テレーゼの知識によりＤＮＡ鑑定されてしまった為、
諜報員の大半が判明してしまったのである、その数９５名。

それでも5名は元々帝国の兵士だった者が寝返った為にチェックに引っかからなかったのである。
しかし９５名は監視を付けて泳がせることとしたのである。
何れ決定的な証拠とする為に。

帝国暦４７９年6月5日

■オーデイン　ノイエ・サンスーシ　小部屋　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

　俘虜達が帰還して慌ただしい日々も終わり今日は総括です。
何時ものようにケスラーが進行役です。

「陛下今回の帰還により多くの民が陛下のご威光のたまものと噂しております」
「そのようなものかの」

「まあ良いことをしたと思いましょう」

「帰還兵のうち傷病兵は軍病院の特別病棟に入院させ守っています」

「帰還兵の話を聞きますと、テレーゼ様のご指摘のように案の定、叛徒共は救恤品の搾取を行っておりました、手口は全く安物のワインと交換するモノ、数人で1本にするモノ、全く与えないモノなどが有りましたが、マーロヴィア収容所では確りと配られたようです」

「ふむ人それぞれと言うことか」

「まったくですな」

「こちら側が噂の為を蒔いたところ、帰還兵達が思い出してくれまして、口々に救恤品の話を行い、続けてくれました其れを全て記憶してあります」

マーロヴィアって言えばこの頃はビュコック爺さん任地か、爺さん睨み効かせたのかもね。

「確かに此で、前提条件が整い始めていますね、あとは諜報員の所在ですね」

「其れについて既に９５人を確認し監視を続けています、しかしその他に居る可能性も否定出来ません」

「そうよの、ダブルスパイなんぞは、必ず居るモノじゃ」

「努々油断無きようにせよ」

「御意」

「しかし女医と看護婦を使い健康診断に自発的に行かせるとは儂等男では考えつかんの」

「噂を流すのも看護婦と来れば、話しに来たくて集まりますの」

「しかも傑作はそちの息子マンセルよの、看護婦の愛人が２００人

もいるそうじゃの」
「ホホホ、まあたまには良かろうと思いましてな」
演技とは言え気の毒なマンセル、此じゃロイエンタールかシェーンコップかポプランに並ぶスケコマシの渾名が付けられるな。
「社会秩序維持局も予想道理動いたの」
「御意陛下の勅命を搦め手から曲解し動くとは一筋縄ではいきませんん」
「まあ此は副次的なモノですからね、警告程度の処置には成るでしょう」
「取りあえずは内務尚書には釘を刺しておこう」
「ローエングラム領への移住もほぼ済みました」
「移住者の生活環境や仕事の準備はどうでしょうか？」
「既に居住区は完成しており、それぞれの職に合わせた作業所も稼働しております」
「よかったです、これで皆安心して暮らせるでしょう」
「移住した帰還兵は予定ではローエングラム領の防衛隊として再編成させ、
ある程度経った後で正規艦隊へ異動希望者が居れば移動させます」
「あとは、放送ですね」
「御意、救恤品から諜報員などの動きを鏤めて、放送を行います、
此により叛徒共の主張の浅はかさと信義を無視する悪辣さ、陛下と殿下の御優しさ、
などを主張する事ができます」
「そうですね、叛徒共がどう出るかですね」

６月２０日銀河帝国国営放送で驚くべき放送が流された。
今回の皇帝陛下の俘虜に対する御心と救恤品下賜、
その輸送を頼んだ叛徒共が品物を窃盗したこと、

また帰還した臣民の中に諜報員を混ぜていたこと、
そしてその諜報員が各種事件を起こしたこと、
そして帰国した臣民を守ったことなどが放送された。

帝国臣民は大いに驚き内容を噂し合った。
しかし証拠を重ねて放送が成されると、
同盟が聞くような理想の国であると言う幻想が曇っていったのである。

第四十八話　ワイン飲み逃げ（前書き）

料金を踏み倒して逃げました。

第四十八話　ワイン飲み逃げ

宇宙暦７８８年　帝国暦４７９年６月２１日

６月２０日銀河帝国国営放送で驚くべき放送が流された。
今回の皇帝陛下の俘虜に対する御心と救恤品下賜、
その輸送を頼んだ叛徒共が品物を窃盗したこと、

また帰還した臣民の中に諜報員を混ぜていたこと、
そしてその諜報員が各種事件を起こしたこと、
諜報員の数は１０名だったこと。
そして帰国した臣民を守ったことなどが放送された。

帝国臣民は大いに驚き内容を噂し合った。
しかし証拠を重ねて放送が成されると、
同盟が聞くような理想の国であると言う幻想が曇っていったのである。

銀河帝国を駆け回った衝撃は、波が流れるように次第に各地へと伝わっていったのであった。

■銀河帝国各地

貴族達は所詮叛徒共に甘い目を見せるからだと皇帝を小馬鹿にして酒を飲み交わしていた。
『わざわざ陛下もこのようなモノを流すとは、
これで陛下も恥をかかれた訳だ、若き頃放蕩三昧であったがゆえか、
あのグリンメルスハウゼンが侍従武官であったし、朱に交われば赤くなると言うではないか』

『まっことそうでございますな余りにもひどうございますな』
『ハハハハ良いではないか、其れだけザビーネの帝位への道が開けるというよ』
ご機嫌なリッテンハイム候まあ酒の席での戯れ言であった。
『そうでございますな』

軍部では陛下下賜の品を叛徒共が略取した事に憤りを感じもしたが、内心はこのまま和平になるのではないかとの思いがあった為、同盟の横紙破りは歓迎されていたのである。

『これで懲罰行為ができますな』
『そうよ、あのままでは、我らが武勲をたてる機会が無くなるところであったわ』
『しかし陛下の御心で兵達の士気は上がっておる、ありがたい事だ』
戦馬鹿共は戦闘再開を喜ぶ。

庶民は、折角皇帝陛下がお慈悲を下さったのに、其れを踏み躙るとは恐ろしいことだと恐れる。
そして彼奴等は元々逃亡奴隷だから卑しんだろ、だから泥棒をするんだべ。
平等とか言ってるだが、捕まえた兵隊さんから、物を盗るんだから貧しいんだ。
等々が流れまくったのである。
庶民の感覚で同盟は宇宙海賊と変わらない存在と認識されていった。

庶民には皇帝陛下の評判は上々であった。

■ローエングラム領

ローエングラム領に移住した１４００万人の家族達はその町を見て歓声に震えていた、
完璧な都市計画による、道路と街路、公園、公共施設、学校、スーパーなど、
オーディンの貧民街には逆立ちしてもない物ばかりであった。
移住者は一軒一軒の家をあてがわれ、その前職業を考慮した仕事が与えられていた。

無事移住した帰還兵達の家族と帰還兵がのんびりと生活を楽しんでいた。
其処で各家庭のＴＶに皇女殿下のお言葉が流された。
皆緊張していた。

『親愛なる我が臣民の皆々、我が領地ローエングラムへようこそ、不便かも知れませんが、此よりこの地で元気に過ごして下さい』
老人などは手を合わせて拝んでいる。

此処では皇帝陛下と皇女殿下は敬愛の対象である。
今回の報道を見て多くの兵や家族が今更ながらに同盟に対しての憤りを見せ、
再志願への道を心に決めたのである。

■フェザーン

フェザーンでは、中継貿易していた酒の値段が一時的に暴落したのは、

同盟が酒をちょろまかしたのかと言う事が判り、
何人かの独立商人達が儲け損なったとじたんだ踏んで悔しがっていた。

放送自体同盟では流れないだろう、間違えなく検閲されるはずだ、
其れを利用して同盟の政治屋から利権の一部をちょろまかそうと考える者、
戦争が激化すればまた儲かると算段する者などがいた。

自由惑星同盟高等弁務官ラファエル・ラ・フォンテーヌは非常に慌てていた。
折角の帝国との蜜月が僅か数ヶ月で壊れてしまう、何処の馬鹿だ！
諜報員については仕方がないどちらも行っていることだ、其処を突けば何とか成るはずだ。

しかしお前等が抜き取った物は普段お前等が横流ししている物資とは物が違うんだ！
皇帝の財物だ、そんな物を盗めば皇帝の横っ面を張り倒したのと同じなんだぞ。
帝国じゃ皇帝の財物の横領犯は国事犯だぞ、お前等は其れを判っていない。
このままだと大変な事になる、ハイネセンへ早急に報告しなければ。

■自由惑星同盟　ハイネセンポリス　最高評議会　最高評議会議長　ディオニシオ・エンリケス

帰還兵を監視する為取りあえず惑星ネプティス、カッファー、パルメレントの警備隊へ編入をすると、統合作戦本部及び情報部から連絡が有った、

兵達は名誉の帰還として其れなりに優遇を受けたはずだ、
あれだけ我々が苦労したのだ、感謝されて当然なのに、
上官に対しての反抗や我々に対しての不平を言う物が居る、
ああいう者が諜報員の可能性が高、厳しく監視するべきだ。

一服後にフェザーンから緊急報告が入った、
慌てているのかフォンテーヌは挨拶も録にしない、
堅物の割には何を遣っておるんだ。

「フォンテーヌ君どうしたのかね？」
『議長大変な事が起こりました』
「自治領主でも死んだのかね、それとも皇帝が死んだか」
『冗談はよして下さい！』

「君その口の利き方は何だね！」
『帝国で大変な放送が流されたのです』
「ほう、それはなにかね？」
『放送を送りましたので見て頂ければ判ります』

全く何を慌てているのやら、彼は堅物で困る替え時か。
私のコントロールにおける人物に変えねば成らんな。
放送が始まると、各委員とも最初はせせら笑っていた連中も私もだが、
顔が引きつっていくのが判った。

救恤品を搾取したと言われても、そう言うこともあるだろう、
しかし帝国でも同じ事をするに違いない、
しかも民衆から搾取した物を再配しているだけで、何ら皇帝はしていないではないか。

恐らく搾取したのは末端の不心得者たちであろう。

諜報員とて、帝国も今回紛れ込ましているはずだ、
発見は未だ出来ないが、さらに厳しく取り調べをさせよう。

放送を見終わると、多くの委員が考え深くしているが、
一部委員は馬鹿にしたような顔をしている。
国防委員長は『その様な放送は戯れ言ですぞ、気にする事は無い』
と言ってきた。
他の委員もおおむね同じ意見のようだ。

フォンテーヌが大変ですという顔で私を見ている、未だ帝国から何
も行ってこないのだから、
慌てる必要はないのだよ。
此処は一つ活を入れてやろう。

「フォンテーヌ君、そんな放送を鵜呑みにしては駄目だよ、
プロパガンダだよ、我々は潔白だと逆に放送してやればいい」
『しかし帝国側から連絡が有った場合はどうなさるのですか』
「同盟と帝国は国交を結んでいないのだよ、国でもない同士が約束
事を守る自体可笑しいのではないかね」

『ではどうすれば、無視すればいい或いは事実無根だと突っぱねる
だ』
「本当にそんなことが通用すると・」
『フォンテーヌ君！黙りたまえ！！私が最高評議会議長なのだよ！
！』
「・・・・・・・」
『君もそろそろ疲れただろう、国に帰って孫の世話でもしたらどう
かね』

「・・・・・・・・・」
『まあそう言うことだ、くれぐれも帝国の言い分を飲まぬようにしてくれたまえ』

あの男は使えんな、やはり変えよう。

しかし問題はこの事が国民に知れたときだ、フェザーン経由の情報が流れる可能性が有る。
「情報交通委員長」
「なんでしょうか？」
「今の話だが、何れフェザーンからこのニュースが流れる可能性が有る」
「確かにあの守銭奴共なら遣りかねませんな」

「其処でだ、流れる前に此方の都合の良い情報を報道しようと思う」
「でどの様な物を流しますか」
「オリベイラ教授に発表文は作成して貰おう、早急にだ」
「判りました直ちに連絡を入れましょう」
「暫く休憩にする」

・
・
・
・

「お呼びだと聞きましたが」
「オリベイラ教授実はこういう事があってな」

「なるほど、其れならば簡単ですな。
救恤品については既に軍刑務所に居る物を適当に罪を付ければ宜しいかと、
諜報員については、知らぬ存ぜぬ帝国側のでっち上げだと声だかに発

表し、
適当な人材を帝国側の諜報員として処罰すればいいのですよ、
所詮国家有っての国民です、犯罪者の有効的な使い方ですぞ」

この老人は恐ろしいこと平気で言う、しかしこれは良い案だ。
他の委員達は殆どが肯定の首を振る。
そうすることとしよう。

■フェザーン　自由惑星同盟高等弁務官オフィス　ラファエル・ラ・フォンテーヌ

連絡を負えて私は悲壮感に包まれた、あれではどうしょうもない。
もう止め時か、悔しいことだ。

秘書が帝国側の弁務官シューレンブルク伯から連絡が有った、
案の定、伯は今回の事を厳しく指摘をしてきたが、
自分の無力を感じながら伯に事実無根であり、逆に帝国側が諜報員を送り込んだと、
指摘し、結局その後無言で終わった。
もう疲れた、やはり辞任しよう。

宇宙歴７８８年　帝国歴４７９年６月２３日

この日、自由惑星同盟政府から、帝国が捕虜に対して虐待を行っていること、
其れを棚に上げて、同盟に対しての事実無根の報道を行い、
帰還兵を洗脳し叛乱や破壊活動を企んだことなどが報道された。

同盟市民は驚きを持ってその報道を聞いた、
フェザーン商人が違う情報を持ち込んだが、
その情報を報道しようとした動きは、政府による検閲で禁止された、
それでも流そうとする記者は憂国騎士団により襲撃を受けた。

最早自由惑星同盟の自由とはいったい何なのであろうか？
それは後世の歴史家に委ねるしかないのであろう。

帝国暦４７９年６月２６日

■オーデイン　ノイエ・サンスーシ　小部屋　　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

　叛徒の放送をフェザーンから入手し見てみたが、
こりゃ酷い無茶苦茶だ、あの長い名前の爺さん辺りが作ったのかもね。
みんなそう思っいるようで苦い顔です。
けど此処までしらを切るとは流石同盟だ、権力欲は何よりも強いね。

ブラウンさんとかリッテンさんとかが可愛く感じるよ、基本彼ら単純だから。
でっち上げられた偽諜報員の方南無です、怨むなら同盟政府を怨んで下さい。

ケスラーのターン。
「今回我が方の放送により起こった各勢力の反応ですがこのようになります」
資料を出します。読んでくれたら楽なんですけどね。

「ハハハ相変わらず儂は馬鹿にされておるな」
「そうですな、私も馬鹿にされております」
「昔から卿と共に馬鹿にされておったからな全然平気じゃ」
「リッテンハイム候もお戯れが過ぎますな」
「あの者ととて夢を見たいのであろうすておけ」
「ですな」

「しかし最初４００～５００万だと思っていた移民が１０００万を越えるとは驚いたの」
「はっ結果的に薬が効きすぎたようで、皆社会秩序維持局におびえておりますので」
「まあその分施設はあるわけだし、大丈夫でしょう」

「軍部に於いても今回の陛下の詔は好意的に受け止められております。
兵の士気が非常に上がったそうです」
「良いことですよね」
「そうじゃな」

「諜報員数は欺瞞ですね」
「良くおわかりで」
「ええ安心させて元から居る諜報員諸共潰す算段ですね」
「その通りです」
「ふむふむ」

てことは鮎の友釣りじょうたいだね。

「しかし叛徒は見事にしてくれましたな、テレーゼ様の策略を返しきっております」
「まあ仕方がないですね、元々帰還兵と臣民の支持を得る為の策で

すから、
叛徒の不和は当たれば儲けモノですから、何時までも引きずっていて仕方ないですよ」

「調べによると叛徒共の中でも疑問に思うモノが居るようです」
「それはそうでしょうね、利益を受けたのが居るわけだから隠し通せる訳がない」
「何れ矛盾が生じるやもしれんな」

「まあ気長に待ちましょう」
「全くです」
「しかし自由惑星同盟と称しているけど何処が自由なのかしら、判らない連中よね」

「名前負けしているのを良くありますんじゃ、帝国貴族なんぞ名前負けだらけですぞ」
「ハハハハ、良い話じゃな」
「まあ確かに彼奴とか彼奴とかはそうですね」

「これで短い休日は終わりじゃな」
「ですね、またぞろ戦闘が始まりましょう」
「そうですの」

第四十八話　ワイン飲み逃げ（後書き）

次回は第四十九話　新婚さんいらっしゃーい（桂三枝風に）

第四十九話　新婚さんいらっしゃーい（前書き）

やっとＵＰ今日はほのぼのですが、一部修羅場有り。
タイトルを読むときは桂三枝風に。

第四十九話　新婚さんいらっしゃーい

帝国暦４７９年６月３０日

■オーディン　帝国軍士官学校　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

今年も来ました、卒業式今年はミッターマイヤーが卒業です。
キスリング、ミュラー、フェルナーは3年生に進級です。
さらに名簿を見ていて驚いた、ブリュンヒルト第４代艦長ザイドリッツが４年に進級です。

此はスカウトですね、何れ帝国軍総旗艦の艦長をする方ですから超有望株です。
ミッターマイヤーは流石クラスヘッドです。

相変わらずエヴァちゃんとはラブラブのようです、
最近ケスラーから聞いて知ったのですがエヴァちゃんのお父様が生きていて、
今回帰還したらしいのですが、病気だったので暫く入院していたそうです。

話を聞くとエヴァちゃんが社会秩序維持局により狙われるからと、
どっかへ身を隠そうとしていたらしいのですが、
ケスラーが、先日来の事件や情報を伝えました。いつの間にやら、
子爵の孫にされていたことにはビックリするとともに、安心したそうです。

ただし自分の生還を知らせるのはもう少し後にしてくれと言われた

そうです。
病気の自分を見せたくないそうです。

ただケスラーとしてもエヴァちゃんが既に出来ちゃてる事は言えなかったようです。
そりゃそうだよね、帰ってきたのに娘が１５歳で子持ちになりつつある。
お父さん怒っちゃうよきっと、疾風ウォルフ当たりすぎです。

種無しじゃないんですか貴方は、艦隊戦では斉射3連とか叫んでますが其れですか―？
もしかするとカプチェランカとかで宇宙線とか浴びすぎて種無しになったんじゃないか？
ロイも子供出来たけど1人だけだったし、あり得る話だ怖いぞ。

そうなるとキルヒアイスも種無しになるかも知れないｗ
アンネローゼ涙目。

おっと、校長の訓辞が終わったぞ、いよいよ私の番だね。
恩賜の短剣授与だよ。

ミッターマイヤーからだね、ミッターマイヤーがにこやかにそして秘密は守りますって感じで静々と壇上に上がってくるよ、短剣渡して「ミッターマイヤー候補生、これから帝国為に頑張って下さい」
「御意お任せ下さい」

演技旨いですよ、まあ明日、爺様の屋敷で結婚式を行うので少しにやけてますよ。
無論私も参加します、二次会と言うか表向きの結婚式は明後日、同期連中とするらしいが其れは流石に参加不能ですよ。

極秘結婚式は、私、カロちゃん、ミッターパパ、ママ、爺様、ケスラーそれと宅配部隊の連中、
そしてサプライズゲストエヴァパパです、パパには後で知らせるようですが、
どうなるか、エヴァパパは単にエヴァちゃんとの再会記念だと教えているそうですから。
修羅場が起きるかも知れません。

そう言えば、ケーフェンヒラー爺様は心臓病で安静なので半年ほど入院だそうです、
会うのは今暫くかかりそうですが楽しみですね。

卒業式終わりミッターマイヤーは胴上げされていますが、
日頃の行いが良いので普通の胴上げです、
ロイみたいにプールへ放り込まれることもありません。
そう言えばロイなにしてるんでしょうね。

■イゼルローン要塞　　オスカー・フォン・ロイエンタール

ハッハッハッークション、ズルズル、うむ風邪でもひいたのであろうか、
背中から悪寒がする。
今日は大人しく寝るとしよう、平和が一番だ。

帝国暦４７９年７月１日

■オーデイン　グリンメルスハウゼン子爵邸

いよいよ待ったミッターマイヤーとエヴァちゃんの結婚式です。
エヴァちゃん大当たりで、４ヶ月だそうです。少々脹らんできてます。
爺様の屋敷の大広間で式典です。

ミッターパパとミッターママには助けてくれた子爵が爺様だと伝えてあるので心配有りません。
あとは身内ばかりなので、何ら問題はありません。
カロリーネも参加してます、他の子は色々煩わしくなる可能性が有るので呼んでいません。

秘密を守るには最低限の人数で秘密を共有するのが普通ですからね。
それにミッターマイヤーの関係者じゃ無いですから仕方がありません。

今日はミッターパパとママには私の正体を晒せないので、ウイッグで変装しています。
普段の黒栗色の髪から金髪ストレートに変えています。
姿的にはエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルぽくしています。

偽名はエヴァンジェリンでは紛らわしいので、ヴァネッサ・フォン・リヒトホーフェンと名乗ってます。
立場的にはグリンメルスハウゼン子爵外孫と言う立ち位置になっております。
方便だけどエヴァちゃんと同じ立ち位置ですね。

ミッターマイヤーとエヴァちゃんの一生に一度の結婚式なので、
私が特別に頼んでベールガールをさせて貰います。

２人とも恐れ多いと遠慮してますが、是非お願いと頼んで決行しました。

大広間には参列者が並んでいる中、私たちは廊下で準備万端です。
ミッターマイヤーもエヴァちゃんも緊張して居ます、まあ私もですが。
執事とメイドが『準備が済みました』と言っていよいよ入場です。

いやはや流石貴族です、楽団も居ます。
生の演奏でウエデングマーチが流れます。
その演奏の中扉が開き入場です。

ズラッと並んだ参列者。
ミッターマイヤーとエヴァちゃんが、
宅配部隊の苦労した人達も呼びたいと言う事で来てます。

箱に入ってケスラーの身代わりをした、デリンガー軍曹緊張してますねカチカチです。
箱を担いだ、ランセル准尉は２０代の綺麗な女性です。
今日はみんな軍服じゃなくタクシードとドレスです。

ケスラーがビッシッと弁護士のように見えますね、
まるで結婚見届け人に見えるますね。
爺様は相変わらずの韜晦ぶりで眠そうに見えます。

カロちゃんはにこやかに綺麗なドレス姿です。
ミッターパパはもう凄く緊張して居るのが判りますね、
自分が結婚するみたいです。

ミッターママは涙を浮かべながら喜んでいます。

普通だとヴァージンロードを親に手を引かれて行くんですが、
人数が人数だし、それは明日やるからベールガールだけで入場です。
拍手と共に簡易的に作ったわりには、立派すぎる祭壇の前まで行きます。
其処で私の役目はおしまいでカロちゃんの隣りに立ちます。
そして結婚見届け人の前に立ち、2人で向き合う形になるのですが、
此処でアクシデントエヴァパパが未だ着いていません。
さあどうしようかと言うときに、入り口のドアが活きよい良く開きました。
おードラマみたいだ、
よく見るとタクシードを着せられた様に見える中年の男性が花束を持って入ってきました。
執事の声が聞こえます、エヴァンゼリン様お父上ご到着でございます。
エヴァパパは取りあえずお辞儀だけはして、ズンズンとエヴァちゃんの所へ来ます。
エヴァちゃんが驚き始めました、ミッターパパママも驚いています。
エヴァちゃん涙が出始めました、そして『お父さん』。
エヴァパパは『エヴァンゼリン』。
感動ですね良い日です。
無言で抱き合います、花束は下に置いてますが気にしないですね。
暫くしてエヴァちゃんが、『お父さん私結婚します』と言いました。
エヴァパパが『エヴァンゼリン無事で何よりださあ帰ろう』

えーと完全に現実から逃げる気満々ですよ。
ミッターマイヤーが我に返り近づいて
『お義父さん、初めましてウォルフガング・ミッターマイヤーと申します。
エヴァンゼリンさんと結婚させて頂きます』

エヴァパパ唸ってますってか現実逃避か？
『貴様にお義父さんと呼ばれる筋合いは無い！』
おー良くあるシーンです、みんな唖然としています。

エヴァちゃんが『お父さん私のお腹には彼の赤ちゃんが居るのよ！』
ビックリ衝撃発言でパパ固まってます。
ミッターマイヤーが『エヴァンゼリンを必ず幸せにするので娘さんとの結婚を認めて下さい！』

いやー爺様寝てるんじゃない？この修羅場でコックリコックリしてるよ。
カロちゃんもなんかねーという感じで私と頷きあいます。

ミッターパパママも駆け寄って、
エヴァパパに『お嬢さんをお預かりしたにもかかわらず、このような仕儀となり誠に申し訳ありません』と言ってますが、パパさん、ママさん、２人して結婚への道を造ったのはあなた方でしょうが（笑）

ミッターマイヤーに責任押し付けましたね。
エヴァパパ正気に戻った、エヴァちゃんとミッターマイヤー見ながら、
エヴァちゃんに『無理矢理じゃないんだな？』

『ウォルフ様が居なければ私は大変な目に遭っいたでしょう、
私はウォルフ様も事を愛しています、お父さん結婚を認めて下さい』

エヴァパパ考え込んでから、
『ミッターマイヤーよ、娘を絶対に不幸にしないんだな』
『しません一生共にあり慈しみ続けます』
感動のシーンですね。

『判った認めてやるしかし一発殴らせろ！』
おー凄いことに。
『お父さん』

ミッターマイヤー殴られるようにエヴァパパの前に立った。
エヴァパパえーと其れはパンチではなくキックですが。
お尻に蹴りを入れるとは凄い音だ。

ミッターマイヤーも痛がってる。
エヴァちゃん心配そう。
エヴァパパ憑き物が落ちたみたい。

『すっきりした、ミッターマイヤー夫妻エヴァンゼリンを育てて頂き本当にありがとうございました、
エヴァンゼリン幸せになるんだぞ、
ウォルフガング殿エヴァンゼリンを宜しく頼むぞ、泣かしたら承知せん』

そう言うと参列者全員に頭を下げてきました。

爺様がそろそろ良いじゃろうと起きました、やっぱ寝たふりじゃん。

エヴァパパが花束をエヴァちゃんに渡してましたが、
あのーーーこのフラグ消えたんじゃないんですか？
真っ黄色の薔薇・・・・・・！！
花言葉教えろよ花屋！！

私がある一定の地位を得たら花屋に必ず花言葉表設置を義務付ける
ようにさせたいとおもったです。

落ち着いたので、式再会です。
エヴァパパも並びました。
結婚見届け人の宣言の後。

私が再度出番です、交換用指輪を持って結婚見届け人の前へ、
その指輪をミッターマイヤーとエヴァちゃんに渡します。
２人とも凄く感動してくれてます。

そして指輪の交換が行われました。
そしてキッスです。
これで晴れて夫婦です。

拍手喝采です。
エヴァパパ大泣きですよ。
ミッターパパママも泣いてます。

万歳です、ミッターマイヤーとエヴァちゃん末永く幸せになって下
さい。

その後食事をしながらの懇談会です。
其処で衝撃の発言がエヴァパパから成されました、
『エヴァンゼリン、お父さん再婚するかもしれん』

えーーーーーみんな驚いてます。
いつの間にルッツみたいな事ですか？
話を聞くとルッツ状態でした。

この世界適齢期の男子の戦死が多いので女余りなんですよ、
しかも男尊女卑ですから、働いてる女性は敬遠されがちなんですよ。
その為に看護婦とかは適齢期過ぎたお局様がおおくなるんですね。

原作のルッツは見事に引っかかった訳なんですね。
話によると、病院入院中に良くしてくれた看護婦さんと良いムードになって、
付き合い始めたそうです、向こうも結婚には乗り気で今日エヴァちゃん言おうとしていたそうです。

エヴァちゃんは喜んでます、『お父さん絶対逃がしちゃ駄目よ』って言ってますね。
良い日です。
エヴァパパは爺様に非常に感謝して何度も頭を下げてました。
パパは船乗りで少佐だって。

和気藹々と時間が過ぎていきました。

終了後にミッターマイヤーとエヴァちゃんが何度も私に頭を下げるので、
「ウォルフ、エヴァ、私たち友達でしょう、楽しいからいいのよ」
て言ったら感動されてしまいました。

今日は家へ帰って明日に備えるそうです、エヴァパパも連れて行くそうです。

■オーディン　ライニッケンドルフ地区　　ウォルフガング・ミッターマイヤー

感動的な結婚式と再会が終わり、俺達は家に帰ってきた。
お義父さんがご無事でよかった、尻を蹴られたのは痛かったが、
テレーゼさまのお陰でエヴァ共々一生忘れない事になった、

最後は緊張した俺達にお友達だと言って頂いた、
あれほど感動的なことはない、エヴァ共々一生お仕えしたい。
そして生まれてくる子供にも語り継ぎたいモノだ、

明日は御義父さんにも参加して貰い仲間連中との結婚式だ、
明日も修羅場じゃないよね。

■オーディン　ライニッケンドルフ地区　　エヴァンゼリン・ミッターマイヤー

人生の中で今日ほど幸せだった日はありませんでした。
テレーゼ様が私たちの結婚式をしてくれる、なんて恐れ多いことなのでしょう。
しかもベールガールをして頂いて指輪まで運んで頂いた。

その上恐縮する私たちに友達だからと言って頂いたのです。
此ほどのことがあるでしょうが。
恐れ多い事なれど子供の名付け親になって頂きたいモノです。

さらに12歳で戦死したと伝えられえていた父に会うこと出来まし

た。
ウォルフ様とのやり合いを思い出すと笑ってしましますが。
しかしお父さんも結婚ですか、幸せになって欲しいですね。
ウォルフ様愛してますよ。
テレーゼ様本当にありがとうございました。
そしてお父さんお帰りなさい。

第五十話　それぞれの休日

帝国暦４７９年7月5日

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　ベーネミュンデ侯爵邸　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

本日は朝からお父様とお母様と三人で朝餉を取っています。
ミッターマイヤーの結婚式から早5日、2人は宜しくしているのでしょうね。

お母様もお父様も終始にこやかで、
このまま行くけばベーネミュンデ侯爵夫人事件は起こりませんね。
てか私が起こさせませんよ。

しかし侍医がグレーザーじゃないんですよね。
調べたのですが、この頃未だ侍医になれる地位じゃないみたいですね。
まだオーディン帝国医科大学の准教授ですね。

まあ奴が来るようなら危険なことを母様に囁く可能性があるので断固拒否ですね。
ブーゲン何とか大尉とかオカマ憲兵クルムバッハ少佐とか黒マントとかが出てきますからね。
あからさまに怪しすぎです、調べた方が良いのかも知れませんね。

食事の後はいつものように、お勉強に出かけます。
みんな段々大人びてきています、噂がすごいですね。
特に後宮寵姫の噂が出まくります。

今日はどんな話がでるやら。

その前にお父様に私が考えた新型戦艦のラフスケッチを見せました。
ブリュンヒルトのような超弩級目立ちがり的戦艦じゃないですよ。
あの姿、なんかオウムガイに似てませんかなんかいやな形です。
お父様、面白いから持って帰るそうです。
無論お母様が午後からのお茶会の話をしている最中に渡しましたよ。

そうそうミッターマイヤーと結婚式の準備中に話したとき聞いたのですが、
今回の救恤品下賜と俘虜交換について士官学校でも大変な話題になったそうです。
門閥貴族出身者は、父様の気まぐれでしてるんだろう。
平民なんぞ放っておけばいいと言うのが多かったそうです。

それで話の種に上がるのは、平民以下の生活をしていた伯爵夫人の弟が捕まった時の為に、
伯爵夫人が閨で囁いたんだという噂が流れてるんですって。

爺様の手のモノが流してたりして。
あり得そうな気がするのは変でしょうか。

逆に最前線に立つ、ミッターマイター達平民や下級貴族達は、
今回の父様の行為を非常に頼もしく思ったそうで、
卒業パーティーでもその話題が上がり、

家族とかも父様に万歳をしていたそうですから。
在校生も軒並み好意的に感じているそうです。
良い兆候ですね、ラインハルトは株を落としまくりで、父様はあげまくる。

門閥の支持はまあしょうがない、追々首根っこ捕まえれば良いわけですからね。

さて時間ですいきますか。
お母様にお父様にご挨拶の後出かけます。
「お父様お母様、言って参ります」
「テレーゼきとつけるのじゃぞ」
「テレーゼいってらっしゃいませ」

■オーディン　ライニッケンドルフ地区　ミッターマイヤー家　ウォルフガング・ミッターマイヤー

エヴァと正式に結婚して5日目。
んー幸せだな、朝起きるとエヴァが隣にいる風景、
しかも俺の子もエヴァの中でスクスクと育っている。
此ほどの幸せが他にあるだろうか。

しかし10日には去年から始まったイゼルローンへの遠洋航海が始まる。
エヴァを残して半年も出かけるのは不安だったが、
親父やお袋もいるし、御義父さんも居るので安心できる、

テレーゼ様は俺だけ遠洋航海を免除するようにしてくれると仰って下さったが、
エヴァが俺に行ってきなさいと背中を押してくれたので行く事に決めた。
テレーゼ様とエヴァには感謝している。

テレーゼ様がイゼルローンへ行って、

オスカー・フォン・ロイエンタール中尉という人物に会ったら、
気の毒な人だから優しくしてあげてねと仰った。

ロリエンタール事件自体は知っていたが、
内容を聞くと確かにロイエンタール中尉は被害者といえよう、
そのために疎外されているらしく、イゼルローンから帰ってこないそうだ。

テレーゼ様はご自分の行動がロイエンタール中尉を傷つけたとお気になっているそうで、
俺にそのことを打ち明けてくれたのだ。
会えるかどうか判らんが会えたらロイエンタール先輩と酒でも飲んで話してみよう。

ただテレーゼ様が自分の悪口が出ても決して怒らないで下さいねと、
そして、絶対に私から聞いたとか言わないで下さいねと仰ったのは、
なんと他人を思う心のお優しいお方なのだとエヴァ共々感動した。

さて朝食だエヴァそろそろ起きなきゃね。

■オーディン　テンペル　―　シェーネベルク　ワーレン家
アウグスト・ザムエル・ワーレン

今日もいい天気だ、暑い快晴に何処かへ出かけたくなる、
一年前は新婚早々遠洋航海とイゼルローンへの研修そして叛徒との戦闘と忙しかったな。
しかしここの所何もなく平和でいい、今年も新人達は遠洋航海に出かけるそうだ、

ご苦労な事だが、実績を積むには良かったと思っている。
まあ俺の場合はいきなりだったから、恨み言もあったがね。
しかしこの所皇帝陛下の為さり様は俺たち兵士に良い方向に向かっている。

俘虜を罪を問わず取り返すとは並の度胸では出来ないモノだ。
同僚連中も同意見が多い、
これなら戦場へ行って万が一でも死を選ばずに何とかなると考えられるだろう。
もっとも戦わずに逃げる奴が増えるかも知れんがな。
まあそればっかりは、その人間の素質だから仕方あるまえ。

さて、リーザ今日は何処かへ出かけよう。

■イゼルローン要塞　　ロイエンタール官舎　　オスカー・フォン・ロイエンタール

5日前に風邪をひいて以来体が怠くて寝込んでいる。
一人暮らしとは此所まで侘びしいモノかと実感してきているな。
しかも誰もまともに扱ってくれん。

一昨日なんぞ鶏冠頭(ビッテンフェルト)がやって来て頭が痛いにもかかわらず、
あの大声で『風邪なぞ、気合いで直せ!だめなら酒でも飲んで寝ちまえ!』
と大量の酒を持ってきて散々呑ませられ、奴も散々呑んで帰りやがった!

しかもだ酔って気分が最悪な俺をそのまま放り出して帰りやがった、
部屋も汚れたままじゃないか!
おかげでさらに風邪が悪化して今ひどい状態だ。

ん？誰か来たようだ。また鶏冠頭か、いい加減にしろ！
「ごめん下さい、ロイエンタール様大丈夫ですか？」
ん、女の声だ、レテーナじゃないのか？
寝室へ来て、俺の惨状を見てレテーナが驚いた顔をしている。

「ロイエンタール様、大丈夫ですか！」
「あまり良くはないがな」
可笑しい、レテーナだけには何故か素直になれる自分が居る。

「レテーナどうして此所へ？」
「ビッテンフェルト様からロイエンタール様が寝込んでいらっしゃると聞いて仕事休んできました」
「鶏冠頭め余計な事を」

「ひどい状態です、私に任せて下さい、ロイエンタール様が直るまで看病しますから」
「仕事はどうするんだ？」
「ママが私の気の済むままにしなさいって言ってくれたんですよ」

ユリアーネか、気を効かせすぎだ。
「さあ片付けちゃいますね、まずは汗まみれのパジャマを着替えましょうね」
普段見せ慣れているのに、何故かこういう時は恥ずかしいモノだ。

「自分で着替えるからいいぞ」
「いいえ、ふらついてるじゃないですか、だめです」
押し切られてしまった、弱い俺を見られるのが非常に恥ずかしい。
体を蒸しタオルで拭かれ、着替えさせられ、新しいシーツのベット

に寝かされた。
レテーナはリビングの掃除をしているらしい。
数時間たっただろうか、夕食を作って俺に食わせてくれた。

そのまま帰るのかと思いきや、泊まっていくという。
よせそんな体力は今無いぞ！
違うのか本気で看病のために泊まり込みをするのか、

「ロイエンタール様直るまでは一緒ですからね」
これはまずい、誰かに見られたら何を言われるか、早く直そう。

■イゼルローン要塞　　ビッテンフェルト官舎　　フリッツ・ヨーゼフ・ビッテンフェルト

いやはや、あのロイエンタールが風邪とは驚いたぞ。あいつでも風邪をひくんだな。
以前俺が風邪をひいたときには『ビッテンフェルト卿も風邪をひくとは天変地異の前触れか』とか言いやがたからな、今回は俺が笑いに行ってやった。

酒と肴を大量に持ち、奴の官舎へ行ったところ、
相当具合が悪そうだったから、酒をしこたま飲まして寝かして帰った。
翌日も出て来ないからさすがに心配になって奴の彼女へ連絡して行って貰う事にしたのだ。
俺も優しいところがあるだろ。まあロイエンタールよ早く良くなれよ。

そういや、最近は前線部隊の士気が高くて良いな、

皇帝陛下のおかげだ、おかげで戦いやすくていい。
功績あげて自分の部隊を早く持ちたいモノだ。

■オーディン　帝国軍幼年学校　ジークフリード・フォン・キルヒアイス

ラインハルト様が男爵に叙爵され早5ヶ月、我々の周りが少ずつではあるが変わり始めていた。
自分も父が永年勤続者叙爵とやらで帝国騎士に成ったため、騎士階級に編入された。
ラインハルト様はたいそう喜んくださり『キルヒアイスこれでお前を平民と馬鹿にする奴らに何も言わせないぞ』と言って下さった。
自分としては帝国騎士に成ったとでアンネローゼ様との間の垣根が一段低くなった気がしてそれが嬉しかった。

幼年学校生は今までラインハルト様を爵位もないと馬鹿にしていたが、
男爵に成られてからは、アンネローゼ様が強請ってラインハルト様に爵位を貰ったと言い始めている。
許せない仕業だ、ラインハルト様もお怒りだ、自分もはらわたが煮えくり返る思いだが、
アンネローゼ様が喧嘩をしないでと仰るので我慢している。

しかしラインハルト様がいつまで我慢できるか、そして我慢が限界に達したとき、
自分では止められないだろう、なぜなら自分も一緒に参加しているはずだから。

■オーディン　　帝国軍幼年学校　ラインハルト・フォン・シェーンヴァルト

最近あの男の慈悲の話が多いが、
今まで散々最悪な罪悪を施してきた男がいきなり慈悲に目覚めたところでなんの意味があるのか、
ばかばかしい事だ。
俘虜交換はしてやられた、俺がいずれやろうと思っていた事だった。
あの男がそんな事を思いつくはずがない、誰かが入れ知恵したのだろう。

俺の敍爵後学校の生徒の俺を見る目が変わっていった。
今まで疎遠にしていた帝国騎士の連中が時々媚びを売るように近寄ってくるようになった。
俺の男爵位に媚びているらしい、浅ましい奴らだ。
役立たずの癖にそういうことだけは、敏感な唾棄すべき輩どもだ。

爵位のある連中は、今まで以上に俺と姉上そしてキルヒアイスを馬鹿にしてくる。
何が姉上がお強請りしただ、そんなわけがない！
何度殴ってやろうかと思ったが、姉上との約束を思い出しとどまっているが、
そろそろ限界に達しそうだ。

今度姉上の悪口を言ったら殴り倒してやる！

第五十一話　趣味で造ろう（前書き）

お待たせしました、疲れで昨夜ＵＰ出来ませんでした。

第五十一話　趣味で造ろう

帝国暦４７９年7月7日

■オーディン　グリンメルスハウゼン子爵邸　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

日本であれば七夕だったこの日、短冊に願いを書いてじゃないけど趣味と実益で欲しい物があるので、
爺様達に頼んで探して貰うことと作ってもらう事にしました。
いやー皇女って良い身分ですね、比較的自由に金使えますから色々企むには最高ですね。

書道と水墨画がやりたいのでその品物を探すか作れる職人を捜して貰います。
必要なのは、まず和紙です。
クワ科コウゾ、ジンチョウゲ科ミツマタなどの木を探して貰い、
其れから紙漉のやり方を詳しく書いた資料を渡します。

次に墨です。
これは菜種油や松脂を燃やして出た煤を集めて、
鹿とかの膠と香料に混ぜて型に詰めて型から抜いた後で乾燥させた物です。
此も作り方を詳しく書いた資料を渡します。

次いで筆です。
鹿毛、貂毛、羊毛、狸毛、馬毛などを集めて、絵筆状にして竹の筒に止めた物です。
此もまた制作方法を詳しく書いた物を渡します。

最後に硯です。
此は粘板岩のなかで綺麗な物を集めて、硯状に掘って貰います。
此も形を確り作ってもらうように資料を渡します。

全部昔の資料から想像補填して作った資料だとして頼んであります。

他に探して貰う物は日本刀です、此がないと落ち着けないんですよね、
刀身長７４ｃｍぐらいな物を探して欲しい物ですが、
なんと言っても２０００年以上前の品ですからね、残っているか自体があやふやですね。

各地の博物館美術館か貴族の邸宅にでも無いものですかね。
貴族の家には西洋剣とかがあるのはＯＶＡで見て知ってるんで持っている可能性もあるんですがね。
原始人に会ってみたいですね、エリザベートは気絶してましたが剥製一杯あるし、
武器も山ほど持ってそうですから、面白そうですし意外といい人だと思いますよ。

続いて庭園を作ってもらう予定です、
１月中に計画を父様に持っていき許可を受ける予定が、
ミッターマイヤーとエヴァちゃん事件で有耶無耶に成ったので最近再度頼んでＯＫが出ました。

そう言えばあの馬鹿小役人は、超弩辺境の宮内省管理地の下っ端職人にされたそうです、
とんでもない寒冷地だとかマイナス３０度の世界らしく、
バナナで釘が打てるそうです、ざまー見ろ！

さてそれでノイエ・サンスーシの一角に日本式庭園を作ってもらうのです、
総面積は６６平方キロメートルもある土地なので１平方キロほど頂き其処に建設して貰います。
私が作ると憶測を呼ぶので、爺様が献上すると言う形で作ってもらいます。

所が宮廷のお抱え庭園技師じゃバロックだロココだの庭園は造れるんですが、
日本式なんぞ作れるはずがないので私が細々と教えなければ成らないのですが、
正体ばれるので教えられないんです。

其処でミッターパパが造園技師なのでお願いしようと思い、
爺様に頼んで今日来るように連絡を入れて貰いました。
今日も正体を誤魔化す為にウイッグで変装です。

おっ来たみたいですね。
ミッターパパが執事に案内されて懇談室へやって来ました。

「ミッターマイヤー殿今日はよう来て下さった」
「グリンメルスハウゼン子爵様御召しに預かり光栄でございます」
パパさん畏まりですね。
「ミッターマイヤー殿そう堅くならずにお座り下さい」
ナイスケスラー

「それに余り畏まった言葉時使いは無用ぞ」
「其れでは」
「ミッターマイヤー殿今日呼んだのは、そちに庭園を作ってもらい

たいのじゃ」
「成るほど庭園ですか、しかしこのお屋敷には良い庭園があるようですが？」

「そこじゃ、今回造るのはノイエ・サンスーシに儂が献上する庭園なのじゃ」
「ノイエ・サンスーシでございますか、皇帝陛下に御献上なさる庭園を私が？」
「そうじゃそちがノイエ・サンスーシに庭園を造るのじゃ」

パパ困惑してますね、其れはそうですよね。
普通ノイエ・サンスーシの庭園は其れなりの帝室御用達が造りますから、
異例の行為ですよ、まあ爺様が造る分には老い先短いので好きにさせてやれと、
父様がリヒテンラーデ侯に言うんですけどね。
この台詞はかなり使えるのですよ。

「恐れ多い事ながらノイエ・サンスーシには専属の庭師がおりましょう」
「うむそうなのじゃが、皆杓子定規で一定の様式からしか造ろうとせんのじゃ、
今回造るのは、嘗て地球の東方で造られていた庭園なのじゃ、
造る者がもう既におらず資料でしか判らん、其れをそちに作ってもらいたいのじゃ」

「なるほど其れで私を」
「そうじゃどうじゃ職人魂が燃えんか？」
良い発破のかけ方ですね。

「そうですね、面白そうではあります。
しかしお気に召すかは判りません」
「いやそちの腕はよう聞いておる安心しておるのじゃ、
それに儂が献上する分には陛下も全て任してくれるのじゃ」

「そこまでの信用をいただき断るわけにはいきませんな、息子達もお世話になっておりますから」
よっしゃ、パパＯＫでましたね。

「其処でじゃ、詳しいことは孫のヴァネッサに聞くように」
「お孫さんですか、未だ１０歳にも成らないのでは？」
「ホホホ、ヴァネッサは地球に造詣が深くてな、庭園も孫の提案なのじゃよ」

さて私の出番です。
「ミッターパパ、こんにちは、今回は宜しくです」
「ヴァネッサ様ご機嫌麗しく」
「ミッターパパ、今回は庭園を造っていただけてありがとうございます」

「いえいえとんでもございません」
「造って貰う庭園は地球時代の日本という地域にあった、日本式庭園と言うモノです。
これは風景の一部を切り取るような感じで自然風に山や川や池を造って四季の木々を植え其れを見ながら心を落ち着かせる庭園なんです」

「なるほど、バロックやロココとは違うわけですね」
「そうです、箱庭を愛でる感じで自然を愛でるわけです」
「なるほど造り甲斐がありますね」

乗ってきたようですね。
「古い資料で日本式庭園を見つけて此こそ造るべきだと思いまして、貴方にお願いしたいと言う訳なのです」
「此処まで頼まれた以上全力を尽くしましょう」

「日本式庭園というのは、回遊式林泉庭園と枯山水というタイプがあり、
両方をそれぞれ造ってもらいたいのです」

「どの様な方式ですか？」
「回遊式は真ん中に池を造り中之島や山を造り、
池に突き出す形で東屋という小さな平屋を造ります。
山や陸には四季折々の草木を植え竹林や松林を造ります。
山には滝を造り、其処から流れる川が池に注ぐようにしてます。
詳しくは資料に書いてありますのでお願いします」

「なるほど、バロックの静に対して動と言うわけですか」
ケスラーナイス！
「ケスラーその通りです」
「なるほどそう言われればそうでございますね」
「そうです」

「で枯山水というタイプは砂と石だけで庭を造るのです」
「其れは想像できません」
「絵で書くとこんな感じです」

一応絵を描いて有るからね。
「なるほど、砂で波を表し石で島を表すわけですか」
「当たりです、その様な物もお願いします」

「判りましたこの資料を持ち帰り研究いたします」
「よろしくお願いしますね」
「ミッターマイヤー殿今日はすまんかったの」

「グリンメルスハウゼン子爵様、この庭園私の全力を尽くして完成させます」
「頼むぞしかし根を詰めすぎにようにな」
「はっ」

よっしOKのようですね、此で日本庭園が復活できるはずです、楽しみなことです。

■オーディン　ライニッケンドルフ地区　　ロベルト・ミッターマイヤー

家に帰り今日のことを考えていた。
数日前に息子と娘の事で大変お世話になった子爵から今日来てくれと連絡が来ていったい何が起こったのかと心配したが杞憂だった。

私がノイエ・サンスーシに庭園を造る。
しかも既に忘れ去れれた、庭園を復活させるのだ。
此は職人魂メラメラと火が付いた。

皇帝陛下に御献上する庭園を私が造る、
最初は恐ろしさが有った、しかし話を聞くうちにやってみたいと言う心が大きくなった。
私が新たな流れを造る、此こそ遣るべきだ。

妻達には子爵邸の庭園を造るとして、秘密を守ることにした。
無用な心配は掛けたくないからな。
しかし楽しみになってきた、孫と共に成長する庭園だからな。

第五十一話　趣味で造ろう（後書き）

庭園や書道についての説明はテレーゼのうろ覚えからですので、間違えていても勘弁して下さい。

第五十二話　エル・ファシル真の英雄・前編（前書き）

やっとエル・ファシルです。
元々二十話ぐらいだったのが此処まで伸びました。

第五十二話　エル・ファシル真の英雄・前編

宇宙暦７８８年　帝国暦４７９年８月

■自由惑星同盟領　エル・ファシル星域

同盟政府と同盟軍が捕虜交換に際し交換した捕虜の中に、
諜報員（スパイ）を紛れこませ、その者達が内部工作を行ったことで、
帝国は少なからず被害を受けたと発表された。

又帝国が俘虜に対し送った救恤品を搾取した事により、
帝国政府と軍が同盟に対して怒りを覚えた為に戦闘が起こり続けていた。
元々軍部としても和平を望んでいない事もあり積極的な攻勢こそしないが小競り合いは始まっていた。

エル・ファシル星域で帝国軍と同盟軍の小競り合いが始まったのは８月初めのことであった。
帝国軍同盟軍とも１０００隻ほどの集団が小競り合いを繰り返していた。

帝国軍指揮官はクリストフ・フォン・シュタイエルマルク少将であり、
イゼルローン要塞指揮官クライスト大将、駐留艦隊指揮官ヴァルテンベルク大将、
それぞれの変更時人事移動で臣民輸送護衛任務で帰国後、
直ぐにイゼルローン要塞艦隊に配属されたのである。
其れだけ期待されていると言う事であった。

同盟軍指揮官はアーサー・リンチ少将であり有能勇敢な指揮官である。

■同盟領エル・ファシル星域　　シュタイエルマルク艦隊旗艦フォールクヴァング

帝国軍旗艦フォールクヴァング艦橋ではシュタイエルマルク少将が、
参謀長エルンスト・シュムーデ准将と作戦を話し合っていた。

「参謀長このままだと此方の損害も馬鹿にならんな」
「はっ既に二割近くを失っております。
このままでは補給の関係で先に息が切れるのは我が艦隊の方かと」

「参謀長、見るところ敵の指揮官は攻撃精神旺盛のようだな突出が多い」
「はっ見るところ余り考えては居ないように感じますな」
「やはりそう見えるか」

「一端引いて攻撃を受け流しては如何でしょうか」
「やってみるか」
「全艦に命令、敵が突出してきたら受け流しながら6光秒ほど後退せよ」

数分後オペレーターが敵艦隊が突出してきたことを伝えた。
「敵艦隊突出してきます」

「よし全艦後退せよ」
「全艦後退」

全力で後退していく帝国軍艦の群れ群れ、
同盟軍のビームは帝国軍が後退することで防御シールドに阻まれ有効打と成らない。
同盟軍も突出したものの圧力を躱されたた為か後退をはじめた。

「参謀長やはり敵は我々を追い払うだけを目標にしているな、決定的な打撃を与えられなければ即後退する、増援を待っているのかも知れん」
「その可能性は高いと言えますが日数がかかりますので時間稼ぎを行っていると思いますが」

「しかし増援が来ると厄介だ、よし偽電を打とう」
「どの様な内容に致しますか」
「発シュタイエルマルク艦隊、宛イゼルローン要塞艦隊司令部。我が艦隊はエル・ファシル星域において敵艦隊と交戦するもエネルギー弾薬の備蓄が心許ない故に断腸の思いながら撤退を行う」
「其れは又大胆な」

「なに暗号を組まずに平文でしかも指向性のアンテナから敵さんに向けて発信すればいい。
それに後ろの艦にイゼルローン方面への電波妨害をかけさせれば良いだろう」
「敵を安心させるのですか」

「ああ安心させる為に此方もイゼルローン方面へ帰還するように暫くは後退し、
敵が反転しエル・ファシルへ向かった時。急速反転し攻撃を仕掛ける」
「判りましたでは準備します」

「それと電文を出した後、敵が攻撃を仕掛けてくる可能性がある、その場合速攻で後退せよと命令を出すようにせよ」
「はっ全艦に命令せよ」

■同盟領エル・ファシル星域　　エル・ファシル警備艦隊旗艦グメイヤ

同盟軍旗艦グメイヤではリンチ少将が敵艦隊と戦闘を行いながら、味方増援が中々来ない事に多少のいらつきを覚えながら戦闘指揮を行っていた。
その艦橋端の席に一人の若い中尉が居た。
彼の名はヤン・ウェンリー彼は戦闘を見ているだけであり、新米中尉では意見すら求められない状態であった。

リンチが参謀長に話しかける。
「参謀長敵も中々やるな、突破しようとしたが受け流したぞ」
「増援が来る為の時間稼ぎです、余り損害を受けるのも良くないと思いますが」

「そうだな、敵が引けば此方も引くそうするしか有るまい。しかし増援はいつ来るんだ」
「他の星系の防備も有りますので時間がかかるかと」
「仕方ないか、現有戦力で何とかせねば成らんな」

オペレーターが敵信を傍受したと伝えてきた。
「提督敵艦隊がイゼルローンに送った通信を傍受しました」
参謀長が聞く

「で内容は？」

「はっ『発シュタイエルマルク艦隊、宛イゼルローン要塞艦隊司令部。
我が艦隊はエル・ファシル星域において敵艦隊と交戦するもエネルギー弾薬の備蓄が心許ない故に断腸の思いながら撤退を行う』以上です」

「提督此はチャンスです、敵は撤退準備を行っています。
此処で一撃を加えれば敵を撃退できます」
「うむ、よしやろう。敵に攻撃を仕掛け撃退後にエル・ファシルに帰投する」
「諒解しました、全艦に命令せよ」

ヤンは違和感を覚えた敵がそんな重要な通信を傍受させるような真似をするだろうかと。
司令官を見上げ意見を述べようとしたがその前に司令官が攻撃命令を発した。

「全艦砲撃開始突撃せよ！」

同盟艦隊が帝国艦隊へと攻撃を開始した。
押しまくる同盟艦隊、後退していく帝国艦隊。
リンチが嬉しそうに話す。
「よしいいぞあと少しだ」

帝国艦隊が高速で後退し同盟艦隊の攻撃圏内から逃れると踵を返して撤退を開始した。

「よし勝ったぞ」

「勝ちましたな」
「いやっほー」

オペレーターが「帝国軍は撤退していきます」と報告がさせると、
艦隊全体で歓声が上がりまくった。
リンチ少将は嬉しそうに「よし帰投する総司令部に連絡。
我敵艦隊を撃破しエル・ファシルを防衛せしとな」
同盟艦隊は反転しエル・ファシルへの帰途に就いた。

■同盟領エル・ファシル星域　　シュタイエルマルク艦隊旗艦フォールクヴァング

オペレーターの声が響く「敵艦隊突進攻撃してきます」
司令官と参謀長がニヤリとしながら。
「全艦急速撤退せよ」
「敵の攻撃を受け流しながら全速後退」

暫く鬼ごっこをした末に射程外へ逃れた艦隊は、
命令道理反転し星系外苑部へと後退をはじめた。

暫く後退し陣形を整えながら
敵艦隊を観測すると安心したのか敵艦隊はエル・ファシルへ向けて帰投をはじめた。
司令官が命令を出す。

「全艦急速反転全速前進、帰投する敵艦隊の背後を撃て！」
「全艦突撃」
「突入せよ」

各艦の艦橋で次々と復唱が行われていく。

「ファイエル！」

ビームとミサイルの群れが同盟艦隊の背後から襲いかかる。

突然の反転急襲に慌てふためく同盟艦隊は次々に被弾爆沈していく。

混乱が生じ彼方此方で反転迎撃しようとする艦と直進し一旦逃れようとする艦が衝突や接触を起こし戦場をさらに混乱させる。

「よし反転しようとする艦を重点的に撃て！」

「ワルキューレを出せ」

「撃って撃って撃ちまくれ！」

あっという間に正面戦闘では一進一退を繰り広げた同盟艦隊が瓦解していく。

「もろい物だな」

「戦闘が終わったと思い気が抜けた状態で背後から攻撃されればこうなりますな」

「我々もこの事を確り肝に銘じて慢心しないことだな」

「まったくです」

同盟艦隊の混乱を収拾しようにもリンチ司令官が恐慌をきたして、旗艦を駆ってエル・ファシル本星へと逃げてしまった。

指揮官逃亡の為残りの艦も戦意を喪失し、

何とか戦闘を続けていた各艦も次々に脱出を計りはじめた。

２００隻程が旗艦を追ってエル・ファシル本星へほぼ同数が他の星系へ逃げ去り、

逃げ遅れた１００隻程が絶望的な戦闘を行うが、

結局帝国軍の包囲下に置かれ結果的に降伏した。

■同盟領エル・ファシル星域　　エル・ファシル警備艦隊旗艦グメイヤ

同盟艦隊の中では既に祝杯をあげる者達もチラホラ見られ、格納庫では整備もせずに酒盛りが始まった。
リンチ指令官は「此で俺は中将だな」とにこやかに参謀長と話している。

そんな空気を絶対零度に落とし入れるオペレーターの叫び声が上がった。
「敵艦隊急反転し本艦隊に突入してきます！」
「そんな馬鹿な！」
「まずい」
「反転迎撃せよ！スパルタニアン全機発進！」

しかし格納庫からの声が艦橋に響き渡る。
「スパルタニアン発進不可能、未だ整備が終わっていません」
「なんだと！」

「司令官このままですと損害が増すばかりです」
「うわーー」
グメイヤの真横の巡航艦ニコライエフが直撃を受け爆沈した。
「味方は混乱し既に組織的な戦闘が難しくなっています」

リンチ司令官は目が虚ろになり小刻みに震えだした。
「司令官閣下！ご命令を！」
「ああエル・ファシルへ後退しろ！」

「今後退すれば敵から撃たれまくります、

指揮系統の混乱を治めてからの後退を」
「構うな後退しろ！此は命令だ！」

他の艦が絶望的な戦闘を続ける中、
グメイヤ以下数隻の艦は味方を見捨てるようにエル・ファシル本星へと逃亡した。
結果的にエル・ファシルへ逃げ込んだのは艦艇２００隻程兵員５０００人程であった。

■同盟領エル・ファシル星域　　シュタイエルマルク艦隊旗艦フォールクヴァング

「思った以上に旨く行ったな」
「全くです。抵抗を続けていた敵も降伏しました、およそ１００隻程です」
「エル・ファシルへ逃げ込んだのはどの程度か？」

「およそ２００隻程かと」
「ふむ、イゼルローンへ通信を送れ」
「内容は？」

「発シュタイエルマルク艦隊、宛イゼルローン要塞艦隊司令部、我が艦隊はエル・ファシルにおいて敵艦隊と交戦此を撃破し現在エル・ファシルを包囲状態にあり。叛徒からの解放の為増援及び装甲擲弾兵を求む」

「あとは増援が来るまで包囲を行うぞ、
慢心せずに確りと監視するようにせよ、
軽い飲酒は許可するが飲み過ぎないようにせよ」

「諒解しました」

第五十三話　エル・ファシル真の英雄・中編

宇宙暦７８８年帝国暦４７９年８月２２日

■同盟領エル・ファシル星域　エル・ファシル本星　同盟軍駐屯基地

エル・ファシルへ逃げ帰ったリンチ司令官達は直ぐに増援を求めた。
リンチ司令官は落ち着かない様子で参謀達に指示をし始めている。
「増援はいつ来ると言っているか？」

「返答はしばし待てと」
「ええい、ハイネセンは我々を見捨てる気か！」
有る参謀が小さな声でボソっと言った。

「一端勝利だと報告したから増援の話がすっ飛んだんじゃねーのか？」
多くの士官達がハッと見た。幸い指令官には聞こえなかったようだ。
そんな状態をヤン・ウェンリー中尉は暇そうに見ていた。

喧噪が続く中、絶望な事が起こった、
帝国軍の増援が到着したとの連絡が入ったのだ。

最早エル・ファシルの失陥は免れない状態になった。
民間人３００万人が状況の切迫に恐怖し軍部に交渉して、
民間人全員の脱出計画の立案と遂行を求めた。

「司令官閣下民間人の代表者が脱出について相談があると来ていま

すが」
「なんだと、今忙しいのだ。誰か適当で暇な士官に任せろ」
「はっ」

取り次いだ士官が司令部を見回すと丁度壁際で暇そうにしている新米中尉を見つけた。

ヤンはどうなるのやらと喧噪を聞いていたが、突然参謀の少佐から呼ばれた。
「ヤン中尉民間人３００万人の脱出計画の立案を行うように」
「小官がですか？」
「そうだ頼むぞ」
「諒解しました」

やれやれ司令官達は戦々恐々してるし年金を貰うまでは捕虜になる訳にもいかないし頑張りますか。

■同盟領エル・ファシル星域　エル・ファシル本星　同盟軍宇宙港

多くの住民が集まり喧噪が凄まじく五月蠅いぐらいだ。
住民の代表者がＭＰに掴みかからんがばかりにエキサイトしている。
「　おい　早く代表者を出せ！」
「どうしたんだー！」

そこへ責任者として姿を現したのがヤン・ウェンリー中尉だった。

若い頼りなさそうな中尉の出現に代表者達は疑惑をいだいたが、
ヤンは頼りなさげに頭をかきながら
「皆さん心配なさらないで下さい、３００万人一人残らず脱出出来

ますので」と言い放った。
皆は若く階級も低い人間に軍部は真剣にやる気があるのかと思ったが、
やるべき事はやってのけた。

そのさなかヤン中尉にサンドイッチとコーヒーを持ってきてくれた少女がいた。
ヤンはコーヒーを受け取ると「紅茶の方が良いんだけどね」ととぼけた事を言っていた。
少女はその姿を心に留めたのである。

帝国軍が増援を得て侵攻間近の混乱の中で、
民間船と軍用船を調達し、脱出の準備を整えさせた。
直ぐに脱出を主張する民間人を宥めながら、
ヤンは時機をを待っているようであった。

■同盟領エル・ファシル星域　　シュタイエルマルク艦隊旗艦フォールクヴァング

戦闘から１０日後の7月３１日イゼルローンからの増援２０００隻が到着した指揮官はミヒャイル・ジギスムント・フォン・カイザーリング少将であった。
双方の艦橋間でモニター越しに話し合った。

「大勝利と言えるなシュタイエルマルク」
「まあ此方も２００隻程損害があるからな喜んではいられんよカイザーリング」

「まあ俺が来たからにはエル・ファシル陥落も直ぐだな」

「ああ其れで地上降下は何時からにするかな」

「艦隊の準備からして明後日9月2日でどうだ？」

「ああ頼むよ、それと奴らが脱出しないように偵察艦配置をお願いしたい、

此方は数が足らんのでな」

「判った任しておけ」

「では」

カイザーリング少将が参謀長リヒャルト・パーペン准将に支持を出す。

「偵察艦を出して敵の動きを逐次知らせるようにせよ」

「諒解しました」

■同盟領エル・ファシル本星　同盟軍駐屯基地　　アーサー・リンチ少将

最早３００万人を連れて脱出は不可能だ残存艦艇も損傷艦が多数で戦闘に耐えうる艦は5割程だ。

敵は増援を受け３０００隻程になっている１００対３０００完璧に我が方は負ける。

このままでは、３００万人全員が捕虜の道しかない。

民間人３００万人を帝国が連れ去るのは時間的には難しいだろう。

その前に正規艦隊が来てくれればエル・ファシルの奪還は可能だ、

此処は残存艦艇を持って敵陣を突破し後方にて増援を待つのが得策だ、

そうだそうしかない！決して敵前逃亡ではない！此は戦略的な撤退

だ！

撤退ならば物資を敵に渡すのは利敵行為だ積めるかぎり積んで脱出だ！

参謀長に命令しなければならんが、民間人に知られると逃げたと思われるから、

密かに準備しなければならないな。

「参謀長一寸来てくれ」

司令官室へ参謀長を呼び込む

「司令官如何しましたか？」

「うむこのままだと数日中には敵が地上降下してくるだろう」

「確かに」

「このまま脱出したとして、３００万人の乗った船を守って撤退は不可能だろう」

「敵が見逃してくれない限りは無理ですね」

「敵が民間船と言えども攻撃してこないとは限らない」

「帝国ならあり得ますな」

「従って民間人を残して残存艦隊で敵陣を突破し後方で味方艦隊の増援を得てから再度エル・ファシルを奪還する。ただし民間人に知られると逃げたと思われるので密かに準備する。

物資等も乗せられる限り持って行く、残していくと利敵行為に当たるからな」

「判りました準備を整えます」

「民間人対応の者達には悪いが３００万人を守る為に残って貰おう」

「では知らせない訳ですか」

「仕方がないことだ、このままだと死者が多数出る」

「諒解しました」

同盟領エル・ファシル星域　エル・ファシル本星　同盟軍宇宙港

9月1日急報が人々を驚かした。
リンチ司令官と彼の直属の部下たちが民間人や他の部下を見捨て、軍需物資を持ってエル・ファシル本星から逃亡しつつ有るというのだ。
騒ぎ立てる人々に、ヤンはようやく脱出の指示をだした。

「心配は要りません。司令官が帝国軍の注意を引きつけてくれます。レーダー欺瞞をせず、太陽風に乗って悠々と脱出できますよ」

「ヤン中尉君はこの事を予測していたのかね？」
驚いた表情の代表者達。
「司令官をおとりにした訳か」

「さあ行きましょう」
彼の予言は的中した、リンチ少将以下は事あることを予測していた帝国軍に散々追い回されたあげく降伏して捕虜となったのである。

帝国軍がリンチ司令官を追い回している中、
ヤンの船団は悠々とエル・ファシルから脱出をしていた。
無論偵察艦によりその姿はレーダーに映っていたが、
脱出する宇宙船がレーダー欺瞞をせずに居る訳がないとの先入観から見逃してしまったのである。

■同盟領エル・ファシル星域　　エル・ファシル警備艦隊旗艦

グメイヤ

エル・ファシルを脱出し全速で敵の薄いところを狙って突破をはかったが敵艦隊は次々に追跡してくる又一隻沈んだこのままではいかん。追いつかれる駄目か参謀長が敵艦から発光信号が来ているといってきた。

「なんと言ってきている」

「最早貴官は我が艦隊の重包囲下にあり降伏せよ呵らずんば攻撃する」だそうです。

「最早無理か皆の命を救う為に仕方ないが降伏する。敵艦隊に受諾の返答を行え」

「はっ直ちに」

「司令官閣下、汚名が残りますね」

「仕方がないことだ、後は増援がエル・ファシルを奪還してくれるのを祈ろう。

済まんなみんなを巻き込んでしまって」

「司令官閣下・・・・」

■同盟領エル・ファシル星域　　シュタイエルマルク艦隊旗艦フォールクヴァング

クリストフ・フォン・シュタイエルマルク

攻撃前日に敵艦隊が脱出を狙い突撃してきた、

民間人を見捨てて逃げる気かと当時は思った。

しかし其れが間違えだと気がついたのは戦闘後だった。

オペレーターの声が響く「敵艦隊が突破し逃亡しようとしています」
「参謀長逃げる気だな」
「民間人を見捨て逃げるのですかな」
「卑怯な奴だ、追撃するぞ！」

敵艦隊は散々我々をエル・ファシルから遠ざけたが、
遂に重包囲下に置かれ降伏した。
卑怯者はあっさり降伏する物だと思い。
捕虜にした敵司令官に会うのも馬鹿馬鹿しく感じたが取りあえずは
会うことにした。

会ってみると堂々としており、
『自分の命はどうなっても良いから民間人の命を助けてくれ』と懇
願された。
意外なことに武人ではないか、

自分の命を捨ててでも弱い存在を守るのはそうそう出来る物ではない。
私は出来る限り尊重すると言い会談を終えた。
その後カイザーリングと共に降下作戦を行ったが、仰天の事態が発
生した。

なんと惑星上に人っ子一人いなかったのだ、３００万人が影も形もなく消えていた。
再度リンチ司令官を尋問すると脱出計画を立てていた事は認めたが、
それ以外は知らないと言ってきた。
見る限り嘘は言っていないと思われた、
司令官はその若い中尉達に囮にされたのだと推測した。

しかしどうやって消えたのか。

情報を精査した結果隕石群と思い見逃した物が脱出船団だったことが推測された。
結果的に我々は敵司令官と共にその中尉に見事にだまされた訳だ。
勝利の酒が不味くなってしまった、グラスをたたき割る者達も居るぐらいだ。

第五十四話　エル・ファシル真の英雄・後編（前書き）

エル・ファシル最終話です

第五十四話　エル・ファシル真の英雄・後編

宇宙暦７８８年帝国暦４７９年１２月１日

■自由惑星同盟　ハイネセンポリス

３００万人の民間人を保護し後方星域に到着したヤンを、歓声が待っていた。
軍首脳部はヤンの沈着さと放胆さに流星雨のごとき賛辞をあびせた。
彼らはそうぜざるをえなかった。

敗北と逃亡、しかも民間人を保護すべき軍隊が民間人を見捨てて。
という不名誉きわまりなる汚名をすすぐには、軍人の英雄が必要だったのだ。
ヤン・ウェンリー中尉こそ、自由惑星同盟の武人の鏡である。

正義と人道の輝ける戦士である。全軍こぞって若き英雄をたたえよ！
１２月１日午前１０時２５分、ヤンは大尉に昇進した。同日午後１６時３０分少佐の辞令をうけた。
生存者に二階級特進は許されないという軍規が、この奇妙な処置を上層部に取らせたのである。

ヤンはエル・ファシルの英雄として各種マスコミからひっきりなしに取材を受けるしか無かった。
首脳部が事件の糊塗を狙い若き英雄を徹底的に持ち上げたからである。

逆にリンチ少将は臆病者敵前逃亡者等の悪行を殊更過大に発表されたあげく。

囮として戦ったのだという話は無視され。
家には誹謗中傷のメールや電話が次々に送られ、
さらに投石や嫌がらせが行われ妻と娘は何処となく隠れる始末であった。

ヤンはハイネセンの街角アンケートでも結婚したい相手Ｎｏ１に選ばれ、
ファンレターやラブレターが山程送られて来たのである。

帝国暦４７９年１２月７日

■オーディン　グリンメルスハウゼン子爵邸　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

「ふーんエル・ファシルの英雄ね」
「どうなさいましかな？」
爺様が不思議そうに聞いて来る。

「いえね英雄って言っても結局は司令官を囮にして逃げたのでしょ、しかも司令官が逃亡したとして司令官に罪きせて単なる醜聞隠しじゃないですか」
「そうですね、しかし３００万人を見事に逃がしていますから、たいした手並みです」

「ケスラーそうだけどそのヤン中尉は職責を全うしてるから良いけど、
出汁にされたリンチ少将は敵ながら気の毒ね。スケープゴートでしょ完全に」

「確かにそうですね、シュタイエルマルク艦隊の戦闘報告書でも敵司令官が、
『自分の命はどうなっても良いから民間人の命を助けてくれ』と言っておりますから、
立派な武人かとおもいます」

「立派な考えじゃの」
「そうですよね。ふむーケスラーその敵司令官は今どこにいるの？」
「一寸待って下さい・・・・アルタイル星系第7惑星の矯正区に入所したところですね。其れが何か？」

「その司令官以下捕虜をヴァルハラ星系の収容施設入所に変更できないかしら？」
「出来ると思いますがいったい何を？」
2人とも不思議がってますね、ヤンにちょと嫌がらせをしようかと思ってね。
エル・ファシルの英雄って厨二病みたいな渾名嫌ってたでしょ。

「いや武人として立派な行動をした方が謂われのない中傷で傷つくのは気の毒じゃないですか、
それに真実を叛徒共に知らせれば混乱が生じるのでは無いですか？

前回の報道規制に対処するために、
フェザーン系資本のＴＶ局報道機関を買収してあるから伝手はあるのでしょう？
それにフェザーンでも流せば伝わるし、
イゼルローンから大出力で流せば傍受されるでしょうし、

エル・ファシルの施設を利用して流す手もあるわ、

それにネット回線の映像流通サイトで流せばあっというまに、コピーされて政府でも手に負えなくなるとおもうの」

「なるほどいい手かも知れませんね」
「武人の鏡だとお父様から言って貰うわ」
「いい手ですのテレーゼ様」
「それじゃ準備はお願いしますね、お父様には明日にでも頼んできますから」

帝国暦４７８年１２月８日

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　小部屋　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

朝からお父様にお願いをしに来ました。
お父様はにこやかに迎えてくれます。
「お父様おはようございますご機嫌麗しく」

「テレーゼよよう参った、今日は何のようじゃな？」
「お父様先だってのエル・ファシルの戦いをご存じですか？」
「国務尚書から聞いておる、敵に一泡食らったそうじゃの」

「はいその時の脱出を指揮した者がエル・ファシルの英雄と呼ばれているのですが、
その為に司令官が悪者にされているんですよね」
「しかし敵前逃亡したのであろう」
なるほどリヒテン爺さん上辺だけしか教えてないか。

「いいえ事実は違うんです。シュタイエルマルク艦隊の戦闘報告書で、
『自分の命はどうなっても良いから民間人の命を助けてくれ』と言っているんですよ、
此こそ敵ながら天晴れじゃないですか？」

「確かにそうよの。でテレーゼは何をしたいのじゃ？」
「敵司令官の身柄をヴァルハラ星系へ向かわしています、
そこで事実を発表し敵司令官の騎士道精神を褒め称えるお言葉を出して欲しいのです」

「ふむ」
「敵の民に自分の軍隊がどれだけ嘘つきかを再度知らせる機会ですからね徹底的にやります」
「テレーゼよ逞しくなったの」
「お父様とお母様の子供ですから」

「ハハハそうじゃな演技をするかの」
「じゃあお父様日にちが来たら連絡します」
「うむわかった」

帝国暦４７９年１２月１１日

■アルタイル星系第７惑星の矯正区収容施設　　アーサー・リンチ

ヤン中尉が俺たちを囮にしてから４ヶ月か、３００万人は無事逃げおせたようだな。
俺たちは捕虜だ、しかしアルタイル星系とはな、

アーレ・ハイネセンが育ち長征一万光年の出発点じゃないか、
小惑星帯にはイオン・ファゼカス号が眠っているはずだな。

ある意味俺には合っている場所かも知れん、
妻と娘はどうしているだろうか。
皆済まんな巻き込んでしまって、
此なら旗艦だけで逃げ回り捕まった方が皆を家族の元へ帰せたのに
俺のミスだ。
ん誰か来たようだな、尋問か？

「リンチ少将、面会の方が来ています」
はぁ俺に面会ってだれだ？
「リンチ少将ですね小官はアルタイル星系警備艦隊司令ボルヒャルト少将です」

「で少将閣下が何の用だい」
「貴官達９８５３名をヴァルハラ星系へ移送します、
まず貴官以下士官３２７名を移送しその後輸送船で残留人員を移送します」

「なんだい見せ物として貴族にでも曝すのかい」
「詳しいことは小官には知らせられておりません、
只移送しろと言う命令が来ただけです」

「んで何時移送だい？」
「今からです」
「そりゃまた忙しいことだ」

まああれだなどうせ捨てた命だ鬼が出るか蛇が出るか判らんがいってみるかね。

帝国暦４７９年１２月１５日

■ヴァルハラ星系　帝国軍捕虜収容所

リンチ少将以下主立った士官３２７人がヴァルハラ星系にある収容所へと到着した。
高速戦艦を使い僅か５日で到着したのである、
タラップを降りて焦燥としているリンチ少将のもとに、
帝国軍将官が出迎えに来た。

「リンチ少将閣下ですな、将官はケッセリング中将と申します、
皇帝陛下の筆頭侍従武官をしております、
皇帝陛下が閣下の民も思う気持ちに感動なされ格別の思し召しを頂きました」

焦燥し絶望していた顔が少し顔色が良くなってきた。
「皇帝陛下は閣下の『自分の命はどうなっても良いから民間人の命を助けてくれ』との発言に大変感動し
『敵ながら騎士道精神天晴れである』と仰いました、
皇帝陛下は『勇者には勇者なりの待遇をせよと』仰せになりました」

暫し考えながら。
「そのようなことを・・・・」
「閣下貴官の古里ではヤン中尉という者がエル・ファシルの英雄と言われています」

「と言う事は民間人は無事に逃げられた訳か」
「我々にしては残念ですが、その通りです」

「そうか良かった」

「ただ残念ながら閣下のご家族は気の毒なことです」
「気の毒とは？家族は妻と娘はどうなった！」
「ご家族は家に誹謗中傷投石され何処となく姿を消しているそうです」

「確かに見た目、俺は敵前逃亡だ、
しかし家族にまで危害を加える必要は無いだろう！」
「同盟政府と軍は貴官が悪逆で敵前逃亡者として報道して居るとのことです、悔しくありませんか」

・　・　・

「俺に何をさせたいんだ」
「いえ大したことではありません。事実を話して頂ければ良いだけです」
暫く考えてから
「判った話そう」

宇宙暦７８８年帝国暦４７９年１２月２４日

■自由惑星同盟　ハイネセンポリス

エル・ファシルの英雄としてヤンがもみくちゃにされた日々が終わり。
幾分暇になり、キャゼルヌ先輩から託された、
ブルース・アッシュビーについての事を調べだし、

アルフレッド・ローザス提督の葬儀が終って3日経ったこの日。

同盟及びフェザーンに於いて、
クリスマスプレゼントとしては最悪である、驚愕の放送が各種メディアで流された。
所謂エル・ファシルの戦いの本当の姿と称する物であった。

リンチ司令官が３００万人を守る為に自身を囮として３０倍の帝国艦隊に立ち向かったこと、
その隙を突いてヤン中尉に民間人３００万人脱出を命令していたこと、
降伏後『自分の命はどうなっても良いから民間人の命を助けてくれ』と言ったこと。
その行為を皇帝が騎士道精神として絶賛した事。

そしてエル・ファシルのヤン中尉の部屋からリンチ少将が密かに渡した自らが囮になるという脱出計画の命令書が破った状態で発見されその原文も映像で発表されたのである。

同盟政府はその放送を止めさせようと躍起に成ったが、
ネット上に流れた映像は次々にコピーされ繰り返しＵＰされ消し去ることが出来なかった。

同盟市民は最初は信じようとはしなかった。
しかし直ぐに驚愕した、その文書は確かにヤン中尉のサインがある文章だったのである。
サイン自体を偽物と疑う者もあったが、
エル・ファシルの英雄として渋々ヤンが書いたサインと瓜二つだったのである。

たちまちヤン中尉に対するバッシングが始まり
エル・ファシルの英雄はペテン師、エル・ファシルの簒奪者、同盟
の恥さらしと騒がれはじめたのである。

自宅には投石がされ、誹謗中傷の手紙が舞い込み、
嫌がらせの電話が毎日にように掛かり、
捕虜となった他の兵士の家族からは罵倒されたのである。

ヤンにしてみれば好きで成ったのではないし、
あの文章は自分は知らないのだが言っても信じてくれないだろうと
黙りを決め込んで、
嵐の去るのを待つことにしたのである。

ＴＶ電話が鳴る、今日も罵倒と嘲りだ無視していると、
「ヤン居るんだろう」キャゼルヌ先輩からの電話だった。
「ヤン大変だな、虚偽だと判らずに市民が動いてしまう。
市民感情は恐ろしもんだよ、
それで軍上層部が元英雄様にエコニアに行けとの命令だそうだ」

「エコニアですか、彼処は捕虜収容所ですよね」
「ああ開店休業中の収容所だ、なんと言っても捕虜を帰したからな」
「で今度は私を収監するんですか」

「いやな、彼処の所長が一身上の理由で早期退職して、副所長が昇
進したんだが、
副所長の椅子が空いてな、残務整理の為の増員を求めてきたのさ、
それでありがたい事に上層部は、
ある程度暇で引き抜いても何ら影響を及ぼさない人物として、
お前さんを副所長にしてしまうわけだ」

「つまりだヤン、ほとぼりが冷めるまで隠れていろってことだ」

「上の連中もあの放送が宣伝だって判ってるのさ、
でも市民感情を無視できないと言う事らしい」

「半年我慢しろ呼び戻すから」

「出発は１２月３１日だ、準備をしておくんだぞ」

ヤンがバッシングを受ける中、
リンチ少将は悲劇の名将悲運の人として同盟の市民が、
彼こそ『真のエル・ファシルの英雄』と称えはじめたのである。

同盟政府としても、このまま行けば支持率が下がり選挙に負けると、
市民の圧力に負けてリンチ少将を大将に昇進させ欠席状態ながら、
同盟軍最高幕僚会議議員の肩書きと自由惑星同盟勲章が授与された。
またリンチ少将と共に捕虜になった全員に二階級昇進と自由戦士勲章が授与された。

リンチ少将を敵前逃亡者としてヤンを英雄にした、
同盟軍上層部としても市民圧力には耐えきれなくなり、
この件を受け、ヤンを持てあました結果明年１月を持って、

彼をエコニアの捕虜収容所副所長として送り出すことを決定した。
エコニア捕虜収容所は４月の捕虜交換でほぼ停止状態にあり、
完全な閉職として送られたのである。

ヤンは１２月３１日にハイネセンをヒッソリと旅立ち、
１月１０日にタナトス星系エコニア星へ到着した。

帝国暦４７９年１２月２８日

■オーディン　グリンメルスハウゼン子爵邸　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

同盟でヤン・ウェンリーが酷い目に遭っている報道が入ってきた。
爺様とケスラーがそこまでする相手ですかという感じで私を見ている。

「しかし敵は凄い状態だそうですな」
「閣下バッシングが凄く逆にリンチ少将は褒め称えられているそうです」
「市民感情って怖いのね、昨日の英雄が今日はペテン師ね」
「まったくですな」

「しかしネットを利用し叛徒共自身にコピーさせＵＰさせるとは驚きですな」
まあヒントは尖閣諸島沖の漁船追突の映像暴露なんだけどね。
「向こうの民のネット依存度を考えたらそうなると思いました」
「なるほど」

「まあ今回は別にそのヤン中尉とかを虚仮落とすのが本来の事じゃ無かったしね」
「どの様な事ですかな」
「４つほど有るのよね」

「１、叛徒の政府と軍のいい加減な報道を民に思い知らせる、
まあこれは期待してませんけどね」

「2、今回はフェザーン資本のＴＶ、新聞、出版社、ネット業者を使い報道を流しました、
その結果叛徒とフェザーンの間に緊張感を与えることが出来ます。
しかも叛徒の政府に居るフェザーンからリベートを貰っている者と貰わない者の亀裂を作れるでしょう」

「3、この報道により叛徒は益々報道規制やネットの規制を始めるでしょう、
自由の国と言いながら報道規制が凄い民の知る好奇心を止める事は不可能ですからね。
したがって、政府に対する不満が増す」

「4、リンチ司令官以下の家族に対するバッシングを止めさせる、
そうすればリンチ司令官以下は帝国に負けた恨みより自分の家族に危害を加えた叛徒により恨みが行くでしょう」

本当はヤンを弄るのもあるんだけどね。
書類は凄すぎだ。

「しかし良くあんな書類を偽造できたましたね」
「まあ当人のサインさえあれば意外と簡単にできる物です」
ケスラー流石だよね、些かやり過ぎな感覚はあるけど。

「なるほど、リンチ少将達は騎士道精神の勇者として其れなりの待遇をしてあげて下さいね、
少ししたら、彼らをローエングラム星系へ移し新規収容施設を造り其方へ移して優遇しましょう」
「待遇改善と言うものですな」

「そうです、勇者には勇者なりの待遇をすれば向こうから亡命とか

降伏がし易いでしょう、
それに矯正区に一旦送られた俘虜をローエングラム領に引き取り其処でまともな生活をさせれば、
地獄に仏で感謝されるし、帝国に対する信奉者を増やせますよ」

「なるほど、矯正区の凄ざまじい環境から出られればそうなりますね」

「そう言うことです、前回の俘虜は叛徒共に潜在的な不信感を与えました、
次回以降は本当に不審だけではなく危険をも与えかねない俘虜になると言う事ですよ」

まあ俘虜対策等は、
４８２年に亡命してくるはずの、リューネブルクに対するメッセージも込めてるようなもんだけどね。
本当はワルター・フォン・シェーンコップが超欲しいんだけどね、
シェーンコップは元々好きなキャラだし、
彼に護衛をして貰えば貞操の危機は有っても命の危機はほぼ無いからね。

あとはローゼンリッターごとスカウトしたいな、
ブルームハルトが赤毛の美人が札束持ってきたら寝返りたいと言ってたから、
そう言うシチュエーションを作ってやるかな。

「今回もご苦労様でした、お父様には私から伝えておきますね」

さて、明日は疾風が帰国だし、エヴァちゃんの出産もまもなくだから楽しみだね。
庭園も段々出来てきてるし、書道用具も出来てきた、来年も忙しく

なるぞー。

第五十四話　エル・ファシル真の英雄・後編（後書き）

次回はこんにちは赤ちゃんです

増補です

「まあ今回は別にそのヤン中尉とかを虚仮落とすのが本来の事じゃ無かったしね」

「どの様な事ですかな」

「４つほど有るのよね」

「1、叛徒の政府と軍のいい加減な報道を民に思い知らせる、まあこれは期待してませんけどね」

「2、今回はフェザーン資本のＴＶ、新聞、出版社、ネット業者を使い報道を流しました、その結果叛徒とフェザーンの間に緊張感を与えることが出来ます。しかも叛徒の政府に居るフェザーンからリベートを貰っている者と貰わない者の亀裂を作れるでしょう」

「3、この報道により叛徒は益々報道規制やネットの規制を始めるでしょう、自由の国と言いながら報道規制が凄い民の知る好奇心を止める事は不可能ですからね。したがって、政府に対する不満が増す」

「4、リンチ司令官以下の家族に対するバッシングを止めさせる、そうすればリンチ司令官以下は帝国に負けた恨みより自分の家族に危害を加えた叛徒により恨みが行くでしょう」

本当はヤンを弄るのもあるんだけどね。
書類は凄すぎだ。

第五十五話　こんにちは赤ちゃん（前書き）

第五十四話に増補してます、
エル・ファシル政策に対するテレーゼの考えを増補してます。

第五十五話　こんにちは赤ちゃん

帝国暦４７９年１２月２９日

■オーディン　宇宙艦隊軍事宇宙港

年も押し迫ったこの日、半年に及ぶ遠洋航海をを終えた第４７９年度新任士官達５１２２名を乗せた特別練習艦隊が帰還した。
皇帝陛下、皇女殿下、帝国軍三長官、幕僚総監、装甲擲弾兵総監以下が列席の中各艦より次々と下りてくる。
新任士官達には陛下の臨御に感動し此からの任務に燃えていた。
此から2週間の休暇が与えられ其れから新たなる任地へと旅立つのである。

■オーディン　宇宙艦隊軍事宇宙港　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

ミッターマイヤー達が帰還しました、今年度は叛徒も攻めてきませんでしたからね、
むしろ此方がエル・ファシルを占領したりしましたから、
まあヤンは原作道理逃げられましたが、仕方がないですね。

あの時点で隕石群に紛れて逃げるなんか教えたとしたら、
怪しまれること１００パーセントですからね。
韜晦は続けなければ成らないのです。

しっかし寒いです、父様や私は毛皮を着てますが、三長官とかは軍服ですから凄く寒そうですね、

みんなお爺ちゃんですから、装甲擲弾兵総監は堂々としていますが、原始人ほどじゃないですね。
装甲擲弾兵総監は未だ原始人じゃ無いんですよね、聞いてみたら原始人は副総監だそうです。
原始人なら裸で立っていても平気だと思います。
あー皮の服を着させて石器持たしてみたい。

終わったら速攻でエヴァちゃんの入院してる病院へ行かねば成りません、
なんと予定日が早まって今日が出産予定になったしましました。
爺様の関係病院なので、防諜その他は完璧です。

ミッターマイヤーも疾風ウォルフに相応しい速度で来てくれるでしょう。
病院には既にエヴァパパ、ミッターパパママが詰めています。
さあ終わりました、お父様と帰りますが途中で抜けます。

■オーディン　宇宙艦隊軍事宇宙港　ウォルフガング・ミッターマイヤー

長かった半年は本当に長かった、エヴァとはイゼルローンに居る間は、
連絡し有っていたが、此処４０日は航海中で連絡が出来なかった、
やっとたどり着いたが、まさか今日が出産予定日になるとは思っても居なかった。

本当ならあと一週間は有るはずなのに、メールに連絡が有って初めて知ったよ。
病院へ直ぐにでも行きたいけど、式典が終わるまでは無理なんだよね。

皇帝陛下ご臨御だからね、彼処にはテレーゼ様もいらっしゃる、
半年ぶりにお顔を見たが相変わらずお可愛いことだ、
殿下にはエヴァ共々一生かかっても帰せないほどのご恩がある。

ファンクラブの連中が興奮してるな、俺は殿下と直接お話出来るんだと言いたいね。
言うつもりは無いけどね。
式典が終わるな、あと2時間で病院へ行けるエヴァ待ってろよ。
我が子よ俺が行くまで未だ生まれるなよ。

■オーデイン　オーディン育英病院特別病室２０１号室　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

病室ではエヴァちゃんが陣痛に耐えています。
「あーうーはーひー」
「未だですよ頑張って下さい」
「あーーー」

間に合いましたが、凄まじい状態ですね。
陣痛真っ盛りです、ミッターマイヤーは未だ来てません。
向かっているのは確認済みです、疾風ウォルフは早いはずです。

子爵家の眼鏡メイド姿に変装した、
ヴァーリア・ディーツゲン中尉が疾風の位置を逐次教えてくれます。
迎えに行った地上車の運転士からの連絡です、あと１０分ほどで到着だそうです。
十分間に合いそうです。

しかし本来なら生まれないはずの子が生まれるわけです、

これほど嬉しいことはないですね、
しかもなんと先ほど聞いたら双生児だそうです。

いやいや嬉しさ２００パーセントです、頑張れエヴァちゃん。
エヴァパパもミッターパパはハラハラしながら廊下でウロウロしています。
ミッターママは流石経産婦です落ち着いてエヴァちゃんの手を握っています。

私も落ち着きたいのですが、何せ初めてのことですからね。
わくわく感と大丈夫かな感半々です。
早くミッターマイヤー来い来い。

おっと連絡です、玄関に着いたとの事、
エヴァちゃんに伝えます。

「エヴァちゃんウォルフがしたまで来たよ」
「ああーううー、あありがああとおおうござああいますうう」
うわー完全な痛みが有るようです。

すごい音が外から聞こえますが、ミッター止められているようです。
消毒してこれに着替えて下さいと看護婦が怒ってますね。
申し少し落ち着け疾風よ。

２重部屋を抜けてミッターが活きよい良く入ってきます、
「エヴァ今帰ったよー！！」
声が大きすぎます。

「ウウウウォオルウフウ」
エヴァちゃん唸ってるのか喋ってるのか区別つきません。

ミッター看護婦さんから『静かにして下さい』と怒られてます。
疾風ウォルフも看護婦さんにはタジタジです。

ミッター私に気づきました、思わず名前を呼びそうなので、シッーと唇に人差し指を当てたら、
気づいたらしく、『ヴァネッサ様今日はありがとうございます』とごまかしてくれました。
良くやったミッターマイヤー。

ミッターがエヴァちゃんの右手を握って顔を見合わせながらうなずき合っています。
幾分落ち着いたのか、力みが始まりました。
「あああ@p@@っっpううううあういあおっあああ」
エヴァちゃん、もう言葉に成ってません。

産婦人科の先生が『頭が見えて来ました』と言いながら、
赤ちゃんが生まれました。
やったね！！

『ホンギャーアンギャー』
泣き始めました、女の子のようです。
未だ2人目が生まれる準備をしています。

女の子は早速看護婦さんが洗浄とかをしています。
猿みたいですね。
疾風ウォルフの子ですから雌狼ですかね。

強く育って貰いたいです。
次の子が生まれそうです。
「あーーううーあああーーーー」

エヴァちゃん、今度は言葉になってます。

ミッターもはらはら顔です、こんなミッター見た事ない。
貴重な映像です、ロイが見たら絶対酒の肴にからかうはずです。
「あーーううーあああーーー」

産婦人科の先生が『頭が見えて来ました』と再度言いながら、
2人目の赤ちゃんが生まれました。
またまたやったね!!

『ホンギャーホンギャー』
泣き始めました、今度は男の子のようです。
てことはこの子がフェリックスになるのかな?

この子も手際よく看護婦さんが洗浄とかしていきます。
同じように猿のようです。
猿みたいだが若狼です、ガオーって言いませんが狼です。

ミッターマイヤーもデロデロです、この顔を見ただけでもレアです。
エヴァちゃんも痛みから放心気味ですが、落ち着いてきました。
やっぱミッターママが一番落ち着いています。
赤ん坊を早速抱っこしています。

バタバタとミッターパパとエヴァパパが入ってきました。
入り方がミッターパパはミッターにソックリです、
看護婦さんに2人とも怒られています。

『お静かにして下さいね!』
思わず此方のみんなで笑ってしまいました。

エヴァちゃんが女の子を抱っこしました。
ミッターママは男の子を抱っこしてます。
良いモノです映えますね、パパーズ写真を撮ってます。

エヴァちゃんとミッターが私に赤ちゃんの名前を付けて下さいと言ってきましたよ。
ミッターパパ、ママ、エヴァパパも納得したように頼んできます。
つまりは5人で示し合わせていたというわけですね。
ミッターは恐らく電話で話し合ったんでしょうね。

んー此処は、男の子はテンプレ道理にフェリックスにしないといけませんね。
女の子はどうしましょうか、直ぐには出ませんね。
取りあえず男の子は言いましょう。

「エヴァちゃん男の子の名前は、フェリックスはどうですか、古い古い言語で幸福を意味する言葉だそうです」

あーやっぱり考えていたようです。
2人ともえって言う顔してます。
ちょっとカマを懸けてみましょう。

「えーと駄目でしょうか？」
エヴァちゃんビックリしながら。
「いえいいお名前です」
「どうしたのですか？」

「いえ私たちが考えていた名前も同じ名前だったのです」
ここは驚きますよ。
「ええ。其れはビックリです、偶然て有るんですね」

「本当にそうですね、この子に良い名前が付きましたわ」
「ヴァネッサ様ありがとうございます」

みんな喜んでいます、女の子は夫婦に付けて貰った方がいいでしょう。

「エヴァちゃん、女の子の名前までは考えつかなかったので、パパとママが付けてあげて下さい」
「解りました、頑張って考えます」
ミッター力みすぎですよ。

「はい可愛い名前を考えなくちゃね」
エヴァちゃん男の子しか考えて無かったんですね。

さて帰る時間になってしまいました。
ヴァーリア・ディーツゲン中尉がそろそろお時間ですと言ってきましたからね。

「みなさんそろそろ帰る時間になってしまいました、
ごきげんようさようなら」

「「「「ヴァネッサ様今日はありがとうございました」」」」
「またです」

帰ります。今日は良い日です、願わくばこの平和が続きますように。

■オーデイン　オーディン育英病院特別病室２０１号室

「エヴァ、良く頑張ったね」
「ウォルフ様、お帰りなさい」

「可愛い2人の家族が増えたね」

「ええ貴方と私の子供です」
「大切に育てようね」
「ええ、大切に育てますよ」

「テレーゼ様に来て頂けるとは光栄の極みだね」
「ホントですね、貴方が来るまでズーッと手を握っていて下さったのよ」
「テレーゼ様のような優しい子に育って欲しいね」

「フェリックスには驚いたわ」
「ああ考えていた名前と同じだなんて」
「運命を感じるわね」

「そうだねテレーゼ様が同じ事をお考えだったんだから、この子は立派な子に育つね」
「そうですね」

「娘の名前を考えなくちゃね」
「ええ、男の子だけだと思って考えて無かったのよ」
「はっは、エヴァも意外と抜けてるな」

「ウォルフ様、ひどいです」
「冗談だよエヴァ」
「2人で考えよう」
「ええ」

第五十六話　双璧誕生秘話（前書き）

双璧＋黒猪できました。

第五十六話　双璧誕生秘話

帝国暦４８０年1月１０日

■イゼルローン要塞　　オスカー・フォン・ロイエンタール

俺の名はオスカー・フォン・ロイエンタール、帝国軍の中尉だ、
あの魔王（テレーゼ）から逃れて以来非常に充実した生活を送っている。

何故かこの俺が、一人の女に執着するとは焼きが回ったか、
まあレテーナが俺を生んだ女と比べるのも烏滸がましいほどのいい女だからなのかも知れん。
料理も旨い、話しやすい、細かいところに気を回してくれる、無論夜もだが。

俺を生んだ女、あれは女の形をしていただけだと今なら断言できる。
レテーナには母性を感じる、幼き日に捨て去った暖かい温もりを感じられる気がした。

レテーナに心惹かれるモノが有るのは、
彼女の生い立ちが俺にどことなく似ているからかも知れん。

レテーナ自身ある貴族の妾の子として生まれたが、
母親は妊娠が知れた時に父親から捨てられ、
一人でレテーナを育ててきたそうだ、

その母親も１５歳で死別しそれ以来、ホステスをしながら生きてきたそうだ。
俺に靡いたのは、どことなく自分と同じ雰囲気がしたからだそうだ。

一度はたまたま知り合った他の女を抱いたが、
その話を聞いて涙ながらに俺の宿舎の前に立っていたレテーナを見たら、
普通の女であれば、ストーカーまがいだと拒絶するが矢張りレテーナは忘れられなかった。
俺としても問題があるかも知れん。

しかも一度の浮気があんな事になるとは思わなかった。
3人から結婚を申し込まれていた女を抱いて捨てた、
それにより3人に決闘を挑まれその結果後輩のミッターマイヤーを巻き込んでしまったのだから。

ミッターマイヤーは士官学校の一期後輩だが士官学校時代は会った事もなかった。
奴が去年の俺と同じで研修に来たとき偶然にも同じ部署に配置されたことが知り合うきっかけだった。
士官学校には魔王（テレーゼ）の件でいい思い出が無いし、後輩なら俺の噂を知っているかと思ったが。
あっさりしていて、知っていますが気にしてないと言ってくれた。
魔王（テレーゼ）信徒じゃない男は其れこそ貴重だ、鶏冠頭（ビッテンフェルト）でさえ魔王（テレーゼ）の潜在的な信徒だからな。
それから飲みに行ったりしたが、奴は20歳でもう妻持ちで妊娠中と来ていた。
しかも妻は15歳と来ている、俺が言う事でもないが犯罪スレスレじゃないのか？
まあ人生の墓場へ好きこのんで入った御仁だが、
それ以外はさわやかで話の会う奴だ、良い関係になれそうだ。

何度か飲みに行くなかで、鶏冠頭（ビッテンフェルト）とも知り合いになり3人で飲んだり遊んでいた。
あの日、いつものようにファンタズィーで呑んでいたら、
俺が遊んで棄てた女に結婚を申し込んでいた3人が決闘を挑んできた。

俺としては3人を一人ずつ銃とサーベルでやるつもりだったが、
ミッターマイヤーが武器の使用は止めて、
3対1じゃ不公平だから俺も入って3対2で殴り合いで決めようと勝手に決めてしまった。
所が鶏冠頭（ビッテンフェルト）が俺も入れろと言いだし結局3対3で殴り合うことになった。

結果は俺達の圧勝だった、しかしその後がいけなかった。
鶏冠頭（ビッテンフェルト）が加減を知らず3人とも病院送りにしてしまったのだ。
さらに不味いのが6人の内ミッターマイヤーと鶏冠頭（ビッテンフェルト）以外の4人は帝国騎士だったが、
ミッターマイヤーと鶏冠頭（ビッテンフェルト）は平民だ、このままだとミッターマイヤーと鶏冠頭（ビッテンフェルト）だけが罰せられる。

鶏冠頭（ビッテンフェルト）は別として、
ミッターマイヤーに対しては、俺としてもそれを何とかして避けたいと、
主犯は俺で、ミッターマイヤーは巻き込まれただけだと主張した。
相手側も3対3でしかも平民に破れたあげく自分たちが病院送りになったのが恥になると、
有耶無耶を求めたためにミッターマイヤーにも鶏冠頭（ビッテンフェルト）にもお咎めがなかった。

其れから暫くしてミッターマイヤーは中尉に昇進したが、

俺は査定表に評価が就いたらしく、そのまま中尉のままとあいなり、
鶏冠頭（ビッテンフェルト）も中尉のままだった、
まあ奴は毎度トラブルばかりだから昇進が遅いのもあたりまえか。

結果的に2人揃って、ミッターマイヤーと階級が一緒になった。
ミッターマイヤーは申し訳ないと言ってきたが、
まあこれで奴と連みやすくなったし気にしないさ。

鶏冠頭（ビッテンフェルト）は、『卿に付き合うとトラブルがやって来るな』と言いやがるが、
お前こそトラブルの元だろうと言いたいがな、
まあ奴も根は良い奴だからな。
しかいあの大声は何とか成らないのか、耳が痛くてたまらん！

ミッターマイヤーは来年にはまたイゼルローンへ来ると言っているから、
今度は2人でチームを組めたら面白いかもしれん。

■オーディン　ライニッケンドルフ地区　　ウォルフガング・ミッターマイヤー

我が家に2人の家族が増えて、毎日が幸せに感じる日々。
エヴァ共々、あー幸せだなと思える。

そう言えばロイエンタールはどうしてるだろな。
テレーゼ様にそれとなく気にしててと言われたが、
まさか同じ部隊に研修に行くとは思わなかった。

初めて会ったとき落ち着いた感じの色男に感じたが、
挨拶後に俺の噂を知っているかと聞かれたときは、
テレーゼ様のお言葉を思い出して、『知ってますが気にしてませんよ』と言ったら、
安心したようだった。

その日に飲みに誘われてロイエンタールの行きつけの店に行ったんだよね。
其処では、彼はお気に入りのレテーナ嬢とばかり飲んでいたな。
噂では女たらしと聞いていたが、1人しかはべらかさなかった。

噂も当てにならないとその時は思ったが、
2月後の10月中旬にその事件は起こった。
ロイエンタールが浮気の虫を復活させたようで、
よりによって、3人から求婚されていた上司の娘を誑かしたのだ。

まあ俺とエヴァみたいに真剣な付き合いなら良いだろうと思っていたら、
奴は数度遊んでポイ捨てしやがった、
なんとまーあひどい事をするモノだと思ったが、
奴曰く、女が勝手にやって来るから相手をしているだけだと言うんだ。

見ている限り確かに女から奴に近づいてくる、
例外はレテーナだけだったな。
女がストーカーまがいに奴の職場まで押しかけてくるは、

親の上司からは睨まれるわで、俺も些かあきれかえっていたんだが、
あの日まさかあんな事になるとは思わなかった。

あの日は奴にビッテンフェルトと共に連れられて飲みに行ったんだが。
泣かした女の自称婚約者3人から奴が決闘を挑まれた。
奴は一人で武器使って戦うと言いだしたが、

俺としては、武器なんぞ使えば下手すりゃ死人が出るので、
酔った勢いもあったが、素手で3対2で戦おうと言ってしまったんだな。
向こうもそれならと売り言葉に買い言葉でOKになったんだが、

一人やっかいなのを忘れていた、寝ていたはずのビッテンフェルトが起き出して、
『それなら俺も混ぜろ』と参戦してきた。
お前は関係なんじゃないのかと思いながら3対3での殴り合いの結果、
此方の勝利となったが、その後がやばかった。

ビッテンフェルトが加減を知らず、3人とも病院送りだ。
軍では私闘は御法度だから、これは軍法会議かと思ったら。
奴が全部自分が悪いと、俺たちを庇ってくれたのは感動したね。

結局向こうも恥になると無かった事にしたので、誰も罪には成らなかったが、
奴は昇進が遅れてしまった、済まんと言ったが、
俺と組めるようになるからいいと言ってくれた。

良い奴だよ、聞いてる限りテレーゼ様に対する愚痴も無いし、
パーティーを組むのは面白い相手だ、
2人とも先輩は要らないから名前で呼べと言われた良いことだね。
次回イゼルローンへ行ったら又組みたいモノだ。

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　ベーネミュンデ侯爵邸　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

　ロイエンタールとミッターマイヤーの馴れ初め聞いてみたら、
んっ？て言う事があった。

部署が同じになるのは此方が仕込んだけど。
原作道理の上官の令嬢を誘惑して捨てるのなんて、出来すぎてるんだよね。
３人が決闘を申し込みに行くのも、何故かバーを知ってるし。

怪しいと思って爺様とケスラーに仕込んだ？って聞いたら。
はぐらかされた、これは仕込んだな、何処まで仕込んだかは判らんが。
言わぬが花という訳か。

まあ仕方ない忘れよう、下手に騒ぎたてれば、ロイを追い込んでしまうからね。
私は何も知りません！！
はい知りません！！

そうそうお父様が戦艦をプレゼントしてくれるそうです。
前渡ししたスケッチから設計させたそうです。
今年の４月ぐらいに完成するそうなので、
その時シャンパンを割るのと艦名命名式をするそうですのです。
楽しみですね。

第五十七話　ジジイの恐怖（前書き）

次は明日の予定です。

第五十七話　ジジイの恐怖

帝国暦４８０年１月１２日

■オーディン　軍病院特別病棟

本日お父様を軍病院の慰問に連れ出しました。
傷病兵にお言葉を懸けるのがメインですが、
私はケーフェンヒラー准将に会うのがメインです。

朝からお父様とケッセリング中将達と一緒に病室を廻ります。
異例のことなので病院側も緊張しまくりなのが判ります。
病院長が一々この患者は何処何処で負傷し何処で負傷しましたとか
言ってます。

父様が傷病兵に言葉を懸けると、
傷病兵達は感動して泣き出す者まで出る始末です。
無論私も声を掛けて励ましますよ。

２時間ほど懸けて、全部の病室を廻りました。
いよいよ最後の病室です。
そうです、あのケーフェンヒラー准将の病室です。

本当なら単独で行きたいところですが、
今回は形式張って医院長や取材陣も一緒なんですよね。
夕方のニュースやネットや電子新聞に流れます。

皇族が映像で出るのが可笑しくないかと言うと、
ＯＶＡでアンネローゼの立体映像が雑誌に載るぐらいなので、

父様や私が映像で出るのは普通なんですよね。

看護婦が病室を開けると、
あのＯＶＡで見たケーフェンヒラー准将がベットの起きる角度になって、
起きて居ました。

やっぱＯＶＡの様に沢山の本が置いてありますね。
よくぞあれだけ集めた物だと思いますよ。
恐らく此方へ帰ってきてからも集めたんでしょうね。

「皇帝陛下、皇女殿下、この度はこの老骨をお救い頂き誠に祝着至極に存じます」
事前に台詞のチェックしているのですね、態とらしさ満点です。
顔がなにか企んでいるような感じに見えますよ。

「うむ、ケーフェンヒラー准将、４２年間の長い間、囚われてご苦労で有った」
「皇帝陛下勿体ないお言葉でございます」
「さて、卿の男爵家じゃが典礼省に命じて復活させておる、安心して養生するが良いぞ」

「臣としてありがたき幸せにございます」
やめてくれー、腹の探りあいだよ。
可笑しいぞ、笑いそうになる。

私も意を決して、ケーフェンヒラー准将に話しかけます。
「ケーフェンヒラー准将、長い間お疲れ様でした、
何か必要な物が有れば遠慮無く言って下さいね」

ケーフェンヒラー准将が形式的に、
「皇女殿下勿体ないお言葉でございます」
普通の挨拶ですね、まあ今はこのぐらいですね、
取材陣や医院長達が居ますから。

こうして一旦病室を出て、病院の貴賓室で医院長と父様の話を取材し終了しました。

終了後に再度ケーフェンヒラー准将の病室へ行きます。
今度は既に爺様が待っているのです。
今度は病室外に護衛が守ってこの部屋に近づけない様にしています。

この特別病室自体が遮音力場を発生しているので会話は漏れません。
病室に入ると、不敵な笑みを浮かべた爺様とケーフェンヒラー准将が2言3言話していました。
父様と私が入ると、直ぐに「皇帝陛下には再度のお越しありがたき幸せ」とニヤリとしながら挨拶してきました。

「うむグリンメルスハウゼンよ子細は伝えたかな」
「陛下ケーフェンヒラー男爵は不思議がっておりますな」
「であろうな」

「陛下ケーフェンヒラー男爵が幾つか疑問があるそうですので、お答えをお願いできますでしょうか」
「無論じゃ、答えよう」
砕けた話し方に流石のケーフェンヒラー爺さんも少しひいてるね。

「ケーフェンヒラー男爵、疑問とは何じゃ」

「御意、何故私のような老いぼれを態々呼び戻したのでしょうか、

私としてはあの地で一生を終える気でありましたのに、
名指しで帰国を命じられましたが、其れはいかなる仕儀でありますか」

「またあの様な配布品を使い同盟に罠をお張りになったのは、
どなたの考えですかな」

ほー流石ヤンが帝国で謀略を遣らせたら同盟が大変なことになったろうと、
評価しただけのことはあるな。

「卿を呼び戻したのも、あの罠を張ったのも予ではない」
「なるほどそうしますと、此処に居られるグリンメルスハウゼン子爵閣下ですな」
「儂ではないよ、儂は手伝いをしただけじゃよ」

「なるほど陛下にはよほど優秀なブレインがついていらっしゃるようですな」
「ハハハそうじゃのグリンメルスハウゼンよ優秀じゃの」
「そうでございますな、優秀でございます」

2人とも私を見て言わないで下さい。
ケーフェンヒラー爺さんが変な顔してますよ。

「ケーフェンヒラーよ予の優秀なるブレインとはこの子じゃ」
「は?この子と言いますと、皇女殿下でございますかな?」
「そうじゃテレーゼが全て企んだことじゃ」

あのケーフェンヒラー爺さんが唖然としてますよ。
けど企むだなんて、悪党みたいじゃないですか!

もう少しナチュラルに言って下さいよ。

「まさかその様な年齢で彼処まで悪辣な事が出来るとは」
えーとさらっと悪口が入ってませんか―？
悪辣ですが人道的にしてるつもりですが。

「本当の事じゃ、先頃のエル・ファシルについてもテレーゼの企みじゃ」
「お父様、企み企みって私がまるで悪の大幹部みたいじゃないですか」
「ハハハテレーゼ様似合うやも知れませんぞ」
「そうじゃな似合うやもしれん」

ハイレグ履いて変な化粧して鞭持って、戦闘員に同盟軍をやっつけておしまいって、
言ってるシーンが目に浮かぶのですがね。
２人してからかいまくりすぎです、ケーフェンヒラー爺さんが唖然としてるじゃないですか。
気を取り直して。

「ケーフェンヒラー准将先ほどは形式的な挨拶でしたが、
父様やグリンメルスハウゼン子爵が言うように、
今回の様々な仕掛けは私が考えて子爵に実行して貰ったモノです」

ここは実行者は爺様だと強調です。
「ホホホ、そうですな、実行は儂が行いましたな」
「しかし、殿下は未だ１０歳にも成らないお年のはずですな、
その様な知識が彼処まで出てくるとは、唯々驚くだけですが」

「持って生まれし才能でしょうかね、

これがなければとうの昔に冷たい土の下だったでしょう」
父様が凄く優しい目で見てくれます。

「そうなのじゃ、テレーゼは生まれた時に害されそうになっての、
偶然に助かったに過ぎんのじゃ、それ以来韜晦を続けておる、
こういう謀も表には出ずに予等がやっておるのじゃ」

「しかしその様な事私に伝えてしまい宜しいのですか」
「そこでじゃ、卿の知識と経験をテレーゼの為につかって欲しいのじゃ」
「私の経験や知識は役に立つとは思えませんが」

「いえ聞きましたよ、家庭のことなども知りましたが、
其れについては、私は何も言えません、
しかし２０代で地方行政のエキスパート、軍に入っては情報分析のエキスパート、
是非私の師匠になって頂きたいのです」

「ケーフェンヒラー、予からも頼む、テレーゼを助けて遣ってくれ」
考えてるです。
「陛下、殿下、老い先短い老人でございます、お役にたてるとはとうてい思えませんが、
このように頼まれて断るわけにも行きますまい、
テレーゼ様のお手伝いを致します」

なんとかなりましたね、けど体には気をつけて貰わないと大変です。

「臣は何をすれば宜しいのでしょうか？」
「ケーフェンヒラー准将、取りあえずは体を治すことに専念して下さい、

その間に向こうで研究していた、
ジークマイスターとミヒャールゼンの事に対する研究を続けて頂いて結構です、
軍務省や統帥本部や宇宙艦隊の資料にアクセス出来るように取りはからいますから、
自由に閲覧なさって下さい」

おーやはり驚いてますね、どこから漏れたのかと思ってるようです。
父様と爺様には誤魔化して伝えて起きましたら、平気ですけどね。
普通は怪しまれますよね。

「どこから其の話をお聞きに成られたのですか？」
「エコニアに居た方が偶然その話を知っていたんですよ、なんでも看守から聞いたとかで」
「なるほど、そうでしたか。
お言葉に甘えてこの老骨を直し殿下のお役にたてるようにいたしましょう」

「お願いしますね、それと明日付けでケーフェンヒラー准将から少将へ昇進です、
本当は大将にしたいんですが、流石に無理とのことで取りあえず少将で我慢して下さい。
後肩書きは、私の領地のローエングラム領に作った、
ローエングラム星系駐留軍統帥部第7課課長という事になりますので、よろしくです」

「この事は他言無用で願うぞ」
「御意でございます」
「体良くして下さいね」
「ありがとうございます」

病室を出て歩いて帰る途中いきなり急患が入ってきたとの連絡が来ましたよ。
何故にと思ったら、今回の帰還兵が自殺未遂だって、名前聞くとビックリです。
プレスブルク大尉だそうです。

聞くところによるとブラスターで胸を撃ったらしいが、外れて負傷したそうだ。

あれほど帝国へ帰りたがっていたのに自殺未遂なんて、
なんで何だろうと考えながら取りあえず、病室へ向かいます。

病室前でも『死なせて下さい』とか『一族の恥になる前に』とか聞こえてきます。
父様と共に病室へ入ります。
暴れていたプレスブルク大尉が我々を見た瞬間、
目を大きく見開いて顔面が蒼白になり、言葉が出ない状態になりました。

私は察しが付きました、彼は貴族です、捕虜になったのが一族の恥と言われたのではないでしょうか？
父様も察したようです。
「プレスブルク大尉、卿は折角助かりし命を粗末にするのか」
驚きながら少しずつ話してきますね。
「皇帝陛下、小官は俘虜になりしモノです、このような者が生きていく価値はございません」

「馬鹿者が、予が卿等の帰りを待っておったのじゃ、胸を張って生

きていけばよいのじゃ」
父様かっこいいですね。
「皇帝陛下・・・・・」

「して如何したのじゃ？」

「「お恥ずかしき話なれど、小官は男爵家次男の当たります、
俘虜になり帰還いたしましたが、
一族からは当家の面汚しなぜ自決しなかったと連日の攻めにございます。
それでも皇帝陛下のご恩に酬いる為に恥辱に混じれながら生きて参りましたが、
生みの親からも、同じように見放されました、そして自裁せよとブラスターを渡されました」

酷いですね、親としても人間としても最悪です！！

「プレスブルクよ卿は予の赤子じゃ、予の言葉を信じるのじゃ予に仕えよ」
涙流し始めましたよ。
「皇帝陛下・・・・・・・・・・」

「よいよい、プレスブルク大尉卿はノイエ・サンスーシの警備に参加せよ、
早く傷を治すのじゃ、良いな」

「皇帝陛下、御意にございます」

良い話ですね、けど帝国貴族とは何たる狭量なんでしょうか、
親なら喜ぶのが当たり前なのに死ねとは、嫌な奴です。

第五十八話　発動ローエングラム軍（前書き）

今回は余り良くないです、スランプかな。

第五十八話　発動ローエングラム軍

帝国暦４８０年1月２５日

■ローエングラム星系　ローエングラム星系駐屯軍戦術訓練センター

ローエングラム領に移住した１００万の兵士の休暇も終わり、再志願の意志を表明する日が来た。
多くの予想どうり、９０万人以上が正式に軍に復活することになった。

実際は１００パーセント近い応募率であったが、既に老齢で志願年齢を過ぎている者や、病気な者などを除いて９２万５８７９名が正式に復帰した。
老齢者や病気な者については約束どうり一階級昇進の上、恩給が支払われ始めた。

老齢者でも特に元気で志願する者は、再訓練センターの職員等に採用された。
それほどに１００万の兵の士気は高かったのである。

９２万の兵のうち元々宇宙艦隊所属者は、７７万人であり彼らを訓練する為に、
元々のローエングラム領警備艦隊では１０００隻しかないため、宇宙艦隊から旧式艦が５０００隻ほど移管された。

其れを練習艦として使い感覚を取り戻すことと成った。
旧型艦とはいえ基本的には殆ど変わらないシステムなため、

さほど不自由はしないのであった。

彼らは長い間にスッカリ鈍ってしまったそれぞれの腕を、
基本作業を行いつつ、
航海練習や攻撃練習などを行い元のように戻すのである。

宇宙艦隊所属以外の１５万人は装甲擲弾兵や地上要員でありそれぞれ訓練をはじめる事に成った。
装甲擲弾兵については職責上、装甲擲弾兵総監による許可が必要であったが、
特別と言う事で許可がおり、ローエングラム領専門の装甲擲弾兵と言う事と成った。

全員が約束どおり一階級昇進を果たし真新しい制服と階級章を付け誇りに満ちた顔で汗を流している。
陸戦部隊は早速グランドで走り込みを行っている。
宇宙艦隊所属は訓練センターのシミュレーションで訓練を始めている。

年齢制限で惜しくも志願が認められなかった者達も職員としての職責を全うしようと努力を続けていた。
さらに家族の中からも志願者が多く出ており、
そう言った若者達にベテランなりのアドバイス等を行いっているのである。

彼らは皆、自分や家族を救ってくれた、
皇帝陛下と皇女殿下の御為にと初日から頑張っているのである。

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　小部屋　　テレーゼ・フォン・

ゴールデンバウム

　ローエングラム領に移住した帰還兵１００万人近くも志願してくれて大変な盛況だそうです。
宇宙艦隊から５０００隻もの旧型艦も移管されて訓練開始です。
この艦達は練習後は順次新造艦に切り替えられていきます。

その後で、スクラップや魚礁として、メンヒェングラトバッハ星系デュイスブルク星へ、
送られていくというシナリオです、他の旧式艦も順次送られていきます。

宇宙艦隊も１５０年も戦っていると意外に生き残る艦も有りまして、
そんな艦が艦隊にいると艦隊運動とかが大変なので新造艦と入れ替えが必要なんですよ。
けど軍も役所ですから、損耗等なら意外と簡単に補充されるんですが、
なまじ生き残っていると減価償却等が会計監査で引っかかるんですよね。

其処で今回のローエングラム領警備艦隊の大拡張です。
宇宙艦隊としても旧式艦をローエングラム領駐留艦隊に供出すれば、
新造艦による艦隊のリフレッシュが出来るので万々歳な訳です。
５０００隻以上の艦が動くわけで、
其れでまず旧式艦を受け取り練習艦として使い潰すという絡繰です。

次々に旧式艦を受け取り其れを使い潰したこととして、
メンヒェングラトバッハ星系デュイスブルク星へ送る。
それを向こうの工廠で色々遣るわけですよ、良いサイクルです。

さて、今日集まったのはローエングラム領警備艦隊の指揮官が居ないと言うジレンマを何とかしようと言う話なんですよね。

爺様がやってくれれば一番なんですが、そうとも行かないのがこの人生どうしましょうかね。
父様や爺様やケスラーに聞くしかないですね。

「お父様、ローエングラム領警備艦隊の指揮官ですが誰かいませんか？」
「現在の警備艦隊司令ではだめかの？」
「今のリンデマン司令官は准将ですが帰還兵に対して余りよい考えを持っていません」

「ケスラーそうなんですよね、リンデマンは、ちと石頭なので帰還兵を軟弱者と言う言動でいけないのですよ、それに５０００～６０００隻の長では最低少将出来れば中将が欲しいのです」

「なるほど丁度良さそうな指揮官か、ケルトリング中将はどうじゃ？」
「いえ中将は正規艦隊司令官に内示が出ております」
「グリンメルスハウゼンお主はできんの」
「陛下忙しくて無理ですの」

候補は居ることは居るんだけど、シュタイエルマルクも正規艦隊指揮官に内定だし。
爺様は駄目だし、ケスラー達は階級が足りない。
モブキャラを持ってくるしかないのかな。
あっメルカッツはどうだろう、彼なら物わかり良さそうだ。

「ケスラー、ウィリバルト・ヨアヒム・フォン・メルカッツ中将は今何処に居るのかしら？」
「メルカッツ中将ですか、暫しお待ちを」
端末で調べてますね。

「ヴェガ星系の警備隊司令官ですね」
「完全な閉職ですね、よほど嫌われているのかどうなんでしょうね？」

知ってますけどね、ミュッケンベルガーと同期なのに何故か田舎廻りばかりで閉職を廻りまくる。
最後は脅されたあげく謀反人に成って、ヤンの所で厄介になり戦死したということです。
能力は抜群ですし、人格も申しぶんない、ここはスカウトですね。

「どうであろうかの」
「決めました、メルカッツ中将をスカウトです、艦隊司令に成ってもらいましょう」
「良いのか？」
「はいお父様お願いします、メルカッツ中将をローエングラム領警備艦隊司令官にしてください」

「ケスラー引き抜いても平気かの？」
「大丈夫かと思います」
「陛下平気でしょうな」

「ではエーレンベルクに伝えておこう」
「お父様、お願いしますね」

帝国暦４８０年1月２７日

■オーディン　軍務省　軍務尚書室　ハーロルト・フォン・エーレンベルク

先日陛下からローエングラム領警備艦隊司令官に、ウィリバルト・ヨアヒム・フォン・メルカッツ中将を充てたいと連絡が有り、部下に調べさせたところ、移動に全く問題がない為、辞令を交付することにした。

第五十九話　種まきこそ必要です！

帝国暦４８０年2月8日

■オーディン　ベーネミュンデ侯爵邸　大広間　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

本日私の9歳の誕生日です。
本来ならあまり大っぴらにしたく無いんですが、
ある目的の為に人数を呼んでいます。

ある人物を此所に招待し近況を聞くためなんですよ。
姐さんとメックリンガーが会っているかとかも聞けますが、
それよりもあの事件の当事者の一人ハルテンベルク伯爵令嬢エリザベートを招待する為、
その他大勢をダミーに呼んでいるのですよ。

そのほかに指向性ゼッフル粒子持ち逃げ犯ヘルクスハイマー伯爵令嬢マルガレータも呼んでますよ。
後々の仕込みのためにね。
けど凄く可愛いです、私より3歳年下ですから御年6歳ですね。

まずは普通にパーティです。
呑んだり食べたり、
踊ったり話したりしながらまったりと過ごします。

頃を見計らって、まずは今年２０歳になり、
男爵家当主として認められたマグダレーナ姐さんに話を聞きます。
姐さん４１０年物のワインを優雅（ガブノミ）に呑みまくってますね。

「マグダレーナお姉さん、聞くところによると、
芸術家の卵のパトロンをしているそうですね」

あらって感じで姐さん答えてくれました。
「ええ、最近7人の芸術家の卵を育ててますのよ」
あっけらかんですね。
メックリンガーはどうなんだろう、姐さんとの世間話でも名前を聞かないんだよね。

「他には居ないんですか」
「一人友人として有能な方がいますわよ」
おっメックリンガー来たー！！

「レイトマイエルという画家なのですけど昨年の個展で知り合いましたのよ」
は??メックリンガーじゃないんですか???

「本来なら別の画家の個展が開かれるはずでしたのに、
其処方が急に仕事で半年ほど留守にするらしくて中止になってしまったんですわ、
其れで代わりと言っては何ですけど、
彼の個展へ詣りましたら話が非常に合いましたのよ。
それ以来親しくしておりますの」

は?もしかしてメックリンガーフラグ折れた?
それともこれから会うのか?
レイトマイエルってラインハルトがブリュンヒルトのお礼に賄賂で渡した5万帝国マルクする絵の作者じゃないのか?
えええええ!原作じゃ姐さんの知り合いにそんな人間の話でなかっ

たぞ？

此処は聞かないと駄目だ。
「お姉さん、その中止になった個展の作者ってなんて言う方なんですか？」
少し考えてから。
「えーと、確かメックリンガーと言いましたわ」
わーもう完全にフラグ折れてます。

「お姉さん、そのメックリンガーの個展とか次回は行くんですか？」
「そうね、今はレイトマイエルや他の7人が忙しいですから、当分は行かないですわ」

うわーーー決定的ですね。もうメックリンガーに興味が全然無いみたいです。
だからか、噂にも乗らないし。サロンでも噂も流れないのは、姐さんが話をしないから流れないんだ。

あーそうか、メックリンガーを一昨年の救恤品輸送と昨年の俘虜交換で参謀にして派遣したから、
個展が開けないで姐さんとの遭遇フラグが折れたんだ！
どうしよう、姐さん経由でメックリンガーを引きずり込もうとしていたのに駄目じゃん！

メックリンガー引き込み計画を変更しなきゃいけなくなった。
どうしようか？？
仕方ない取りあえず次の仕込みをしよう。

「お姉さん、ありがとうでした」
「いえいえどう致しまして」

姐さんまた呑みに行きましたよ。

気を取り直して、ハルテンベルク伯爵令嬢エリザベート嬢を探して挨拶です。

エリザベート嬢はＯＶＡで見た病的に痩せて幸薄そうな姿じゃなく、生き生きと輝くような美しさで優雅ですね、希望に満ちた顔をしています。

ＯＶＡの姿はやっぱり、カール・マチアスを失い、無理矢理リューネブルクと結婚させられたからなのですね。

「エリザベートさん、初めましてこの度は私の誕生会に参加頂きありがとうございます」

いきなりの挨拶に驚いたようですが挨拶してくれます。

「皇女殿下におかれましては、この度私のような者をご招待頂き誠にありがとうございます。殿下のご生誕記念を心よりお祝いいたします」

んーやはりお嬢様ですね、話し方が未だ未だ堅いですね。

其処が可愛いんですが。

「エリザベートさんありがとうございますね」

「殿下ありがとうございます」

「エリザベートさん堅苦しい挨拶は無用ですわよ、もう少し軽めにお話しましょうね」

「はい、しかし宜しいのでしょうか？」

「いいのですよ、私的な誕生会ですから」

「殿下解りました」

よしよし、掴みはＯＫですね。

「エリサベートさん見たところ凄く嬉しそうですわね」
「殿下判るのでございますね」
「何か嬉しいことが有るのですね、教えて下さいませ」

「私事でお耳汚しになるかも知れませんが、私この度婚約いたしました」
おっ来たーーーーー！
「まあそれはおめでとうございます」

「殿下ありがとうございます」
おだてて聞き出しますよ。
「いえいえ、お相手はどなたなのですか？」

「はいフォルゲン伯爵令息のカール・マチアス様と申しますの」
やっぱり来たー、サイオキシン麻薬の元締めだ！
これで面白い事が出来るぞ！！

「まあそのマチアスさんはどの様なお仕事を為さってらっしゃるのですか？」
「軍で後方勤務をしてますの」
此処はさり気なく生活を聞かないとだめですね。

「ご生活はどの様に為さるんでしょうか？」
「はいマチアス様が素晴らしい邸宅と、
すてきなすてきな結婚生活をしようねって言ってくれていますの」

あーーーーー、完全に目がハート型です、完全に恋する乙女ですね、
どうやっても軍の大佐相当で貴族の４男で大学７年もかかって卒業した男が、
稼げる額じゃ無いのに、完全に判ってません。

「エリザベートさんお幸せになってくださいね」
「殿下ありがとうございます」

完全にマチアスは、生活の為にサイオキシン麻薬密売ですね。
今の時期だとハルテンベルク伯爵は未だ気がついてないはずだから、
ケスラーに調べさせて、証拠を握ろうそしてハルテンブルク伯爵が
手を打つ前に、
呼び出してお父様も知っている言い、
ハルテンベルク伯爵とフォルゲン伯爵の首根っこを押さえましょう。

マチアスは色々利用価値がありますから、
殺されないように守りながら使いましょう。
フォルゲン伯爵は別として内務省警察総局長で優秀な人材であるハ
ルテンベルク伯爵は是非引き込みたいですからね。
エリザベート鴨が葱を背負ってくる状態ですよ。

さてさて続いて、ヘルクスハイマー伯爵令嬢マルガレータを探しま
す。
まあ6歳ですから、眠そうにお座りしてますがＯＶＡどおりの可愛
さですね。
「こんにちは、マルガレータちゃん」
気がつきましたね、お付きの女官が私を見て、挨拶をするように諭
してますね。

「皇女殿下におきましてはご機嫌麗しく、
ご招待ありがとうございます」
「どう致しまして、これからも宜しくね、
これからも遊びに来て下さいね」
「はい、よろしくお願いしいたします」

んー礼儀正しいですね、陰謀企むヘルクスハイマー親父の娘とは見えませんね。
母親に似たのでしょうかね。

そのあといろんな方と話しながら一日が終わりました。
さああて、仕込みまくるぞ！
しかしメックリンガーどうしようか？

第五十九話　種まきこそ必要です！（後書き）

謀略だと筆が進みますね。

第六十話　ヤン・ウェンリーのエコニア滞在記（前書き）

ヤンの名誉回復事件

第六十話　ヤン・ウェンリーのエコニア滞在記

宇宙暦７８９年1月～3月

■タナトス星系エコニア星同盟軍捕虜収容所

はあー、ハイネセンを追い出されて、
エコニアの収容所副所長という職に付くことになりここへ来たけど何もないところだ。

宇宙港に迎えに来てくれたパトリチェフ大尉は恰幅の良い健康そうな青年士官だった。
挨拶後、空港から地上車で出発してからは無言が続いた。

私に彼が話しかけて来たのは出発後正確に2分後だった。
「正直なところ、あまり前途ある有望な士官は、此処には赴任してこんのですよ。
私を含めてですな、ヤン少佐もあの噂で赴任なさったのですか」

パトリチェフはヤンを見て気の毒そうな顔をしていた。
「まあそんなところかな」
「大変なことですな」
「まあ仕方ないことだよ」

「後で街をご案内しますよ」
そう言ってくれたパトリチェフの身分は参事官であるという。
昨年までは参事官補だったが、所長のいきなりの退職で繰り上がりになったそうだ。

ヤンの仕事の助力をして貰うに、能力は未だ不分明だが、
パトリチェフは気質は邪悪にほど遠そうで、
ヤンとしては一安心と言うところであった。

「本当は大規模な緑化計画が実施されて、
住民もとうに１００万人は超しているはずなんですがね」

実際に、この惑星に居住しているのは、
民間人が１０万６９００人、軍人が３６００人だけである。
昨年までは帝国軍の捕虜５万５４００人居たのであるが、
現在は皆帰国してしまい今は０人だそうだ。

６６４平方キロある収容所も今は住人も居らずガランとしているそうだ。

名ばかりの宇宙港から収容所まで、地上車で１時間を要した。
収容所の門から所長室のある本部まで、さらに地上車で１０分。
玄関から所長室まで徒歩と待機を５分ずつ。

ようやく所長と対面だ。

「ヤン・ウェンリー少佐です」
「宜しく、私はジェームズ・ジェニングス中佐だ、
ヤン少佐、貴官の噂は色々聞いておるが、私はそんな事を気にせん。
貴官が職責を全うしてくれることを求めるだけだ」

「はあ誠心誠意努力いたします」
「頼んだぞ、なんと言っても前所長のコステア大佐が急に退役したのと、
会計係長のポートランド大尉も退職したうえで、

捕虜を帰国させたのでゴタゴタしているので、
書類等の処置が溜まりまくっているのだよ」

「小官はどの様な仕事を？」
「うむ、コステア大佐は、就任以来書類を自分で処理してきたのに、
家族のことで急に退役してしまったので残務処置が大変残ってしまっている。

会計に関しても所長と大尉で決算していたから訳の判らん状態なのだよ。
その上、私は此処に就任して1年5ヶ月目なんだが、
いきなりの昇格で、上との折衝等も行わねばならなくなり忙しすぎて処置出来んのだよ、

其処でヤン少佐とパトリチェフ大尉に書類処置をして貰いたいということだ。
コステア大佐が使っていた所長室は、
そのままにしてあるから其処で作業を行ってくれ」

「はあ判りました」
「まあ今日は疲れただろう、明日から取りかかってくれ」
「了解しました」

自室に案内され従卒に紅茶を頼み暫く寛いでいると、
夕食だとパトリチェフ大尉が呼びに来た。
しかし士官食堂では良い席だが、ヤンにとっては鬱陶しい席だった。

収容所所長のジェニングス中佐に近い席のことである。
元々ヤンは美食家じゃないので士官食堂で問題ないが、
収容所所長と3メートルしか離れてないテーブルでは、

本のページを捲りながら紅茶をゆっくりすするという気分になれないのである。

居心地の悪い食事を終え、部屋に帰る途中、廊下の隅で若い男女が囁くように会話する声を聴いた。
男性兵士と女性兵士が、深刻な表情で何か相談していたのだが、ヤンの姿を見でさらに隅へ移動してしまい、彼らの姿はヤンの視線から直ぐに消えてしまった。

他人の恋愛をざたを妨げるつもりも無かったので、
ヤンはそのまま自室へ歩き去ったのだが、
押し殺したような男の声が耳を掠めた。

「ふん、話したって無駄さ。士官学校出身のエリートさん、しかもペテン師に、下積みの兵士の苦労や心情がわかるかよ!」

ヤンにしてみれば士官は別として一般兵の心情を見た気がしたのである。

翌日からヤンはパトリチェフと共に膨大な書類の山がある元所長室で仕方なしに整理を始めた。
さらに時折新任の会計係のバリング中尉が書類を持ってきて指示を受けに来る。
ヤンにしてみればノンビリと出来ると思った星が、
やたら勤勉さを求める土地だったという罠であると思えて成らないのであった。

2ヶ月が過ぎ、いい加減書類の山から解放されたい、
火でも付けて燃やしたいと思い始めたある日。
バリング中尉が会計記録簿におかしな記載を発見したと伝えてきた。

「少佐殿」
「どうしたんだい中尉」
「会計記録簿をチェックしていたのですが、購入した備品や食材の数や質が合わないデーターが多数出てきたですが」

ヤンにしてみれば厄介ごとがまた来た感じである。
「どれどれどんな感じだい？」
「はっ、7年ほど前から納入される品物の質がそれ以前より悪くなってきているのです」

「しかし其れは、予算措置の結果じゃないのかい？」
「いいえ、調べた結果ですが、予算は此処数年間は捕虜1人当たりに対しては殆ど変わっておりません」
「そうしたら物価が上がったのでは？」

「前線部隊所属の少佐殿はご存じないかも知れませんが、この星系では製造業が殆どありませんから、物品は納入業者が他の星系から搬入するのですが、その際、基準品納入を義務づけられています。所が私が調べた限りでは基準品の型落ちや、アウトレット、よく似た類似品が納入されています」

「なるほど、中間でピンハネしている業者が居るわけですな」
「そうなると、納入業者を調べなければならないね」
「其処なんですが、この事態が起こった7年前というのは、前所長コステア大佐と前会計係長ポートランド大尉が就任してからなのです」

「つまり中尉は、この不正に前所長と前会計係長が関与している可能性が有ると言うわけだ」
「はっ誠に遺憾ながら、この書類を見て気がつかない事はあり得ないと思うのです」
「どれどれ、ふむふむ、なるほど、はー、ヤン少佐これは勘づかない方が可笑しいですわ」

そう言ってパトリチェフが書類をヤンに渡す。
短なる数字の羅列に過ぎなくはないが、
それにかかる費用と品物が明らかに以前の物と違う書類である。

「と言う事は、コステア大佐とポートランド大尉が急に辞めたのもこれ繋がりかもしれないね」
「なるほど、いきなりすぎましたからな」
「この３人の中で以前から居るのは大尉だけだ、最近何か変わったことは無かったかい？」

考え始めるパトリチェフ。

「そう言えば、去年捕虜交換前に帝国が捕虜に救恤品を送ってきたのです。
その中身に４６３年物のワインが入っていたんです。
所が２袋に１本の割合でしか入ってませんでね、
配る時に面倒だった事ぐらいですかね」

「待って下さい、其れは可笑しいですね」
「中尉どうしたのかな？」
「はい、私が以前居たマーロヴィア星系の収容所では１人１本の配給が行われました、
駐留艦隊司令官ビュコック准将閣下が、

ネコババしようとした、収容所所長を一喝しまして、無事全員に配給されたのですよ」

「なるほど、本来1人1本なわけですな」

「いやあ、あの時のビュコック司令官の台詞は今でも思い出しますが惚れ惚れします」

「どんな台詞だい？」

「はっ、『仮にも自由惑星同盟軍に所属する将兵ならば誇りを持て、捕虜に送られて来た救恤品を掠め取る盗賊まがいの行為をするなら、儂が1人残らずマーロヴィアの太陽に投げ込んでやる』こう仰いました。

「ビュコック准将か、そう言えば准将も第二次ティアマト会戦に参加していたんだったな」

「少佐殿よくご存じで、閣下からは時折その話をお聞きした事もあります」

「へー其れでどんなはなしだい？」

「ヤン少佐、今は不正のことをしませんとだめですな」

「すまんすまん大尉、そうだったね。

中尉また今度聴かせてくれないか」

「少佐殿いつでもどうぞ」

「話を戻すとして、本来なら捕虜1人に対して1本が定数だったと言うわけになるのか、

でそのワインは市価でいくらするんだい？」

「元々帝国のワインはフェザーンからの輸入に頼ってますから、今回の４６３年物ワインはハイネセン価格で２０００ディナールします」

「２０００ディナール！それほどですか」
「凄いね其れが５５４００本、年金何年分になるだろうね」
「ざっと１億１０００万ディナールを超します」

「其れが半分消えたわけだ」
「そう言う計算になります」
「そして、会計のピンハネか、大がかりな不正があったと言うわけだ」

「なるほど」
「よし所長に報告しよう、大尉と中尉は手伝ってくれ」

翌日、ヤンにしては珍しく勤勉さを見せ書類を作り上げて所長の元へと向かった。

「ジェニングス所長」
「開いている入りたまえ、
ヤン少佐どうかしたかね？」

「はい、小官とパトリチェフ大尉、バリング中尉で書類整理をした結果、
大規模な不正を発見しました」
「なに、不正だって」

「はい、前所長と会計係長が就任直後から、
物品の質が低下したにも関わらず、納品書にはその旨が無く
さらに各種備品も規格外の物が使用されていることが判りました」

「一大事だぞこれは」
「さらに、捕虜に救恤品を渡した際に、ワインがマーロヴィア星系の収容所では1人1本の配給が行われましたが、
此処では2人に1本でした、つまり半数を横領した可能性が有ります」

「うむー、これは大変な事だ、ヤン少佐達だけでは手に負えない事だ。
至急タナトス警備管区に報告を入れるのだ」
副官が所長のメンツが潰れますがと小声で言うが。
ジェニングス中佐は副官に自分のメンツよりよほど大変な事だそんな小さな事気にせんと怒った。

「ヤン少佐貴官が詳しく報告を頼むぞ」
「了解しました」
早速所長が連絡を入れる。

管区司令官マシューソン准将は、参事官のムライ中佐と共に惑星間通信の画面に現れた。
どうやらエコニアだけでなく、この管区全体が、覇気の欠乏状態に有るようにも思える。
妙に疲労した雰囲気を有する退官間近の初老男は、つやのない声をおしだした。

「ジェニングス所長大変な事とはどんなことだね？」
「はい詳しいことは此処に居るヤン少佐に説明させます」
「私が、マシューソンだ。ヤン・ウェンリー少佐か、
名は聞いておる、まあ災難だったな」

ヤンは3人で発見した不正について彼にしては珍しいぐらい勤勉に詳しく報告した。

「ふむ。それが本当なら一大事だ、調査の必要があるな」
その結果エコニアに管区司令官代理として参事官ムライ中佐が派遣されることとなった。
中々に手きびそうに見え、堅苦しげな表情をした、堅苦しげな男。
其れがムライ中佐の印象だった。
この印象が正しければ、ヤンとしては苦手なタイプに直面することになる。

「宜しい小官が惑星エコニアに到着するまでに更なる資料の照査をお願いする」
ムライ中佐が3日後にエコニアに到着する事を確認して、ジェニングス所長は通信を終えた。

「ヤン少佐、参事官が来るまでより一層の照査をするように」
「了解しました」

また3日間も忙しいのか。
部屋に戻るとパトリチェフ達が待っていた。
「ヤン少佐、如何でしたか？」
「ああ所長が管区に連絡して調査にムライ中佐が来るんだ」

「ムライ中佐ですか」
「んなにか問題でもあるのかい？」
「いえ、聞きおよぶ所では、汚職と冗談が大嫌いなおかただそうで」

「秩序と規則が服を着ている？」
「ＴＶ電話で見て、そう思いましたか」

「そう思った」

「第一印象が正しい、珍しい例ですな」
「多数例への変更がきかないものかねえ」
「まあさらに3日間照査に努めろとのお達しだ、やるしかないんだよね」

「まあしかたがないでしょうな」
「少佐殿頑張りましょう」
「少佐が照査か下手なダジャレだね」

「・・・・・・・・」
「・・・・・・・・」
ヤンのダジャレは受けなかったようだ。

当初より早く2日後に到着した、ムライ中佐に挨拶後、
此処10年分の勤勉さと交換に纏めた資料を説明しながら、
会議室でムライの連れてきたスタッフと共に実に1週間も調べた結果、
前所長と前会計係長の不正が確定されたのである。
フェザーンの北極星銀行に匿名の秘密口座が有ることさえ調べきったのである。

直ぐさま、マシューソン司令官へ連絡が行き、
司令官から軍上層部へと連絡が行き、
事件は大事に成っていくのである。

直ぐさまコステア大佐とポートランド大尉の収監が命令されたが2人とも既に家族共々、
フェザーンへ出国しており逮捕できなかった。

さらにフェザーンの自由惑星同盟高等弁務官ラファエル・ラ・フォンテーヌ氏が引退した後、高等弁務官になった、チャン・ヨーステンは賄賂政治家として囁かれた事もある人物であり、大佐から裏金を１０００万ディナールを受け取り知らぬ振りを決め込んだのである。

同盟政府に提出した報告書には【コステア大佐とポートランド大尉両人はすでにフェザーンより帝国へ出国した模様】と書かれていた。納入業者も既に廃業しており代表者も単なる名義貸しだった為、追跡が不可能であった。

結局捕まったのは、末端の兵や従業員であり彼らから殆ど情報が得られなかった。

事件終了後ヤンはムライを率直に賞賛した。

「おみごとでした」

「私は万事、型どおりの考えしか出来ない男でね。型は提供するが、柔軟に修正を施すのは、他人に任せたいと思っている」

ムライ中佐は、相変わらず堅苦しい表情でベレーの角度を直した。この人は、照れ屋と言う奴かも知れないなと、ヤンは思い好感らしきものを感じた。

ヤンは基本的に軍隊と言う存在を軽蔑していたが、組織はともかく個人的には尊敬や信頼に値する人物は結構居るものである。

事件が一段落して、暫くしたある日、同盟首都ハイネセンから、

遠路はるばるという感じでＦＴＬが入った。
「アレックス・キャゼルヌ中佐という人からです」
と通信担当の中尉に言われて、ヤンは通信室へ飛んでいった。
砂嵐に襲われたようなざらつく画面の中に、士官学校の先輩がいた。

「どうも大変だったらいいな、ヤン」
「人生を退屈せずにいられるのは幸運だと思ってますよ」
「責めんでくれて、ありがたいと思うよ」

「まずニュースだ。アルフレッド・ローザス提督が今年の３月１日に付けで元帥に昇進する事が正式に決定したよ」
こうして７３０年マフィアは全員が元帥に叙せられる事と成った。
ヤンは頷いた。アルフレッド・ローザスは、業績といい人柄といい、元帥の階位に相応しい人物で有ったと思う。

「もう一つ決定した事がある。お前さんの召還だ」
「はあ・・・・？」
「帰ってこいよハイネセンへ。俺の結婚式に間に合うようにな。どさまわりも、さしあたって中断だ」

キャゼルヌ中佐が今回の事件を利用してハイネセンへ早急に戻れるように手配してくれたのだ。
こうしてヤンは、共にハイネセンへ帰還命令の出た、パトリチェフ大尉とエコニアを離れたのである。
予定より３ヶ月ほど早いハイネセンへの帰還であった。

ヤン達の指摘でワインの横領が表沙汰になり国防委員会でも調査が行われる事になった。
調査は秘密裏に行われた結果、
ジャムシード星系同盟軍補給敞パーヴェル・コヴァリスキー大佐が

腹心の部下１００名と共に、
２０～３０万個を横領している事が発覚した。

憲兵隊が収監に行く前にコヴァリスキー大佐と腹心の部下１００名と家族共にジャムシードから、
輸送艦で逃亡したが事故により全員が死亡した。

その結果、今回の事件はパーヴェル・コヴァリスキー大佐が主犯であり、
コステア大佐以下各地の収容所の関係者の横領事件として発表されたのである。

救恤品横領事件による、政府、軍のイメージの低下を懸念して政治屋達は、
その事件を暴いたヤン・ウェンリー少佐の手腕を高く評価し褒め称えなければ成らなかった。

その褒め称える政治屋はかなりの人数が、自らに火の粉が来ることなく終わった事に安堵感を得ていた。
又一部の者達は旨く始末できたとほくそ笑んでいたのである。

第六十話　ヤン・ウェンリーのエコニア滞在記（後書き）

誤字等修正しました。
ご指摘いつもありがとうございます。

増補もしました。
最後にも増補しました。

第六十一話　新たなるたくらみ（前書き）

喉が痛いです。

エリーゼはりーさんから頂いたお名前です、りーさんありがとうございました。

第六十一話　新たなるたくらみ

帝国暦４８０年2月１０日

■オーデイン　オーディン育英病院　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

本日エヴァちゃんと赤ちゃんが定期検診です。
私も色々用事は有りますが、何はともあれ会いに来ています。
フェリックス君とエリーゼちゃんです。

フェリックスは私が付けた名前ですね、エリーゼはエヴァンゼリンと私テレーゼの名前を合体させた名前です、ミッターマイヤーとエヴァちゃんが『恐れ多いのですがテレーゼ様のお名前の一部を使わせて下さい』と言ってきたので、二つ返事で喜んでＯｋを出しましたよ。

２人とも大変喜んでくれました。
それでエヴァンゼリンの【エ】と【リ】をテレーゼの【ーゼ】に足してエリーゼになったわけです。
良い名前でしょう。

今日はミッターマイヤーも来ています。
実は今年の１０月の人事異動まで、
ミッターマイヤーはローエングラム駐留軍オーディーン事務局スタッフにしてあるんですよ。
実質仕事はありません、所謂お疲れ休暇と育児休暇中にさせているんですよ。

ミッターマイヤーとエヴァちゃんとお話ですね。
「ウォルフ、エヴァちゃんごきげんよう」
「「テレーゼ様わざわざのお越しありがとうございます」」
「2人ともっと楽にして下さいね」
「はっ」
「はい」

「フェリックス君良いに子にしていたかい、
エリーゼちゃん泣かなかったかい」
「あぶ、あぶぶ」
「あ@お一、ああぶ@」
「お返事が出来るのね、偉いぞ、フェリックス、末は宇宙艦隊司令長官だぞ」

「テレーゼ様早いですよ」
「んー早いかな、じゃあウォルフの方が先に宇宙艦隊司令長官だよ」
「まあ、あなたが長官じゃ大変ね」

「エヴァちゃん、ウォルフはいずれ出世するよー、泥舟に乗った気で安心しなさい」
「テレーゼ様それじゃ沈みますよ」
「だね」

「しかしフェリックス君とエリーゼちゃん大きくなったね」
「はい、おかげさまで」
「皇帝陛下、テレーゼ様をはじめ、多くの方のおかげでございます」

「良いの良いの、ウォルフとエヴァちゃんはお兄さんお姉さんみた

いだし、
フェリックス君とエリーゼちゃんは弟と妹のような物ですもの」
「「テレーゼ様勿体ないお言葉です」」

「いいえ、そうやって付き合って欲しいんです。
私の兄も弟も赤ちゃんの時に死んでいますから」

「「テレーゼ様・・・・・・・」」
「お願いね」
「はい判りました」
「はっ」

「湿っぽい話はこれでお仕舞いね」
「はい」
「はっ」

「お願いがあるのですが、
フェリックスとエリーゼの髪の毛を初めて切るときにその髪を欲しいのですが」
「髪の毛ですか？」
「そう髪の毛」

「髪を何かに使うのですか？」
「そうなんです。昔の風習で生まれてから一度も切っていない髪の毛で筆を作ると、
運がよいと言うのが有ってそれで2人のを作りたいのですよ」

「テレーゼ様が宜しいのなら是非にどうぞ」
「ありがとうです、今度切る日を決めましょうね」
「はい」

「それと、ウォルフ」
「なんでしょうか？」
「今度グリンメルスハウゼン邸でシミュレーションの相手をして欲しいのです」

「シミュレーションですか、どの様な物を？」
「ん、士官学校でやる戦術シミュレーションですね」
「テレーゼ様は其れを行うのですが」

「そう、興味があってコンピューター相手にやってるんだけど、成績優秀なウォルフに相手をお願いしたいのですよ」
「はあ、小官で良ければお相手します」

「よかった、じゃあ今度都合の合う日でお願いしますね」
「判りました」

「お邪魔しました」
「「テレーゼ様ありがとうございました」」
「いえいえ」

帝国暦４８０年２月１２日

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　小部屋　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

本日は、これから行ういろんな事を話し合いです。

「テレーゼ様今回はどの様な事で」

「また何か考えましたかな」
「楽しみじゃの」

3人3葉ですけど、顔はにやついてますね。
「先日の誕生会で面白いネタを仕入れました」
「なんじゃな」

「ハルテンベルク伯爵令嬢エリザベート嬢て方をご存じでしょうか？」
「聞いた事はあるの」
「で何か有ったのかの」
「彼女が最近婚約したのですが、その相手が問題が有りそうなんですよ」

「どの様な事でしょうか」
「相手なんですが、フォルゲン伯爵令息のカール・マチアスって言うのですが」
「聞かぬ名じゃな」

「怪しすぎるんですよ、今仕事が軍で後方勤務で有りながら、生活が派手になりつつある様なんですよね、で私の感だと怪しいと感じたんですよ」

「テレーゼ様の感は良く当たりますからな」
「でケスラーにカール・マチアスの身辺調査をお願いしたいのですよ」
「テレーゼ様が仰るなら調べてみましょう」
「ケスラーお願いします」

「それとイゼルローン回廊付近で直径６０ｋｍほどの小惑星があっ

たらピックＵＰして下さい。
それとこれは極秘で遣って欲しいのですが、太陽系で６０～１００ｋｍほどの小惑星もお願いします」

「はい判りました」
怪訝な表情ですねケスラー。
「あと秘密研究所に、小惑星クラスの天体とイゼルローンクラスの人工天体をワープさせたり自力移動出来る様な研究をさせて下さい」
「移動要塞ですか」

「近いです」
「ふむ」
「なんぞ面白い事のようじゃな」

「出来たら教えますね」
「判ったわい」

「小惑星ですが中を刳り抜いて其処にワープエンジンを添え付けるとか出来るかどうか研究をお願いします。あとは表面を流体金属で覆えるかどうかもお願いします」

「面白そうですな」
「出来たら面白くなりますよ」
「ふむふむ」

「あとは小型の隕石にロケット付けた隕石ロケットの研究もして下さい」
「御意」
「ではケスラー大変だけど、先ほどの事と同じでお願いします」

「お父様にもお願いが」
「なんじゃな」
「はい今度オーディンに劇場を作りたいのですが、
その設計コンペを行いたいのですよ」

「ふむ、何か有るのかな？」
「はい市井や下級役人に隠れている優秀な人材を発掘する為です」
シルヴァーベルヒとか応募してきそうじゃないですか、
そしてゲットです。

「あとその劇場に飾る絵画のコンクールも行いたいのです」
「それも同じかの」
「はいそうです」
これは、メックリンガー対策なんだよね。

「テレーゼ様は劇場で何を為さるのですかな？」
「帝国全域から１０代の少女を募集して、歌劇団を作るのです」
「なぜじゃな？」

「帝国兵士の慰問の為に歌と踊りで楽しますのです」
「しかし、集まりますかの」
「儂の肝いりで募集すれば良いのではないか？」

「えーとですね、お父様の肝いりにすると、
又ぞろ新たな寵姫の候補者選出かと思われるので駄目ですね」
「ハハハ陛下駄目ですな」
「そんなに信用がないかの」

「いえいえお父様は大丈夫なのですが、たちの悪い小役人がいます

からね」
「どの様に致しますか」
「普通の後ろ盾では、有力貴族が妾にとかと言ってきたら断れませんからね、
ここは私が自分の劇団を欲しいと言う事で矢面に立ちます」

「危険じゃないかの」
「暫くに間は、普通に劇場で公演させます、それなら単なる趣味だと思われるでしょう」
「そうなさるが宜しかろう」

「お願いします」
「任しておきなさい」

正しく銀河帝国歌劇団だね。

第六十二話　シミュレーション作戦（前書き）

皆さん応援ありがとうございます。

第六十二話　シミュレーション作戦

帝国暦４８０年2月２０日

■オーディン　グリンメルスハウゼン子爵邸　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

本日ミッターマイヤーと以前約束したシミュレーションを行います。
朝から開始するので大変です、参加者は私、ミッターマイヤー、爺様、ケスラー、侍従武官のブレンターノ大佐、ヴィッツレーベン少佐、バウマイスター大尉、ディーツゲン中尉の８名です、ケスラーは運良く参加できました。

侍従武官のブレンターノ大佐、ヴィッツレーベン少佐、バウマイスター大尉、ディーツゲン中尉の４人は陸戦専門なので、主にサポートを担当です。

まあ爺様も軍事に関しては超素人ですから、見てるだけですがね。

まずは私がコンピューター相手にヤンがワイドボーンを破った方式で最初に補給線を絶ちその後は防御をしまくりながら、相手の補給切れの後で逆襲する事をして見せました。

ウォルフが画面をじっと見ながら、
「補給線の断絶を行い防御に徹する方式は理にかなってます」
「けどね、相手がウォルフなら防御に移る前に潰されていると思うよ」
「テレーゼ様買いかぶりすぎですよ」

「と言う事で、戦場のパターンこっちで指定するので相手をお願いします、
ケスラーとウォルフが出来る指揮官で、ブレンターノ、ヴィッツレーベンが普通の指揮官役でお願いね」

「「「「御意」」」」

まずあれですね、アムリッツァ星域会戦で行きますか、多少アレンジして。

「まず恒星上に青軍の１５０００隻の艦隊が２個布陣、
恒星前面へ赤軍の１５０００隻の艦隊が３個布陣、
青軍右翼は私、左翼はブレンターノ。

赤軍右翼がケスラー、中央がウォルフ、左翼がヴィッツレーベン。
赤軍左翼部隊は戦闘開始時に９時方向へ移動後、
青軍右翼部隊へ２時方向から突入して下さい」

「「「「御意」」」」

早速開始です、ヤンがやったように、恒星に融合弾を投下、
恒星風に乗って急上昇です、疾風ウォルフの艦隊に急接近し下方から猛攻撃です。
疾風艦隊が後退します、その隙を突いて此方も一旦後退です。

シュワルツ・ランツェンレイターよりは時間がかかりましたが、
ヴィッツレーベン艦隊が２時方向から突っ込んできました。

此処でもヤンの真似です。

装甲の厚い戦艦を並べて防御壁を築きその隙間から砲艦や小型艦の主砲で迎撃です、
見事に凌ぎきりました、しかしやはりと言うか、ブレンターノ艦隊がボコボコにされます。
其処へヤンのように背後のヴィッツレーベン艦隊を叩きます。
その後はヤンのようにはせずに、疑似突撃で引きます。
何とか生き残りですがヤンほどは出来ませんね。
未だ未だ未熟ですね。

「ウォルフどうですか？」
「そうですね、恒星風を使い急上昇は参りました、
さらに戦艦を使い防御壁を築くのも良い案だと思います」

「結果は同数を失った感じですな」
「まあ仕方ないわよケスラー」

「小官が止めきれずに済みません」
「ブレンターノ良いのですよ、２個艦隊相手にしたんですから」
「御意」

次はアスターテを行います。
「今度は青軍２００００隻私が指揮します、
赤軍は１３３００隻ずつ３個艦隊で行きます、
３方向から包囲殲滅を狙います」

「これはダゴン星域会戦のパターンですか？」
「ウォルフそうです、今回はウォルフは青軍分艦隊指揮でお願い」
「御意」

「6時の艦隊はブレンターノ、10時の艦隊はヴィッツレーベン、
2時の艦隊はケスラーでお願い」
「「「御意」」」

再度開始です、ウォルフに先鋒を任せて全域に妨害電波と妨害電波
発生装置をばらまきます。
ラインハルトと同じように、ブレンターノ艦隊を強襲です。
第4艦隊と同じパターンで艦載機発艦前に撃破です。

流石ウォルフです、食い詰め提督より遙かに凄いスピードで切り裂
いていきます。
あっという間に旗艦が沈み、ブレンターノ艦隊は組織的抵抗力が無
くなったので、
さっさとヴィッツレーベン艦隊へ向かいます、

ケスラーがどう出るかですが、ヤンの作戦のように合流していたら
逃げれば良いだけです。
偵察しながら見ましたが、ヴィッツレーベン艦隊は単独ですその為
其処へ攻撃です、
4時半方向からの攻撃で完勝ですね。

流石ケスラーです後方から追撃してきました。
そのまま此方の艦隊は時計方向へ進撃し陣形をリング上になり、
消耗戦です、アスターテと第二次ティアマト会戦のパターンです。

そこで両方がタイミング良く撤退しました。
「どうかしら?」
「そうですね、パターン的には良い作戦ですが、
ヴィッツレーベン艦隊、ケスラー艦隊が合同であたった場合はどう
しましたか?」

「その場合は、ブレンターノ艦隊を潰した後さっさと撤退します、2倍の敵に包囲され1個艦隊を撃破しただけでも良いでしょう」
「確かに非難はされませんな」

お昼を食べたあと、午後からまた作戦です。

マッチ1本火事のもと作戦を行います。
「ガス状惑星で艦隊決戦です、１５０００隻対１５０００隻ですレーダーも効きませんから、
青軍は私、赤軍はブレンターノです」
ラインハルトのしたように核融合ミサイル一発で１００００隻以上撃沈です。

驚いてますよみんな。
気象状況で幾らでも出来る戦法と言い合ってますね。

続いて、中央突破を行います。
これでもあっという間に中央突破です。

そして今度は逆に中央突破をして貰います。
青軍が私１３０００隻、赤軍が２００００隻ウォルフです。
中央突破をしてくるウォルフに対して左右に分かれて急速前進です。

後方で再集結の後、後方から攻撃です。
ウォルフは前進を続けます。
またそのまま此方の艦隊は時計方向へ進撃し陣形をリング上になり消耗戦です。
アスターテと第二次ティアマト会戦のパターンです。

その他いろんなパターンのヤンやラインハルト達の戦闘パターンを行います。
夕方まで懸けて終了しましたが、みんなで夕食を食べ終わりました。

■オーディン　グリンメルスハウゼン子爵邸　ウォルフガング・ミッターマイヤー

テレーゼ様とのシミュレーションを行いながら、
テレーゼ様は荒削りながら戦術的に非凡な才能を発揮された。
戦術家としても楽しみだが、テレーゼ様自ら戦場に出るわけには行かないからな、
ここは俺達がテレーゼ様の戦術を昇華させるように頑張ろう。

■オーディン　グリンメルスハウゼン子爵邸　ウルリッヒ・ケスラー

テレーゼ様のシミュレーションを見てみたがミッターマイヤーの言うように、
荒削りながら非凡なる才能を持っておられる。
これらを専門家に照査させ使える作戦は、
今後の士官学校のカリキュラムに入れるべきであるとテレーゼ様は仰る、
何故ならその作戦により、
帝国の損害を減少させ兵の損耗を少なくする考えは流石テレーゼ様だ。
兵の命を大事にするお考えは兵の士気を上げ兵の支持を受けになる、
流石と言えるだろう。

第六十二話　シミュレーション作戦（後書き）

医者行ってきました。
今日はこのくらいで勘弁して下さい。

第六十三話　春の飛翔（前書き）

ご心配おかけしました。
風邪はだいぶ良くなりました。

3日ぶりに更新です。

しかし謀略に比べて書きづらかったです。
私はやはり謀略こそ生き生き書けるようです。

第六十三話　春の飛翔

帝国暦４８０年3月1日

宇宙暦４８０年3月1日、この日は銀河の歴史の中ではごくありふれた日であった。
しかし銀河帝国の中で幾人かのその後の人生を、変える日と成ったのである。

この日、銀河帝国中のテレビジョン、電子新聞、町の掲示板等に一斉に発表された内容は、
大多数の臣民は多少の関心を持ち、一部の者には嘲りを持って。
そして、実力や自信のある者達には、ある意味の喜びを持って迎えられたのである。

発表された内容は【ローエングラム大皇女記念大劇場設計コンペ】【大劇場大ホール壁画及び展示絵画コンペ】であった。

文面は以下のようなモノであった。

【この度テレーゼ皇女殿下のローエングラム領相続記念の為、
オーディンに記念大劇場を建設するに辺り、
昨今のモノ違う斬新なる設計を求めるモノである。
我と思う者は貴賤を問わず応募せよ】

【この度テレーゼ皇女殿下のローエングラム領相続記念の為、
オーディンに記念大劇場を建設するに辺り、
劇場内に飾れし、大壁画及び絵画の制作者を求めるモノである。
我と思う者は貴賤を問わず応募せよ】

これらは銀河帝国内の貧富の差無く、あらゆる階層からの募集を行う事であり、
これまでであれば、それらは貴族御用達の建築家、芸術家が行ってきた。
今回は彼等を優遇せず初めて全臣民からの募集である。
ある意味この事は驚愕を持って迎えられた。

この日より、帝国内において、この噂が話の種に上る日々が続いた。
しかしその話は階層ごとに、それぞれ違う意味で会話されたのである。

貴族達は、この行為を皇帝の悪い遊びがまた始まったとの考え、
ことあるごとにせせら笑っていたのである。

そして、貴族御用達の者達は自らの既得権益を侵される思いで憤慨しており、
門閥貴族に傾倒する姿勢を見せて居るのである。

逆に下級貴族や平民達は、ここ数年の皇帝陛下の為されように心服しはじめており、
また新たな考えに賞賛する者達も増えていくのである。

市井における建築家や芸術家達は、
このチャンスを生かすべく心を奮い立たせるのであった。

■銀河帝国　辺境宙域　アインザームカイト星系

この地に赴任していた内務省官吏の中に、

若き日のブルーノ・フォン・シルヴァーベルヒの姿が見られた。
内務省官吏として3年前に優秀な成績で入省したものの、

人を食ったような態度が忌諱された彼は、
この様な辺境の一惑星の地方官として派遣されていたのである。
今日もまた暇な毎日が始まるのかと、
最早恒例と成った朝のニュースを見ていたのである。

ふむ相変わらず変わり映えのしないニュースばかりだ、
此処では俺の才能を発揮することすら出来ない、
中央でででかい仕事をして俺の名を後世に残したいモノだ。

ん？皇女の記念劇場だって、又ぞろ無駄遣いだな、
だいたいロココ調だバロック調だって古くさいんだよな、
俺が設計すれば斬新な物を作るのにな。

所がそのニュースを見た彼は、普段の嘯くような態度は何処にも見あたらず、
心の奥底から沸々と沸いてくる喜びに包まれたのである。

「よしー、俺が設計してやるぞ！」
思わず1人で大声を上げるシルヴァーベルヒ。
この年24歳の春であった。

■ボーゲン星系　　エルネスト・メックリンガー

此処にもまた若き才能を持つ男が軍務に付きながら、
休みの日にはスケッチを行いつつ過ごしていた。

一昨年、昨年の参謀職により楽しみにしていた個展を中止しなけれ

ば成らずに大変残念な結果であった。
彼は今日もスケッチをしながら、次回の個展は何時開けるかと考えていた。

部屋に帰り昼食でもと思っているとＴＶ電話が鳴った。
誰かと思えば一昨年の参謀職以来、
芸術談義などで付き合いのある、ケルトリング中将からだった。

「メックリンガー少佐、久しぶりだね」
「中将閣下もお変わりなく、この度の正規艦隊司令官就任おめでとうございます」
「ありがとう、まだ４ヶ月だからね中々大変だよ」
画面の中で照れくさそうにはにかみ笑いをする中将。

ケルトリング中将、銀河帝国開闢以来の武門の名家で侯爵である方。
しかしその人となりは門閥貴族とは思えないほど、
気さくであり部下の忠告を良く聞き作戦を仕立てる方だ。

「本当なら貴官を参謀に欲しかったのだけどな」
残念そうな顔をする中将。

「仕方がありません、色々有りますから」
世間話をするにはしては態々ＦＴＬを使う事もないはずである、
何か有るのかと考えていると中将から話し始めた。

「メックリンガー少佐、今朝のニュースを見たかね？」
怪訝な表情をするメックリンガー。
「いえ今朝は朝からスケッチに出ておりましたので未だ見ておりません」
何か有ったのだろうか。

「いやね皇女殿下のローエングラム領相続を記念して、
今度オーディンに記念大劇場が作られるのだよ」
にこやかに話す中将。

「なるほど閣下のご令嬢は殿下のご学友ですね、
しかし其れが何か有るのですか？」
「それで、その劇場の設計を全臣民から募集するのだよ」

しかし私には関係が無いはずだ。
「閣下自分は芸術を解しますが、建築は門外です」
「いや少佐。其れだけでは無いのだよ」

にこやかな中将。
「その劇場内に飾る壁画と絵画の作者も全臣民から募集するそうだよ。
少佐、是非参加するべきだと私は思うんだ」

態々知らせて頂くとはありがたい事だ。
「閣下お知らせ頂きありがとうございます」
「少佐。何れ参謀で来て欲しいモノだよ。
では頑張ってな」
「はっ」

■オーディン　ヴェストパーレ男爵邸　　マグダレーナ・フォン・ヴェストパーレ

今朝のニュースで発表されました劇場の絵画には、
是非フランツ・オットー・レイトマイエルを参加させなければと思いましたわ。

早速フランツに連絡をしましたわ。

ＴＶ電話に出る、フランツは相変わらず母性本能を擽られますわ。
「フランツ。今朝のニュースは見たからしら？」
「マグダレーナ様絵画の話でしょうか」

流石フランツね、よく判ってるわ。
「もちろん貴方も参加するわよね」
「無論でございます」
自信満々の顔で頷くわね、其処がまた良いのよね。

「私も後押しするから頑張りなさいね」
「マグダレーナ様勿論でございます」
「じゃあまた来週にでも会いましょうね」
「はっ」

さてフランツなら実力でも大丈夫でしょうけど、
テレーゼちゃんに話しておきましょう。

■オーディン　メルカッツ邸　ウィリバルト・ヨアヒム・フォン・メルカッツ

小官がヴァガ星域警備隊司令官の職に就き早2年の月日が流れた。
妻と娘をオーディンに残し単身赴任。
食事は将官食堂で三度とも取っていたが、
妻の作る食事が懐かしく思えたモノだ。

洗濯も部屋の掃除もいい加減になってしまうのは、仕方がないと思う。

たとえ同じ下着を3日ほどそのまま履き続けたとしても、
まあ男職場だみな気にしないからな。

時々あまりの部屋の乱雑さに、地元出身部下のご母堂に部屋の掃除をして頂き恐縮したモノだ。
しかし今回の職場はオーディンから僅か2日にあるローエングラム領だ。
しかも大変名誉なことに今回の辞令は皇帝陛下のお声掛かりだ。

昨日。エーレンベルク元帥に会い、話を聞き自分の指名に興奮と誇りを持ったモノだ。
曰く。ローエングラム駐留艦隊は帰国俘虜から成っている。
「その為、苦労するかも知れん」と言われたが。
皇帝陛下からのお声掛かりという名誉を受けたのだ。
これほどの感動は無いだろう。

しかも明日、バラ園で皇帝陛下にお会いすると言う栄華を受けることになっている。

第六十四話　マチアス囮作戦（前書き）

前半書くのに６時間。
後半書くのに１時間。

第六十四話　マチアス囮作戦

帝国暦４８０年3月2日

■オーデイン　ノイエ・サンスーシ　バラ園

この日早朝からの謁見を追えた銀河帝国第３６代皇帝フリードリヒ４世は、
午後から非公式な謁見の為にバラ園へテレーゼ皇女と共に来ていた。
バラ園では、にこやかに笑いながら話しをする、皇帝と皇女の姿が有る。
其処へ侍従武官シェーンシュテット准将からメルカッツ中将参内しましたと報告があり、
バラ園へ通す様に皇帝が命じた。

緊張した趣でバラ園へ入るメルカッツ。
彼の皇帝に対する忠誠心は類い希なるモノであり、優秀な将帥でもある。
その彼がバラ園という皇帝の私的スペースと言って良い場所に呼ばれるのである。

皇帝陛下への拝謁という栄誉に緊張がヒシヒシと、その全身からにじみ出していた。

メルカッツは皇帝陛下に近づき跪く。
皇帝陛下と皇女殿下がにこやかにメルカッツを見る。
「来たか」
「はっ」

「メルカッツよ。そちにローエングラムの兵権を預ける」
買い物を頼むようにサラリと言う皇帝。
「御意」

「メルカッツよ。話は聞いておろうが、彼の地の兵は殆どが、叛徒からの帰還兵じゃ。
そちを司令官とするは、その事を気にせず分け隔て無く慈しんで欲しいからじゃ。
彼の者達は帰還後に再志願した、心根の良き者達じゃ。
しかし、今の世では、嘲りや危険視される者じゃ。
しかし、彼の者達の忠誠心は本物じゃ。
だからこそ、そちに司令官を任せたいのじゃ」

真剣な表情で話す皇帝陛下、その側で頷く皇女殿下。
メルカッツは自分に課せられた事の重大さと、
自分を選んでくれた皇帝陛下に益々の感謝を感じていた。

「彼の者達は、長い間叛徒に囚われたため、すっかりからだが鈍ってしまっておる。
其れを鍛え直してやってくれ、今彼の者達は自ら率先して訓練をしておる。
立派な精鋭として育て直してくれ。」

「御意」

メルカッツ提督にテレーゼが近づき話しかける。
「メルカッツ提督。今回はローエングラムの為にありがとうございます」
メルカッツは驚いていた、皇女殿下から礼を言われたのである。

「殿下勿体のうございます」
慌てて其れしか言えない。
「お父様、薔薇をいただけますか？」
「うむ良いぞ」
そう言うと皇帝陛下は薔薇を数本切りテレーゼに渡した。
「提督。この薔薇を奥方とご令嬢に」
そう言うと皇女殿下がメルカッツに薔薇を下賜した。
メルカッツは益々感動したのである。
メルカッツがバラ園を退出し、自宅へ帰宅すると妻と娘が迎えてくれた。
そして、皇帝陛下と皇女殿下から薔薇を下賜された事を話し、大いに驚かれたのであった、妻と娘は挿し木にして育てようと相談を始めていた。
メルカッツは心地よい気分に包まれていた。

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　小部屋　　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

お昼過ぎにメルカッツ提督に会い、ローエングラムの事を父様と共に頼みました。
提督は感激していたみたいです。
奥さんと娘さんに薔薇をあげましたよ。
何れ家族は保護する予定ですから、印象を良くしておかないとですからね。

今日はカール・マチアスについて僅か3週間ほどで決定的な話が入ったそうでその報告です。
流石はケスラーですね、早いです。

真剣な表情のケスラーが話し出します。

「先だって、殿下より調査をご依頼されました、
フォルゲン伯爵令息のカール・マチアスですが。
確かに軍嘱託俸給以上の浪費を続けておりました」

「しかし其れだけでは、実家からの資金かもしれんな」
爺様合いの手が旨いですね、流石は名コンビ。

「はっ資金の流れも調べたところ、
フォルゲン伯爵からの、資金援助は殆ど無いようです。
元々カール・マチアスは貴族専用大学を7年も掛けて卒業したうえ、
兄のフォルゲン伯爵のコネで軍に中佐待遇嘱託として採用された様な男です」

困った人間だとみんなが思っているようです。
此処はちゃんと言ってあげましょう。
「つまり、貴族ならアホでも入れる大学に入ったのに、3年も留年してやっと卒業し。
就職先が無いから兄としては、世間上みっともないから、コネで軍に入れたと言う、
お馬鹿さんと言うわけですね」

「要約すれば、その様な者じゃの」

「資金流れが不明な為、テレーゼ様の違和感を確かめるべく此処３週間監視していたところ。
彼がサイオキシン麻薬の売人と接触していることが判明しました」
父様も驚いてますね、私は知ってますが、驚いたふりをしますよ。
「えー其れは大変じゃないの、マチアスは麻薬中毒患者なの？」

「いえ、彼のカルテ等を調査しましたが、麻薬中毒を示す症状は見かけられませんでした」
「となると、何故売人に接触したのかの」
父様は惚けか本当に判らないのかどっちだ？
まあ私が結論をぶつけますがね。

「ケスラー、もしかしてマチアスは売人の元締めじゃないの？」
ケスラーも流石という顔しますね。

「テレーゼ様、その通りでございます。
マチアスはサイオキシン麻薬を売人に卸し、
その売り上げを生活資金や結婚資金に活用しようとしている模様です」

「直ちに逮捕するべきじゃな」
「陛下準備なさいますか？」
「そうじゃな」

此処でマチアスだけ捕まえても、ハルテンブルク伯爵やフォルゲン伯爵を利用できないし。
軍内部で密造している。サイオキシン麻薬を検挙できませんよ。
ましてや地球教やフェザーンとの関係を立証は不可能だけど、
奴らの動きや資金源を絶つことも出来ないし。

軍内部や門閥貴族に巣くう連中をあぶり出したり、
密売に関与している連中を大量検挙すれば、
其れだけ関係者の勢力を削れるじゃないですか。

「お父様。私はマチアスを今検挙するのには反対です！」
みんな私の大きな声に驚いてます。
「サイオキシン麻薬密売は大逆罪に次ぐ大犯罪です、
ましてや其れを野放しにすれば依存患者が増えるばかりです」

「ケスラー、其れは解りますが、
マチアスが何処からサイオキシン麻薬を手に入れているかが最大の
問題です。
拷問すれば、吐くかも知れませんが、
その前に逃げられる可能性が大きいですし、
口封じに消される可能性の方が大きいでしょう」

「確かにその可能性はあります、
しかし中毒患者を増やすことは問題なのでは」

「そこでです。マチアスは監視し続けます。
そして中毒患者を少しずつ、此方の工作員とすり替えていきます。
そうすれば、麻薬患者は増えませんし。麻薬の拡散は防げます。
また一定数の売人もすり替えます」

「なるほどの、その手があったかの」

「只最大の問題はエリザベートとの婚姻です。
ハルテンブルク伯爵は厳正な警察官僚が偶然貴族だっただけと言う
ほどの方です。

マチアスの事を知ったら、逮捕するかもしれません。

またハルテンブルク伯爵、フォルゲン伯爵両家の事を考えたら、
最前線にでも送り戦死に見せかけて、消しにかかるかも知れません。
そうなると全部駄目になります。

そこで、マチアスを守りながら、証拠固めを行いある時点で、
ハルテンブルク伯爵とフォルゲン伯爵を呼び出し、
此方の指示に従うように首根っこを押さえてしまいましょう」

毎度ながら私を見る皆さんの目が驚愕の目ですね。
黒狐の様な酷い謀略じゃないですから安心して下さいと言いたいですね。

「テレーゼ様の仰る風になれば、内務省に素晴らしい杭を打ち込めますね」
「確かにそうじゃの」

「そして検挙で一網打尽ですよ。
マチアスは囮捜査員として発表してしまえば、
ハルテンブルク伯爵、フォルゲン伯爵両家に傷は付きませんから、
両家とも表向きは文句は出ないでしょう」

「どうでしょうか、お父様」
「ケスラー、どうじゃな？」
「はっテレーゼ様のお考えを旨く使えば確かに、
かなりの成果を上げれると思います」

「ではテレーゼの考えで行うようにいたそう」
「御意」

「ケスラー、あと士官学校で、
私が視察にいけないのはシュターデン教官が、
反対している為だと言う話ですよね」

「はい、校長とシュターデン教官が反対してます」

「それをシュターデンが諸悪の根源だと、
私の降嫁を望んでいるフレーゲル男爵に、聞こえるように噂を流して下さい。
男爵は私を士官学校でエスコートしたいらしいのですが、
其れが出来ないので、苛ついているはずです」

「御意」

旨く行きましたね。此で地球教やフェザーンに怨まれるのは、マチアスになる。
貴族や軍に怨まれるのは、ハルテンブルク伯爵とフォルゲン伯爵だし、
其れを此方が守れば、両家を支配下に置いて協力体制をもてますしね。

さらに検挙を４８２年7月以降にして。
幼年学校卒業後にラインハルト少尉とキルヒアイス准尉をカイザーリング艦隊に配属し、
此方の工作員を使って、サイオキシン麻薬密売をキルヒアイスに検挙させましょう。

目立つのはキルヒアイスにして、ラインハルトをそのオマケにしてしまいましょう。

果たして自分より階級が上がるキルヒアイスにラインハルトが我慢できるかですね。

士官学校の件でも、シュターデンとフレーゲルが仲が悪くなれば、面白い工作ができますからね。

第六十四話　マチアス囮作戦（後書き）

誤字直しました。

第六十五話　ＧＯＧＯピクニック（前書き）

今回はほのぼの

第六十五話　ＧＯＧＯピクニック

帝国暦４８０年3月１2日

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　日本式庭園建設現場　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

　ノイエ・サンスーシの一角では、
今日もロベルト・ミッターマイヤーが設計図を片手に職人達に指示を出していた。
「よし。その石はあと3ｍ東だ。そこは道だから砂利を敷くのだ」

　本日は建設現場へ見学に来ています。
無論変装してますよ。
現場へは定期的に来ているんです。そうしないと、とんでもない事になるからです。

枯山水を作るとき名石を置き砂利で水を表すと教えて絵まで添付したのですが、
名石が翡翠の原石とか瑪瑙とかだったんですよ。
侘び寂びじゃなく秀吉の金の茶室並のやり過ぎだと言うわけです。

あと山を作るのも、小山のはずが富士山みたいな角度の山が出来てしまいやり直しに。
池の玉石も玉石という事で翡翠、瑪瑙、紅玉、緑玉とかの宝石類を入れようとしたり、
ノイエ・サンスーシだからと、やり過ぎが多いんですよ。

その為に時たま監督とアイデアを出しに来ています。

「ミッターマイヤー殿この感じなら良いですね」
「ありがとうございます」

「池に突き出る形で作る、木造の平屋寝殿造りは、どの様な感じですか？」
「はい、お聞きしたように、針葉樹と広葉樹の柱や板を造り乾燥させています。
建築する者達の訓練も佳境に入りましたので、５月には建築開始できるはずです」

「良いペースですね、けど急ぎすぎて失敗しないようにして下さいね」
「はいその点はお任せ下さい」
「皆さん頑張って下さいませ、此をあとで皆さんでお？みになって下さい」

差し入れです、４５０年物のワインですよ。
「「「「「「ありがとうございます」」」」」」

「では宜しく」
「はっ」

帝国暦４８０年３月１５日

■オーディン近郊　帝室御料地内自然公園

自然公園に、少女達と少年達の笑い声が聞こえる。
この日はテレーゼ皇女殿下の発案による、ピクニックが行われていた。
貴族の子弟達による晩餐会と違い自然を満喫する為である。

「テレーゼ様お足が早いですー」エルフリーデが息を切らしながら付いてくる。
「エルフリーデ未だ未だ修行が足りないわよ」クラリッサが軽いステップで走り去る。
「クラリッサ負けないわよ」ブリギッテも負けじと走る。

「待って下さいー」ヴィクトーリアが息を切らせてながら付いてくる。
「頑張れー」カロリーネがスタタターと駆け上がる。
「はぁーいそろそろ休憩する？」テレーゼがにこやかにみんなを手招きする。

「おねがいしますーー」肩で息をするような、ヴィクトーリア。
「ヴィちゃんが一番鍛え方が足りないね」笑いながらのクラリッサ
「そんなークラちゃんやブリちゃんカロちゃんと違って私はか弱いんだもん」

「ヴィちゃんも少しは鍛えた方が良いよ。私は曾爺様と一緒に早朝マラソンしてるんだよ」
みんな驚いた顔をする。
「えー、エーレンベルグ元帥が早朝マラソンしてるの？」
みんなあの老人がマラソンする姿を思い浮かべないようだ。

「そうだよー、短パンにランニングに鉢巻きして、お屋敷の外庭を走ってるんだよ」
「凄いね」
「そうだね」

「だから、ヴィちゃんもマラソンするのだ」にやけ顔のブリキッテ。

「そうだよ、ヴィちゃん鍛えないと此からさらに辛いよ」真剣な眼差しのクラリッサ。
「えーー、死ねるよ・・・・・＞＜」

「まあヴィちゃんも少しずつ体を鍛えればいいよ」
「テレーゼ様お優しいですわ」カロリーネとエルフリーデが合いの手を入れる。
「そう言えば、フリーデグットとアルフレッドとヨヒアムとイザークとブルーノは何処行ったんだろう？」

「皇女殿下」
「おお～～このランズベルク伯アルフレッド～～～」
「アンスバッハ～～～～～～～～～」
「お待ち下さい～～～～～～～～～～」
「助けて～～～～～」

下の方から1人を除いて息絶え絶えの声が聞こえる。
「彼等士官学校と幼年学校生のはず。鍛え方が足りないですね」カロリーネがさらっと言う。
「けど流石エッシェンバッハ子爵ね、息切れしてないよ」クラリッサが感心している。

「ランズベルグ伯爵、何処でも名前を叫ぶのね」エルフリーデが感心している。
「フレーゲル男爵は執事かなんか呼んでるの？自力で来なさい！」
ブリギッテがあきれ顔。
「トゥルナイゼン伯爵はまあまあですかね、努力は認められますね、情けないのはコルプト子爵ね13歳とはいえもう少し鍛えないと駄目ね」カロリーネがサラリと言う。

ニヤケ顔でテレーゼが皆を手招きして昼食を食べる為に既に侍従達が、
準備している山頂に男達をこのまま放置して駆け上がると提案した。

「みんな、あの5人を捨てて上へ上がろう」
「「えっいいんですか？」」エルフリーデとヴィクトーリアが驚く。
「「フフ其れは面白いですね」」ブリギッテとクラリッサが頷く。
「同意します」サラリと相変わらずのカロリーネ。

男連がテレーゼ達の姿を見つけてやれやれと言う顔をした時。
せーのっと言うかけ声と共に。
「「「「「先に山頂へ行くねーーーーーーー」」」」」
と言う声と共に走り去る姿を見ることになった。

「皇女殿下～～～～」
「まってください～～～～～～～～～～」
「あ～～～～～～～～～～～～～～」
「シュトライト～～～～～～～～～～～～」
「うわ～～～～～～～～～～～～～～」

みんなで山を登る事僅か１０分で山頂へ到着した。
其処には、侍従や女官や武官達により、バーベキューの準備が終わっていた。
早速みんな汗だくの服を着替えて、
広場に集まると同時に下から5人がヘトヘトになりながら到着したのである。

「皇女殿下如何でしたか、私の姿は」　フレーゲルが息を切らしながら言ってくる。
「ランズベルグ伯アルフレッド皇女殿下の為この山の詩を考えまし

た」
「「〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜」」倒れているコルプト、トゥルナイゼン。
エッシェンバッハは厳格に立っている。
「皆さんお疲れ様、早く着替えて食事にしましょう」
ふらふらに成りながら着替えに行く4人と颯爽と着替えに行くエッシェンバッハの差が大きかった。
15分後に着替え終わった5人が来てワイワイとバーベキューが始まった。
フレーゲル男爵はテレーゼの元へ来ては話かけ続ける。
「皇女殿下におかれましては、今回の宴にご招待頂きありがとうございます。
次回は是非招待させて頂きたく思います」
「そうですわね、しかし士官学校へ視察が出来ないのは残念ですわ」
「ぜひお越し下さい。私がエスコートいたします」
「ええけど、反対する方がいるそうです」
「その様な事私が何とかしますので是非視察を」
「ええその時は宜しくお願いしますわ」
その話を聞きにこやかになるフレーゲル男爵。相変わらず変な男である。
ランズベルグ泊アルフレッドが下手な詩を発表し始めると、
カロリーネがスーッと近づき酒を飲まして酔わせて黙らせた。

コルプトは青い顔しながら、女官に背中さすって貰っている。
イザークはヴィクトーリアと楽しそうにお喋りしている。
フリーデグットは、炎を見ながらワインを片手に肉を噛っている。
其処へエルフリーデが興味津々に見ている。

わいやわいやと楽しい時間が過ぎ、お開きになり全員がヘリで帰宅した。

第六十五話　ＧＯＧＯピクニック（後書き）

誤字直しました。

第六十六話　さらば理屈倒れ・また会う日まで（前書き）

明日は出張なのでＵＰ出来ないかも知れません。

第六十六話　さらば理屈倒れ・また会う日まで

帝国暦４８０年3月１５日　午後5時

■オーデイン　ブラウンシュヴァイク邸

夕方。フレーゲル男爵がテレーゼ皇女主催のピクニックから帰宅時、
男爵は非常にご機嫌であった。
「ヨヒアム、首尾は如何であった?」待っていたとばかりに質問するブラウンシュヴァイク公。

「伯父上、テレーゼ様を士官学校でエスコートすることになりましたぞ」
「ヨアヒムでかした!流石は儂の甥だ。其処から順次話を進めていくのだ」
「はい伯父上、頑張りますぞ」

「思えば儂がアマーリエと初めて会ったのも、お前と同じ年頃であったな。
あれは陛下の晩餐会の時であった。あの頃儂は未だ士官学校生でな、アマーリエをエスコートして踊ったものだ」

昔の思い出に浸るブラウンシュヴァイク公を見て、
フレーゲルも自分も何れ、今日のことを懐かしむ時が来るのだなと思うのであった。

しかし時間が経つにつれて、フレーゲルの脳裏にテレーゼの言葉が蘇ってきた。

『そうですわね、しかし士官学校へ視察が出来ないのは残念ですわ』
『ぜひお越し下さい。私がエスコートいたします』
『ええ、けど反対する方がいるそうです』

そうだ反対する奴が居る！
誰なのだいったい、このブラウンシュヴァイク公爵の甥である、
ヨアヒム・フォン・フレーゲル栄光の日々を邪魔する輩は！

士官学校では私のテレーゼを信奉するファンクラブが存在するが、
心の広い私はその者達を許しているのだ。
しかし私はその様なクラブは所詮下賤な者が偶像崇拝で造るモノだ
と無視していたからか、
私のテレーゼに対する何者かの妨害情報が入らなかったのだ。

フレーゲル一生の不覚、取り巻きをスパイとして入会させておくの
であった。
うむ、今から入会させるか。

「ヨアヒム、どうした？」思い出から我に帰ったブラウンシュヴァ
イク公が、ブツブツ言っているフレーゲルを見て心配そうに問いか
けてきた。

「あっ、伯父上。いえ、テレーゼ様のお言葉を思い出しまして」
勘違いしたのか、ブラウンシュヴァイク公がにこやかに話してくる。
「テレーゼ様から良いお言葉を賜ったのかな」

フレーゲルが真剣な眼差しで話し始める。
「伯父上、テレーゼ様の士官学校視察を邪魔する輩が居るそうです
！」
「なんと、テレーゼ様の邪魔をするとは。何たる不敬な奴だ！」

伯父と甥、真剣に話し合う2人。

「伯父上。我がブラウンシュヴァイク一門に対する挑戦としか思えません！」
「確かにそうだな。リッテンハイムの手の者であろうか？」
「詳しくは判りません」

「ふむ、調べる必要があるようだな」
「伯父上、実は士官学校内にテレーゼ様ファンクラブが存在しまして」
「なんと、それほどまでにテレーゼ様は慕われておられるのか」

「なんと言っても、あの愛らしさです。仕方なき事です」
「お前にテレーゼ様が降嫁為されば、
その支持が全て我がブラウンシュヴァイク一門へ来る訳だな。
ヨヒアムよ益々励むのだ」

「はい伯父上。必ずや果たして見せましょうぞ」
「それで、ファンクラブがどうしたのか」
「はい、テレーゼ様の視察を邪魔する輩の情報が有るようでして」

「お前は入っておらなんだか？」
「下賤の者共と共にはその様な事出来ません故」
「そうだな、其れが正しかろう」

「ファンクラブから情報を貰うのもあれですから」
「そうだの、誰か士官学校で情報通はおらんかな？」
「伯父上、此処はアンスバッハとシュトライトを呼びますか」

「そうだな、あの2人なら良い知恵を出してくれよう。

アンスバッハ、シュトライト応接室へ来るのじゃ」

暫くするとアンスバッハとシュトライトが応接室へ現れた。
フレーゲルにしては先ほど世話になったばかりである。
「「ブラウンシュヴァイク公、お呼びでございましょうか」」

「おお良く来た、2人とも聞いてくれ。
ヨアヒムがテレーゼ様を士官学校でエスコートすることになったのだが、
士官学校視察を邪魔する輩が居るそうだ。
その輩を調べることは出来るか？」

暫く考える二人、そしてシュトライトが頷いた。
「公爵閣下、小官の遠縁にあたる者が今士官学校の3年に居ります。
その者は冷静沈着で諸事に詳しいので、その者に連絡を入れてみます」

「うむ。シュトライト頼むぞ」
「シュトライト、どの程度かかるか？」
「本日は休日ですので、連絡を入れてみます」

シュトライトは電話室へ移動する為、応接室を出て行った。

フレーゲルが犯人をどうしてくれようかと思いながら待つと、
僅か10分もかからずにシュトライトが帰ってきた。

「シュトライトどうであった？」ブラウンシュヴァイク公が待ちきれないように聞く。
シュトライトは深刻に困った顔をしている。
「シュトライト、どうした判らなかったのか？」

シュトライトが意を決したように話し始めた。
「小官の縁者によりますと、皇女殿下視察を反対しているのは、士官学校校長フライエンフェルフ中将と」
話が終わる前にフレーゲルが激高する。
「何！校長が邪魔をするだと、身の程知らずが！！伯父上、目に物見せてくれましょう！！」

「男爵。落ち着いて下さい」
「此が落ち着いて居られるか！我が妻を奪うがごとき仕儀なのだぞ！！」
「男爵。校長は単に流されているだけです。主に動いている者が居るのです」
落ち着かないフレーゲルに変わってブラウンシュヴァイク公が訊ねる。
「シュトライト、その煽っている者とは誰なのだ？」
言いにくそうなシュトライトだが、遂に口を開いた。

「実は教官のシュターデン大佐が視察反対の急先鋒で、校長もその勢いに贖えずに反対の立場を示しているようです」
その言葉を聞いた途端、フレーゲルがさらに激高した。

「なんだとシュターデンだと。奴はブラウンシュヴァイク一門末席ではないか！！」
フレーゲルは、頭から湯気が出そうなぐらい真っ赤になっていて血圧が大変心配である。
「うむ、まさかシュターデンが邪魔をしているとは」考え込むブラウンシュヴァイク公。

「おのれ！シュターデンめ、目にモノ見せてやる！！」
「うーむ」
「伯父上、こうなればシュターデンを追放して頂きたい」

アンスバッハもシュトライトも会話に参加できずに見守るだけで、シュターデンを気の毒に思っていた。

「うむ。ブラウンシュヴァイク一門でありながら、一門の行動の邪魔をするのでは仕方が無かろう」
「では早速呼び出しましょう！」

「うむ。アンスバッハ、シュターデンを呼び出すのだ」
「御意」
アンスバッハは短く返事をすると連絡を行いに行った。

シュターデンが来るまで、フレーゲルはイライラしながら酒を飲み時間を潰していた。
ブラウンシュヴァイク公はその姿を見ながら、シュターデンをどうするか考えていた。

帝国暦４８０年3月１５日　午後7時

■オーディン　　シュターデン邸　　アウグスト・フォン・シュターデン

夕食後にリビングで寛いでいると、ブラウンシュヴァイク公爵邸から電話が来たと、妻が呼びに来た。
このような時間に何であろうと電話に出たら、アンスバッハ中佐であった。

何用かと訊ねたら、公爵が緊急の用で公爵邸に早急に参上せよとの事であった。
公爵様がお呼びと有れば、参上せねば成るまい。
妻に話して早急に地上車で公爵邸に向かった。

しかし何であろうか？
この所フレーゲル男爵を士官学校で成績を有利になるように調整をしているが、
その事であろうか。まあ悪いことでは無かろう。

到着するとアンスバッハ中佐が迎えてくれた、
中佐はなにやら私を見る目が変である。
何か有るのかと思うが、直ぐに応接室へ通されたので聞けなかった。

帝国暦４８０年3月１５日　午後8時

■オーディン　　ブラウンシュヴァイク邸　応接室

シュターデンが応接室に現れる同時に、フレーゲルが大きな声で叫んだ。
「シュターデン！貴様、我が妻との時間を潰すとは何様のつもりだ！！！！」

はっ？シュターデンは何のことか判らなかった。
フレーゲル男爵に奥方は居ないはずだが？
ましてや居たとしても会ったこともないのに何のことだと思った。
その態度がさらに、フレーゲルの怒りに油を注ぐ。

「貴様わからんのか！！お前がテレーゼ様が士官学校視察を為さるのを、
邪魔しているのは判っているんだ！！！！」
なぜ皇女殿下の視察が出来ないのがフレーゲル男爵の怒りになるのか判らなかった。

「シュターデン！貴様は我が一門の恥さらしだ！！」
そこまで言われるとシュターデンとしても頭に来る。
「フレーゲル男爵、皇女殿下御視察が、その様に大変な事でありましょうか？」

その言葉がぶっきらぼうに言われた為、さらにヒートアップするフレーゲル。
「えいえいえいえい黙れ黙れ！！貴様は要らん！！！」
ブラウンシュヴァイク公もアンスバッハもシュトライトも只見つめるだけである。

あまりのキレ具合にブラウンシュヴァイク公が話しかける。
「フレーゲル、そのくらいで良かろう」
「伯父上、この件は私に任せて頂きます！」

フレーゲルが伯父に反対意見を言う、普段ならあり得ないことである。
そしてフレーゲルの鬼気迫る勢いに、思わずブラウンシュヴァイク公も頷く。

「シュターデン！二度とこの屋敷の敷居を跨ぐこと許さん！！」

「我が一門からも追放する！！！」

「どこぞなりとも行くいい！！！」

凄まじい勢いである。
シュターデンもブラウンシュヴァイク公もアンスバッハもシュトライトも唯々聞いているだけである。

「命を取られないだけありがたいと思え！！」
「アンスバッハ、シュトライト！
此奴をたたき出せ！！」

その言葉に、シュターデンに悪いなと思いながら、
2人は呆然としているシュターデンを連れて外へ出て行った。
流石にたたき出すわけにもいかず、地上車に乗せてオートモードで家に帰るようにして帰宅させた。

応接室ではブラウンシュヴァイク公とフレーゲルが話していた。
「伯父上、取り乱して申し訳ございません」
「うむ、ヨアヒム驚いたぞ。まあ良い、過ぎたことを悔やんでも仕方があるまえ。
シュターデンごとき一門から追放したところで、如何ほどのことがあるか」

「伯父上、ありがとうございます」
「そうなるとシュターデンを士官学校からも追放せねばならんな」
「どこぞの田舎にでも送ってしまいましょう」

「そうだな、校長の罪を見逃して奴を飛ばさせよう。
校長もこの事を知れば反対はするまえ」
「伯父上本当にありがとうございます」
「明日にでも行うようにしようぞ」

帝国暦４８０年3月１５日　午後１０時

■オーディン　　シュターデン邸

自動操縦で地上車が帰ってきた。其処から出てきたシュターデンは放心した様子で、
妻の問いかけにも答えず、そのまま倒れるように眠りに就いてしまった。
その夜は、凄まじい罵声の寝言が聞こえたと後に妻は回想している。

帝国暦４８０年3月１５日

■オーディン　帝国軍士官学校寄宿舎　　アントン・フェルナーの日記

昼間ギュンターとナンパに出かけて遊んできたが、
ナイトハルトは彼女の所へ行っていたようだ。

その疲れを癒して風呂に入った後、
遠縁の伯父さんから、久しぶりに電話があった。
伯父さんはブラウンシュヴァイク公に使えているんだが、
なにやら士官学校の噂を聞きたいらしかった。

伯父さんも噂好きなのかと思ったが、
至急調べて貰いたいと事だから此は何か有るなと思い用件を聞いた。
内容はあの噂の皇女殿下視察拒否事件の当事者を教えてくれとのこ

とだった。

あれは校長も賛同したが、主に引っ張っていたのはシュターデン教官だと教えてあげたら、ありがとうと言われ話が終わった。
何なのだろうねあれは？

帝国暦４８０年３月１６日

■オーディン　帝国軍士官学校寄宿舎　　アントン・フェルナーの日記

　本日シュターデンが授業に来なかった。
昨日の電話が関係有るのか調べてみたい気がするな。

帝国暦４８０年３月２０日

■オーディン　帝国軍士官学校寄宿舎　　アントン・フェルナーの日記

　いきなりだがシュターデン教官が転勤した、
しかも転勤先は超弩級土田舎のフェーゲフォイアー星系らしい、
彼処は常時５０度以上の沙漠の星だが、なんかしたのか教官？
判らん。伯父さんも教えてくれないし、何なのだろう？

生徒達は陰険な理屈倒れが消えてすっきりしたと喜んでいるがね。
何故か校長も最近髪の毛が異常なほど抜けてきているし白髪も超増えている。
不思議なこともあるモノだ。

第六十七話　四老人の朝（前書き）

何となく、穴埋めした感じな話です。

第六十七話　四老人の朝

帝国暦４８０年3月３０日

■オーディン　エーレンベルグ子爵邸

エーレンベルグ元帥の朝は早い。
７０歳を越え益々朝が早くなり午前４時には目が覚めてしまう。
毎日の習慣である。目覚めに一杯の水を飲む。
此により寝汗で濃くなった血液の濃度を適正にする。

寝間着から運動着に着替え庭へ出る。
その姿は、ランニングに短パンそして鉢巻き姿である。
未だ星が輝いている。其処で柔軟運動を始める。
「ふん、とう、たーーーあ」

足腰を伸ばし屈伸などを行う。
とても７０歳を越えた様には見えない程の柔軟性である。
しかし3月でも早朝である。未だ未だ吐く息が白くなる。

３０分ほど柔軟運動を行い、５時を越える頃。
曾孫のブリギッテが起床する。
ブリキッテも曾祖父と同じように、目覚めに一杯の水を飲む。

同じように寝間着から運動着に着替えて庭に出てくる。
やはり同じような姿である。
その間に元帥は柔軟運動の続きを行っている。

曾祖父と曾孫がにこやかにそして元気よく朝の挨拶を行う。

「お爺様。おはようございます。今日も良い天気で嬉しいです」
「ブリギッテおはよう。今日も頑張るのだぞ」
「はい、お爺さま」

同じように元帥の執事のホーファーとブリギッテ付きのメイドのリリーも挨拶する。
「旦那様おはようございます」
「お嬢様おはようございます」

「うむ。おはよう今日も頼むぞ」
「リリーおはよう」

４人で柔軟体操を行い６時近くになると屋敷の外庭でのランニングが始まる。
「よいしょ」
「一、二、三、四」
「旦那様」
「お嬢様」

外周を何周かし今日の朝の日課が終わる。
汗だくの体をシャワーで流し、
着替え終わると、あの軍服姿のエーレンベルグ元帥ができあがる。

その後家族と共に朝食を取る。
その後８時に軍務省へ出かけるのである。

■オーディン　エッシェンバッハ子爵邸

宇宙艦隊副司令長官グレゴール・フォン・エッシェンバッハ上級

大将の朝も早い。
まだまだ５１歳の働き盛りである、その鍛えられた肉体は鋼のごとき筋肉である。
エーレンベルグ元帥よりは遅い午前５時彼の朝は始まる。

目覚めの一杯はスポーツ飲料であり電解質を補充している。

グレゴールの息子、エーリヒは士官学校へ入校したが。
三半規管が弱すぎて、ワルキューレのシミュレーションで吐きまくり。
適正が全く無いと言われた挙げ句に、
艦隊研修でも目を回しミュッケンベルガー一族初の士官学校を中退した男である。

現在はグレゴールの実家である、ミュッケンベルガー家の所領管理を行っている。
期待はずれの息子であったが、孫のフリーデグットはグレオール似て偉丈夫であった。
期待道理に士官学校に好成績で入校した時、グレゴールの喜びは大変なモノであった。

その為、今日のような士官学校休みの日は、
同時に孫のフリーデグットも共に起床し並んで目覚めの一杯を飲む。
軽く柔軟運動をした後。諸肌を脱ぎ、軍用サーベルを握り素振りを始める。

「エイヤー、トアーー、ダーー」
グレゴールが振り抜くサーベルの刀身が朝日を受けキラキラと光り輝く。
直ぐ横では、フリーデグットも同じようにサーベルを振り抜く。

２人で一時間ほど稽古を行い、汗で濡れた体をタオルで拭き上げる。
走り込みを行い足腰も鍛える、其れを行ったあとシャワーを浴びて汗を流すのだ。
そして此方でも軍服を着てエッシェンバッハ上級大将ができあがる。

その後。妻や孫との朝食後。
宇宙艦隊司令本部へと出かけるのである。

■オーディン　ベヒトルスハイム元帥邸

他の２人とは違い宇宙艦隊司令長官ヴィルフリート・フォン・ベヒトルスハイム元帥は朝寝坊である。
もう６０歳近いのであるが。
朝が子供の頃から苦手であり今でも何人ものメイドが起こしに来るのである。

「旦那様朝でございます」
「・・・・・・・・・」
「旦那様遅れます」
「・・・・・・・・・・」

「元帥閣下艦隊が出航します」
「・・・んーーあと５分まて・・・」
「元帥閣下敵襲でございます！」

「・・・なに・・迎撃せよ、ワルキューレ全機発進・・・」
「発進間に合いません！」
耳元でメイドがＩＰレコーダーから爆発音を響かせる。

「・・うをーーーーーーーー！！」

「あああああ朝か・・・・」
「旦那様お目覚めのお時間でございます」
「うむ、何か言ったかの？」

「いいえ何もお言いになってはおりません」
「お時間が来てしまいます」
「おおもうこんな時間か」

「朝食は車の中に用意しております」
「うむでは行くとしよう」
こうして今日も宇宙艦隊司令長官ヴィルフリート・フォン・ベヒトルスハイム元帥は遅刻ギリギリに宇宙艦隊司令本部へ登庁するのである。
既に一時間前に副艦隊司令長官エッシェンバッハ上級大将は登庁し仕事を始めている。

■オーディン　シュタインホフ元帥邸

統帥本部長テオドール・フォン・シュタインホフ元帥は特に朝何もしていない。
普通におきて、普通に朝食を食べ、普通に統帥本部へ登庁するだけである。
７０歳であるが、腹を見れば判るように。
運動は好きではなく最近の健康診断でメタボであると注意を受けたところであるが、
暴飲暴食が好きで良くジャンクフードを食べている。

しかも老人のわりに、夜更かしが好きで昨夜もネットサーフィンを行い午前3時に寝る始末である。
今朝も7時半まで寝過ごし、生欠伸で登庁である。
優秀な部下が居るからこその夜更かしであると本人も承知しているのが、
それが返って始末が悪い状態になっている。

今日も副官や部下達の献身的な働きで仕事が減っていくのである。

第六十八話　戦艦を貫おう（前書き）

遂に戦艦ゲット。

第六十八話　戦艦を貰おう

帝国暦４８０年４月１０日

■オーディン　皇帝直属工廠

この日オーディンは新造戦艦の門出を祝うように快晴であった。
先年テレーゼのアイデアから起工された新型旗艦級戦艦が竣工したのである。
地下ドックでライトで照らされるその姿を見て、参列者達は驚きの声を上げた。

今までのヴィルヘルミナに代表される旗艦戦艦級と一線を画す艦形である。
ヴィルヘルミナは長方形の箱にエンジンブロックを取り付けたような形であったが、
新造艦はシャープで鋭い流線型の艦首を持ち船体後部が艦首に対して2倍ほどの幅を持ち、
その後部がワルキューレ格納庫と成っている。

今までの戦艦では、ワルキューレ格納庫は下部船体側面に有り。
発進時にワルキューレを火線に曝しやすかった。
その為重装備状態のワルキューレが誘爆し戦艦自体が失われることが多々あった。

テレーゼがＯＶＡのアムリッツァ星域会戦などで惚けなく誘爆で失われる戦艦を見ていたことが、
改良のヒントとして設計図にも生かされていた。
原作であれば後方式格納庫は、カール・グフタス・ケンプ艦隊旗艦

のヨーツンハイムから始まるモノだが、其れを先取りしたした形になっている。

本来の戦艦であればエンジンが艦体後部に有り。
左右にエンジンブロックをポット式に懸架しているが、
新造艦は艦体後部を格納庫としている為、
主機関を主艦体よりポット式に左右に懸架するようにしている。

ＯＶＡで言えば、ベイオウルフやトリスタンの艦体を原型に設計されている。
ただし機関を大型化して上下二段式に装備しエンジンブロック自体を大型化し前後上下に延長を行い。
格納庫自体を完全に側面からは隠すようにしている。

艦首はリューベックの艦首の傾斜装甲を取り入れ。
艦首下部にはトリスタンのような顎状突起の中に中性子ビーム砲が収められている他、
レールキャノンや荷電粒子ビーム砲やレーザー砲などが備えられている。
これらの兵装は全て隠見式に成っている。

艦体構造自体は標準戦艦の延長線上であるが重装備と重装甲が施されている。
またセンサー類も高性能のモノが艦体下部に集約して装備されている。
防御スクリーン展開システムも高出力のものが備えられている。

巡航速度、加速力、航続力も高速戦艦以上であり、機動性も巡航艦を越えている。
ただし通常であれば４８６年前後に建造される戦艦の技術のため、

7年ものフライングで未だ未成熟な技術も多くメンテナンスが通常型戦艦の3倍以上かかる為、
運用が限られてしまう。

またブリュンヒルトの対ビームコーティングが技術的には完成してない為装備していない。
費用も通常戦艦の4倍程度掛かっている。
塗装も従来型の灰色からテレーゼの頼みから濃い蒼色に成っている。

■オーディン　皇帝直属工廠　　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

　いやはや、完成しましたよ我が旗艦が遂に目の前に現れています。
転生して以来早9年自分の旗艦を持つこととに成ろうととは思いもよりませんでしたよ。
もっとも、自分で艦艇指揮する訳じゃないんですけどね。

あくまで御召艦兼ローエングラム領警備艦隊総旗艦ですから。
メルカッツ提督の旗艦はＯＶＡのネルトリンゲンでして、
映画版のように改装されてないんですよね。

何れ本艦の改良型を下賜する予定ですけどね。
ワルキューレに変わり雷撃艇格納庫を装備させて建造予定ですよ。

いやしかしでっかい。
ワクワクしますね。
ラインハルトがブリュンヒルト貰って喜んだのが判る気がしますよ。

何と言っても、
ベイオウルフやトリスタンにリューベックの艦首足したものですか

ら鋭い艦首は美しいです。
しかも機動性抜群だけど金が掛かるというジレンマも有るけど、
大半が軍事宇宙港で停泊ですから、【そんなの関係ねい！】といえるかも知れませんが、
私としては、ローエングラム領警備艦隊旗艦としてジャンジャン、メルカッツ提督に使って貰うつもりですよ。

その為に艦橋は三段式の指揮所にして貰ってますから、
上の段が御召艦時の私のシート。
中の段が通常使用時の提督シートにしてあります。
下の段が運行要員というのは他艦と同じ。

色はZガンダムのアレキサンドリア級のティターンズカラーを少々薄くした感じですね。
漆黒の宇宙空間ではこの色が目立たないはずですから、
ブリュンヒルトみたいに真っ白なんて嫌ですよ。

集中砲火の的じゃないですかあんな色。
ビームコートの色が有るとは言え。
私なら上から目立たない色を塗りますけどね。

この艦自体本来ならば前線指揮しないから、
白でも良いですが腹黒皇女としては白はラインハルト色なんですよね。
かといって黒はビッテンフェルトの色ですから取ったら可哀想ですよ。

その結果蒼色に決まりました。
最初は艦名ラプンツェルに由来する緑も考えたんですが。
同盟カラーと被るので没になりました。

ラプンツェルって言えばグリム童話ですが、
ノヂシャ、チシャ、所謂レタスっていう意味なんですよ。
ラインハルトの嫌いな野菜の名前を付けましたよ。

何れブリュンヒルトクラスの艦が出来たら、
その艦名はアマテラスかクリエムヒルトにしますけどね。
或いは、ヴェルザンディですかね。

今日は父様、御臨席と言う事で、工廠の幹部連中や工員達が緊張の趣で整列してますね。
帝国軍三長官も来てます。
そして艦を預かる事もある。メルカッツ提督も来てます、無論艦長も来てますよ。
そろそろセレモニーです。

「皇帝陛下の御臨席、違え希なる栄華とし子々孫々まで肝に銘じまする」
工廠長。緊張気味で変な感じになってますね。
「皇女殿下。命名式及び進宙のシャンペン割をお願いいたします」

さあ出番です。
思いっきりおめかししてきてますよ、母様の趣味丸出しですが。
艦首に向かっている紅白のリボンにシャンペンが括り付けられています。

まず壇上で命名式です。
艦名を書いた表彰状のような丸く丸まった紙が乗ったお盆を、
侍従が父様から受け取り、静々と進んできます。

其れを父様の侍従武官ケッセリング中将が私に渡してくれます。
「皇女殿下此方をお持ちになって下さい、合図と共に開いてお読み下さい」
「判りましたわ。ケッセリング」

軍楽隊が、ＯＶＡで聞き慣れた帝国軍軍歌を生演奏し始めます。
やっぱり良いですね、ジーンと来ますよ。
合図が来ました。

「殿下お願い致します」
縦に丸まった紙を真っ直ぐに持って命名です。
しかし、この紙持ちにくいですね。

「本艦をラプンツェルと命名する、
銀河帝国第三皇女テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム」

其れと共に全員から拍手が起こりました。
その拍手の中ケッセリングからシャンペンを渡されました。
「皇女殿下此方をお持ちになって下さい、合図と共に手をお離し下さい」

シャンペンを受け取り一呼吸後。
「殿下お願い致します」
手を離すとシャンペンが活きよい良く艦首へと進んでいきます。
そしてパシャンと割れ鮮やかな泡が舞いました。

壇上から降りて、父様の所へ行きお礼を述べます。
「お父様。この度は私の為に戦艦下賜、誠にありがとうございます」
父様もにこやかに返してくれます。
「うむテレーゼ気に入るとよいの」

「はい」

帝国軍三長官のうち、エーレンベルグ元帥はよく知っているのでにこやかに見ていてくれます。
シュタインホフ元帥は相変わらずのぼけーっとした感じです。
ベヒトルスハイム元帥は鋭く艦を見てます、やはり気になるようですね。

セレモニーとして。艦長、副長、運用長が父様と私の前に進み出ました。
実は艦長人事は超悩みました。
艦長で有名どころは、ザイドリッツなのですが。
彼はまだ士官学校生ですからね。

他に艦長ってシュタインメッツとかしか考え付かなかったんですよね。
あとはロイの弄んだ女の親とかしか考えつかなかったんですが、
原作の１０年前ならワーレンの旗艦サラマンドルの艦長ドゥンケル大佐が居るはずだと、

軍務省士官データーバンクから探したら、
少佐で軽巡航艦の艦長してましたから早速頼んでスカウトしました。
何故って聞かれたら困りましたが、
戦歴や経歴が良いからと誤魔化すつもりでしたけど意外にあっさり決まりました。

裏では色々調べたみたいですけどね、安全だと太鼓判を押されたわけですね。
取りあえずは中佐に昇進させて辞令を出して貰いました。

それで副長は、何とフォルカー・フォン・ビューローを引っ張ることに成功しました。
イゼルローン要塞駐留艦隊配属で大尉でしたが少佐にして副長にして貰いました。

その為運用長はビューロー繋がりで、ハンス・エドアルド・ベルゲングリューンを引っ張りましたよ。
同じく。イゼルローン要塞駐留艦隊配属で大尉でしたが少佐にして運用長にして貰いました。

当初の予定ではエヴァちゃんのお父さんのアルフレート・ミュールマイスター少佐を副長か運用長に充てるつもりでしたが、
戦闘で負傷して捕虜収容所で悪化した腕が完治して無くて、
今回は間に合わないんですよね。

だからウォルフを殴らないでキックで決めたのかと納得した次第です。
ワーレンみたいに義手にすれば良いんですが。
切る必要のない腕を切るのも酷なので完治させる事にしたのですよ。

緊張の趣で艦長達が挨拶をします。
普通なら艦長と皇帝が会うなんて有りませんし、
片膝付いて顔を下にして顔合わせませんし、
ましてや挨拶なんかしませんからね。

「皇帝陛下、皇女殿下におかれまして、小官を艦長に任命して頂き恐れ多いことと存じます、
全身全霊をもって身命を懸け、皇帝陛下、皇女殿下の御為にお仕えする事を此処に誓います」

父様が「うむドゥンケル、ビューロー、ベルゲングリューン頼んだぞ」
3人とも感動に体を震わせながら「「「御意」」」と言いました。

私は「ドゥンケル中佐、ビューロー少佐、ベルゲングリューン少佐お願いしますね」言いましたよ、
無論愛らしくですけどね。

メルカッツ提督も呼ばれて、父様から「メルカッツ頼んだぞ」と言われて。
「御意」っていうけど皆同じですね。

私はメルカッツ提督に「メルカッツ提督お願いしますね」
「御意」だもんね、もう少し砕けて欲しいと思うのは酷でしょうか？

一時間ほどで式典も終わり帰宅となりました。
貰ったけど暫くは運行テストで乗れないんですよ残念。
ジャンジャン、ドゥンケル、ビューロー、ベルゲングリューンには慣れて貰わないとですからね。

第六十八話　戦艦を貰おう（後書き）

第六十九話はラプンツェルの運用を任された連中の話の予定です。

第六十九話　戦艦人事協奏曲（前書き）

戦艦の人事の話です。
外伝のキャラがでます。

第六十九話　戦艦人事協奏曲

帝国暦４８０年４月１１日

■オーディン　　戦艦ラプンツェル　　クリストフ・ドゥンケル

小官はドゥンケルと言う船乗りだ。
士官学校卒業時は３０００番台と言う決して誇れる成績では無かったが、
それ以来前戦で頑張ってきて１３年、３３歳まで来た叩き上げだ。
卒業以来イゼルローンに何度も配属されてきた。
一昨年少佐に昇進しイゼルローン駐留艦隊のブレーメン級軽巡航艦ケンプテンの艦長に就任し日夜努力してきた。

１１月中旬駐留艦隊司令部から出頭を命じられ艦長職の交代とオーディンへの人事異動を命じられた。
普通の人事異動は１０月だが何故か一ヶ月遅れでの移動である。
周りの同僚は『何かしたのか？』と聞いてくるが、
小官にも全く心当たりが無かったのであった。

異動先は軍務省の軍事参議官補佐局だったから、事務職にされるのかと思ったが。
同僚の情報通が言う事には、軍務省軍事参議官が退役寸前のロートル爺さん達の溜まり場だから、
其処のお茶くみか、お前も予備役編入じゃないかと言われたものだ。
出頭後急遽決まった後任艦長には若干２５歳のレンネンカンプ少佐で彼と諸事の引き継ぎを行い、

1年ほど住み込んだ軽巡航艦ケンプテンと別れオーディン行きの艦に便乗して出立したのが11月23日の事だった。

艦は駐留艦隊でも最旧式の駆逐艦ハーメルン？で艦長はアデナウアー少佐と言い男爵様だが、話してみると元々商船の船長だったそうで気さくな方だった。

ハーメルン？は昨年から始まった宇宙艦隊の新造艦配備による旧型艦のローエングラム警備艦隊配備に伴い僚艦キッシンゲン？、バンゲン？、ジーセン？？、ライト？の第237駆逐隊共々移動するそうだ。

艦長は気さくに笑いながら。

乗員のうち副長ベルトラム大尉、砲術長シャミッソー中尉、水雷長デューリング中尉、

通信主任フレーベル少尉の4人が希望により新造駆逐艦カッツェ？へ異動し、

士官でも残る連中と艦長自身を含めたロートルと他艦のロートルが乗り込んで来たそうだ。

下士官兵はそのままローエングラム警備隊へ移動だそうで、

安全な内地に帰れると喜んで居る兵も見受けられた。

小官の他に2名の便乗者が搭乗していた。

2人とも若く出張かと思ったが、姿を見ると非常に落ち込んだ顔をしていたので。

話を聞いてみたところ、小官と全く同じでいきなり出頭を命じられ、軍事参議官補佐局へ移動を命じられたそうだ。

小官も仲間だと聞くと2人とも仲間が出来たと若干は喜んできた。

髭面の男は、ハンス・エドアルド・ベルゲングリューン大尉と名乗

り、
オールバックの男は、フォルカー・アクセル・フォン・ビューロー大尉と名乗ってくれた。

２人とも士官学校以来の付き合いだそうで年齢は小官より６期下の２７歳だそうだ。
ベルゲングリューン大尉は戦艦クロッセンで運用士官をしていたそうで、
ビューロー大尉は巡航艦マウルブロンで砲術長をしていたそうだ。

３人とも暇だったので、此からのこととかイゼルローン時の事とかを話し合っていた。
特に面白かったのが、ベルゲングリューンの乗艦クロッセン艦長ダンネマン中佐の娘が評判の美人で３人から結婚を申し込まれて迷っている間に、ロイエンタール中尉という者にまんまと攫われた話だった。

その後の話は弄んでポイ捨てされたので、
怒った３人が決闘を申し込んだ挙げ句にロイエンタールの仲間３人と殴りあいになり、
ノックアウトされたそうだ。

２人や艦長や乗員と知り合いに成り色々話しながら、
再度艦を持てたら彼等と共に行きたいなと思ったが。
まさか直ぐにその願いが叶うとは思わなかった。

１２月２２日にオーディン軍事宇宙港到着後アデナウアー艦長達と別れの挨拶をして３人で軍務省人事局へ出頭した。
人事局の受付に行き、３人とも受付嬢に出頭命令書を渡すと「人事局長ハウプト中将閣下がお会いになります。局長室は三階の奥に有

ります」と愛らしく案内してくれた。

3人とも顔を見合わせて、中将閣下が小官達のような者達に会うとは間違いじゃないかと聞いたが、受付嬢が『確かに局長室へ出頭せよと連絡が有りました』と言う事で3人とも向かうことになった。

局長室に行くと部屋の中へ案内された。
局長室の待合室には副官だという大尉が一人しか居らず、局長は奥の個室でお待ちですからと言われ3人で入室した。

「ドゥンケル少佐、はいります！」
「ベルゲングリューン大尉、はいります！」
「ビューロー大尉、はいります！」

部屋に入ると人事局長ハウプト中将閣下が待っていた。
中将は『良く来た』といい話を始めた、その話を聞き3人が3人とも驚きを隠せなかった。

「ドゥンケル少佐、ベルゲングリューン大尉、ビューロー大尉、本日卿等にここへ来て貰ったのは、卿等の新たなる配属先についてだ」
しかし人事局長自身が言う事はよほどのことしかないはずだがと、不思議がっていると。

「卿等は明年4月に竣工する新造戦艦の艤装委員として任命された、配備先はローエングラム警備艦隊旗艦だ」

「新造艦でありますか」
「そうだ恐れ多くも皇帝陛下の御発案による新型艦だ」

3人とも皇帝陛下の御発案には些か考え込んでしまったようである。
それを見透かしたのか中将がフォローを入れてくる。
「陛下は御発案で設計は艦政本部がしている、」

しかしこの時中将が一番大事な御召艦の話だけはしなかったと判ったのは、
1月に入り飛行長が就任した時であった。

そんなこととは露知らず。
なるほどと納得しあうと、
中将が読みながら渡し始めた辞令を恭しく受け取っていた。

「クリストフ・ドゥンケル少佐、卿を中佐に昇進、新造戦艦艤装委員長へ任命する」
「はっ謹んで拝命いたします」
小官が艤装委員長と言う事は艦長職かまさか直ぐに艦長に戻れるとは思わなかった。

「ハンス・エドアルド・ベルゲングリューン大尉、卿を少佐に昇進、新造戦艦艤装委員へ任命する」
「はっ謹んで拝命いたします」

「フォルカー・アクセル・フォン・ビューロー大尉、卿を少佐に昇進、新造戦艦艤装委員へ任命する」
「はっ謹んで拝命いたします」

「新造艦は皇帝陛下直属工廠で建造中で明年2月に完成する予定だ。
其れから航行試験を行い4月に竣工する予定だ。
その旨を考え準備して貰いたい、
また乗員の選定も卿等の推薦を元に決めることとする」

ハウプト閣下の元を退室した後。
３人とも非常に明るい顔をしている。
早速話し合い工廠へ向かうことにした。

地上車に乗り工廠へ着くが、守衛所で止められた。
新しい制服が間に合わずに皆一階級下の制服姿である。
怪しまれるのは当然だった、書類とＩＤを見せ納得して貰い、

その後工廠長の元へ案内された。
工廠長は眼光の鋭い４０代後半に見える男だった。
「ドゥンケル中佐。話は聞いている、私は工廠長のシュミットバウアー中将だ」
「はっ」
「卿の預かる新造艦を見てみるかね」

眼光は鋭いが意外に話しやすい人物だった。
「お願いします」
中将自ら我々を案内してくれるそうだ。
部屋を出て、廊下の先からエレベーターに乗り地下ドックへ行く。

ドックを見る我々の前に今まで見たことのない形状の艦が鎮座していた。
呆然と眺める我々を見ながら。したり顔の中将が長々と説明を始める。
しまったこの中将はマッドだ！
新型傾斜装甲や新型機関、エトセトラと長い長すぎる、
ベルゲングリューンは居眠りを始めそうだ。
ビューローも目の周りを揉んでいる。

小官はじっと我慢して聞いている。

ジックリ2時間ほど掛かって中将の話が終わった。
話し終わると満足したらしく「後は勝手に見てくれと」帰ってしまった。
しかしこの工廠長がガチガチに緊張する日が来るとは当時は考えつきもしなかった。

途方に暮れる我々を見かねて造船主任が説明してくれた。
「ようこそ少佐、小官はタウベルト造船大佐です。この艦の造船主任をしております」
階級が少佐のママで間違えられた。

「大佐殿よろしくお願いします」
その後色々なところを見学し帰還した。
帰りに3人でゼーアドラーで呑んで親交を深めた。
その夜は家に帰るのが遅くなり1年ぶりに会う、妻と子に文句を言われてしまった。

翌日から3人で軍務省に用意された部屋に集まり乗員を考え始めた。

「フォルカー。機関長は老練なあの人が良いんじゃないか?」
「ハンス。良い案だと思うぞ」
「艦長如何でしょうか?」

「おいおい俺だけ艦長か、クリストフで良いぞ」
「しかし」
「なあ」

「まあ3人だけだから良いじゃないか」
「「判りました」」

「で機関長はインマーマン工兵中尉にしたいが、
階級がせめて少佐じゃないと駄目か」

「なら階級を上げよう。
その位の権限は与えられているし、
聞いた限りじゃ優秀な機関長だ」

「アデナウアー少佐は商船出身だし商人もしていたそうだから、
艦長から格下げだが補給担当の補給長を頼みたいな」

「ローエングラム警備艦隊所属なら。いっその事ハーメルン?の乗員を全員引き抜こう」
「あとは、ケンプテン、クロッセン、マウルブロンの乗員や後輩連中を引き抜こう」
「あと防衛指揮官にジンツァーを呼ぼう」

「ジンツァーとは?」
「クリストフ先輩、我々の同期で良い奴です」
「お前等が言うならそうしよう」
延々と話が続いた。

４８０年の1月5日を迎え軍務省に散々考えまくった１１５０名の乗員名簿を提出した。
ワルキューレ関係は飛行長が就任してから相談する予定だ。
パイロットと併せて４００名が必要だから、専門家に聞かないと駄目だからな。

最初は撃墜王のカール・グスタフ・ケンプ少佐に打診したが、
『田舎の警備隊の飛行長なんぞ出来るか！』と速攻で断ってきた。
奴の言いように、３人共むかついたが、仕方なく軍務省に人事を頼んだ。
数日後に、飛行長は元ワルキューレパイロットでローエングラム警備艦隊所属の少佐が喜んできてくれると連絡が有った。

連絡三日後の１月１４日に取る物も取りあえず来た風の少佐がやって来た。
会合一番「ヘルマン・メルダース少佐であります、この度名誉を与えて頂きありがとうございます」
我々は非常に驚いたが、彼は真剣だった。

「メルダース少佐。卿に飛行長をお願いしたいが大丈夫かね？」
「無論であります、今すぐにでもワルキューレを操縦して見せます」
「おや引退したのではないのかね？」

「いえ長期休暇で腕が鈍っただけです、現在復帰の為猛訓練中です」
「８０機のワルキューレを搭載するが、
それらのパイロットと整備員など４００名の手配を任せて良いだろうか？」

「はっお任せ下さい」
彼は非常に真剣にそしてキビキビとしている、此はめっけもんかも知れない。

「しかし何故そんなに真剣なのかね？」
「はっ？」
不思議そうな顔をする。

「其れはこの艦が皇女殿下御召艦とローエングラム警備艦隊総旗艦になるからでは有りませんか」
今度は此方が不思議そうな顔をする番だった。
「「「はっ？」」」

「警備艦隊旗艦の話は聞いているが、皇女殿下御召艦の話は聞いてないぞ、本当なのか？」
「本当で有ります。多くの警備艦隊員が小官が乗艦すると聞いてじたんだ踏んで悔しがっております」
「「「かつがれた！」」」

中将め教えてくれても良いじゃないか、人員の集め方が果たして許されるか不明になってきたぞ。
しかし不安より、御召艦という栄誉を受けることに感動を感じている自分が居た。
フォルカーもハンスも同じなのだろう、喜んでいることが判る。

取りあえずハウプト閣下にねじ込みに行こう！
そうしようとしたとき。まるで見ていたかのようにエーレンベルグ元帥から出頭せよと連絡がいきなり来た。

仕方がないので直ぐ行くと、尚書室へ通されエーレンベルグ元帥から直接説明を受けた。
結局御召艦と判れば、型にはまった乗員しか集まらないので、敢えて知らせなかったそうだ。
エーレンベルグ元帥曰く我々が調べて推薦した１１５０名は全員合格だそうだ。

結局かつがれたが、後々嬉しい事だった。
しかしまさか進宙式で皇帝陛下と皇女殿下が御臨席するとは思わな

かった。
昨日は一生の誇りになった。

第六十九話　戦艦人事協奏曲（後書き）

ケンプと仲が悪くなるフラグが立ちました。

第七十話　パイロットがいっぱい

帝国暦４８０年１月

ローエングラム警備艦隊が帰還兵を受け入れる１月２５日の１８日前の１月７日ローエングラム警備艦隊司令部に一通の軍務尚書の命令書が電送されてきた。

【ローエングラム警備隊及び帰還兵の中より飛行長の出来る。ワルキューレパイロットを推薦せよ】

此が送られて来たとき、リンデマン准将はどうするかと考えた。帰還兵には知らせないで良いのではないか？彼奴等は俘虜になるような軟弱者だ。

そう思い副官に艦隊の飛行長の一人を適当に出せば良いと指示を出したところ。

司令官室の扉が勢いよく蹴り開かれた。

何処の無礼者が来たかと思わず、ブラスターに手を伸ばすリンデマン准将だが。

入ってきた人物は、屈強な下士官を従えた少将だった。

「軍務省人事局人事部長補佐バウマン少将だ」そう名乗った後。

火薬式拳銃を右手に持って、バウマン少将は隻眼の厳つい顔で睨みながら。

「リンデマン准将。エーレンベルグ元帥が出した命令は警備隊と帰還兵全員に知らせろと有るが、

其れを無視する気かね？」

すっかり呑まれる。リンデンマン准将。
「いえ・・・・」
「なら宜しい。命令書どうりに発表しなさい」
「はっ」

びびりまくる准将である。
「あと選考は俺が仕切るから良いな」
「はっ」

その後全兵士に布告するまで、バウマン少将は執務机に腰を掛けて火薬式拳銃を磨き続けたのである。
そしてバウマン少将が帰った後には、壊れた扉と放心するリンデンマン准将の姿が見られたのである。

「バウマン閣下。あれはやり過ぎですよ」
「あれぐらいせねば、ああ言う奴は直らんよ」
「准将は閣下のことを見て、完全にびびってましたぜ」

「クルマン曹長、シュミット曹長。
卿等も悪人過ぎだ、何処のギャングかと思ったぞ」
「閣下ほどでは有りませんよ」
「閣下此は1本取られましたね」

大笑いする少将と部下達。
「ハハハ参ったな。よし今日は俺の奢りだタップリ呑もう」
「「はっ閣下ゴチになります！」」

まあ此でグリンメルスハウゼン爺さんの頼みはＯＫだろうな。
態々巡航艦をかっ飛ばして来たんだからな、帰ったらオーバーホー

ルしないと駄目だな。
バウマン少将はそう考えながら部下達を連れてローエングラム市の繁華街へ消えていった。

翌日1月8日二日酔いでフラフラの部下を連れて、
帰還兵パイロットが駐屯軍戦術訓練センターへ向かうのを確認してから、
自分もセンターの大会議室で睨みを利かせて待っていた。

駐屯軍戦術訓練センターでは多くの帰還兵パイロットが集まってきていた。
本来の集結日は1月25日だが、布告を聞いて集まってきたのである。
大会議室へ数千人のパイロットが集まってきていた。

バウマン少将が集まったパイロットの大尉、少佐を残して帰すと言うと、
大ブーイングが起きたが、睨み付ける眼光と、
少将にしては珍しい丁寧な説明でその他の者は、
25日に再度来る様にと解散する事になり結局は宥めて帰宅させた。

指揮官としての大尉、少佐クラスが残され。
其処で詳しい募集要項が発表された。
【ローエングラム警備艦隊旗艦の飛行長になれる士官と各航空隊長を特に旗艦の飛行長は早急に欲しい】

残った士官は250名を越え、しかも御召艦に成る艦であると言えば、
皇帝陛下と皇女殿下に並々ならぬ御恩がある彼等にしてみれば、
小官こそが、俺こそが、私こそがと我先に手を挙げはじめて収拾が

付かなくなっていた。

其処へ、少将が天井へ向けて拳銃を数発発射して騒ぎが一瞬で収まった。

「やい！てめーら。仲間同士でガタガタ騒ぐんじゃねー！
パイロットなら腕で決めな腕で！」

其れを聞いた。パイロット達は飛行場へ走り出そうとするが、
今度は少将が部下から奪った火薬式短機関銃を天井に撃ちまくった。
バラバラと薬莢が散らばり、屋根の欠片が降り注ぐ。

「やい！てめーら！いきなり出て行くんじゃねー！
いきなり操縦しても駄目に決まってるだろう！
シミュレーションで決めるんだよ！」

短機関銃を肩に担ぎながら凄む隻眼の少将、見た感じはギャングのボスである。
シーンとするパイロット達。
見かねた、少将の副官が話し始める。

「バウマン少将閣下副官のネルリンガー中尉です、今回の募集は飛行長一名を大至急決めるモノです。
その為パイロットとしての腕より各種航空作戦や整備班との話し合いなどを行える人物をお願いします」
ざわつかず、お互いを見合う者達。

「またその後で８０機分のパイロットや整備班はその飛行長に決めて貰います」
非常に苦労していそうで胃が悪そうな中尉である。

「お前等。と言うわけだ！頭に自信がねー奴はやめておけよ！」
少将の物言いに、中尉が頭を抱える。

文句を言いたそうな士官も居るが、少将の威圧で何も言えない。
「良いですか、順番にシミュレーションを行います。
その後ペーパーテストも行います」

「と言うわけだ、野郎共駆け足！」
少将の声に反応し走り出す士官達、
其れをニヤリと見ている少将、悪人面である。

４日間に及ぶシミュレーションやペーパーテスト。
その後の実機を使ったテストを経て、１２人の飛行長候補と大隊長候補が決まった。
じたんだ踏んで悔しがった、他の連中は警備艦隊所属艦の飛行長や隊長候補として名簿に記録された。

旗艦にはワルキューレを８０機を搭載するが予備パイロットを含めて１２０名が乗り込む為、
飛行長１名と飛行長補１名と各大隊長１０名が決まったのである。
喜びを隠せない１２名は、やっかみ半分の仲間達から手厚い胴上げをされて、
寒いプールに投げ込まれた。

「てめーら、俺達を殺す気か！」
投げ込まれた連中が叫んでいるが、顔は笑っていた。
其れをバウマン少将は笑って見ている。

飛行長補と大隊長は取りあえずローエングラム警備艦隊新発足の２５日までは休暇であるが、

腕をならす為に休暇返上で訓練を始めるそうだ。

飛行長に決まった、ヘルマン・メルダース少佐は３０歳、
士官学校卒業後にワルキューレパイロットとしてイゼルローン要塞へ配属された後、
メキメキと腕を上げ、戦艦２隻、巡航艦６隻、スパルタニアン撃墜数８９機を誇ったが。

５年前当時新進気鋭のパイロット、カール・グスタフ・ケンプ少尉が無茶な行動をして撃墜されかけ、
ケンプを守ってで自機が被弾そのままケンプを逃がした後、
戦場に置き去りになり叛徒の捕虜になったのである。

撃墜王の彼は同盟で怨嗟の為に酷い尋問を受け片眼が不自由に成っている為、
最早パイロットとして再起不能として同盟側も前回の捕虜交換で釈放したのであり、
五体満足であれば釈放されなかった可能性が高かった。

しかし彼は、其れを感じさせないほどの努力でハンディを克服している。
しかも彼は元々明るく部下思いなため逆境にも耐え続けたのである。
また自分を見捨てたケンプについても何ら恨み言を言わないほどの清廉さである。

そして素晴らしい見識を持って居る為、
バウマン少将がメルダース少佐を認め、
飛行長を手に入れたのである。

彼の嬉しのあまり、ガッツポーズをして同僚から、からかわれたの

である。
そして取るモノも取りあえず。
オーディンへ帰還する。バウマン少将の巡航艦アトレビドに便乗し
旅立った。

第七十話　パイロットがいっぱい（後書き）

出てくる少将はどっかで知ってる様なかたです。

第七十一話　戦陣訓

帝国暦４８０年４月２５日

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　小部屋　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

本日も定例総会です。
参加者は何時ものように、私、父様、爺様、ケスラーです。
早くケーフィンヒラー爺さんや信用できる謀略仲間が欲しいです。
カロちゃんは謀略には向いてませんから残念です。

今日もケスラーが司会です。
「今回も小官が牽引させて頂きます」
話しながら色々考えているようです。

今回は多数の報告と新規の提案がありすぎなので大変です。
庭園は未だ建設中だし。
歌劇団も未だ募集前ですからね。

指向性ゼッフル粒子先に開発しようかなと思ってます。
未だ開発どころか構想すら無いようです。
そうすればシャフトの権勢ゼロじゃないですか。

さらにヘルクスハイマーが、アマーリエ姉さん、エリザベート、クリスティーヌ姉さん、ザビーネ達の遺伝情報を仕入れてきてやばい状態になっても、既に出来ていれば持ち逃げされる可能性が減るし。

と言うか、リッテンハイム候がヘルクスハイマー伯を暗殺しようと

するぐらいで、
皇位継承どころか門閥貴族としても破滅的なモノなのなら。
ザビーネやエリザベートの遺伝的欠陥が姉上達からの遺伝であるから、

この情報を先に仕入れて両家の首根っこを押さえる。
しかし私自身が遺伝的欠陥があるかもしれない。
これは、諸刃の剣だな。

大体原作、ＯＶＡでも結局は内容までは出なかった。
しかしヘルクスハイマー伯が知り得た情報だ、
うちなら比較的簡単に暴けるのでないか。

劣悪遺伝子排除法で破滅する遺伝情報か。
ＯＶＡを見る限り、姉上達やエリザベートやザビーネに身体的欠陥は見受けられなかった。
そうなると精神的か、外観に出ない内臓的な欠陥なのか。

色盲という可能性もあるか。
幼年学校生で色盲が原因で放校されたしあり得ることだ。
んー危険すぎるか、暫くは保留にするか。

ケスラーの報告を聞きながら考えていた。
「サイオキシン麻薬については、カール・マチアスの仕入れ元の探索に時間が掛かっております」
ん。判らないのか、ヒントをあげるかな。
「ケスラー、サイオキシン麻薬だけど、オーディンだけじゃなくて全国に広まっているのでしょう」

「はい、全国各地で中毒患者が出ております」

「でそのディーターは出せるかしら」
端末を操作して出してくれます、見た感じ各地に麻薬関連の犯罪や患者数が出てますね。

「ケスラー麻薬犯罪や患者数の多い順に並び替えて」
操作中です。
出ましたね、やはり軍港が多いな。

「やはり、軍港を中心に同心円状に広がってますね」
「なんと」
「そう言う事じゃと？」

みんな驚愕ですね、私は知ってましたけど。
「軍がサイオキシン麻薬を流通させているのではないかと思うのですが」
「しかしその様な事が」
「ありえんのではないか？」

「まず考えて下さい、サイオキシン麻薬の製造には大がかりな施設が必要です、
そんな工場が内務省に見つからないのは可笑しいのではないですか？
あれだけ、でっち上げや冤罪だらけの社会秩序維持局が検挙できないのは何故なのか？
意外な盲点にいるのではないかと」

「其れが軍だと？」
「ええ、軍の補給敞に有るプラントならサイオキシン麻薬制作も出来ますし、
輸送艦を使えば正規の物資に混ぜて各地へ合法的に送ることが出来ます。

まさか軍用艦を警察や社会秩序維持局が調べるわけには行かないでしょ」

みんな考え出しましたね。

「軍と軍に影響のある人物が暗躍している可能性が大だとテレーゼは言うのじゃな」

「はい、お父様」

「そうなりますと、慎重に事を運ばねばなりません」

「そうなのよね、気づかれたらアウトだから。

其れと思うのだけど、マチアスのように金のない貴族で豪遊している連中や強突張りの連中は密売してるんじゃないかと思うのですよね。その辺りも調べた方が良いですね」

「確かにその可能性はあります」

「お父様どうでしょうか？」

「テレーゼの策を取ろう、グリンメルスハウゼン、ケスラー頼むぞ」

「「御意」」

「所でテレーゼや」

お父様が先ほどと違ってにこやかに話しかけてきます。

「だいぶ士官学校の事では色々やったそうじゃな」

ああシュターデンや、憂鬱になるフレーゲルの事ですね。

「まあ色々としましたが」

「テレーゼの事じゃ飛ばされた者にも何かしらするのであろう、フレーゲルの事はまあ一時じゃ我慢せい」

「シュターデンについては理屈と理論は優れている為、

お爺様の代にイゼルローン要塞建造を監督したリューデリッツ提督

のような仕事をさせれば良いかと思います、けれどもブラウンシュヴァイク公の紐が完全に切れたらですけどね」

「なるほど、確かに理論的ならば力を発揮しそうですね」
「ええ、フレーゲルはねー。まあ適当にあしらいますよ」
憂鬱です。

今度も大事なことです。
「お父様、ゼッフル粒子を指向性にする研究をしませんか？」
「指向性を持たせるとは？」
「はい、今のゼッフル粒子は流したまんまです。其れでは大して役に立ちません。
其処で指向性を持たせれば機雷原突破や敵要塞の一部だけ破壊などや敵艦隊にだけ損害を与えるなど出来るはずです」

「しかしゼッフル粒子にそんな事が出来ないじゃろうケスラー？」
「はっゼッフル粒子はコントロール可能なモノではありませんね」
みんなが子供の考えだと思った顔です。けども内容を知っている私は大丈夫です。

「ゼッフル粒子自体を制御するのではなく、
ゼッフル粒子を吸引するナノマシンを開発して其れにより指向性を確保するんですよ。
それならば可能なはずです」

コロンブスの卵的な発想ですから、みんな其れがあったかという顔に変わります。
「なるほど、確かに粒子自体をコントロールするより遙かに簡単かもしれません」
「確かにそうじゃな、研究させてみるか」

「お願いしますね」

「次にですが、帝国軍規はルドルフ大帝がお決めになったモノなので、
変更は難しいのですが、改訂しておきたいというモノが有るのです」
「いったい何じゃな？」

「『俘虜を恥として死を持って矜持を得よ』です。
このせいで降伏もせずに玉砕を遂げる部隊が続出しています。
確かに帝国軍人で有れば、叛徒に降伏は恥辱以外の何物でもないでしょう。
しかし門閥貴族なら鼻で笑うでしょうが、人命を無駄に浪費したくはないです」

「しかしルドルフ大帝以来の軍規を変えるわけにも行かんぞ、
貴族達が騒ぎ出すにきまっておる」
お父様も此に関しては弱いな、まあ暗殺されるかも知れないしね。

「簡単です。晴眼帝マクシミリアン・ヨーゼフ?世が劣悪遺伝子排除法を有名無実にしたようにすれば良いのです」
「で内容はどうするのじゃ？」

「はい、お父様に勅命を出して頂きます」
「勅命をか」
「はい勅命であれば、帝国臣民ならば考えは別として須く守らねばなりません、
破れば逆賊ですから」

「出すとしてどの様なモノじゃ？」
「はい戦陣訓と言うモノを出して頂きます」

「戦陣訓？」

「ええ、現在の帝国軍の軍規は非常に低いです、
汚職や横流しなどの犯罪、地方叛乱時などでの略奪暴行等、
そして先ほどの玉砕や自決を強要などです」

「確かに軍規の乱れは酷いです」
「それほどか？」
「はっ」

父様はあまり聞いてないからね。
「其処でです、今上勅命により古い軍規を有名無実化してしまうのです」
みなさん頷いてます。此処は酷いようですが敢えて酷い言い方を言います。

「酷いようですが、はっきり言って人命も資源です。
叛徒撃破ですり潰すならいざ知らず、
無駄な自決や玉砕で捨てるのは、大いなる損失です」

みんな考えてますよ。
「草案はあるのですか？」
「ケスラー考えて有りますので、其れを元に作って欲しいのです」
「教えて頂けますか？」

「ええ」

【昨今の軍規の乱れを鑑み。此処に新たなる詔を示す】

【帝国軍人　心得の条　我が命我が物と思わず　無用なる死、あく

まで禁じて　奮戦勇戦し刀折れ矢尽きし時　堂々なりて降伏せよ、
無用なる死迎えし者　死して屍拾う者なし　死して屍拾う者なし】

【第一条
軍規の粛正。
略奪、暴行、虐殺等の帝国軍人にあるまじき行為の厳禁、
また其れを行いし者は厳罰を処す。】

【第二条
降伏要項。
帝国軍人として、奮戦虚しく俘虜になりし者の罪は此を問わない】

【第三条
玉砕、自決の禁止。
上記要項に鑑み。
死に逃避する考えを禁じ自滅玉砕を禁ずる。】

「まあこんな感じで作れば良いかと思います、
只逃げ道を無くすように作らないと曲解されます」
皆さん又々考え中です。

「時代掛かった台詞じゃ」
「まあ無用な死を強調したいですからね」
実際は大江戸捜査網からだけどね。

「まあ此を元に考えて見るのも一興じゃ」
「ではその様に」

何とか成りそうですね。
「テレーゼ様」

「ケスラー何かしら？」
「テレーゼ様のシミュレーションの結果を照査した結果、ご指摘のように士官学校のカリキュラムに取り入れる事が出来るレベルだそうです」

「それでは、来年度から入れて貰ってくれるかしら、其れと現役士官にも在所でその理論を教えてあげて下さい。ただし幼年学校は未だ早いので、幼年学校生は士官学校へ行ったら勉強させて下さい。初めのうちから奇策覚えたら真っ当な思考が出来ませんから」

「なるほど、全士官が知れば作戦を立てやすいですね、幼年学校生も士官学校で習えばいいわけですから確かにそうです」

「４８１年度からカリキュラムに入れれば僅か１年で全士官に戦訓を教えられますから。其処でお仕舞い出来るじゃないですか、あとは士官学校の教育ですから」

みんな関心してるけど。これラインハルトに対する嫌がらせなんだけどね。
幼年学校出のラインハルトはその理論を習ってない、其処で各個撃破戦法とか中央突破戦法とかしても誰も驚かない。教科書や授業で習ったのを、自分が発明したかのように言うＫＹだと思われるでしょう。

「お父様如何でしょうか？」
「いいじゃろうそうしなさい」

「あそうだ、ラプンツェルのように、後方射出型の標準戦艦や巡航

艦の設計を出来ないかしら、
それにワルキューレ母艦の建造をお願いしたいです。
横出し式だと火線で殺られる可能性が大きいですから」

「うむ其れの基本図は出来るかの？」
「戦艦に関しては今までの後方砲座部分を延長して格納庫として、
その上面に砲座をもうければいけるはず。
巡航艦は基本から変えないと駄目です。

空母は叛徒の空母のように開放型釣り下げ式だと、腹に火薬を抱いて居る状態ですから、
そこを何とかしないと駄目ですね」

「難しいの」
「秘密研究所で艦艇専門家が居るから其処でゼッフル粒子共々研究させましょう」
「ケスラーそうだね」

やることがありすぎて体が足りません。

第七十一話　戦陣訓（後書き）

障害についてご意見が有った為削除しました。
原作準拠の物は残しました。

第七十二話　原始人と一緒（前書き）

オフレッサー登場です。

第七十二話　原始人と一緒

帝国暦４８０年5月1日

■オーディン　帝国軍装甲擲弾兵訓練施設　装甲擲弾兵総監部

この日の早朝から。
戦場では叛徒共を、その肉弾で叩きつぶし戦斧で引き裂く。
百戦錬磨の装甲擲弾兵達が、緊張しまくっていた。
何故なら、皇帝陛下と皇女殿下の閲兵を受ける為である。

装甲擲弾兵総監ライムバッハー上級大将と副総監オフレッサー大将が2人して落ち着かない姿を見るのが初めてなので、多くの兵員がにやついたりして眺めている。
しかし、そんなことすら気にしないように巨体をチョコマカと動かしながら準備を指導していた。

「おい、其処じゃない！もっと右にしないとご観覧出来ないぞ！」
「違う違う、グランドはもっと確りと真っ平らに均すんだ！」
「あー、馬鹿もん！！折角均したところをズケズケ歩くんじゃない！！」

2人共顔を真っ赤にして、部下達を叱咤激励する。
それに反応して普段は戦闘してる連中が、
一生懸命トンボでグランドを均し、石拾いや雑草むしりをしている。

なぜ機械力でグランドの整備をしないかと言うと。
【健全な肉体には健全な精神が宿る！】
と言う装甲擲弾兵のモットーが有るからであった。

３時間近くかけて午前7時過ぎに、全ての準備が終了し早速朝食である。
皆黙々と食べ続ける、あの筋肉を維持する為にバランスの良い食事が出されている。
ライムバッハー上級大将は、緊張した趣で肉を食べている。

オフレッサー大将は、普段の豪快さが嘘のように細々と食事をしている。
しかし装甲擲弾兵全体でやはり緊張のあまり食が細くなっているようだ。
全員が食事後配膳係は普段と違い大量に残った料理をどうするかと、頭を抱えていたのである。

食事後一旦全員が身だしなみの為、シャワーを浴びることになった。
汗臭い状態で皇帝陛下と皇女殿下をお迎えするわけには行かないからだ。
念入りに体を洗う者、普段しないリンスをする者、伸び放題の髭を剃る者、
皆が皆身だしなみに気を付けているのだ。

全員が下着を新品にしていて、まるで初ディートか死に装束である。
眉毛の形を整える者まで居る始末。
全員がそれぞれの個性を持った髪型にしている。

最早ファッションショーの楽屋裏である。
そうして皆がおめかしして、
クリーニングされノリの効いた軍服を着て集合を始めた。

午前９時準備万端整った。

帝国軍装甲擲弾兵訓練施設には、
あと1時間でで皇帝陛下と皇女殿下が御到着すると連絡が有り、
早速全兵士による整列が正門前から始められた。

オフレッサーのだみ声が響く。
「パウマン中佐。卿の部隊は右側だ」
「はっ」
「ラフト中佐。卿の部隊は正門前だ」
「はっ」

「モルト少将。少将は車止めで挨拶を俺と一緒だ」
「御意」
「レムラー大尉。卿は扉を開ける係だが大丈夫であろうな？」
「はっ、何度も練習いたしました」
「頼んだぞ」
「はっ」
そしてキッカリ1時間後皇帝陛下と皇女殿下の車列が正門前に現れた。
５万人に及ぶ兵達が正門前から、５ｋｍに渡り、２列で両側にズラッと並ぶ光景は黒い壁のようである。
今回はご尊顔を見ても不敬にあたらずと事前に布告されたため、
直接全員がご尊顔を見ることが出来たのである。

皇帝も皇女もその光景を見ながら手を振っている。
並ぶ装甲擲弾兵達は歓声こそ出せないが確りとした敬礼をしながら、
内心では感動を覚えていた。

装甲擲弾兵総監部庁舎前に車列が到着すると、
装甲擲弾兵総監ライムバッハー上級大将と副総監オフレッサー大将と総監部査閲官モルト少将達が整列し皇帝陛下と皇女殿下を出迎え

た。

地上車から降りてくる皇帝陛下と皇女殿下を緊張の趣で敬礼し迎える。

ライムバッハー上級大将が緊張した声で挨拶を行う。

「皇帝陛下、皇女殿下におかれまして、この度の御統監、装甲擲弾兵すべからず感嘆の極み」

皇帝は頷き「総監御苦労」と答えた。

皇女はにこやかに「皆の者御苦労さま」と答えた。

居並ぶ装甲擲弾兵達は益々感動に震えていた。

此処まで皇帝陛下や皇女殿下を間近にして、お言葉を賜っているのであるから。

緊張のレムラー大尉が扉を開けて、

皇帝陛下には、ライムバッハー上級大将が、

皇女殿下には、オフレッサー大将が、

それぞれエスコートして応接室へ向かう。

最初は皇女殿下のエスコートについては、

厳つく恐ろしい感じのオフレッサー大将ではなく、

優しい趣のモルト少将と言う話も有ったが、

皇女殿下、ご自身の希望でオフレッサー大将に決まったのである。

オフレッサーはその話を聞くと、自分の厳つさは女子供を泣かすことが多い為、

皇女殿下が泣いてしまうのではと内心心配しながら、お迎えしたのである。

所が、お迎えしエスコートするオフレッサーが挨拶をすると意外な答えが返ってきた。

「皇女殿下におかれましてはご機嫌麗しく、
不肖オフレッサー、皇女殿下のご案内を賜り誠に祝着至極でございます」
「オフレッサー、会いたかったぞ。卿の働きはよう聞いておる。
その頬の傷も歴戦の証じゃ、誠に頼もしく思うぞ。今日の案内楽しみじゃ」

オフレッサーにとって頬の傷は叛徒との戦いで受けた傷である、
敢えて完治させずに歴戦の強者として傷を残したのであるが、
皇帝陛下と皇女殿下にお見せするのが、憚れるのではと考えていたのであるが、
皇女のこの言葉で安堵の気持ちになったのである。

応接室で皇帝陛下と皇女殿下に相対しながら、
緊張しつつ装甲擲弾兵についての質問を受け答えを行われた。
小一時間が経ちグランドでの御観覧を開始する時間となった。

グランドに作られた御観覧台へ、ご案内をする総監達。
グランドには装甲擲弾兵５万人が整列して準備が整っている。
皇帝陛下と皇女殿下が御観覧台へお上がりになると、

軍楽隊による、国歌と軍歌の演奏が行われる。
全員が直立不動で皇帝陛下と皇女殿下を見つめる。
通常であれば跪いて顔を上げることすら許されないモノである。

その姿は、立体ＴＶや新聞等では見た事があるが、
殆どの者が、直接ご尊顔を拝謁する事は初めての事である。
其れだけでも装甲擲弾兵全体に感動と忠誠心が沸き上がっていた。

流石に5万人では後方の方や左右の者は、小さくて見えないため、大ビジョンにより映像が映されていた。

まず、皇帝陛下から、お言葉を賜る。

「装甲擲弾兵達よ、卿等の忠誠誠に重畳である、予は卿等を頼もしく思うぞ」

続いて、皇女殿下から、お言葉を賜る。

「装甲擲弾兵の皆さん、皆さん素敵です。これからも頑張ってください」

皇帝の激励にキリッと締まる者達。

そして、皇女の愛らしい挨拶ににこやかになる装甲擲弾兵達。

皆が皆、この栄誉を忘れないようにと思うのであった。

挨拶の後、装甲擲弾兵同士の模擬戦が始まった。

みな真剣に模擬戦を行っている。

時折、皇帝陛下や皇女殿下が質問を行う。

「あの技はどんな技じゃな？」

「はっ、たいがためにございます」

「あの者は見事じゃ」

「はっ、第12装甲擲弾兵師団のパウマン中佐であります」

「天晴れじゃ」

「御意、かの者も喜びまする」

「うむうむ」

こうして、皇帝陛下の御相手をする、

装甲擲弾兵総監ライムバッハー上級大将は、緊張の連続である。

逆に皇女殿下の御相手の装甲擲弾兵副総監オフレッサー大将は。
皇女殿下から非常に懐かれていた。

「オフレッサー、そちの身長は高いのー、いくつあるのじゃ？」
「はっ、２ｍ８ｃｍであります」
「おー、すごいの、天に届くようじゃ」

オフレッサーは普段から怖面であり、
皇女殿下のエスコート役になることが不安であった。
しかしまったくの杞憂に終わりホッとしていた。

さらに殿下が非常に親しく接してくれるのも、
下級貴族出身の彼としては、望外のことであり。
皇女殿下に非常に親しみと慈しみを覚えていたのである。

「オフレッサー、皆が皆ようやってくれる、嬉しいことじゃ、
わらわにも出来る事ならしてやりたいものじゃ」
「殿下、そのお言葉だけで十分でございます」
「オフレッサー、そちは優しいの」

そう言われて、照れてしまうオフレッサー、普段あまり見ない姿である。
「そうじゃ、オフレッサー、聞くところによると、
そちは相当な腕前でハンティングをするそうじゃな」
「自慢するほどのものではございません」

「どうじゃ、今度そちの家に招待してくれぬか？」
「小官の家でございますか、恐れ多いことでございます。
とてもとても殿下をご招待できるような家ではございません」

「よいよい、わらわは、オフレッサーそちが気に入ったのじゃ、
それともわらわが家に行くのはいやなのか？」

「滅相もございません」
「では決まりじゃ、オフレッサー、
そなたが仕留めた剥製を沢山見せてたもれ」
「御意」

「オフレッサーよ、これを賜する」
テレーゼ皇女がゴソゴソとポシェットから万年筆を出して渡してきた。
「殿下これは？」

「うむわらわの使っている筆じゃ、
副総監となれば書類も多かろう、
そちに合うかどうかは判らんが使ってたもれ」

オフレッサーにしては望外な贈り物である、
彼は大変感動しお礼を述べた。

「皇女殿下におかれましては、誠にありがたく存じます」
「よいよい」
「オフレッサーの家に行くのが今から楽しみじゃ」

そうしてその日の閲兵は無事終わった。
皇帝陛下と皇女殿下の車列を見送る装甲擲弾兵達は、
緊張から解放された感覚よりも、
皇帝陛下と皇女殿下からのお優しいお言葉や激励を思い出し、
益々精進しようと考えているのであった。

更に皇帝陛下と皇女殿下から下賜された、
酒類で今夜は宴会が許されたので、
そのことも士気を挙げる要因の一つとも成っていた。

「皇帝陛下万歳」
「皇女殿下万歳」
車列が見えなくなるまで歓声は続いたのである。

装甲擲弾兵総監ライムバッハー上級大将は、
緊張からか椅子に座ったままグッタリしている。
もう今日は仕事は、お仕舞いであろう。

副総監オフレッサー大将は、
皇女殿下より賜された万年筆を見ながら。
俺の手には小さいなと思いつつ、
あの愛らしい姿を思い出して益々の忠誠を尽くそうと思うのであった。

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

今日は装甲擲弾兵の閲兵に行っ来ましたが、
みんな訓練に頑張ってくれてます。
お嬢様のような口調で話すのも疲れましたが、
オフレッサーとも知り合えて、
無理を言って、お家へ遊びに行ける事になりました。
ＯＶＡで見ると剥製とか刀とか一杯有るから楽しみですね。

日本刀も有るか知れないし、
古式銃も持っているようですからいいですね。

しかし大きかったです。流石石器時代の勇者。
２万年ばかり遅れて生まれてきた原始人ですね。
けど、ストレートで優しい人ですよ。
私は好きですね、今度のお宅拝見が楽しみでなりません。

第七十三話　ラプンツェル訓練中（前書き）

あまり短いです。
書くのが遅くなりつつあります。

普段のネタが出ない。
４８２年７月からは怒濤の事件が有るのですが。

第七十三話　ラプンツェル訓練中

帝国暦４８０年5月１０日

■ヴァルハラ星系外縁　　宇宙艦隊演習宙域　　戦艦ラプンツェル

艦橋内でドゥンケル艦長、ビューロー副長兼砲術長、ベルゲングリューン運用長、ジンツァー防衛指揮官達が戦闘指揮をしている。
その指示を受け、航宙士エメリッヒ少尉が舵を取り。

索敵士グナイスト少尉が探査機器を睨みながら報告をする。
機関長インマーマン工兵少佐がエンジンの調子を見る。
飛行長メルダース少佐がワルキューレ隊の発艦準備を指示する。

艦内ではアデナウアー補給長が補給主計課調理班員に昼食の用意をさせている。
ヨーンゾン軍医は万一の怪我人に対処する為スタッフと共に待機している。

「敵機直上急降下！」見張り員が報告する。
「右舷上方敵機来襲！」
「両舷上方ウエポンオールフリー、ファイエル！」ビューロー副長兼砲術長が命令する。

「取り舵一杯！最大戦速！」ドゥンケル艦長が命令すると航宙士エメリッヒ少尉が舵を切る。
「敵機撃墜！」見張り員が報告する。

「舵戻せ！」

「艦周辺に敵影ナシ」索敵士グナイスト少尉が探査機器を睨みながら報告をする。

「ワルキューレ発艦せよ！」飛行長メルダース少佐が命令をだす。

「発艦準備宜し」発艦士官が報告をあげてくる。

「ハッチ開け」

「カタパルト装着完了」

「発艦開始！」

「第一、第二、第三、第四ワルキューレ隊発艦！」

「第二波発艦準備」

「第一波集合完了」

「続いて第五、第六、第七ワルキューレ隊発艦！」

「敵艦発見、方位α６．２、γ４．２、β３．４、距離７０光秒！」索敵士グナイスト少尉が報告をする。

「第二波集合完了」

「敵艦艦載機発艦！」

「ワルキューレ隊は敵艦載機を排除せよ！」飛行長メルダース少佐が戦闘を指示する。

『了解』

「主砲３０ｃｍ中性子ビーム砲準備宜し」砲術士官が報告する。

「敵艦距離４０光秒」砲術員が距離を数え始める。

「射程距離入りました」

「有効射程距離まであと１０光秒」

「あと5光秒」
「ワルキューレ隊、敵艦載機と戦闘開始」通信士が報告する。

「有効射程に入りました」
「全艦ファイエル！」ドゥンケル艦長が命令する。
「全艦ファイエル」ビューロー大尉が復唱する。

ラプンツェルの艦首から、演習用に出力を落とした12門のビームが発砲される。
敵艦に向け直進するビームが敵艦の艦体に当たる。
敵艦上面に有る撃沈判定の赤ランプが点滅を始める。

「敵艦撃沈」
艦内に歓声が上がる。
しかし飛行長メルダース少佐だけは未だ渋い顔である。
「ワルキューレ隊の動きが未だ未だな」

やっと敵機を撃退したとワルキューレ隊から報告が入る。
「遅いな、未だ未だ旗艦に乗せる程じゃないな」
そうは言っているが、腕前は既に正規艦隊所属部隊ベテランの域である。

ワルキューレ隊が次々に帰還してくる。
「ワルキューレ隊順次着艦」
ゆっくりと格納庫へ着艦する。
ワルキューレにロックが懸けられ

「拘束確認ハッチ閉め」甲板員の確認の声が復唱されていく。
「エアロック閉鎖確認」
「洗浄開始」

帰還した機体が洗浄液により放射線や宇宙塵を洗い流されていく。
洗浄終了までパイロットが外に出られない。
僅か1分弱で洗浄と乾燥が終了する。

「洗浄終了」
「エアー注入」
整備員がハッチから現れ、パイロットがワルキューレから出て来る。

「お疲れ様です」
整備員が労いの言葉を放つが、
パイロット達は「ありがとう」出てくる。

標的艦に終了の合図を行い、宇宙艦隊演習宙域から演習用基地へ向かう。
「合戦終了、用具片付け」
艦長が宣言する。
艦内に終了の放送がされると、早速片付けが始める。

艦橋では、幹部達が話している。
「今回はまずまずの仕上がりだな」
「ですね、各方面とも動きがよいです」
「機関も調子がよいですぞ」

「各砲の動きが良くなってます」
「機動性も良いです」
「艦載機の発艦方法も良いですな」

「しかし、艦載機の動きが未だ未だ」
「飛行長は厳しいな」

「これぐらいせねば、殿下の御召艦のパイロットは任せませんよ」

「仕方ないな」

「まあそう言う事ですよ」

片付けが終わったと艦内各所から報告が上がる。

其れを聞いた艦長が、昼食を取るようにと放送を入れる。

食堂では、主計課が腕によりを掛けて作った昼食が出され、皆が皆、舌鼓をうちながら疲れた体を休めていた。

標的艦と随伴巡航艦達と基地へ帰る。

明日もまた早朝からの訓練である。

帝国暦４８０年5月１０日

■イゼルローン回廊同盟出口付近

帝国軍はイゼルローン回廊の出口に付近でパトロールを行っていた。

今日もまた少数のパトロール隊が回廊出口付近を航行していた。

巡航艦１０、駆逐艦２０程度の第２０４パトロール艦隊は、今月初めてのパトロールであった。

旗艦巡航艦ゲヴィッター内では艦長兼パトロール艦隊指揮官エルラッハ中佐が部下に指揮を丸投げで指揮官席に座っていた。

指揮をしているのは副長のルッツ大尉である。

突然に回廊出口付近で同盟軍のパトロール部隊と遭遇したのである。

エルラッハ中佐は慌てて椅子からずり落ちた。

「敵だと。数は」
落ち着いているルッツ大尉と対照的である。
「艦数１００程度、巡航艦４０、駆逐艦６０程度です」
オペレーターの声が震えている。
「三倍じゃ勝てんぞ」

エルラッハがさらに慌てる。
「撤退しよう」
「この状態では、撤退するにも一戦しなければ引けません」
ルッツが冷静に応対する。
「増援は求めたのか？」

「既に連絡を入れております」
「そうか」
「敵艦隊包囲しようとしています」

どうするかとルッツを見るエルラッハ。
「艦長此方は紡錘陣形を取り一撃を加え、その後急速撤退を行いましょう」
「わかった其れで行こう」

そして戦闘が始まった。
案の定同盟艦隊は鶴翼の陣で来たが中央を攻撃され引いたところで、撤退に成功したのである。

同盟艦隊は追撃を懸けたが、イゼルローン要塞から増援が来た為逃げ帰っていった。
エルラッハ中佐は椅子に座りながらホッとしながら、
頼りになる副長を見ていた。

そして思った彼が副長で良かったと。

第七十三話　ラプンツェル訓練中（後書き）

ご指摘を頂き。航空参謀→飛行長へ変更しました。

第七十四話　養父と養子（前書き）

取りあえず、のってきたので投稿。
今晩は仕事で夜勤なので、投稿無いかもしれません。

第七十四話　養父と養子

帝国暦４８０年６月１日

■オーディン　軍病院特別病棟　　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

本日、父様と病院へケーフェンヒラー爺様に会いに来ています。
爺様の調べている、ジークマイスターとミヒャールゼンのスパイ組織は既に４０年以上前ですからね、
既に死んでいる組織なはずです。

最早歴史の世界ですね。
しかしそのスパイ組織細胞の浸透方法は現在でも使っている可能性が有りますから、
役に立つ研究だと思いますよ。

さらに今日は、フレーゲル問題を少々相談したいんですよね。
士官学校行かなきゃ成らないんだけど、フレーゲルが居るから行きたくねーーーーーー!!

さらに、自殺未遂後に誰も家族が、お見舞いにすら来ない。
気の毒な、プレスブルク大尉の事もお見舞い&爺様にお願いをしに来たんですよね。
こっちは楽しみなんですけどね。

爺様生きてるか!とは言えないですよね、言いたいですけどね。
「ケーフェンヒラー具合はどうじゃ?」
まずは父様が聞くのが当たり前。

「はっお陰様で良い状態でございます」
ニヤニヤですね、２人ともにスッカリ悪戯仲間みたいですね。
「ケーフェンヒラー元気そうで何よりですね」

「ハハ、この様に生きております」
「所で研究はどうですか？」
「中々尻尾が出ませんな」

「じゃろうな、４０年も前の事じゃし、知って居っても名誉で隠すじゃろう」
「陛下と殿下がお許し頂いた、資料自由閲覧でかなり推測できてきましたが」
「今更墓場から故人の名誉に泥を塗る訳にも行かないと言うわけですね」

「まあそうじゃな」
「フェザーンかイゼルローンにジークマイスターとミヒャールゼンの間を、
渡す何者かが居たわけですね」
「その通りです、その人物が何者なのかが特定できません」

「最早故人であろうが、その後を継ぐ者が居るかもしれんな」
「現在の者は諜報部などが探していますよね」
「そうじゃな」

「まあ、臣の研究は歴史のようなモノですから」
「そうですよね」
「まあそうじゃな」

3人で顔を見合わせて笑います。無論人払いしているので3人以外誰もいませんよ。
「所で陛下、この話だけをしに来たのではないのでしょう」
ニヤリとしますね、流石です。
「うむ卿に頼みたいことがあってな」

「臣に頼みとは陛下ご命令頂ければ宜しいのですが」
「実はな、卿の家の事じゃ」
「臣の家でございますか」

「卿の家は、跡継ぎが居らん、このままではケーフェンヒラー男爵家が断絶してしまうじゃろう」
はって感じですね、元々奥さんに逃げられたのが原因なんだから、家なんか潰しても良いと思ってるんですよね。

「陛下。臣は家名など惜しくはありません」
「いやな、卿に良い養子を紹介したくてな」
「養子でございますか」

ふむ要らないって言ってるですな。
ここいらでネタばらし！

「ケーフェンヒラー、実はプレスブルク大尉って知ってますよね」
「あの、若者ですかな？」
知ってるけど、はぐらかしして。

「あの若者がどう言う意味か知らないですが、エコニアで一緒だった中尉です」
「あのプレスブルクがどうしたのですかな？」

「家族に死ねと言われて自決未遂を起こして今入院しているんです。けど誰も家族がお見舞いにも来ないんですよ、生みの親にも実家の恥さらしだとなじられているんですよ」

「あの若造がな」

シンミリしてますね。

「其れでじゃ、あの者を儂の近習にしようと思ってな、しかし、あの者がこのままでは気の毒でな」

「それに彼は真面目すぎて、直ぐ人に騙されそうですから、ケーフェンヒラーに仕込んでも貰おうと、お父様と話し合ったんですよ」

「なるほど、確かにあの若造は騙されやすいですかな」

エコニア事件が起こらなかったけど、きっと原作以外にも騙されていたんだろな。

「それでじゃ、此は卿が嫌ならば断って構わんのじゃ」

「出来たら、養子にして教育してあげて欲しいのです」

「なるほど、しかしあの若者は納得しているのですか？」

「全然未だ言ってないんですよ」

「そうじゃ此から言いに行く所じゃ」

「それに、資料集めとかにも人出はいるでしょう」

「フフ、陛下、殿下負けましたわ、判りました、あの若造を教育してやりましょうぞ」

「頼むぞケーフェンヒラー」

「こき使って下さい」

3人で笑い始めますよ。
おっともう一つ大事な事を相談しないと。

「ケーフェンヒラー、少々相談が有るんだけど」
「なんでございますかな？」
「いやね、ブラウンシュヴァイク公の甥フレーゲル男爵が、ストーカみたいにしつこいんですよ。
士官学校在校中なんですが、
前から士官学校視察時はエスコートさせてくれって言ってくるんです」

「視察に行かないと言う事は出来ないわけですな」
「その通りよ、取りあえず義理の兄の縁者だしね」
「そうなりますと、我慢するしかないですな」

「そうだよね、凄く憂鬱なのですよ」
「うむ。オットーへ伝えるか？」
「いえ、今ブラウンシュヴァイク公を敵に回すわけには行きませんからね」

「となりますと、やはり殿下が一時我慢するしかありませんな」
「ですね、仕方がありませんね」
「ケーフェンヒラー、ありがとう」

「御意」
早速プレスブルク大尉の元へ行かなきゃね。

「プレスブルグ、元気かの」
慌ててますね、そりゃそうですよね。
陛下がお見舞いですから。

「皇帝陛下、皇女殿下に、おかれましてはご機嫌麗しく」
ベットから慌てて下へ降りようとしてますね。
「よいよい、そのままで居るのじゃ」

パニクってます。
「御意」

「プレスブルグ、卿に今日は良い話を持って参った」
「はっ」
「プレスブルグの姓を捨てる気はあるか？」

考えているのか、頭が真っ白なのか？
・・・・・・・・・・

「陛下それは、如何なことでしょうか？」
「うむ、卿は家族に捨てられた訳じゃな」
辛そうですね。
「御意」

「そこで、儂が卿に新たな家名に連なるようにしようとおもうてな」
「陛下・・・」
泣き始めたよ。

「プレスブルグ、卿に紹介するのは、卿もよく知っている人物じゃ」
「プレスブルグや、此から会いに行くぞよ」
「御意」

看護婦が車椅子でプレスブルグ大尉を運んでくれます。
特別病室へ入室して、顔を見たプレスブルグ大尉の顔と言ったら、

唖然としていますよ、爺様はニヤリとしてます。

「陛下、殿下お早いお着きですな」
「ケーフェンヒラーよ、そちの子を連れて参ったぞ」
プレスブルグ大尉は、唖然としまくってます。

「プレスブルグよ、卿の新たな父じゃ挨拶せい」
「・・・・・・・・」
「どうした若いの」

「陛下、此は何かの冗談でございましょうか？」
「プレスブルグよ、予が冗談を言うと思うか？」
「滅相もございません」

慌てまくりです。
「実はの、ケーフェンヒラーは係累がおらんのじゃ。
昔さる伯爵家から殺されかけてな。
それで伯爵に負けるかと生き続けたのじゃ。
しかし伯爵はもう故人じゃ、此方へ帰国したが家族が居らんのが気になっての。
卿が家族から疎外されて居るのであればと思い、儂が頼んだのじゃ」

話を聞いて爺様の事をマジマジと見て考えてるようですね。
「プレスブルグ、嫌であれば断っても構わんぞ」
「皇帝陛下のご英断、断ることなどございません」

「そうか、そうか、ケーフェンヒラー頼むぞ」
「陛下、お任せ下さい、確り育てますぞ」
「うむ。プレスブルグ、いや今よりケーフェンヒラーと名乗るよいぞ、

ヴェルナー・フォン・ケーフェンヒラー良い名じゃな」
初めて知ったよ彼の名前。
「御意」

「ハハハ、陛下此で儂にも息子が出来たわけですな」
「そうじゃ、息子じゃ、大事にいたせよ」
「無論でございます」

「ケーフェンヒラー大尉、卿は爺の子じゃ確りと孝行するのじゃ」
「御意」
緊張してますね、爺様と父様は笑いそうです。

「さて若いの今日から儂の子じゃ、確り鍛えてやるぞ」
ニヤニヤしてます。
父様の前では、緊張して居るな。

「はっ少将閣下よろしくお願いいたします」
「これ、父であろう、父と呼んでやれ」
「御意、父上よろしくお願いいたします」

「よいよい。此で卿等は親子じゃ」
「よかったわね、2人とも、おめでとう」
「「陛下、殿下ありがとうございました」」

「良いか、まずはけがを治すのじゃ」
「「御意」」
「頑張って下さいね」
「「御意」」

こうしてお節介を終えました。

此で大尉も少しは用心深さが付けばいいですけどね。

第七十五話　地獄の視察録（前書き）

ナルシストフレーゲルですね。

第七十五話　地獄の視察録

帝国暦４８０年６月１０日

■オーディン　帝国軍士官学校　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

あーーーーかったるい。
行きたくない。
憂鬱だー。

しかし、仕方がない行くしかない。
士官学校がこれほど遠くに感じた事はなかったね。
フレーゲルが居るだけでいやになるですよ。

国旗掲揚に合わせて、午前8時には現地で挨拶ですから、
宮殿出るのは午前6時ですよ、眠いですね。

本当なら6月30日の卒業式でお茶を濁すつもりが、
フレーゲルとブラウンシュバイクのオッさんが余計な圧力を校長にかけてくれさりまして。
今日の視察になってしましましたよ！

ケーフェンヒラー爺様には、仕方がないと言われましたし。
爺さんはにやにやするだけ。
ケスラーは、テレーゼ様にも苦手なモノが有ったんですねって、言う始末ですから。

全く、幼女をからかって何が楽しいのやら。

普段の態度が出せませんよ。
まあ、それもみんなの愛情表現と思いますよ。

正門が見えてきました。
門の前でお出迎えが居ますね、
生徒達や一部教官の整列する中、
正門から入校し正面玄関前に地上車が止まります。

この辺は毎年同じ場所ですから、勝手知ったる他人の家状態ですね。
お出迎えは、校長以下主要な教官達と成績優秀者ですけど、
フレーゲルも居るのは矢張りごり押しの結果でしょうね。
彼の成績はお世辞にも良いとはいえませんからね。

あーあ、フレーゲルが先頭で非常にキリリと顔をしているつもりなんでしょうが不気味なだけです。
父様も変なモノでも見る目で見てますよ。
門閥貴族の威厳丸つぶれな、残念な顔です。

父様と一緒に降りると校長が挨拶してきましたが。
校長去年見たときより、もの凄く禿げて真っ白なんですが、しかも凄く痩せて病人みたいですね。
我が儘貴族に、よほど苦労しているのでしょうね。

「皇帝陛下、皇女殿下におかれましては、御臨御を賜り祝着至極に存じます」
「うむ、卿もご苦労である」
「御意」

「皇帝陛下、皇女殿下、私、ヨヒアム・フォン・フレーゲルと申します。

本日ご案内補助をさせていただきます、なにとぞ宜しくお願いいたします」
知ってるのに、態とらしく言わないとだめなんですよね、面倒くさいですね。
此所で、案内不要と言えれば良いんですけどね。

「フレーゲルよ頼むぞ」
「御意」

あー内心にやついているのが、丸わかりですよ。
仕方がありませんが父様に一緒に廻るから何とか成るでしょうがね。

しかし、フレーゲルの学年が格闘の受業というのは、
ロイエンタールの時のように優勝者へのキスを期待しているのですね。
恐らくは、取り巻きや金使って、いかさまする気満々ですね。
そうでもしなきゃ、フレーゲルが勝てる訳がないじゃ無いですか。

父様が居るので、フレーゲルでも2年から最初に行く訳には行きませんから。
四年から始まります。
禿が進んでいる校長が先導で、私の横をフレーゲルが話しかけながら歩いてくるんですよ。

「皇女殿下、この場所はかの有名な3代目ブラウンシュヴァイク公エーリッヒが植えた記念樹でございます」
「ほうーそうですか」
おざなりですよ。

「私の戦い方是非ご覧下さい」

「判りましたわ」
やるきなーい！

其れから４年の教室へ着くまで、延々と話しかけてくるんですよ、うんざりです。

４年は、戦略論ですね。ザイドリッツが居るはずですが判りません。
あーうざい。
横で話されると苛つきますね、レーザー水爆にでも縛り付けてフォークとロボスにでもプレゼントしたくなりますよ。

おやおや？彼処に居る。くすんだ金髪の生徒は見たことがある気がしますが、
誰だったかな？
んーーー、あっ少しこっち向いた。

あの顔は、シュナイダーじゃないか？
メルカッツ提督副官の、ベルンハルト・フォン・シュナイダーだよ。
おー４６０年生まれだったか、こりゃ来年辺りメルカッツ提督に推薦しよう。

此だけでも多少なりとも気が晴れる。
横でフレーゲルが何か有りましたかとか聞いてくるが、
いいえ皆頑張っていますのねって、適当に言ったよ。

此だけの戦果で次に３年生へ。
３年には、ミュラー、キスリング、フェルナーがいるからね、フェルナー以外は引き込みやすいが、
フェルナーは非常に話が合いそうなんだけど、ブラウンシュヴァイク公の紐付きだから危険だね。

廊下でも話しかけてくるからねー。
フレーゲル少しは黙れ！

３年生は補給関連の話ですね。
おー、的確に話していますね。わかりやすい教官ですね。
知らないキャラですから、只のモブキャラですね。

相変わらず9歳児に色目を使う17歳不気味ですね。
ロリですが、、まあ此は私に付いてくる地位や名誉や何やらが目当てだと判りますし、
対処しようがありますけどね、今は無理ですね。

此奴が横にいるだけでなんて長い時間のだろうか、
嫌になるけど、みんなにはにこやかにしてますよ。
ミュラーとかキスリングとかフェルナーが居るはずですからね。

けど今日は判りませんね、隣のが邪魔で判りません！
あーあ時間になってしまった、今回は残念＞＜

ここから少し休んで2年の格闘の受業です。
フレーゲルが名残惜しそうに着替えに行きます。
いいから。二度と帰ってくるな、ハイネセンでも行ってしまえ！

校長室で優雅にティータイムですよ、
高級茶葉ですね、優雅ですよ。
しかし、校長の頭が気になり過ぎます禿禿です。

あっ時間です、優雅な時間は直ぐに終わるのです。
あーこのまま帰りたい。

しかし無情にも2年の授業へいきますよ。

全員集まって、私たちに挨拶してって、おいおい総代もフレーゲルかよ、
４６２年生まれが心配だぞ。
まあ気を取り直して、格闘開始ですね。

ロイ達の時と比べて、全然迫力がありません。
父様と小声で囁きあいますが、やはり思っているそうです。
八百長のような試合が続きます、死合いしろよ、死合いを！

んー言葉が荒くなりますね、表に出していないから良いですが。
かったるい試合だなー。
全然面白くなーい。

本当にシナリオ道理の勝ち上がり、
酷すぎですね、結局フレーゲルが優勝ですが。
インチキじゃ何の価値もありません。

父様が賞めるだけで終わりですよ。

「フレーゲル、見事じゃな」
「陛下ありがたき幸せ」
待っているがしませんよーーーだ！

拍手と握手だけで済ませます。
「フレーゲル、ようやったな」
「殿下、ありがたき幸せ」
「そうか」
キス貰えると思っただろうが、やなこったい！

そのままフレーゲルを残して、1年へ行きます。
1年は戦術論の授業です。
此処には、エッシェンバッハとランズベルグ伯が居るんだよね。

んーやはり、あのでかさは目に入るね、しかも真面目に授業受けてるし良いことだね。
シュターデンが左遷されてから授業の質が上がったようだね、理論と応用を教えてるからね。

フレーゲルが居ないと、あっという間に時間が過ぎるね。
途中から着替え終わった、フレーゲルが来たら時間の遅いこと数倍です。
結局今日だけで胃炎になりそうですよ。

もうあれですね、フレーゲルが卒業まで士官学校視察は父様だけに任せよう。
あー卒業式どうしようかな、チャット来てチャット帰るようにしようっと。

結局終了後もうざうざでした。
車に乗るまで、ギリギリ一緒でしたよ。
あー今日一日で眉間に皺が出来そうですよ。

早く帰って寝たい。

■オーディン　帝国軍士官学校　ヨヒアム・フォン・フレーゲル

本日は、テレーゼがやってくるぞー。

私が伯父上に頼んで総代をさせて頂くのだ。
格闘のご褒美も貰う予定だ。

既に取り巻き達には、派手に負けるように司令してあるし、
他の生徒は金や、脅しやらで協力してもらう事になってあるからな。
何と言っても今日は４時に目が覚めてしまったではないか。
フフフ決まってるな。

テレーゼがいよいよやってきた、私の姿に見とれているようだな。
フフフ、セットに3時間掛けた甲斐があったな。
エスコート中は非常ににこやかであったな。

試合はシナリオのとおり私の完勝であった。
陛下とテレーゼから賞められたが。

テレーゼは照れてしまってキスは無かったが、
可愛いモノだ、何れキスをしまくるのだから。
今は我慢しても苦に成らんよ。多少は惜しいがな。

正門前でお別れの際も、名残惜しそうであった、
次回が楽しみだ。
今日は良い日であったな。

帝国暦４８０年6月３０日

■オーディン　帝国軍士官学校　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

卒業式でさっさと式典して帰ってきました。

謝恩会も今回は不参加で嘆かれましたが、
１０日に来てるんで何とか成りましたよ。

フレーゲル居なきゃいいのにね。
ベルンハルト・フォン・シュナイダーが3席でしたね。
恩賜の短剣渡しました、此で面通しはＯＫです。
スカウトすることができますね

明日は劇場と絵画の募集締め切り日です。
既にシルヴァーベルヒとメックリンガーの作品が届いているので、
建築は数人の補欠を絵画は１０人程の合格者を決めなきゃですね。
大変ですが楽しみです。

第七十六話　芸術家をゲットせよ（前書き）

明日夜勤です、更新できるか未定です。

第七十六話　芸術家をゲットせよ

帝国歴４８０年７月１日

■オーディン　ローエングラム領臨時事務局

この日は３月１日に発表された。
【ローエングラム大皇女記念大劇場設計コンペ】と【大劇場大ホール壁画及び展示絵画コンペ】の応募締め切りの日の翌日である。

オーディンのローエングラム領臨時事務局応募係には、全国から設計試案及び応募作品が続々と届いていた。
締め切り時点で既に設計試案１５０００人、応募作品３０万人に及んでいた。

高名な人物は全くと言って良いほど応募してきておらず。
劇場コンペ応募者は、市井の建築家や建築学科学生が殆どであったが、
一部には官吏なのも含まれていた。
絵画コンペ応募者も、市井の芸術家や美術学校生なども居たが、中には子供の描いた微笑ましい物も含まれていた。

膨大な数であるから、スタッフ２０００人が手分けをして仕分けを始めている。
名前順に並べて記録を付けていく。
このまま数日掛け並べていき記録をするのである。

テレーゼ自身は上から下のホールを見ながら。

今回の代表者として頼んだ1人である、ゼーフェルト博士に話しかけていた。
他に代表者は、ヴェストパーレ男爵夫人である。

「博士、畑違いな代表者を頼んで済みません」
「殿下とんでもございません。このような事初めての事でございますから、
臣としても学問になります」
「そう言って頂いて助かりますわ」

博士すみませんね、貴方と?がりを持つ為に畑違いな事をさせているんですよ。
それに既に出来レースで合格者はシルヴァーベルヒとメックリンガーとレイトマイエルなんですよ。
それ以外は、付属施設の建築家に使う予定ですから勘弁して下さい。
美術家はあと8人ほどは合格させますんし、
優秀な人材なら雇ったり支援しますんで、今回はお許しくだされ。

「其れでは博士宜しくお願いしますね」
「はっお任せください」

■オーディン　ローエングラム領臨時事務局　アドルフ・フォン・ゼーフェルト

いよいよ始まったか、大学で教鞭を執っていた私にいきなり、
ノイエ・サンスーシから連絡が有ったのは3月1日の発表が為された日であった。
最初は建築と美術審査の代表者とは、畑違いで何かと思ったが話を聞いて居るうちに、
新たな考えが必要な為に敢えて畑違いな私を頼むとのことであった。

学問的にも新たな考えに挑戦は望むことであったし、
皇女殿下のお頼みである以上、お引き受けすることとした。

最初にお会いした時にご挨拶をして頂いたが、
非常に礼儀正しきお方であった。
本日もお気配りを頂きありがたい事であった。
さて今日から頑張ろうとしよう。

■オーディン　ライニッケンドルフ地区ミッターマイヤー邸

　ウォルフとエヴァちゃんの結婚1周年記念に顔だけ出してきました。
時間がないんですよ。
2人にプレゼントを渡して、ご両親にご挨拶して、
フェリックスとエリーゼを抱っこして、
少し居た後おいとましました。
もう少し居たかったんですよね。

■オーディン　ノイエ・サンスーシへの帰り　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

　いやはや、作品は集まりまくりです。
結局発表は8月1日になりましたよ。
順番に一応は審査しないと駄目ですからね。
今月は大変忙しい日になります。

そう言えば、士官学校でフレーゲルの学年が余りにも体たらくだったので、

気になって在校生調べたんですよね。

４７７年組ミュラー、キスリング、フェルナー、
４７９年組エッシェンバッハ、バイエルラインが出ているのに、
４７８年組で著名人が出てないのって変じゃないですか。
そしたら最悪の人材だらけでしたよ。

フレーゲルを筆頭に、
自意識過剰貴族、ヒルデスハイム伯。
典礼尚書のアイゼンフートの曾孫コンラート。

あの息子2人を職権で後方配置にした、憲兵副総監クラーマーの息子グスタフ。
原作じゃミッターマイヤーを殺そうとして失敗した、ヴィクトール・フォン・コルプト。
銀河帝国正統政府財務尚書シェッツラー子爵の息子フィリップ。

ヴェスターランドで悪政した、ヴェルナー・フォン・シャイド男爵。
おいっ！ラインハルトを苛つかせたら天下一のノルディン少将の弟もいるぞ。
あとヴァーゲンザイルとか、ゾンバルトもいるぞ。

精々及第点ってヴァーゲンザイルぐらいじゃない？
あれも、質が悪かったけど、此だけどうしようもない連中だと優等生に見えるのだろうな。
それで大将までいったんだったりしてね。

頭痛ーーーい、余りの酷さに目眩がしますね。
４７８年度だけ恩賜の短剣じゃなくて怨念の短剣でも渡した方が良いよね。

それに遠洋航海じゃなくて彼奴等乗せて、
イゼルローン要塞から同盟側に迷子にして捕獲させた方が、
帝国の為になるんですけどね。

あのインチキ格闘の根性を叩きつぶしたいんですけどね。
原始人に頼めば良いんですが、
未だ家に行ってないので、呼びにくいんですよね。

頼めば原始人が来てくれるように、
早いうちに家へ行かないとですね。

おや、考えているうちに家にまもなく着きますね。
今日は母様と一緒に夕餉です、父様は、アンネローゼ所です。
そろそろ姐さんに頼んで、アンネローゼの館へ連れてってもらおうかなと思ってます。

色々仕込みたいんですよね。
最近料理も習い始めましたのですよ、特にチシャ料理を重点的に習ってます。
ラインハルトの大好物(キライ)じゃないですか。
アンネローゼの前では好き嫌いを言っていられないですからね、
全部チシャ料理で行きますよ。

アンネローゼは虐める気はないんですがね、
ラインハルトが足されると危ない化学変化がおこるのです。
少しは?がりを付けておこうと思いましてね。

あとは、幼年学校の食事が味が悪いそうですから、
改良をさせるつもりですよ。
無論チシャをタップリ使うようにさせます。

「お母様、ただいま帰りました」
「テレーゼ、お帰りなさい」

第七十六話　芸術家をゲットせよ（後書き）

変更

４６１年誕生年度→４７７年度

４６２年誕生年度→４７８年度

４６３年誕生年度→４７９年度

第七十七話　テレーゼの原始人のお宅拝見（前書き）

オフレッサーの家族登場です。

第七十七話　テレーゼの原始人のお宅拝見

帝国暦４８０年7月１５日

■オーディン　オフレッサー邸

この日、任官以来、装甲擲弾兵として敵陣のまっただ中で、２１年戦い続けてきたオフレッサー大将であるが、この日は、朝から落ち着かない様子で、家の中を彷徨いていた。

「うむー、やはりこのグリズリーの剥製は、倉庫にしまった方が良いかもしれんな、殿下が泣き出すやもしれない」

「いやしかし、ありのままを見せてくれと言われて居るしな」

「んー、兎の方が良いかも」

「いやいや、かわいい兎を剥製にしたと気分をお悪く為さるかもしれんし」

数日前から、オフレッサーが独り言を言いながら。

部屋の中をウロウロと悩んでいる姿を見ながら妻と執事やメイド達は、

まるで動物園の熊が檻の中でウロウロしているように見えて思わず笑ってしまっていた。

しかしそれを見ていた者達も、この日になると朝から同じように緊張して居る姿が見られるのである。

今日7月１５日に恐れ多くも銀河帝国第三皇女テレーゼ様が、

オフレッサー大将邸に御臨御為さるからである。
通常、皇女殿下といえども、臣下でしかもたかだか帝国騎士の邸宅に御臨御するなど余りない事である。

2ヶ月半前の5月1日に装甲擲弾兵のご観覧があり。
その際皇女殿下をエスコートしたのが、オフレッサーであった。
そして、殿下がオフレッサーをいたく気に入り、
自宅への御臨御の栄誉を受ける事となったのである。

「ヴァーリア、料理の方は大丈夫であろうな？」
「貴方大丈夫ですよ」
「殿下がお前の料理をお召し上がりになるのだ細心の注意をするんだ」

オフレッサーが妻に心配そうな顔で注意を行っている。
妻のヴァーリアが長い金髪を束ねた状態で料理をしている。

通常であれば、贅を尽くした料理を料理人達によって作られ、
それをお召し上がり頂くのであるが、
殿下が、是非オフレッサー家の家庭料理を是非食してみたいとの事で、
料理自慢のヴァーリアが腕によりをかけて家庭料理を作っているのである。

「んーすでに8時か、ご到着まで後1時間だぞ。
玄関先はギリギリまで掃き掃除をして、塵一つ無いようにするんだぞ」
「承知いたしました旦那様」
オフレッサーの言葉にメイド達がてきぱきと動きまくる。

「旦那様もそろそろお着替えの準備を為さいませんと」
執事のバウムガルテンが時間を告げてくる。
「おうもう１５分も経ってしまったか、そろそろ着替えるとしよう」
結局剥製はそのままの状態で置かれたのである。
オフレッサーの心配事を残したまま。
それが杞憂に終わるのは、殿下が応接室へ入室後の事であった。

午前８時４５分、オフレッサー邸に先触れの使者が到着し、
皇女殿下があと１５分で到着すると伝えた。
恭しく報告を受けたオフレッサーの姿は普段見慣れた姿ではなかった。

普段であれば、ロックアイスもかみ砕くほどの顎の持ち主のオフレッサーが、
ハンカチで顔を何回も拭きながらジッーと直立不動の状態である。
妻のヴァーリアと娘のズザンナも緊張した趣である。
邸宅前は凄まじい緊張感に包まれていた。

息子のエアハルトのみは未だ幼いため、
乳母が付いて、別棟で待機していた。

午前９時丁度にテレーゼ皇女様が乗った専用車がオフレッサー邸前に到着した。
愛らしい姿で地上車から降りてくる皇女殿下を見て皆が恭しくお辞儀を行う。
そして屋敷の主たる、オフレッサーが皇女様に挨拶を行うのである。

「皇女殿下におかれましては、ご機嫌麗しく。
我が屋敷へ御臨御いただきこれほどの栄誉はございません、

末代までの誉れとしとう存じます」

皇女殿下がにこりとして。

「オフレッサー、大儀である。今日は大変楽しみにしていたのじゃ頼むぞ」

「御意」

妻と娘を紹介して、息子が未だ小さいため昼餉の時にご挨拶する旨を伝え。

その後、殿下からにこやかに了承の挨拶を返されたのであった。

そうして挨拶が済むと、オフレッサーの案内で応接室へと向かうのであった。

妻と娘は別行動で台所へ向かった。

「オフレッサー、剥製は凄い数なのか？」

「はっ多数有りまする」

「うむ楽しみじゃ」

そう、皇女は言うが、オフレッサーの心の中は不安を残した状態であった。

「此方にございます」

オフレッサーが応接室へ案内すると中には、

多数の剥製と武器類が所狭しと並べられていた。

入るやいなや、皇女殿下が無言になった。

オフレッサーはやはり刺激が強すぎたかと、後悔し始めていたが。

「おーー、これは凄いのー」

皇女殿下の一声が、応接室に響いたのである。
皇女殿下は目を輝かせながら剥製を見て、オフレッサーに質問を始めた。

「オフレッサーこの熊は凄く大きいノー、どうやって倒したのじゃ？」
片付けようかと考えていたグリズリーの剥製を指して殿下が質問してくる。
片付けなくて良かったという安堵と共に、
全く殿下が怖がらないという胆の強さが印象に残るのである。

「はっ、この熊は、アルタイルグリズリーと申しまして、
アルタイル星系に生息している熊でございます。
旧来の地球の熊に比べて生活環境が良いのか大型化しておりまして、
この熊はその中でも特に大型でございます」

下手に永い説明に成ってしまい、殿下が退屈するのではと思ったが。
目をランランと興味津々に話を強請ってくるのである。
「ほう。そう言う熊が居るのか。
それで、オフレッサーであるから、素手で倒したのか？」

殿下がジョークを出してくる。
「いえ、さしもの臣も素手では無理でございます。
猟銃を使いまして一撃で仕留めました」

「おーそちは、銃の腕も一流なのじゃな」
「お恥ずかしい限りです」
「謙遜せずとも良い」

殿下は、非常ににこやかで質問をぶつけてくる。

「このライオンも凄いの」
「はっ、ヴァガライオンでございます」
「ほう、これがあのヴァガライオンか、これも銃か？」

「これは、ボーガンで倒しました」
「ほー、凄い物じゃ」

「虎もいるの、しかも白虎も居るではないか」
「はっ、オリオンタイガーでございます」
「うむー、オフレッサー見事じゃ。
いずれ私も一緒に狩猟へ連れて行って貰いたいの」

「御意。お許しがございましたら、臣がご案内致します」
「うむ、オフレッサー約束じゃぞ」
「御意」

その姿を見てオフレッサーもついつい。
つもの厳つい顔は何処へやらで、
にこやかな顔に成るのであった。

「武器も凄いの」
「銃に剣でございます」
「これは古式銃じゃな、マスケットかの？」

「よくご存じで、１８世紀のマスケット銃でございます」
「こちらは、マウザーＧｅｗ９８ではないか」
「その通りでございます」
「素晴らしいコレクションじゃの」

「ほうほう。これは、アリサカタイプ３８ライフルではないのか？」

「殿下素晴らしい、まさしくアリサカタイプ３８ライフルでございます」

「うむ、やはりか、写真で見た事があったのじゃ。しかし本物を触れるとはおもわなかったぞ」

「偶然にも手に入れまして、同じ物が２つ有ります」

頷くテレーゼ、しばらくすると剣の方を見始めた。

「これは、サーベルじゃな」

「これは、バスターソードではないか」

殿下の剣を見る目は真剣そのものである。

「おーこれは、日本刀ではないのか？」

「よくご存じで、東洋の島国に伝わります、侍ソードでございます」

「これはよい物じゃな」

お付きの者があわてる中、刀を抜き刀身を出して波紋や研ぎ具合などを確認する皇女、

少し異様な姿である。

あまりに見続けるため、オフレッサーが先ほどのアリサカライフル共々献上しようと考え始めた。

「皇女殿下」

「おっ、オフレッサー、ついつい見とれてしまった」

「宜しければ、そちらの日本刀とアリサカライフルを殿下に献上いたします」

えっと言う感じで、オフレッサーの顔を見る皇女。

危ない物を皇女に献上しないでくれと見ている侍従達。

皇女もそろそろ覚えるのかという顔の武官達。
それぞれがそれぞれなりの考えをしていたのである。
殿下が満面の笑みを浮かべて。

「オフレッサー、良いのか」
「はっ、日本刀は臣には小さくただ飾って有っただけどございますし、
アリサカライフルは2丁有りますので是非に」

「オフレッサー、こんなに良い物をありがとう」
皇女殿下がお礼を言う事に、オフレッサーも驚きを隠せない。
「勿体のうございます」

「しかし、この日本刀は、手入れが行き届いているのう。
オフレッサーが研いだのか？」
「いえ、シュミット星系に未だに、
古式の製造法で制作している場所があります。
そちらで研いでもらった物です」

考えだす、テレーゼ。
「成るほどの、伝統工芸という訳じゃな」
「はっ、その通りでございます」

テレーゼとオフレッサーは時間が経つのも平気で談義を続けた。
「そうじゃ、先だって士官学校へ視察に行ったのじゃが、
その時に４７８年誕生年度候補生の格闘訓練を見たが酷い物であった」

「殿下それはどのような状況でしょうか？」

やはり格闘は気になるらしい。
「全然基本が出来ていないのではないかな、
以前見た４７４年度の格闘とは話に成らないほどの差であった」

「それは、ゆゆしき事ですな」
「フレーゲル男爵が総代なのだが、皆の格闘を見たが皆へっぴり腰
であった、
あれでは、叛徒共の格好の餌食に成ってしまうの」

「殿下、我ら装甲擲弾兵が特別コーチをしても良いかと存じますが」
「うむ、父上に相談してみよう。
父上が良いと言ってくれたら、オフレッサー達に頼むとしよう」
「御意」

話している内に１２時になり昼餉に向かうために、
食堂へと殿下を案内していく。

「殿下、狭い食堂でございますが、どうぞご勘弁をお願いいたします」
恐縮するオフレッサーだが、十分に広い食堂である。
食堂では、妻のヴァーリアと娘のズザンナが準備を整えていた。

「殿下のお口の合いますか不安でございますが」
ヴァーリアが、恐縮したように話してくる。
「オフレッサーの奥方が作った料理です、大変楽しみにしていました」
にこやかにテレーゼが話しかける。

早速昼餉が始まる。

ロードネルソン風にしん
アボカド、ザリガニ添え

ハンブルク風ジャガイモスープ
ハンブルク風海老スープ
コールラビ・クリームスープ、クルトン添え

グリーンアスパラのサラダ
ソーセージ・サラダ

グリューンコールと塩付豚のあばら肉、コールヴルスト
鮭フィレ・白ワインクリームソース
ラム肉ロースト・いんげんのベーコン巻き・グリルトマト添え
レングフィッシュ、マスタード・デイルソース

腕によりをかけた料理がところ狭しと並んでいる。
テレーゼは、目を輝かせながらお上品に食しているが、
ほめる事も忘れない。

「見事な料理じゃ、素晴らしい、しかも美味じゃ」
「ありがたき幸せ」
「皆も食すのじゃ」

みんな遠慮していたが、是非にというテレーゼの言葉に笑顔を作って食べ始めた。
オフレッサーは大食している。
朝まで食事が喉を通らなかったのだが、
皇女とのお話で胸の閊えも取れて当たり前のように食べているのである。

テレーゼも大変喜んでいる、
娘のズザンナとも仲良く話している。
又未だ幼い息子を見ていたりする。

オフレッサーは今日が良い日であると実感を感じていた。

デザートを食べ終え、昼餉が終わると妻がピアノの演奏を行い殿下がそれを褒め称えた。
妻は高校時代音楽活動をしていたのである。

長いようで短い時間が過ぎ午後3時になり殿下は帰宅の途についた。
その際に家族全員に殿下のお印の付いた、
品物が下賜されオフレッサー以下恭しく受け取ったのである。

■オーディン　オフレッサー邸　　アルノルト・フォン・オフレッサー

ふう、殿下の御臨御は光栄な事で有った。
ヴァーリアも確りとしてくれたし、子供達も良い子でいてくれた。
儂が貧乏騎士から士官学校を卒業し早２１年、色々あったが今日ほどの事はなかなかあるまえ。

役職がら皇帝陛下のお近くに居る事はあるが、
自宅に殿下が来ていただけるのは、そうざらには居ないからな。
本当にありがたい事だ。

殿下が恐ろしがるかと思ったが、杞憂に済んでよかったわい。
以前来たご婦人が気絶して大変な事になったから怪うんだが返ってお喜びであったからな。

あの胆力はなかなかの物だ、殿下はひとかどのお方の様だな、
我らの忠誠の対象として良きお方だ。

妻や子や使用人にも事細かい気配りは流石王者の感覚だ。
おしむらくは、殿下が皇女という事か、
男子であれば次期皇帝陛下の素質が十分なのだが。
いやいやこのような事を考えるのは不敬だな。

さあて、殿下が陛下にお頼みする。
士官学校生の根性をたたき直す事を力を入れるとしよう、
猛者共を連れて行くかの、久々に暴れられるかもしれんな。

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

本日オフレッサー邸に行ってきました。
ＯＶＡで見ていた通りの家でした。

家族を始めてみましたよ、４人家族で奥さんを見たとき沢庵を思い出しました、
何と眉毛が沢庵眉毛、けいおんのムギみたいです。
娘さん１３歳で可愛くて、お父さんに似ないで本当に良かったねでしたよ。
息子さんは未だ2歳で眠そうでしたが、彼はお父さん似ですね。

けどこの家族、原作で行くと謀反人の家族だからラインハルトに酷い目に遭わされる訳ですよね。
一緒に食事してお話ししましたが、ごく普通の家族でしたよ。
ラインハルトはこういう普通の家族をどれだけ不幸にしたんでしょ

うか、
益々ラインハルトには負ける訳にはいけないと思いましたよ。

しかし、剥製は凄かったですね迫力満点です。
あれほどとはエリザベートが気絶する訳を納得しましたよ。

しかし日本刀を貰えるとは凄くラッキーですね。
刃渡り５０ｃｍほどの脇差しですが、見た感じでは本作りの刀ですね。
しかも波紋が三本杉ですよ、関の孫六系の刀と思われますね。
これは良い物です、長さも現在の身長ならピッタリですからね。

しかも製造している星まで判ったし、
何故かあれだけ探して貰ったのに発見できてないと聞いたけど、
実は未だ私には、危ないからと隠してるんじゃないかと疑惑が沸いてきましたよ。
今度ケスラーを問い詰めてみよう。

三八式まで手にはいるとは驚きですが、レプリカの可能性も有りますね。
槓桿（ボルトハンドル）が下方に曲げられているのに刻印は三八式のまま、
しかも刻印が非常に怪しい漢字と１６弁菊花ですからね。

しかしオフレッサーが４１歳だとは知らなかったね。
奥さんは２９歳で、高校時代にオフレッサーが危ないところを助けてくれて一目惚れしたそうです。
良いとこのお嬢さんだけど１６歳の時に押しかけて来たそうです。

オフレッサーとも非常に良い関係を築けたと思いますよ。
父様に頼んで４７８年度のしごきを頼んでもらおう。

料理も美味しかったし今日は本当に良い一日でした。

第七十七話　テレーゼの原始人のお宅拝見（後書き）

以前感想に有りました、オフレッサーの奥さんムギがよいをしてしましました。
まんまムギですね。

ヴァーリアの名前の元は紬ですが、ドイツ語で判らなかったので。
紬で木綿と出たので、ドイツ語の木綿、バオムヴォレ　Ｂａｕｍｗｏｌｌｅ
から語呂の良さそうなものにしました。

第七十八話　原始人士官学校襲来（前書き）

取りあえず、さわりからです。
次回以降フレーゲルの恐怖が見られるか？

第七十八話　原始人士官学校襲来

帝国暦４８０年7月２９日

■オーディン　帝国軍士官学校

４８０年度入校生も士官学校の仕来りになれ始めたこの日。
士官学校校長フライエンフェルフ中将は2名の教官と1名の臨時教官の受け入れの為、また胃薬を飲むのであった。
3名とも、恐れ多くも皇帝陛下からの特命で指名された教官であったからである。

2人はシミュレーション担当アウグスト・ザムエル・ワーレン大尉とレオポルト・ライブル大尉である。
2人は校長が卒業生として送り出した教え子であった為に話しやすかったが。

もう1人を見て校長は、聞こえぬ様に溜息をつくのであった。
その人物は格闘戦専門担当、装甲擲弾兵副総監アルノルト・フォン・オフレッサー大将だからである。

先日、フライエンフェルフ中将は皇帝陛下の御召しでノイエ・サンスーシに参内し、
先だっての士官学校視察についてお言葉を賜った。
その際、陛下自らの発案による戦術シミュレーションを士官学校のカリキュラムに入れるように勅命を受けたのだ。

その為、この2名が一年間士官学校で実用試験を行い。
４８１年7月以降、歴代の士官学校卒業生に各勤務先で新戦術シミ

ュレーションを行わせて、
全士官学校卒業生に新規戦術を知らしめる為だと言う事である。

また、校長の胃痛の元になっている、オフレッサー大将の臨時教師としての派遣は、
前回の視察で４７８年度生の格闘での余りの体たらくに陛下が憂いて、
直接オフレッサー大将を召して命じたモノである。

「ガッハハ、校長。最近の若い者はろくな格闘も出来んそうだな。
それと俺に敬語は使わないで良いぞ」
大声でオフレッサーが話すとワーレンとライブルが顔を見合わせる。
「大将、確かに私が見ても3号生は格闘能力が低い事は認めよう」

「じゃあ何故確り指導せんのか」
校長は言いにくそうな顔をしながら。
「ブラウンシュヴァイク公の甥が在籍でな」

「ふん！それが怖くて手を抜いているのか」
「大将そう言わないでください」
「しかし、この俺が来たからには大丈夫だ！」

大きく胸を張るオフレッサー。
「しかし大将、フレーゲル男爵は色々な」
オフレッサーは校長の言葉を遮る。

「フン。俺達は皇帝陛下の勅命で来ているんだ！
ブラウンシュヴァイク公と言えども、それに逆らえば逆賊になる。
早々邪魔はさせんよ」

オフレッサーの言葉を聞き、俺達の仕事は違うから巻き込むなという顔のワーレン達。
益々胃が痛くなる校長。
オフレッサーは其れを見て笑う。

「ガッハハハ、卿等気にしたら禿げるぞ」
オフレッサーが、校長の禿かけた頭を見ながらワーレンとライブルを見る。
顔を見ながら、ワーレンとライブルが苦笑いしながら。
お手上げだという感じで手のひらを胸の前で翻す。

「大将、それで何時からやるのかね？」
校長がやっと話の流れを取り戻した。
「おう、今すぐにでも良いが、まだ部下が来て居らんからな」

「部下とは？」
「おう、俺だけでも５０００人を鍛えられるが時間が掛かりすぎるからな。
そこで、俺の部下を６０００人呼んでいる」

「一人で一人教えるのか？」
「おう、６０００居れば其れが出来るからな。
皇帝陛下もご承知の事だ」

「陛下が、ご承知なら小官は言う事はない」
「校長、それじゃ６０００人の宿舎と食事を頼むぞ」
「は？」

「は、じゃない俺達を野宿させるのか」
「一寸待ってくれ、６０００人も来るとは聞いてないのだ」

「皆準備して3日後には此処へ来るんだがな」

最早何を言ってもしょうがないと諦めた校長が返答した。

「判った3日で何とかしよう」

「頼んだぞ、じゃあ俺は連中の姿を見てくる」

オフレッサーは用が済んだとばかりに、

さっさとしごく連中を観察しに校長室を出て行った。

残された3人が顔を見合わせながらホッとした顔をする。

校長が気を取り直して、ワーレンとライブルに話を振り始めた。

「ワーレン大尉とライブル大尉、久しぶりだな」

「「はっ、フライエンフェルフ中将閣下」」

2人の返事でホッとした表情をする校長。

この2人までオフレッサーの様だったら校長はそのまま入院したであろう。

ワーレン大尉とライブル大尉は同じ４５８年生まれで士官学校でも同期であった。

「卿等は、シミュレーション担当だが、

新しい戦術というがどの様なモノなのかな。

私はよく聞いておらんのでな」

2人を代表してワーレンが説明する。

「はっ、小官等が本年4月より宇宙艦隊総司令部で研究を命じられた戦術の応用等を含めた結果を、

シミュレーションに纏め上げたモノです」

「ふむ、其れはどれ程のモノなのかね？」

「この資料を見て頂ければ宜しいのですが、
今までのシミュレーションでは、ごく普通の戦術で行われてきましたが、
硬直した理論的な戦術だけではなく、
応用や奇策に位置するモノも勉強しておくことも必要との事であります」

「正論だけでなく奇策も必要という訳か」
「正しくその通りであります。
正論だけでは戦闘時に咄嗟の判断が出来ない可能性もあります。
その為の応用や奇策も必要というのが皇帝陛下のお考えです」

「皇帝陛下のお考えか、お変わりに成られておるな」
「其処で、此処４ヶ月ほどで纏め上げて今年１年試験運用を行う訳です」
「そこで効果があれば正式採用という訳か」

「そう言う事です」
頷くワーレンとライブル。
「で卿等は何時から授業を始めるのか？」

「資材の搬入でやはり８月１日から開始できます」
「わかった、両名とも宜しく頼む」
「「はっ」」

２人が敬礼し部屋を退出後に校長は早速、胃薬を飲んだのだ。
「はーーー、フレーゲル男爵だけでも頭が痛いのに、オフレッサー大将とは」
益々胃が痛くなり、髪の毛が気になる校長であった。

■オーディン　帝国軍士官学校　アルノルト・フォン・オフレッサー

　オフレッサーは早速、格闘場へ進んでいた。
ふむ、陛下と殿下のご期待に添える様に努力しなければな。
しかし２１年経ったが殆ど変わらんな。

格闘場は此処だな。
んやって居るか、入るか。
オフレッサーは扉を開けて入る。
其処には４号生が格闘訓練を行っていた。
見た感じ４号生は非常に優れた格闘術を行っている。

ふむ、良い姿だ。荒削りだがいい動きをしている。
教官が此方を見て、慌てて敬礼を始めた。
其れを見た生徒達も慌てて敬礼を始める。

「卿等いい動きだな、装甲擲弾兵には敵わんが先ず先ずの動きだ」
教官が聞いてくる。
「大将閣下、如何致しましたか？」

「おう、皇帝陛下の勅命でこの俺達が格闘の教官をすることになった」
「はっ」
「しかし、この期はいい動きをしておる、此ならあと少し教えれば一人前の装甲擲弾兵になれるぞ」

生徒達が別に装甲擲弾兵には成りたいわけでは無いですという感じで見るが、
オフレッサーの威圧感に口に出せない。

「8月1日から俺達が教えてやるから、そのつもりで頑張るんだ」
「はっ」
其れしか言えない教官達。

「じゃあ帰るぞ」
「はっ」
4号生の動きには満足したから帰る事にしよう。

今日はズザンナの誕生日だから、プレゼントを買って帰れらねばならんからな。
何が良いであろうか。
10歳の時は弟が欲しいと言われてついつい頑張ってしまったからな。

まあ3号生は今度で良かろう、楽しみは後まで取っておくのがいいのだからな。

第七十八話　原始人士官学校襲来（後書き）

変更

４６２年誕生年度→４７８年度

第七十九話　士官学校の嵐（前書き）

装甲擲弾兵襲来です。

お詫び、入学年度の表記変更について。
通常の学校でも入学年度で第何期生とするので、
士官学校も入学年度で表記を行います。
従って４６４年が４８０年度に、４６３年が４７９年度に４６２年
が４７８年度入学になります。

第七十九話　士官学校の嵐

帝国暦４８０年８月１日

■オーディン　帝国軍士官学校

士官学校の朝は早い・・・本来ならだが、
４号生、２号生、１号生は確りと軍人としての総員起こし５分前の伝統で５時５０分には起床し素早くベットメーキングを行い、校庭に出て軍隊式運動を行い始める為に並び始める。

６時丁度に、教官達から点呼始めの号令が上がる。
轟音のように点呼が行われ、其れが終わると早速朝の運動である。
真面目の運動を行い汗だくになるが、皆すがすがした顔である。

１号生でさえ僅か一ヶ月であるが、必死に頑張っている。
しかしその中に3号生の姿がない。
3号生は総代フレーゲル男爵が伯父ブラウンシュヴァイク公爵の威光を笠に着て朝寝を楽しんでいた。

部屋は貴族趣味の特別室であり専用メイドまで居るほどである。
今朝もメイドのアリーセを傍らに微睡んでいた。

その微睡みを消し去るように、ドカドカと足音が響いてくる。
五月蠅い奴がいるなと二日酔いの頭で苛ついたのであるが、
その足音が部屋の前で止まったのは感じた。

何だと思ったが突然ドアが蹴り破られた！
大音量でドアが破壊され破片が飛び散る。

外から大男がドアを破壊したようだ。

「きゃーあ」

アリーセが慌てて毛布で胸を隠す。

「誰だ！無礼者！」

フレーゲルが叫ぶ！

「ん、もう6時半だ起床時間はとうに過ぎてるぞ！」

大柄の男が部屋に入ってくる。

「黙れ！私はフレーゲル男爵だ！」

「フン。それがどうした！お前は学生だろう」

ズケズケ入ってきた大男がフレーゲルをベットから掴みだした。

「何をするか！」

酔っぱらっている、フレーゲルの目にはその大男の階級も目に入らないらしい。

「上官に対してその態度は何だ！」

フレーゲルが階級に気がついたが、態度は改めない。

「上官だと！高々大将風情が私に意見するとは貴様何やつだ！」

「フン、耳かっぽじってよーく聞け。

儂が装甲擲弾兵副総監アルノルト・フォン・オフレッサー大将である」

フレーゲルは酔いで回らない頭を回して思い出した。

原始人、石器時代の勇者、ミンチメーカーと呼ばれている男のことを。

何故そんな奴が自分の目の前に居るのかを。

オフレッサーがドスの利いた声で命令する。
「おい早く着替えて校庭に集合だ！」
「何故私が命令を聞かねばならんのだ！」
「ゴタゴタぬかすと潰すぞ！」
股間に向けてでかい手が繰り出されてくる。
「ひぃ」
フレーゲルは逃げ出す。
しかしオフレッサーに回り込まれてしまった。
「判った着替えるから判ったから」
とうとうフレーゲルが降参した。
「フン。最初からそう言えば良いのだ。
3分以内に着替えて集合だ！」
フレーゲルは、オフレッサーの鋭い眼光にビクつきながら、
伯父上に言いつけて此奴を何とかしてやると小悪党のような考えをしている。
それに気がついているのか、オフレッサーがドスの聞いた声で注意してくる。
「ブラウンシュヴァイク公爵に泣き着こうとしても無駄だぞ。
お前等478年度生の教育は、恐れ多くも、勅命によるものである！」
「皇帝陛下がだと、世迷い言を！」
「そう言うと思って陛下から勅書を頂いてきた」
そう言うオフレッサーが恭しく懐から勅書を出し、フレーゲルに見せてくる。

「こっこれは」間違いなく。
ブラウンシュヴァイク邸で見た皇帝陛下の御宸筆と同じ筆跡であった。
「どうだ、此でも従わぬのなら、卿は不忠者と言う事になる」

フレーゲルは今は従うしかないと考え着替えを始めるが、
普段はアリーセに手伝わせている為に中々はかどらない。
時々オフレッサーが足で床を踏んで大きな音を鳴らす度にフレーゲルはビクつく。

「もう3分経ったぞ、未だ着替えられんのか！」
フレーゲルは、パンツにシャツだけの状態で慌てている。
女性ならセクシーなのだがフレーゲルでは気持ち悪いだけだ。

7分が過ぎやっと着替え終わった。
「よし行くぞ」
オフレッサーはフレーゲルを引っ立てて部屋を出て行く。
部屋には、全裸のメイド、アリーセがベットで毛布を被り縮こまっていた。

「ご主人様。わたくしはどうすれば宜しいのですか＞＜」
アリーセの呟きが壊れたドアに虚しく響いていた。

同じ時刻、士官学校寮内各所で同じような悲鳴が上がっていた。
「ぎゃーーーーー。」
「うわーーーーー」
「たすけてくれー」

「ひえーーーーー」

「うわあああー」
「死ぬーーー」
「命ばかりは・・・」

１０分後寮内は恐ろしいほどに静かになっていた。
そして7時の時報が流れた直後。
校庭には制服も滅茶苦茶な着方の3号生４６５０名が集められていた。
校庭には朝の軍隊式運動を終えたばかりの4号生、2号生、1号生が整列して待っていた。

４７８年度生は、元々入校時５１００人の在校生であったが。
心ある者はフレーゲルに反発した結果、ブラウンシュヴァイク公の権力で嫌がらせを受け、
1年留年させられて４７９年度生に編入させられていたのである。
その為４７９年度生は５５５０人という大クラスになっていた。

残った連中はフレーゲルの取り巻きや、門閥貴族のどら息子、フレーゲル達に迎合する者、事なかれ主義な者達などであった。
はっきり言って、士気も低く役立たず揃いである。
此を果たして矯正出来るかは神のみぞ知るだが、ほぼ無理と言いたい。

全教官と全校生徒が集まり、校長が今日も胃痛のせいで顰めっ面をしながら訓辞を述べる。
「本日より、格闘術の臨時教官として、
装甲擲弾兵副総監オフレッサー大将閣下以下６０００名が赴任した。
又、シミュレーションの教官として、ワーレン大尉とライブル大尉が赴任した」

４号生、２号生、１号生は概ね友好的な趣で話を聞いている。
３号生は、未だ寝ぼけている者、敵意丸出しの者、怯えている者など三者三様である。

校長が壇上から降りると大将の制服を着た大男が代わりに壇上に上がってきた。
オフレッサーは全校生徒２万人強をジロリと見ると挨拶を始めた。

「儂が装甲擲弾兵副総監アルノルト・フォン・オフレッサー大将である」
非常に大きな地声が響き渡る。

「今回の派遣は、恐れ多くも勅命によるものである！」
そう言うと先ほどフレーゲルに見せたように、
懐から勅書を恭しく出し皆に見えるように掲げる。
その勅書が校庭にある大ビジョンに写されると生徒達から声が上がった。

４号生、２号生、１号生達は３号生を見ながら、
さも有らんという顔をしている。
３号生は青い顔をし始める者達が多数出てきた。

「卿等いいか、この１年で俺達装甲擲弾兵６０００名が確りとした士官になれる様に教育してやる！
楽しみにしているんだな」
そう喋るとオフレッサーは壇上を降りて行く。

続いてワーレンとライブルが挨拶をしたが、
オフレッサーの記憶が強力しすぎて、さほど目立たない状態であった。

それでも、ミュラー候補生やバイエルライン候補生などは、
新規シミュレーションを面白そうだと考えていた。

その後3号生のみ校庭に残され、
サボっていた軍隊式運動を装甲擲弾兵の監視の元。
みっちりとやらされた。

■オーディン　帝国軍士官学校寮　フレーゲル男爵部屋

当日は格闘の授業がなかった為に何も起こらなかったが、壊れたドアを直した。
オフレッサーによる朝のしごきに頭にきたフレーゲルたちが、夜間にあつまり、
巫山戯るなと散々悪口を言い合うので有った。

その席でヒルデスハイム伯がブラウンシュヴァイク公爵なら勅許を何とかしてくれるはずだと言い始め、
フレーゲルにみんなが頼んだ為、派閥の親玉としては出来ないとは言えずに連絡を入れたのである。

「伯父上」
『おうヨアヒムかどうした？』
「オフレッサーが士官学校に来まして」

『うむ陛下からお聞きしている』
「伯父上」
『勅許は儂でもどうにも出来ん』

「私もそう思うのですが、ヒルデスハイム伯達が言いますので」

『暫くは我慢するしかあるまい。出来る限り陛下にはお願いするからな』
「判りました」

ブラウンシュヴァイク公は、気の毒そうにフレーゲルを見ながら。
『ヨアヒム、頑張るのだぞ』
「伯父上」
画面が切れた。

周りの者は、絶望の淵に居るようである。
その中で、憲兵副総監クラーマーの息子グスタフ・フォン・クラーマーが悪人面でニヤケながら話し始めた。

「フレーゲル殿」
「クラーマーどうした」
「いえね、陛下の勅許が有る限りオフレッサーは我らをしごくでしょう」

「そうだな」
「ならばしごけないようにすれば良いのですよ」
「オフレッサーでも殺すのか？」
ヒルデスハイム伯が聞いてくる。

「いえそんな事出来るわけ無いじゃないですか」
「まあそうだな」
皆が頷く。

「違いますよ、私の父は憲兵副総監ですから。
父に頼んでオフレッサーの家族を調べて、
悪党にでも襲撃させて恐怖を与えてやれば良いのですよ」

「そんなことしたら、俺達が殺されるぞ」
コルプトが青い顔をしながら震える。

「大丈夫ですよ、我々が雇わずに父の伝手で襲撃させますから」
頷き始めるフレーゲル達。
「本当に大丈夫だろうな？」

「任せて下さい、数日後には戦果を上げてオフレッサーを追い出して見せます」
自慢顔のクレーマー。

この夜の悪巧みが盗撮盗聴されているとも知らずに喋りまくるのであった。

■オーデイン　士官学校内グリンメルスハウゼン特務隊盗撮盗聴部屋

数人の男女が士官学校内の映像や音声を記録している。
その方法は無線式だと探知機で探られる為に有線で巧みに隠されているのである。

幼年学校も同じように成っており、
ラインハルトとキルヒアイスの不敬な言動や簒奪への言葉や映像が確りと記録されていたのである。
その記録は皇帝の命により、皇帝、テレーゼ、グリンメルスハウゼン、ケスラーの４人以外には閲覧を禁止され記録係もグリンメルスハウゼン子爵家の家の子しか担当して居ないほどである。

フレーゲルの部屋で只ならぬ悪巧みが行われているという情報は直

ぐさまグリンメルスハウゼンの元へ届けられ、速攻でオフレッサー以下の家族に護衛がついたのである。
又翌日には陛下と殿下にも伝えられ、殿下が追加指示を出したのである。

第七十九話　士官学校の嵐（後書き）

修正しました。

第八十話　建築家、美術家ゲットだぜ！（前書き）

魁士官学校は次回以降の話となります。
時間系列関係上です。

第八十話　建築家、美術家ゲットだぜ！

帝国暦４８０年８月１日

■オーディン　ローエングラム領臨時事務局

装甲擲弾兵が士官学校でフレーゲル達をしごいていたこの日、

この日は３月１日に発表された。

【ローエングラム大皇女記念大劇場設計コンペ】

【大劇場大ホール壁画及び展示絵画コンペ】

入賞者発表の日である。

最終的に設計試案１５７１２人、応募作品３０万３５５１人に及んでいた。

高名な人物は全くと言って良いほど応募してきておらず。

劇場コンペ応募者は、市井の建築家や建築学科学生が殆どであったが、

一部には官吏なのも含まれていた。

絵画コンペ応募者も、市井の芸術家や美術学校生なども居たが、

中には子供の描いた微笑ましい物も含まれていた。

発表会場には代表者３名が並んでいた。

銀河帝国第三皇女、テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム。

マグダレーナ・フォン・ヴェストパーレ男爵夫人。

オーディン帝国大学教授、ゼーフェルト博士。

ＴＶカメラは３名を確りと映し帝国全土に放送がされている。

殿下のファンは録画必須である。

フレーゲル達がしごかれて居るさなかの、８時に発表が為された。
アナウンサーが挨拶を行い始まる。
『恐れ多くも皇女殿下、御臨席による【ローエングラム大皇女記念大劇場設計コンペ】
【大劇場大ホール壁画及び展示絵画コンペ】採用者及び優秀賞を発表致します』

『始めに優秀賞を発表致します。
優秀賞は、３番目以降という事ですがローエングラム領に建設する建物の設計や、
美術の発展に参加して頂きたい方々への賞でございます。
また此からの活躍の為に支援金が支給され続けます』

ドラムの音と共に優秀作品がゼーフェルト博士が優秀賞を建築家、美術家それぞれ８名ずつを発表していく。

帝国全土では、一喜一憂している応募者達がそれぞれ画面に釘付けになっていた。
発表がされる度に各家庭や職場、酒場などで歓声が上がった。

『やったー。合格じゃないが最後まで残ったぞ！』
『ホントか。おめでとう』

続いてヴェストパーレ男爵夫人が次点を発表する。
『続きましてヴェストパーレ男爵夫人様より次点の発表でございます』
男爵夫人は華麗な服で名前を読み上げる。

「設計部門、ライナー・グルック」
「美術部門、フランツ・オットー・レイトマイエル」

男爵夫人は発表を終え考えていた。
レイトマイエルが一位で無いのは残念ですけど、
余りごり押しもできませんから、２位で丁度宜しいのですね。

アトリエではレイトマイエルが、２位は残念だが参加できると意欲を燃やしていた。

そして、自宅では試案は書いたが恥ずかしくて、
送付しなかったグレックが何故自分が呼ばれているのか？
同姓同名の別人じゃないのかと思っていたが、
ニヤリと笑う妻から、私が貴方の書斎から図面を応募しておいたわと言われていた。

『お待たせ致しました。恐れ多くも皇女殿下御自ら優勝者のご発表でございます』

テレーゼが立ち上がり、優勝者の発表を行う。

「設計部門、ブルーノ・フォン・シルヴァーベルヒ」
「美術部門、エルネスト・メックリンガー」
その様に発表された。

アインザームカイト星系で発表をＴＶで見ていた。
シルヴァーベルヒは食べていたパンを噛ったまま、
雨の中外へ飛び出しやったー！万歳ー！等を叫び近所から変な人だと思われた。

ボーゲン星系で勤務中であった、メックリンガーは食堂でのＴＶで発表を見て、
静かに感激していたが、事態を知った周りの同僚から盛大に激励されまくり、
食堂のおばちゃんからは色目を貰う有りさまで頬にキスされて這々の体で逃げ出した。
その後司令官に呼び出され、浮かれぬように軍務に精進する様にと叱責されたのである。

オーディンの美術高校でも、早期登校で全員が発表を見守っていた。
しかし応募者が多数居たが入賞者が居らずにガッカリムードであった。

その中の一人、ロルフ・ザイデルはガッカリどころか出した彫刻が返還されるか不安で一杯であった。
絵画ではなく間違えて彫刻を送ってしまったからだ。

何と言っても彫刻なら学校一の腕前だから、
それで良いだろう思っていたが、
勘違いに気がついたのは、送付した後だったからなのだ。

ＴＶも終盤にさしかかり、終わりかと思ったとき、皇女殿下から特別賞があるとのお言葉が発せられた。

「今回は建築と絵画のコンペであったが、彫刻等の応募も１万点ほどあったのじゃ、
其処で急遽、妾が出来の良い彫刻の作者に特別賞を取らせようと思う」

その発表で元気が出てきた、ロルフは此で彫刻が返還されるなと思っていた。
皇女自らが再度発表する。
ドラムの音が止む。

「彫刻特別賞オーディン美術高校在籍、ロルフ・ザイデル」

そう発表された。
ロルフ自身は最初、えーうちの高校から特別賞がでたよと思ったが。
周りから。おい！ロルフ！おめでとうと言われ始めた。

そうして、初めて自分が特別賞に選ばれたと知ったのであるが全然実感がわかなかった。
しかし親友や友人や同級生達からもみくしゃにされて、
その日学校はそのまま宴会へと突き進んでいった。
校長ですら大喜びで、自ら宴会芸の裸踊りをする始末で翌日は皆フラフラで登校する羽目になった。

発表が終わると殿下自ら、応募者全員に労いの言葉が為された。
「この度我が記念に多くの臣民が参加してくれて、妾は大変嬉しゅう思う」
この【嬉しゅう思う】がファンクラブ会員携帯電話の呼び出し音に密かに使われたのは事実であった。

■ヴァルハラ星系外縁　宇宙艦隊演習宙域　戦艦ラプンツェル

ラプンツェルの食堂ではＴＶで発表が放送されていた。

アラヌス・ザイデル伍長達が食事をしながら、
「俺の弟は彫刻なら学校一なんだが絵画はなー」と話していた。
その話を聞きながら、最前線からラプンツェルに移動出来た事に感謝しつつ食事を取っている。

次々に発表される合格者達。
「やっぱり才能があると良いね。シュミット一等兵も星の研究を再度したいだろう？」
「それは出来たら再度したいですよ」
「俺なんか家族に会いに行って正直に話したら、泣かれちまってな」
いろんな話が為されている。

いよいよ終わりかとＴＶを見ると、彫刻部門が新設されてその特別賞に弟の名前が出たことで、
ザイデル伍長は持っていたナイフを落としてしまった。
皆が気がついて、聞いてくる。

「ザイデル伍長の弟さんもオーディン美術高校在校生ですよね？」
「ああ弟の名前もロルフ・ザイデルだ」
「じゃあ弟さんですか？」

「未だ判らん、連絡しないとな」
「本当だとしたら凄いじゃないですか」
食堂にいた機関科のい連中が詰め寄ってきて、
お祝いだとか言い始めたが、取りあえずは後で確認してからだとして何とかその場はしめた。

しかし夕方実家に確認して弟と話した結果事実だと解り、
ラプンツェル全乗組員１５５０名からお祝いの言葉と宴会での主賓を任されてしまい。

アラヌス・ザイデル伍長は俺が受賞したわけじゃ無いのにと良いながら、
散々飲まされながら、弟の事を誇りに思ったのである。

■オーディン　ローエングラム領臨時事務局　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

本日発表はかなりインチキでしたけど、無事終わりました。
レイトマイエルとメックリンガーとシルヴァーベルヒは想定道理、グレックは想定外でしたね、あの人実直だからそう言うの出さないと思ったんですけどね。

早いうちに確保できそうですね。
しかし高校生でザイデルで彫刻と聞いた時ＯＶＡの話が頭に浮かんで、
ハーメルン？じゃないかと思って調べたら、
なんとハーメルン？乗り組み員がラプンツェルに移動していたとはびっりですね。

しかもザイデル伍長の弟が応募してきていた。
此はスカウトしてあげないとでしょうと言う事で特別賞を作ったわけです。
そうなると、星の学者さんも居るわけだから、
彼は奨学金でもだして、運航士官になって貰おうかな。

今度ラプンツェルに乗るときが楽しみですね。

第八十話　建築家、美術家ゲットだぜ！（後書き）

次回以降に装甲擲弾兵名物。
ボウ倒し、出ます。
内容はお楽しみで。

あと何れ没企画、キルヒアイス、アンネローゼの最後をシリーズの各種設定に書くかも知れません。

第八十一話　装甲擲弾兵名物ボウ倒し（前書き）

今回は短めで。
明日は夜勤ですので、更新できません。
すみません。
銀河英雄伝説～ラインハルトに負けませんシリーズの外伝や各種設定に　別伝　キルヒアイスとアンネローゼの最後　中編　をＵＰしました。

第八十一話　装甲擲弾兵名物ボウ倒し

帝国暦４８０年８月２日

■オーディン　帝国軍士官学校

士官学校の朝は早い。
４号生、２号生、１号生は確りと軍人としての総員起こし５分前の伝統で５時５０分には起床し素早くベットメーキングを行い、校庭に出て軍隊式運動を行い始める為に並び始める。

６時丁度に、教官達から点呼始めの号令が上がる。
轟音のように点呼が行われ、其れが終わると早速朝の運動である。
真面目の運動を行い汗だくになるが、皆すがすがした顔である。

昨日までいい加減な態度を取っていた３年生も装甲擲弾兵副総監オフレッサー大将が３号生寮に全館一斉放送で【儂が装甲擲弾兵副総監オフレッサー大将である】と大音量で放送すると、
昨日の恐怖から飛び起きたのである。

本来であれば４号生と２号生、３号生と１号生という２人で共同生活であるがフレーゲル達はブラウンシュヴァイク公のごり押しを頼んで１人１部屋を使い、メイドを連れ込んでいたのである。

フレーゲルも昨日の悪巧みをした後、
寝た為眠かったが一瞬で目が覚めた。
その声を聞いて昨日の事を思い出したのか、
メイドのアリーセは泣きそうな顔で震えまくっている。

早く着替えてでないと彼奴（オフレッサー）が来ると焦りまくりながら着替えをすまし慌てて校庭へ駆けだしていった。
寮内では彼方此方で同じような光景が見られていて大変な状態である。

しかし未だに6時には集まれない3号生。
校庭には既に4号生、2号生、1号生が点呼も終わり、
軍隊式運動を始めている。

6時10分を過ぎてやっとバラバラ状態で3号生が集まりだした。
オフレッサーはギロリと3号生を見ると大音量で「遅い！」と叫んだ。
その叫びは校舎のガラス窓を震わせる程であった。

「貴様等！未だ判らん様だな。6時集合だ、今は何時だ！」
並び始めたフレーゲルの横に来たコルプトが「悪い予感がするんですが」と言い始める。
「貴様等の根性を叩き直す為に、装甲擲弾兵名物ボウ倒しを行うことにする！」

その話を聞いている、4号生、2号生、1号生、
「棒倒しってなんだい？」と言う話し声も聞こえている。

4号生上位グループに位置する、アントン・フェルナー、ギュンター・キスリング、ナイトハルト・ミュラーの3人は、体操をしながら話していた。
「おいアントン、棒倒しって、あの棒を中心に立たして置いてそれを守りながら相手の棒を倒すってやつだな」

「しかしギュンター、装甲擲弾兵名物って言ってるぞ」

「ナイトハルト、装甲擲弾兵名物ボウ倒しは違うモノだ」
「アントン、どう違うんだ？」

３人が話している側から、装甲擲弾兵が何やら色々な物を持ってきては、
校庭にセットを始めている。

「ナイトハルト、あれは何だ？」
「なんか、長細い箱だな」
「ああ、あれは連弩だな」

「アントン、連弩ってなんだ？」
「連弩とは機械式に連続で矢が撃てる弓だよ」
「あんな物セットしてどうするんだ？」

「だから、ボウ倒しだよ」
「棒倒しか？」
「いや、矢倒しだな」

「矢＝ボウだ」
「矢で何を倒すんだい？」
「人間だよ」

「おい！アントン正気か？」
「正気も正気だよ」
「知っているのかアントン！」

【ボウ倒し】
【ゴールデンバウム王朝で流血帝と呼ばれた。第１４代皇帝・アウグスト二世の時代に始められた、装甲擲弾兵の訓練方法。

流血を好んだ皇帝が装甲擲弾兵の強靱さを計る為に始めた物であり。
練兵場一帯に仕掛けられた、連弩から放たれるボウを避けながら走しりきる訓練方法である。

ジグザグに走るなどの方法を行わないと必ず当たり、又急所を狙う位置にボウが来る為、
多数の死傷者を発生させた。止血帝と呼ばれた。第１５代皇帝・エーリッヒ二世により禁止されたが。
第１７代皇帝・レオンハルト一世の時代に再度始まった。

しかし、過激な状態で死傷者が再度多発した為。
余り危険さに晴眼帝と呼ばれた。第２３代皇帝・マクシミリアン・ヨーゼフ二世により禁止された。
一説によると死者の数は１０万人を越えたとの話もある】

直、ボウとは本来、弓であるが勅書に書かれた文字が間違えていた為、
そのままボウ＝矢と成ってしまっている。

現在の諺、【光陰矢のごとし】は、元々【教員矢のごとし】であり。
装甲擲弾兵の教官は矢の如く走り回り全く当たらない事を言ったことである。
それが転じて【光陰矢のごとし】という諺が生まれたのである。

【ミュンヒハウゼン出版刊　地獄の特訓装甲擲弾兵一代記】

「アントン、そんな恐ろしい儀式なのか？」
「ギュンター、そのとおりさ、しかし最近はしていないはずなんだがな？」
「恐ろしいな」

「まあ我々は真面目にしていれば大丈夫だよ、あれはお仕置きだからね」
「気の毒だな3号生も」
「ナイトハルト、あれは自業自得だよ」

「違いないな」
「教官が顰めっ面を始めたな、どやされるまえに真面目にやろう」
「真面目にやりますか」

フェルナー達が真面目に運動しているさなか、
装甲擲弾兵によって連弩は次々にセットされ、完璧なモノになっていった。

フレーゲル達は周りで起こる様子を見ながらいかぶしんでいた。
フェルナーの様に知識がある者が居ない為何をやっているのか全く判らないのである。

「フレーゲル殿、此は何なんでしょうか？」
「判らんな、コルプトお前は判るか」
「判りませんが、悪い予感がするんです」

「クレーマー、お前の工作はどうなったのだ？」
「昨夜父に連絡し頼んであります、数日中には開始できるはずです」
「早く成らんかな、此では生きた心地がしないぞ」

そう言っているフレーゲル達の周りを動いてて作業している装甲擲弾兵達はまるで地獄の獄卒であり、
3号生達は完全にビビっている。
次々に準備が進んでいる。

３号生は真っ青な顔をし始めている。
異様な雰囲気が体に震えをもたらすのだ。

４号生、２号生、１号生が軍隊式運動を終了したので、
朝食を食しに行くことに成ったが、３号生は許されない。

オフレッサーが理由を言った。
「このまま食事をすると、当たったとき死ぬぞ」
死ぬと出たことで、ボウ倒しの理由をしらない殆ど生徒が驚きの声を上げた。

フェルナー達は、さも有らんと頷き有っている。
フレーゲル達は益々真っ青になっていった。
此から地獄が校庭に現れるのである。

第八十一話　装甲擲弾兵名物ボウ倒し（後書き）

ボウ＝矢の補足説明を入れました。

第八十二話　ボウ倒しで矯正を（前書き）

ボウ倒し後編です。

銀河英雄伝説～ラインハルトに負けませんシリーズの外伝や各種設定に、
別伝　アンネローゼとキルヒアイスの最後　後編ＵＰしました。

ネタ捏ねるのに時間が掛かりました。

第八十二話　ボウ倒しで矯正を

帝国暦４８０年８月２日

■オーディン　帝国軍士官学校

オフレッサーが居残りをさせた、３号生をジロリと見渡しながら説明を続ける。

「お前達は、校門前から走り出し校舎に入れれば食事に行って宜しい！」

一見簡単そうであるが、その途中にある得体の知れない箱の山は恐ろしさを感じる。

更にボウ倒しと言っている意味がわからない、フレーゲル達には不気味なだけである。

「誰か、ボウ倒しを判るものはおらんのか！」

フレーゲルが聞き出そうとするが、普段からサボってばかりの３号生では判るはずもなかった。

惚けている３号生を見てオフレッサーが部下達に命令を出し人形を２体出してきた。

その人形の顔はフレーゲルとクラーマーによく似ていた。

人形を見て３号生がざわめき出す。

「何故私に似ているのだ！」

「私もです」

フレーゲルとクラーマーが騒ぎ出すが、オフレッサーの一睨みで静かになる。

「3号生総代と副総代の姿を模した人形でボウ倒しを説明する！」
クレーマー君人形が校庭中央に設置される。

この映像は全館放送で食堂でも流されていた。
食事を取りながらＴＶを見るのは本来禁止であるが、
今回は校長のお達しで放送を見るようにと流されていた。

実際はオフレッサーが校長にＯＨＡＮＡＳＨＩした結果であるが。
そんな些細なことは関係ないのであった。
まあ、校長の胃炎と禿が進行したのは確かである。

クラーマー君は中央に置かれた後、オフレッサーが号令を出す。
「ボウ倒し開始！発射ー！！」
オフレッサーのかけ声と共に連弩から矢が次々に発射される。

なんだー、わーなどの悲鳴などが3号生から聞こえ始める。
次の瞬間、全身に矢が刺さり完全にハリネズミ状態のクラーマー君が出来ていた。
クラーマー本人が蒼くなり今にも気絶しそうである。

全校中に驚愕が走る、校長は泡を吹きかけている。
フレーゲル以下3号生は完全に真っ青である。
校舎で見ている他の生徒は絶対にサボらずに真面目にやろうと心の底から誓った。

「おい、フェルナー、こんな馬鹿なことをするのか？」
「ああ、あれがボウ倒しだよ」
「恐ろしいな」

その後の話であるが、オフレッサー以下装甲擲弾兵が臨時教官をし

ている間は、
生徒の門限破りが一切起こらず、上級生巡邏が暇で仕方が無かったのである。

「フン、この矢の雨を走り抜けるのが、装甲擲弾兵名物ボウ倒しだ！」
オフレッサーがニヤリと話す。
「無茶だ。そんな事出来るわけがない！」
３号生の誰かが叫ぶ。

「無茶かどうか、お前等では判らんだろうから、儂がやり方を見せてやろう！」
オフレッサーが準備の為に装甲服を着て、愛用の戦斧を手にする。

「お前等、良ーく見ていろ。発射用意」
オフレッサーがスタートラインに立ち、スタートの合図を行う。
「撃てー！！」

次々に矢が発射される。
その中心をオフレッサーが走り始める。
「うをーーー！」

走るオフレッサーに矢が次々と向かっていく。
ＴＶで見ている４号生、２号生、１号生は固唾を呑んで見ている。
一部生徒は食事もそっちのけで、屋上などから見学している。

３号生は驚く者、何も言えない者、オフレッサー死ねと祈る者など色々であった。
矢を避けながら走り、身を捩りジグザグ走行を行う。
しかし、オフレッサーの元へ多数の矢が迫る。

避けられない当たると皆が見ていると、
オフレッサーは持っている戦斧を旋回させ矢をたたき落とし始めた。
「ウォーーーー」

次々に向かってくる矢がたたき落とされる。
そのたたき飛ばした流れ矢が3号生の方まで飛んでくる。

コルプトの足下に数本が纏まって飛んできて刺さる。
「ひえーーーーー！！」
コルプトは倒れて気絶する。

シャイド男爵の足下にも刺さるが意外に動じていない様に見える、
実は既に立ったまま気絶状態であった。

ヒルデスハイム伯は失禁していた。
フレーゲルは、普段の傲慢さは何処へ行ったやら、
他人の後ろに隠れている。

オフレッサーは矢をたたき落として悠々とゴールへ到着し、ヘルメットを脱いだ。
「フゥ、どうだボウ倒しとはこうやるんだ！」
オフレッサーが3号生の前に帰ってきた。

無茶だ、無理ダー、死ぬー。次々に出る否定の言葉。
「フン、お前等に此は些かきつすぎるからな、少々遣り易いモノを用意した」

そう言いながら、新たな矢を連弩に補給し準備を終える。
今度は、フレーゲル君人形が中央に置かれる。

「この鏃は丸くなっていて少量の火薬が詰めてある、
当たると赤い塗料が散布されるのでそれにより死傷率を計る。
これぐらいならお前等でも出来るだろう！」

ホッとし始める3号生達、そうだいくら何でも死ぬような事はしないよなと思い始めていた。
「お前等、安全だと思うな。矢の速度は速いんだ、当たり所が悪ければ怪我をするぞ！」
オフレッサーの言葉に再度震え出す3号生。

「ではその矢で人形を撃つぞ」
オフレッサーが号令を出す。
「ボウ倒し開始！発射ー！！」
オフレッサーのかけ声と共に再度、連弩から矢が次々に発射される。

次の瞬間、矢を食らったフレーゲル君が大爆発をして木っ端微塵になった。
3号生からまた悲鳴が起こる。
シーンとするその他の生徒。

3号生は最早完全に泣き始めている。
「ガハハハ、火薬の量を間違えたか」
オフレッサーがあっけらかんに言う。

「仕方ない、今日はボウ倒しを中止とする。
次回行うかどうかはお前等の態度次第だ！」

オフレッサーの怒気は凄まじく、
3号生の殆どが頷き此から真面目にやりますと、

泣いて宣言するのであった。

その後軍隊式運動でしごかれた3号生達は食事も余り喉を通らずに授業を受けたが。
昨日までの不真面目さが嘘のように勉学に励んでいた。
一部の馬鹿を除いては。

■オーディン　帝国軍士官学校寮　フレーゲル男爵部屋

今日も又懲りない面々が集まっていた。
メイドのアリーセはヒルデスハイム伯のメイドのアーニャと共にヒルデスハイム伯の部屋で待機している。

「フレーゲル男爵、今日のような屈辱耐えられません！」
「クラーマー、私もそうだが、未だ返事は来ないのか」
「未だ今日の朝ですから、あと数日はかかりますよ」

「あと数日が恐ろしいが、暫くは大人しく従う振りをしているしかあるまい」
「ですな、それしか有りません」
コルプトは完全にびびっていた。

「フレーゲル男爵、止めるわけには行かないのですか？」
「なぜだ」
「知れたら、きっと殺されます」

「大丈夫だ、親父に頼んであるし気がつかれないさ、いざとなれば、憲兵を出して揉み消すから」
「はあ」

■オーデイン　士官学校内グリンメルスハウゼン特務隊盗撮盗聴部屋

数人の男女が士官学校内の映像や音声を記録している。
その方法は無線式だと探知機で探られる為に有線で巧みに隠されているのである。

またしても懲りない悪巧みを話し合う馬鹿達に些か呆れ始めている隊員達であった。
そして、憲兵隊を使うというニュースはテレーゼ達にもの凄い恩恵を与えることになるとは、
この時点で判るものは居なかったのである。

第八十三話　オフレッサー家襲撃（前書き）

２日がかりで完成だが、未だその後が残っているという、果たして馬鹿共がどうなるか、憲兵隊がどうなるのか、それは次回からです。

２７日も夜勤仕事なので更新できない可能性大です。済みません。

ヴァーリアＣＶ　寿美菜子　けいおん　琴吹　紬
ズザンナＣＶ　真田アサミ　リリカルなのは　ヴィータ役
バウムガルテンＣＶ　永井一郎　ど根性カエル　町田先生役

第八十三話　オフレッサー家襲撃

帝国暦４８０年８月６日　２０時

■オーディン　オフレッサー邸

この日の夜、オフレッサー邸で事件が発生した。
オフレッサー自身は士官学校へ泊まり込んでいた為不在である。
その為、オフレッサーの不在を狙って、
憲兵副総監クラーマー中将が、自分の馬鹿息子の頼みを聞いて、
憲兵隊の伝手を使いゴロツキにオフレッサー邸を襲撃させたのである。
ゴロツキ共は性犯罪者やサイオキシン麻薬常習者などを集めて、
クラーマーとの関係を判らないようにしていたのであるが、
襲撃のお膳立てと事後の処置をする為に自分の腹心を動かしたことが、
後に自分だけでなく憲兵隊全体に多大なる影響が波及し、
現職憲兵隊幹部が破滅するとはこの時夢にも思っていなかった。

「へへへ、襲う家の女は２９歳の美人で巨乳じゃねーか、俺がかわいがってやるぜ！」
「そんな婆より、娘の方が１３歳でいいじゃねーか、俺が女にしてやるぜ！」
「ウヘヘヘ、メイドも居るからな、姦放題だぜ！」
「ブツブツ、ウアア、殺、殺、殺、ブツブツ」

「手足を切り裂いてあげよう」
「えへへへへへ」

用意された襲撃者ははっきり言って最悪の連中であった。
しかもクラーマーが部下に丸投げでした為に怪我をさせる程度が、
完全な襲撃にエスカレートしてしまっていた。
襲撃者は元軍人崩れも居て、その数なんと４０人。
しかも、催涙弾や閃光弾などを装備した支援隊が４名居た。

余りにも多すぎるのは、クラーマー中将がが勘違いして、
フレーゲル男爵の頼みは、ブラウンシュヴァイク公爵の頼みであり、
それを行えば後々の出世やおこぼれに預かれるとの浅はかな考えからであった。

その当時、皇帝とテレーゼの指示により装甲擲弾兵の家族には護衛をつけていたが、
その夜、オフレッサー邸に来た襲撃者は、護衛の数を遙かに上回る数であった。
更にクラーマーが憲兵隊を動かし、２ブロック先で火災事故を起こして、
護衛の目を逸らす行為を行ったのである。

同日２０時３０分

ドカンーン！！
ボワーー！
「火事だー！！」

「どうしたんだ！」
「２ブロック先で火災です！」
「隊長、どうしますか？」

「うむ、このまま捨て置くわけには行くまい、
曹長、分隊半分を率いて現場へ向かい避難誘導を行え」
「はっ」
「半数は此処で待機だ」

１０分後襲撃者が襲ってきた。

ドカンー！！
突然煙幕弾が破裂し辺り一面が白煙に包まれる。
「なんだ！攻撃か！」
「視界が効きません！」

「戦闘用意！敵の数は？」
「少尉殿、敵数不明です！」
「直ちに援軍を求めろ！」

「駄目です、ジャミングされています！」
「本格的だな、オフレッサー閣下の御家族をお守りするが我らの使命だ、
定時連絡が無ければ、本部から援軍が来る。
それまで６人で守り抜くのだ！」

「はっ」

シャーフェン少尉はその他２名と共に正面を守っていた。
ランド軍曹はその他２名と共に裏門を守っていた。

煙幕弾の効果が中々薄れないのは、敵が次々に煙幕弾を発砲して来るのである。

「くそう、敵がどこだか判らん！」
「暗視装置を持ってくるべきだった」

その様な切羽詰まった会話がされている中、
襲撃者は隣家の壁際から進入していたのである。

同日２２時５０分

この夜、ノイエ・サンスーシでは7月の終わりに退院した、
ケーフェンヒラー大尉が宮中警備隊庁舎に呼び出されていた。

ケーフェンヒラー大尉は病み上がりであるが、
僅か2ヶ月であるが養父、ケーフェンヒラー少将の薫陶（しごき）をうけ、
以前のように堅物ではなく、大部ナチュラルな考えを出来る様になりつつあった。

「ケーフェンヒラー大尉、入ります」
「入りたまえ」
まだまだ緊張感が抜けない状態で入室する。

ごく普通の部屋であったが、中には何と皇女殿下が待っていた。
慌てて敬礼しカチカチなり挨拶を行う。
「皇女殿下におかれましてはご機嫌麗しく」

テレーゼが落ち着かせる話をした。

「ケーフェンヒラー大尉、未だ未だ堅いの」
部屋には、テレーゼの侍従武官ブレンターノ准将達も居た。

「去る筋からの情報じゃが、オフレッサー大将邸に賊が侵入して居るようじゃ。
定時連絡が無く、ジャミングが行われているので、超望遠レンズで確認したところじゃ」

皆が頷く。

「従って早急に宮中警備隊５個小隊を持って救援に向かえ、
此は父上も承知の事じゃ、勅命と思ってくれて良い。
ブレンターノ、卿が指揮を取れ、ケスラー、卿が副官だ、
ヴィッツレーベン１個小隊を引きいよ、そしてケーフェンヒラー、
卿も参加せよ」

「「「御意」」」
「早急に出発するように」
直ぐさま立ち上がり部屋を出て行く４人。

４人が出て行った後テレーゼが独り言を言う。
「ふう、まさか大規模攻撃があるとは、クラーマーを舐めていたわ。
無事でいてくれよ、ヴァーリア、ズザンナ、エアハルト達よ。
ケスラーは階級が未だ低いから指揮官を任せられんのが残念じゃ」

同日２２時４５分

オフレッサー邸内では、既に襲撃に対しての準備が終わっていた。

流石に装甲擲弾兵副総監邸である
そういった非常事態には慣れるようにしていたのである。

「奥様、不心得者が襲撃してきたようでございます」
「あらあら、それは大変ね。バウムガルテン歓迎会の準備をなさい」
「はっ、ヴァーリア様とズザンナ様とエアハルト様は地下室へお隠れ下さい」

「あら、私も戦いますわよ」
ヴァーリアは、にっこりと笑みを見せる。
執事のバウムガルテンが頭が痛そうに顰めっ面になるが、
仕方が無いと諦めて戦闘準備を命じた。

「奥様、奥様自ら装甲服をお着になる事はありますまい」
「あら、着なきゃ死んじゃうわよ・・・敵が・・」
奥方が、ぼっそっと、怖いことを言う。
「はあ」

「はいはい、バウムガルテンも着替えなさい」
「はっ」
「お母様、私も戦いますわ」

「お嬢様、危険でございます」
「ズザンナ、貴方もやる気満々ね、覚悟は出来ているのかしら?」
「ええ、オフレッサー家の娘ですもの」

「判りましたわ、ただしバウムガルテンと一緒に居なさい。
此でだけは譲れないわよ」
「判りました、お母様」

「バウムガルテン、ズザンナを宜しくね」
「はっ、命に代えてもお守り致します」
「そんな堅くなくて良いわよ」

「アーリア達は外で戦ってくれている方々にも御茶の用意をしてね」
「はい、奥様」
襲撃中にも関わらず普段のような会話をしている。
どれだけ肝が大きいのか凄い家族である。

同日２２時５５分

側壁の窓を破って、襲撃者が４０名が乱入してきた。
廊下に入った襲撃者達が、黒ずくめの服装でナイフや銃で武装していたのに対して、
オフレッサー家側は何と装甲服と戦斧などで武装していた。

「あら、パーティーは玄関から来るモノですわよ」
ヴァーリアがにこやかに話すが、その手には抜き身の日本刀が握られていた。
「宴の準備は出来ておりますぞ」
バウムガルテンが執事の仕事として話しかける。

襲撃者は一瞬止まったが、元々頭の可笑しい者達である。
うなりを上げて襲撃してきた。

「うをーーーー」
「死死死」
「ウケケケケ」

「絨毯を血で汚さないように殺さないようにね」
「はっ」
「任せてお母様」
「お任せ下さい」
「はい」
「了解しました」

オフレッサー家側は８人編成であるが、
２人は地下室入り口のある厨房で待機していた。

バウムガルテンが最初に戦闘を始める。
「装甲擲弾兵生活３５年、未だ未だ若い者には負けんわ！」
５５歳とは思えない軽やかなステップで戦斧を操り、敵の手足をへし折り行動不能にしていく。

それでもめげない襲撃者達は隙を突いて突っ込んでる。
「ウヘヘヘ其処の巨乳の彼女、僕と良いことしようよ」
「あら、あら、あたしのこの胸は旦那様の為にあるのよ」

「えへへへ。なら俺がご主人様になってやるよ」
突っ込んで来る変質者、もとい襲撃者。
「おいたは駄目ですよ」

鋭い動きで峰打ちで延髄を叩き、返す刀で手足をへし折る。
動く姿はまるで戦女神である。

突然、横の窓からも襲撃者が進入してきた。
「ウヒャヘヤッジャヤヒャ。ツルペタツルペタ、ジュルジュル」
ズザンナに向かって突入してくる。

ズザンナは自分がある一点が平均より発育が不良な為悩んでいたのに、
ツルペタなど言われ、凄い怖い目で襲撃者を睨み付けた。

「あ”・・テメー殺す!!」
そう言うと、戦斧を振り回し襲撃者に叩きつけた。
一発で骨折する襲撃者達。

「うあああああ、痛い痛いいい!!!」
のたうち回る襲撃者達。
他の3人もそれぞれ襲撃者を叩きつぶしていく。

「あらあら、血反吐を吐いて汚れてしまいますわ」
「コラ!テメー死ね!!!」
「こんなモノ叛徒共に比べたらへでもないわ!」
ヴァーリアがにこやかに戦い、ズザンナが切れまくり、バウムガルテンが吠えまくる。

襲撃者は全く統制が出来ずにバラバラで攻めてきたが、
４０人全員が僅か６人によって壊滅させられた。
時間にして僅か３５分。

的確に殺さずに、動けないようにした為時間が掛かったのである。
殺していれば、遙かに早く行けたのである。

同日２３時３０分

襲撃者４０人はオフレッサー家内で完全に戦闘不能で倒されていた。
支援犯は未だ支援を続けていたが、間抜けなことに連絡は自分たちのジャミングで届かない為に未だ支援をしていたのである。
クラーマー中将が口封じの為に襲撃者を収監するべく準備させた憲兵隊は、まだかまだかと苛ついていた。

同日２３時３３分

士官学校のオフレッサーの元へ、自宅が襲撃されたとの第一報が入った。
オフレッサーは慌てる部下を尻目に準備を始めた。
「フン。夜討ち朝駆けとは小賢しいわ。しかし儂の家を襲うとは、馬鹿か！」

「閣下、悠長にしている暇は有りませんぞ。速攻全員で向かいましょう」
「ハハハ、卿は儂の家族をよく知らんからな、賊が１個中隊いても平気だ」
そう言いながらも、頭には来ているオフレッサーである。

「連れて行くのは、分隊で良い！」
「はっ」

部下が出て行き準備をしながらオフレッサーは思う。
バウムガルテンが居るから、ヴァーリアもズザンナも無茶はしないであろう。
余りやり過ぎないで欲しいモノだ。

その後分隊と共にオフレッサー邸へ向かったのである。

同日２３時３５分

屋敷からバウムガルテンが出てきて、
煙幕弾を受けている、シャーフェン少尉に室内で襲撃者を撃破したと伝えてきた。
その直後に装甲擲弾兵長年の感で発射位置を割り出し、
突撃して襲撃犯４名を一瞬で撃破してきた。

「すげーな、あの爺さん」
「少尉殿まったくですな」

「おーい若いの、見てないで此奴等を連れて行くから手伝え」
「あっはい」
慌てて手伝いに行く。

その姿が見えたのだろう、憲兵隊が来るのが判った。
「憲兵ですね、来たようですね」
「ああ、奴らがどう出るかで決まるな」

憲兵隊が現れて、ハンドマイクで警告を出す。
「其処ので戦闘をしている連中、直ちに武器を捨て降伏せよ、呵らずんば攻撃する」

「ほうー、手際が良いモノですな」
バウムガルテンは涼しい顔だ。
「思ったとおりだな、奴らしゃやしゃり出てきたな」

「大方証拠を消す為でしょうな」
「さてどうしますか？」

苛ついた憲兵隊が強制執行しようとし始める。
「あと１０数える間に投降せよ！」
「１０」
「９」
「８」

「執事殿は、館へお帰り下さい。此処は我々で対処します」
「いえいえ、奥様より、御茶のお誘いでございますから、来て頂くまでは帰るわけには行きませんので」

「３」

するとである。憲兵隊の後方から突入してくる装甲車列が見える。
その装甲車列は探照灯を点け勢い良く中央突破してくる、逃げ惑う憲兵隊。
戦闘など出来ずに烏合の衆のように逃げ回る。

装甲車列は４隊に分かれて、憲兵隊を包囲している。
更に一隊ケーフェンヒラー大尉が率いて後方へ回り安全を確保する。
装甲車列は館前に止まり、スピーカーから指揮官が話をする。

「我々は、皇帝陛下直属の宮中警備隊だ。恐れ多くも勅命により此処へ来た。
憲兵隊は直ぐさま武器を捨てよ。さもなくば勅命により卿等を排除する！」

装甲車から次々に宮中警備隊の隊員が降りてくる、全員が完全武装である。
憲兵隊はパニックになりつつあるが、まさか勅命に攻撃も出来ず、相手が装甲車である、自分達は精々ライフルが最大武器では最早抵抗のしようがない。
僅か１０分で憲兵隊２個小隊は降伏した。

「やりましたな、ケスラー少佐」
ブレンターノ准将がケスラーに話しかける様は上司と部下が逆であるが、
実際ブレンターノは階級では上だが、組織ではケスラーが上という状態であり、
実際の指揮官はケスラーと言う事であった。

「ブレンターノ准将殿、此から奴らを調べねばならんですな」
「全くです」
「小官は館へ赴きます」

「了解しました」

同時刻オフレッサー家内では。
「あらあら、味方の方々が大勢来ましたわね。御茶の用意を増やしましょうね」
「奥様、承知いたしました」
「３００人分ほど用意してちょうだい」
あくまでマイペースであった。

ケスラーがオフレッサー家執事バウムガルテンに会い、挨拶を交わ

す。

「勅命によりオフレッサー邸を守るよう来ました、ケスラーと申します」

「それはありがたき事でございます。オフレッサー家執事バウムガルテンでございます。ささ館へどうぞ」

館へ行くケスラー。

玄関を入り、応接室へ案内される。

其処には、装甲服を着ている2名の女性が居た。

ケスラーは顔を見て驚いた、なんとオフレッサー夫人とオフレッサー令嬢だったからである。

「ようこそいらっしゃいました。私当家の留守を預かります、ヴァーリア・フォン・オフレッサーと申します。この子は娘のズザンナですわ」

「はっ、小官は皇帝陛下と皇女殿下の命により貴家を救援に来ました、

ウルリッヒ・ケスラー少佐と申します。指揮官ブレンターノ准将は外のことで手が離せませんので小官がご挨拶と説明に参りました」

「ケスラー殿、賊は４０人表の騒動に紛れて隣家より進入してきましたわ。

全員を既に私たちで撃破済みです、全て生かして縛ってありますわ」

「流石、オフレッサー大将閣下のお宅ですな」

ケスラーすら驚いている。

「ええ、手応えのない連中でしたわ」

「その姿を見るとまさかご婦人も参加なさったのですか？」
「ええ私で８人、娘が５人、バウムガルテンが１２人あと３人で倒しましたわ」
「流石ですな」

朗らかに笑う奥方。
少々引きつる執事。
唸るケスラー。

「表の賊も片づいたようですわね」
「はい、憲兵隊も一枚噛んでいるようです」
「なるほどね」

「これは、調べが済むまではご内密に」
「ええ、判りましたわ」
「大将閣下には既に連絡済みでございますので、ご安心を」

「あら、あの人が帰ってくるのね、早速好物のシュラハトプラットを用意ししなきゃね」
何処から見てもほのぼのしていて、ホッとする方であるとケスラーは思った。
「ケスラー少佐失礼。ズザンナお父様の為にシュラハトプラットを用意するようにアーリア達に伝えてきてちょうだい」

「はい、お母様。ケスラー少佐、失礼します」
そう言ってズザンナは装甲服着たまま部屋を出て行った。

「ケスラー少佐、連中を受け渡しますわね。
夫が帰ってくる前に連れて行かないと、

みんなミンチに成ってしまいますから」

奥方は、にこりとそんな話をする。
ケスラーは、テレーゼ様に匹敵するお方がまだまだ居るのだと関心していた。

帝国暦４８０年8月7日0時１５分

ケスラーが外の部隊から2個小隊を持って襲撃者を引き取り全員を、後から着いた護送車に乗せて順次送り出しているとき、
連絡を受けた、オフレッサー大将が数人の部下を連れて帰宅した。

オフレッサーが地上車から降りると、外にいた兵達が皆敬礼を行う。
ケスラーが敬礼して話す。

「オフレッサー大将閣下、御家族はご無事です。
小官はケスラー少佐であります」
「おう、御苦労さん。所で何人殺した?」
いきなりの質問に驚く。

「死者０であります」
「ほう、で賊は何人だ?」
「はっ実行犯４４名、従属犯１００名ほどです」

「家に押し入ったのが４４名か?」
「４０名であります」
「卿等が倒したのか?」

「いえ、閣下の御家族がお倒しに成られました」
オフレッサーはそれを聞いて、あちゃーと言う顔をする。
「そうか、犯人はどうしたか？」

「既に収監して送っております」
「ふむ、まあいい。御苦労だった」
「はっ」

「皇帝陛下と皇女殿下には並々ならぬご配慮感謝の極みとお伝え下され。
ご挨拶に、向かいますとお伝え下され」
「はっ」

家へ入るオフレッサーにヴァーリアとスザンナとバウムガルテンがお出迎えをする。
「貴方お帰りなさいませ」
「お父様、お帰りなさい」
「旦那様、お帰りなさいませ」
「うむ、今帰ったぞ」

とても襲撃を食らった後とは思えない。
普通の家族団欒にみえてしまう。

その後残っていた、宮中警備隊に御茶が振る舞われ皆が恐縮した。
「さあ、皆さん御茶をどうぞ」

ブレンダーノ准将とオフレッサー大将も語り合い。
陛下と殿下へのお礼が更に述べられたのである。
「オフレッサー大将閣下、小官はクレメンス・ブレンターノ准将と

申します、
この度は当方の不手際で、御家族を危険な目に会わせてしまい申し訳ございません」

「いや、教官を引き受けた以上、このような事が起こることは覚悟していたからな。
気にする事は無い」
「はっ」

「それに陛下と殿下がこうやって宮中警備隊まで送ってくれたのだ。ありがたい事ほかならない、皇帝陛下と皇女殿下には並々ならぬご配慮感謝の極みとお伝え下され」
「はっ」

「今夜は夜通し2個小隊で警護いたしますので、御家族はごゆっくりお休み下さい」
「ああ、御苦労様、そうさせてもらうよ」
「はっ」

第八十四話　襲撃の後始末（前書き）

明日も夜勤ですので更新が難しいです。
寒くなってきて風邪気味です。

第八十四話　襲撃の後始末

帝国暦４８０年8月7日0時２５分

■オーディン　ノイエ・サンスーシ宮中警備隊庁舎貴賓室　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

オフレッサー邸に防衛に行った、ケスラーより全て済んだとの連絡を受けた。

「ケスラー、御苦労様。屋敷の方々や部隊の者は無事ですか？」

「御家族も当方も全員無事です。また襲撃犯も全員生存しています」

「で怪我人はどの位出ていますか？」

「当方は怪我人０です。襲撃犯が４４名が重傷です」

「随分と味方が頑張ったんですね」

言いにくいようにケスラーが話す。

「いえ、憲兵隊は我々が捕らえましたが、襲撃犯は御家族が倒しました」

「あの執事の方ですかね」

「執事の方が１２人、ご婦人が８人、ご令嬢が５人倒しています」

「あー、流石オフレッサー家の家族だね」

驚くきますね、凄いぞオフレッサー一族、どこぞのリリカルな高町家みたいだ。

「じゃあ、オフレッサーは何もせずに済んだのね」

「はい、先ほどご帰宅しましたが、そのままですね」

「ケスラー、逮捕した連中を徹底的に取り調べて、クラーマーの悪

事を暴いて下さい。
私はオフレッサーに連絡して策を授けますんで」
「判りました。取りあえず今夜は、ヴィッツレーベン、ケーフェンヒラーを残して警戒させます」
「お願いしますね」

同日０時３５分

家族達の無事を確かめた後。
久々に戦った為に執事のバウムガルテンがギックリ腰になり痛がっているのを、賞めた後、寝るように諭して寝かせた後。

アーリア達が準備したシュラハトプラットがリビングへ届けられていた。
おいしそうな湯気に食欲がわいてくるが、その時電話が鳴る音がした為。
メイドのイルマが受けに行った。

オフレッサー邸に掛かってきたＴＶ電話は、ノイエ・サンスーシから掛かってきた。
電話に出たメイドのイルマが慌ててリビングへ駆け込んできた。
「イルマ、慌ただしいわよ」
「大変です、でででで殿下からお電話です！」

「はっあ、殿下？」
「こここ皇女殿下です」
「なに！、それを早く言わんか！」

オフレッサー慌てて電話室へ走っていく。
ＴＶ電話のモニターにはテレーゼがにこやかに写っていた。

「皇女殿下におかれましては、お待たせ致しまして誠に申し訳ございません」
「オフレッサー、その様な事気にせずとも良い。妾は卿の家族達が無事で嬉しいのじゃ」
「殿下、勿体のうございます」

「父上も心配しておったのじゃが年寄りは夜が早くて耐えられなかったのじゃ。
済まんな起きておらんで、しかし、父上と妾が卿を士官学校の教官を頼んだばかりにこのような事に成ってしまいすまん」

テレーゼが頭を下げた。
驚くオフレッサー。
「殿下、頭をお上げ下さい。恐れ多いことでございます」
「オフレッサー、ありがとうじゃ」
「勿体のうございます」

オフレッサーがぺこぺこしている姿は一興であった。
「オフレッサー、今回の事はかなり根が深いようじゃ。
子供の悪戯では済まない状態じゃ其処で済まんが、
士官学校の教官を明日は休んでくれんか？」

「殿下のご命令とあれば、その様に致しますが何か為さいますのですか？」
「うむ、今回の事件は憲兵隊が絡んでいるので、それを頼んだ連中と関係者をあぶり出します。
其処で連中を油断させる為に明日は休んで欲しいのです」

「御意」
「憲兵隊を捜索するときに、宮中警備隊だけでは足りませんので、装甲擲弾兵の応援をお願いします」
「皇女殿下、お任せ下さい。我ら装甲擲弾兵は陛下と殿下に永遠の忠誠を尽くしますぞ」

「オフレッサー、大儀です。けどライムバッハー総監に話を聞いてませんよ」
テレーゼがにこやかに突っ込む。
「総監も同じ気持ちです」
嫌だと行ったらぶっ飛ばすと考えてるオフレッサーであった。

「心強いことです、オフレッサー。父に代わって礼を言います」
「勿体のうございます」
「夜遅くまで済まぬな」

「殿下とんでもございません」
「卿の家族も素晴らしい戦いをしたと聞いたぞ、ズザンナを妾の近衛に欲しいくらいじゃ」
「お恥ずかしゅうございます」
「冗談ではないぞ考えておいてくれ」
「御意、娘も喜びましょう」

「さて遅うなってすまぬな、ゆるりと休んでくれ」
「殿下、誠にありがとうございました。家族共々御礼申し上げます」
「ではな」
「御意」

■オーディン　オフレッサー邸　　アルノルト・フォン・オフレッサー

殿下からのご連絡と陛下からの、我が家族へのご心配を受け今回ほどありがたい事はなかった。
益々陛下と殿下に忠誠を尽くす所存だ。
それに殿下がスザンナを近衛に欲しいと仰ったからな、明日にでもヴァーリアとズザンナに話してみるか。

しかし、餓鬼共の悪戯かと思ったが、憲兵まで動くとはクレーマー候補生の仕業か？
装甲擲弾兵対憲兵隊か普段は、取り締まられているからな。
逆に我々が取り締まるのも一興だな。

しかし、皆も４０人を半殺しとは、育て方を間違えたかのう。
あれでは嫁のもらい手が無いかも知れん。
ヴァーリアも１６の頃は大人しかったが、儂に追いつこうと一緒に訓練したから彼処まで強くなったのかの。

まあ、家族が無事でよかった。
好物のシュラハトプラットを食べるとするか。
明日は休みになったからな。

■オーディン　帝国軍士官学校寮　フレーゲル男爵部屋

今夜が襲撃だと言う事でまたも懲りない面々が集まっていた。
しかしびびったらしくコルプト子爵は数日前から参加しなくなって

いた。
フレーゲル達もリッテンハイム候にもいい顔をする、臆病者には用がないと捨てておいた。

「そろそろ襲撃されている時間です」
「クラーマー、家に投石とかして脅かすので大丈夫だろうな」
「フレーゲル殿、父がフレーゲル男爵の依頼なら、任せてくださいと言っていますから大丈夫ですよ」

「そうか、まあ投石や生ゴミを庭に蒔くなどすれば威圧には十分だろうな」
「いざとなれば、糞尿を玄関にばらまけば大丈夫ですよ」
「ヒルデスハイム伯、確かに良い案だな。今回の事で懲りなければそうしたそう」

「しかしコルプトの奴、ビビリおって情けない」
「逃げる奴は放っておけばいい、そのままハブれればいいのだから」
「まあ確かにな」

フレーゲル達が計画したのは非常に幼稚な嫌がらせだったが、それがクラーマー憲兵隊副総監が間に入ったことで、大事件になったのが真相であった。

■オーディン　クラーマー邸

その頃クラーマー憲兵隊副総監は、現場へ送った腹心以下の部隊から連絡が途絶えていたが、大したことがないと思い、明日連絡を聞けばいいと寝てしまった。

■オーディン　宮中警備隊庁舎

その頃襲撃犯や確保した憲兵隊は、宮中警備隊官舎にて夜通しの取り調べが始まっていたのであった。この取り調べが、憲兵隊の膿を出し切る外科手術になる第一歩と成ったのである。

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　皇帝別宅

テレーゼは夜更かししすぎて、眠くなりノイエ・サンスーシのフリードリヒ４世の別宅で寝る事になり、翌日、シュザンナに言い訳をするのに苦労したのであった。

第八十五話　尋問の威力（前書き）

取りあえず此処まで出来ました。

第八十五話　尋問の威力

帝国暦４８０年８月７日

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　宮中警備隊庁舎

深夜収監した、オフレッサー邸襲撃犯とそれに乱入を計った憲兵隊の取り調べは続いていた。
襲撃犯達は支離滅裂な事を言う者も多く、又元軍人は口が堅くなかなかはかどらない状態であった。

逆に憲兵隊はただ単に上司に連れてこられて争乱を鎮圧せよと命じられた者が殆どであり、
何故自分たちが此所に連行されたのか、納得のいかない者達が殆どであった。

しかし、全体指揮を行っていて、装甲車出現時に逃げだそうとして確保された、
ハイドリッヒ大佐が指揮官である事は明白であり、
憲兵副総監クラーマー中将の腹心である事も判っていると尋問するが、
只ひたすら沈黙を守っていた。

結局尋問は朝まで続き、多くの宮中警備隊捜査員が寝不足に成ったのである。

その為、一気に事を行うために陛下が早朝４時に早起きして関係者をノイエ・サンスーシへ連行或いは監視することを命じた。

命令を受けた各部隊はそれぞれ目的地へと向かった。

ブレンターノ准将率いる宮中警備隊はクラーマー邸を急襲し、暴れられたら困るため、手っ取り早く睡眠ガスで眠らせたままクラーマー中将の家族全員と使用人を連行した。そして留守宅には監視人を常駐させて、憲兵隊総監庁舎には、風邪で休むと使用人に化けて連絡させたのだった。

エーレンベルク元帥は、いつものように朝の体操中に皇帝陛下侍従武官シェーンシュテット准将が陛下がお呼びであると迎えに来たため、慌てて準備をして宮中へ向かった。

ブラウンシュバイク公爵には今のところ呼び出さずに監視だけを行うようにグリンメルスハウゼン部隊が命じられた。

又いたずらを仕掛けたはずが大事件に発展したとは露も知らない、フレーゲル以下の面々も今日は監視だけに留めるようにと命令が下った。

これらの事は、昨夜寝る前に皇帝とテレーゼとグリンメルスハウゼンで決めていた事であり。

クラーマーを処罰して憲兵隊の膿を出し切るだけでなく。

ブラウンシュバイク公なども全体的に利用しようという悪巧みがあったのである。

クラーマーは宮中警備隊庁舎の留置所で目を覚めさせられて、いきなりの事に怒り狂っていた。

「此所は何処だ！私を誰だと思って居るんだ！貴様憲兵隊副総監の私をこのような目に遭わせたら後でただではおかんぞ！」

クラーマーは両手両足を手錠と足錠で繋がれて芋虫のような状態であるから、
脅しも全然怖くない状態であり、
監視している隊員達は横でコーヒーを飲みながらリラックスしていた。

エーレンベルク元帥が皇帝の元へ参内したのは午前４時５０分のことであった。
ケッセリング中将に案内されて謁見の間に行くと陛下が待っていた。

「皇帝陛下急なるお呼び如何為さりましたか？」
「うむ、元帥大変な事が起こったのじゃ」
「大変な事とはいったい何が？」

「うむ、装甲擲弾兵副総監オフレッサー大将の館が暴漢に襲撃されたのじゃ」
「なんと、オフレッサーの館を襲うとは、では直ちに憲兵隊を派遣致します」
「いや元帥、その憲兵隊がオフレッサー館を襲ったのじゃ」

「なんと陛下それは真でございますか？」
「真じゃ、証拠もある」
そう陛下が言うと、ケッセリング中将がクラーマーが部下に襲撃の指示をする音声を流した。

『そうだ、オフレッサーの家を襲撃させろ。
フレーゲル男爵の許可を受けている以上、ブラウンシュヴァイク公の後ろ盾を受けた訳だから大々的に襲撃させろ。後はハイドリッヒ、お前に任せるぞ』

この音声を聞くエーレンベルク元帥とケッセリング中将の顔が見る見るうちに真っ青になっていく、そして冷や汗もかき始めた。

「陛下此は、大変な事ですぞ」
「そうじゃだからこそ元帥を呼んだのじゃ」
「憲兵隊の不始末、小官の監督不行でございます。如何様な処罰をお受け致します」

神妙な顔で頭を下げるエーレンベルク元帥を陛下が宥める。
「今回の件は元帥のせいではない、此まで憲兵隊をほっておいた、予にも責任があるのじゃ」
「陛下その様な事・・・」
「其処でじゃ元帥、この機会を持って憲兵隊の膿を出し切りたいのじゃ、協力してくれるな」

「御意、誠心誠意勤めさせて頂きます」
「実はな、宮中警備隊を使って昨夜オフレッサー館を襲った襲撃犯と従属犯そしてクラーマーを宮中警備隊庁舎にて尋問中じゃ、此より予も参る。元帥も共に参れ」
「御意」

ケッセリング中将を案内役に陛下とエーレンベルク元帥が宮中警備隊庁舎へと向かって行った。

午前6時　皇帝別宅

昨夜の夜遊びをシュザンナへ言い訳しているテレーゼが居た。
「テレーゼ、昨夜は何故別宅にとまりましたの？」
「お父様や爺と話し込んでしまって、時間が経ってしまって夜は怖

かったので、
お父様が止まって行きなさいと仰ったのです」

「で陛下はどうしたのですか？」
「お父様は、朝の運動に行ったみたいです、エーレンベルク元帥に影響されたみたいですよ」
「あら、そうなのね。けどねテレーゼ、成るべく館には帰ってきなさいね。
お泊まりするなら、早めに連絡をしなさいね」

「ご免なさいお母様」
「それじゃ、今日は其処からお勉強に通うのですね」
「はい、お母様」
「テレーゼ行ってらっしゃい、今日は帰るのですよ」
「判りましたわ」

ふううう一何とか誤魔化したよ、本当の事知ったら、母様気絶しちゃうよ。
それにしても憲兵隊を一気に改革できそうだし、
フレーゲル関係も解決できそうで色々悪巧みが出来るね。
父様、爺様、ケスラーに相談して決めなきゃね。

「殿下、陛下がエーレンベルク元帥と共に宮中警備隊庁舎へお向かいになりました」
「マルティナ、判ったわ。此方も向かいましょう」
「グリンメルスハウゼン閣下、ケスラー少佐も既にお向かいとの事です」

「急がなきゃね」

「はっ」

午前６時３０分

皇帝とエーレンベルク元帥が宮中警備隊官舎へ到着した。
ほぼ同じ時刻にグリンメルスハウゼンとケスラーが裏口へ到着、
ケスラーとブレンターノが尋問者として準備を行い尋問室へクラー
マーとハイドリッヒが連れて来られた。

陛下とエーレンベルク元帥が尋問室隣の観察部屋に入り観察してい
る。
少し遅れてテレーゼも到着し、グリンメルスハウゼンの居る、
貴賓室へ向かいＴＶモニターで尋問を観察し始めた。

「殿下、おはようございます」
「アリウス、おはよう」
「ホホ、大変な言い訳になりましたな」

「そう言わないでよ」
「ベーデミュンデ侯爵夫人はご心配なのですよ」
「まあね」

「尋問が始まりますな」
「そうね、どうなるかしらね、連中は」
「証拠が揃いすぎておりますから言い逃れは出来ませんな」
「だね」

午前６時４０分　宮中警備隊庁舎尋問室

尋問室に連れて来られたクラーマーはその中に自分の腹心のハイドリッヒ大佐が同じように縛られているのを見て、襲撃が失敗したのかと考えたが、
全てハイドリッヒのせいにして知らぬ存ぜぬを決めようと考えた。

ケスラーが尋問を始める。
「クラーマー中将。卿は装甲擲弾兵副総監オフレッサー大将邸を部下に命令し襲撃させたことは明白だ。
何か言うことはあるか？」
「何を言うのか。小官はその様な事をしたことは全く身に覚えの無いことだ！
早急に小官を開放せんと憲兵隊を敵に回すことになるぞ！」

「オフレッサー邸で逮捕した、ハイドリッヒが私がやったと言ったのか？」
「いいえ、ハイドリッヒ大佐は何も言いません」
「確かに腹心だが、ハイドリッヒ大佐は卿の腹心ではいかな」

「それ見ろ、何もしていないからこそ、ハイドリッヒは何も言うことがないのだ！」
「ほう其処までしらを切るわけだな」
「しらを切るどころか、知らんのだから言う事がない！」

それを見ながらどうこの事件を利用するか考えるテレーゼであった。
グリンメルスハウゼンはそれを見ながら、ニヤニヤと笑っているのである。
皇帝陛下はエーレンベルク元帥と話しながら、「しぶといの」と言っていた。

「それでは決定的な証拠を出してやろう」
ケスラーが言うと、ブレンターノが録音デスクを流し始めた。
『そうだ、オフレッサーの家を襲撃させろ。
フレーゲル男爵の許可を受けている以上、ブラウンシュヴァイク公の後ろ盾を受けた訳だから大々的に襲撃させろ。後はハイドリッヒ、お前に任せるぞ』

この音声が流されると、クラーマーが蒼い顔をして冷や汗をかき始めた。
又ズーッと黙っていたハイドリッヒ大佐が苦虫を噛み潰したような顔をし始めた。

「どうだ、此でもシラを切る気か！」
「知らん、こんな音声は合成に決まっている！！」
「既に声紋検査済みだ、卿達の声紋で一致している！」

此だけ出してもクラーマーはシラを切り続ける。
その間にも襲撃犯に対して尋問が続いていたが、
遂には自白剤を使う事も許可された結果、性犯罪者の一部がハイドリッヒ大佐から命令を受けたと吐いたのである。

その連絡はケスラーの元へ直ぐさま届き証拠をクラーマーとハイドリッヒに突きつけたのである。
しかしクラーマーは断固として関与を否定しまくり、ハイドリッヒは沈黙を続ける。

皇帝陛下はエーレンベルク元帥にそろそろ予が行こうと言い、エーレンベルク元帥を慌てさせたが、
尋問室へと2人で向かった。

クラーマーとハイドリッヒが否認しているとき、尋問室の扉が開きなんと皇帝陛下とエーレンベルグ元帥が入室してきた。
ケスラーとブレンターノと書記官は直ぐさま跪く。

しかし縛られているクラーマーとハイドリッヒは動けない為にそのまま陛下のお姿を見てしまうことと成った。
「ブレンターノ、ケスラー御苦労じゃ」
「「御意」」

「クラーマー、未だ罪を認めぬか！」
クラーマーは怒気を見せる陛下を見て更に蒼くなる。
クラーマーとしても罪を認めたら死罪であるから必死である。

突然ハイドリッヒが笑い出した。
「アハハハハ、もう駄目ですよ閣下！」
「ハイドリッヒ陛下の御前であるぞ」

「もう諦めましょう、そうです、私がクラーマー閣下の命令でオフレッサー邸を襲撃させましたよ」
「ハイドリッヒ、何を言うか！」
陛下の御前なのに言い争いを始める2人。

「皇帝陛下に逆らっては反逆罪ですからね、閣下も私も、もうお仕舞いですよ」
「ハイドリッヒ貴様が勝手にやったことだ！」

陛下がハイドリッヒに聞く。
「ハイドリッヒとやら、誠にそちがクラーマーの指示で動いたのじゃな」

「陛下そうでございます」

「どうじゃ、クラーマー未だシラを切るか！」
「陛下、フレーゲル男爵に命令されたのです、私はブラウンシュヴァイク公が怖いので動いただけです、
私は脅されただけです、心ならずも荷担したのに過ぎません」

「ほー、ブラウンシュヴァイクとフレーゲルが唆したと言うのじゃな」
「そうでございます」
「ブレンターノ、ケスラー後は任すぞ」
「「御意」」

「エーレンベルグ参るとしよう」
「御意」

その後も尋問が続き、クラーマーとハイドリッヒは全てを吐いたのである。
しかしフレーゲルとブラウンシュヴァイクに示唆されたと言い続けていたが。

ノイエ・サンスーシに帰った陛下は、辞任すると言うエーレンベルク元帥に憲兵隊の綱紀粛正を厳命し、装甲擲弾兵と協力するようにと命じて、密かに全国一斉で憲兵隊を調べるようにした。
そして昼よりライムバッハー上級大将及びオフレッサー大将との会議を行うこととした。

テレーゼとグリンメルスハウゼンは参加しないが、会議室の隣接室で内容を確認する事になっていた。
その前に陛下とテレーゼとグリンメルスハウゼンと朝餉を食べたの

である。

第八十六話　悪巧みは巧妙に（前書き）

あけまして、おめでとうございます。

今年こそは良い年でありますように。

久々の悪巧みに筆が進みました。

1日～5日まで仕事です。

明日の更新は無理だと思います。

第八十六話　悪巧みは巧妙に

帝国暦４８０年８月７日

■オーディン　帝国軍士官学校

フリードリヒ四世がエーレンベルク元帥と共に宮中警備隊庁舎に向かいつつあり。
テレーゼがシュザンナに言い訳を考えながら誤魔化しをして居るほぼ同時刻。

士官学校でも朝の運動が始まっていた。
今日は朝から聞こえるはずのオフレッサー大将のだみ声が聞こえなかった為、
事情を知る一部の者達以外は不思議に思いながら運動場で整列を行っていた。

校長や教官は既に今朝の内にオフレッサー大将は会議に出る為と誤魔化して、
今日は士官学校には来ない旨を知らせられていた為動揺はなかった。

又装甲擲弾兵は既に箝口令がひかれており、
また襲撃自体を撃破済みであり何の被害もないと知らせられていた為に動揺は全然無かった。
逆に古参の連中は副総監の家に入る馬鹿が居るのかと笑い話になる始末であった。

嫌々起こされて校庭へ出てきた、フレーゲル一党はオフレッサーが今日居ないと言う事を知ると、自分たちの嫌がらせが効いたと喜んでいた。

「クラーマー、やったようだな」
「フレーゲル殿、オフレッサーが居ないことが証拠ですな」
「校長は会議だと言ってますが、恐らく家に慌てて帰ったのでしょう」

「ヒルデスハイム、そうだな」
「あとは、伯父上に頼んで校長に圧力をかけて装甲擲弾兵には帰って貰おう」
「フレーゲル殿、そうですな是非ブラウンシュヴァイク公へお願いいたします」

「クラーマー、卿の功績は素晴らしいモノだ、近いうちに伯父上に紹介してやろう」
「フレーゲル殿、是非宜しくお願いいたします」
軍隊式体操を適当にやりながら、上機嫌でわが世の春を謳歌している、フレーゲル一党であった。

■オーディン　オフレッサー邸

午前6時

昨夜の襲撃を軽く撃退した、オフレッサー家では普通に朝が来て起床し運動を行っていた。
オフレッサー大将がズザンナと共に戦斧を振りながら汗をかいていると、

メイドのイルマがエーレンベルク元帥からＴＶ電話が来たことを伝えに来た。

「旦那様、エーレンベルク元帥閣下よりお電話です」
「うむ、昨日の事であろうな、直ぐに行く」
オフレッサーは汗を拭きながら電話室に向かう。

ＴＶ電話には車の中からであった。
「エーレンベルク閣下、おはようございます」
「オフレッサー大将、おはよう」

「元帥閣下、昨夜の事ですかな？」
「そうだ、それに付いて昼から、ノイエ・サンスーシで会議を行うので参加せよ」
「はっ」

そう言って電話は切れた。
オフレッサーは、昼からか準備をせねばなと考えていた。
電話を終えた、エーレンベルク元帥を見ながら陛下が御苦労じゃったと仰っていた。

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　小部屋

会議前に皇帝、テレーゼ、グリンメルスハウゼン、ケスラー四者による会議の内容についてのレクチャーが行われていた。

「今回のオフレッサー邸襲撃はフレーゲル男爵の言葉を曲解したクラーマー憲兵副総監のスタンドプレーと言う事は明白です。又クラーマーはひたすら、ブラウンシュヴァイク公爵とフレーゲル男爵に

示唆されたと言っております」

「ケスラーの言うとおり、録音や録画を見れば判りますね。フレーゲル達は本来近所の嫌がらせ程度のことをしようとしていたようですが、クラーマー中将がフレーゲルの頼みをブラウンシュヴァイクの頼みと勘違いし、得点をあげようと大事件に発展したと言う事ですね」

「そうなると、クラーマーの処罰は勿論じゃが、フレーゲル男爵以下の者達に対する処罰も行わなければ成りませんの、ブラウンシュヴァイク公爵はフレーゲル男爵への監督不行ですかの？」

「そうじゃの、オットーを処罰するとしても、余りしすぎは良くなかろう」

「お父様、宜しいでしょうか？」

「テレーゼ何か考えが有るのか？」

「はい、今回の件を持って憲兵隊を徹底的に清掃する事と共にもう少し利用しましょう」

「利用とはなんじゃな？」

「下手に今回のフレーゲル一党の関与を表沙汰にすれば、喜ぶのはリッテンハイム候でありましょう。そうなりますと、ブラウンシュヴァイク公の勢いが減りすぎてバランスがとれなくなります」

「確かにそうなりますの」

「さらに、今回の憲兵隊の綱紀粛正で門閥貴族の中から反感を持つモノが出てくるでしょう。それをフレーゲルの罪を不問にする代わりに、ブラウンシュヴァイクに協力させるんですよ。そうすれば、

リヒテンラーデでも反対出来にくく成るでしょう」

「成るほど、只単に罰してしまえば、恨みが残るだけじゃが、助けておいて交換条件で協力させると言う訳じゃな」

「お父様、そう言う訳です。さらに貴族がエーレンベルク元帥に対して監督不行が有ると騒いでもブラウンシュヴァイクには何も言えますまえ、精々減給程度で大丈夫でしょう」

「エーレンベルクはようやってくれておる、罪には問いたくないからの」

陛下の言葉に頷く3人。

「フレーゲル一党は精々成績不良で1年ほど余計に士官学校へ居て貰う程度にしておけば良いかと思いますね、その程度の罰は必要でしょう」

「ホホ、確かにそうじゃの」

「後は、フレーゲル一党に対する盗撮盗聴なのですか、それがばれるとその後の行動に悪い影響が出ます。その為、一党の内誰か1人か2人の罪を完全に問わずに無罪放免してその者が盗聴盗撮して密告したと、フレーゲル達に勘違いさせるのが良いでしょうね」

「殿下、良い手ですそれなら疑心暗鬼になり気がつかない可能性が高くなります」

「憲兵隊の綱紀粛正した後で、悪事を暴いて広く臣民に発表致しましょう」

「しかしその様な事、軍の威信の低下につながるのでは？」

「威信の低下は、戦果で戻せます。それより評判の悪い憲兵隊をお

父様が厳格に処罰したことを知れば臣民や下級貴族の支持を更に受けられるでしょう」

「儂の威信か、若き頃は欲しいとは思っていなかったが、テレーゼが儂を担ぎあげまくるの」

「ですの陛下」

にこやかなフリードリヒ四世とニヤニヤ顔のグリンメルスハウゼンである。

「所でクラーマー一家は騒乱罪や反逆罪で極刑が行われる事になります」

淡々とケスラーが言う。皆がそうだなと頷くがテレーゼだけは違った。

「クラーマーですが、態と処刑前に脱獄させてフェザーン経由で叛徒に亡命させましょう」

「はっ？それじゃと厳罰にならんぞ？」

「お父様、私は別にクラーマーが気の毒だと言って逃がすのではないのです」

「どう言うことじゃ？」

「クラーマーは旧悪の為に処刑されるところを、憲兵隊残党によって脱走。

その後、フェザーン経由で叛徒共の所へ亡命した。

帝国で臣民を虐待していたクラーマーを護民軍を自称する叛徒共が受け入れれば、臣民はどう思うでしょうか？臣民は叛徒を更に信用しなく成るはずでは？」

「うむ、その考えはなかったの」

「確かに殿下のお考えは理にかなっております」

「廃品の有効活用ですな」
グリンメルスハウゼンの言葉に思わず、笑みが溢れてきたのは。死者が1名も出ずにいたからであろう。

「無論、旧残党にはアウリスの部下を紛れ込まして、叛徒へのスパイとして潜入させます」
「此処でスパイを入れるわけですね」
「ケスラーそう言う事です、命からがら逃げてきた連中にスパイが居るとは余り考えないでしょう」

まあ駄目なら駄目だけどねと思うテレーゼだった。
「して憲兵隊の今後じゃが、人事をどうするかじゃな、余り貴族の紐付きはいかんの」

「お父様、それなら、憲兵総監にグリンメルスハウゼンを、副官にケスラーを、副総監にモルト少将を、査閲官にケーフェンヒラーをそして実戦部隊をブレンターノに武装憲兵隊には装甲擲弾兵上がりの者を、充てるのが良いと思います」

いきなりの指名に驚く2人。
「私がですかな?」
「小官がですか?」

「そうです、貴族や軍人はこう思うでしょう。憲兵隊総監は70歳の惚け老人、
査閲官は俘虜上がりで心臓病の老人、副総監も爺さんとあれば油断するでしょう。
憲兵隊内部をアウリスの部下達で固めてしまえば、
サイオキシン麻薬の際でも更に動きやすくなるでしょう。
無論秘密諜報員や今の位置にいた方が良い者達はそのままで行けば

OKでしょうね」

「確かに面白いかもしれんな、どうじゃグリンメルスハウゼン、やってみよ」

「はあ、判りました、この老骨に鞭を打って勤めましょうぞ」

「ふふ、アウリスは総監室で居眠りするんでしょ、それで仕事をするのがケスラーで書類仕事はモルトなんだよね」

「ハハハ、グリンメルスハウゼン、そうなるかのー」

「閣下ではそうなりますな」

「そうだよね。ケスラー頑張ってね」

「テレーゼがケスラーに仕事を押し付けるのであろうに」

「お父様、酷いですね」

みんなが笑ってる。

「陛下そろそろお時間になります、既に会議室へエーレンベルク元帥以下関係者が集まっております」

「お父様、会議では襲撃のこととクラーマーと憲兵隊綱紀粛正についてのみでお願いしますね」

「ケスラーが付いて居るから大丈夫じゃ」

「お父様行ってらっしゃい」

第八十七話　重臣会議（前書き）

取りあえず。職場からＵＰ

寒いです。

第八十七話　重臣会議

帝国暦４８０年８月７日

■オーディン　ノイエ・サンスーシ会議室

この日の昼過ぎ、エーレンベルク元帥から会議がある為、ノイエ・サンスーシに参内せよと命じられた、
ライムバッハー上級大将及びオフレッサー大将の両名は会議室にて、エーレンベルク元帥と会い皇帝陛下の御臨席があると聞き驚きを隠せないで居た。
特に事情を知らないライムバッハー上級大将は何が起こるのか不安そうにしていた。

皇帝陛下がブレンターノ准将とケスラー少佐を伴い会議室へ現れると全員が立ち上がり最敬礼を行う。
それを見ながら、皇帝はにこやかに挨拶を行う。
「皆の者今日は大儀である」

代表してエーレンベルク元帥が挨拶を行う。
「皇帝陛下におかれましてはご機嫌麗しくぞんします」
「うむ、今日は卿等に忌憚なき話をして貰いたいので礼節は無用じゃ」

ブレンターノとケスラーが資料を配り始める。
知りように目を通す、エーレンベルク元帥とオフレッサー大将は大体のことを知っている為、
さほど驚きはしないが、ライムバッハー上級大将は驚きを隠せない。

「皆の者、今日集まって貰ったのは、昨夜遅くにオフレッサーの館が襲撃されたことについてじゃ、それについて今より此処におる、ケスラーに説明させる」

「ケスラー少佐と申します、今回の事については他言無用にお願い致します」

皆が頷くのを見て、ケスラーが話し始める。

「本日未明、オフレッサー閣下邸が賊に襲撃を受けました。賊自体はオフレッサー家の方々が撃退し逮捕しましたが、その際憲兵隊と戦闘が起こりました」

「何故憲兵隊と戦闘になったのかね？」

ライムバッハー上級大将は不思議がる。

「問題は其処であります。襲撃犯は４４名であり、その者達はある人物の指示で襲撃を行ったのです。

そしてその襲撃犯の口封じを行う為に憲兵隊が動いたのです」

「なんですと、それは由々しきことではありませんか」

「つまり、襲撃自体が憲兵隊指導で行われたのです。

本日未明憲兵隊副総監クラーマー中将を逮捕し取り調べた結果、全体の関与を認めました」

「なるほど、しかし何故クラーマーはオフレッサーを襲ったのですか？」

「ライムバッハー、それは予のせいじゃ」

皇帝が話すとライムバッハー上級大将は驚く。

「陛下いったい何が起こりましたのでしょうか？」

「うむ士官学校の戦技教官をオフレッサーに命じたのは知っておるな、

その生徒の一部が嫌がって悪戯を仕掛けたのじゃが、その中にクラーマーの息子が居って、
悪戯の実行をクラーマーに頼んだ訳じゃが、クラーマーが曲解して大襲撃を行ったのじゃ」

完全な話にエーレンベルク元帥以下が驚く。
「それでは、単なる悪戯が大事になったわけですか」
オフレッサー大将が頷くながら話す。

「陛下そうなりますと、クラーマーは重罪ですが、同じく悪戯示唆した者も重罪です」
ライムバッハー上級大将が話す。
「憲兵隊は軍務省の管轄ですから、小官の監督不行きといえます」
エーレンベルク元帥が謝る。

「エーレンベルク、卿だけのせいではない。予が憲兵隊を放置して居ったのも問題なのじゃ」
「陛下」
エーレンベルグは今朝言われたが、何度言われても感動するのである。

それを見ている、ライムバッハー上級大将、オフレッサー大将、ブレンターノ達も陛下の度量の大きさに感動を覚えていた。

「今回の事で憲兵隊が腐っていることが判ったので、大掃除をすることにしたのじゃ、
しかしじゃ相手は憲兵隊、武力もあるので装甲擲弾兵を実働戦力として使い。捜査を宮中警備隊に任せることにしたのじゃ、その為に軍務尚書と装甲擲弾兵総監には協調して協力して欲しい」

「陛下、お任せ下さい」
「御意」

「そこで、準備が済むまで他言無用じゃ、詳しくはケスラーに任せる」
「「「御意」」」

「説明致します。今回宮中警備隊の指揮はブレンターノ准将が取り、小官が副官を務めます。
捜査員は宮中警備隊が請け負いますが、実力行使に対しては装甲擲弾兵にお願いします。
まずオーディンの憲兵隊総監部を徹底的に内偵捜査します。
その後一ヶ月半後を目処に憲兵隊総監部を始めとして、帝国全土の憲兵隊を捜査し膿を一気にぬきます。

機密保持のため、連絡は必要最小限とします。また捜査戦力確保のため。
士官学校に赴任中の装甲擲弾兵は一旦駐屯所に帰還してもらいます。
必要戦力は5日後にオーディンを出発帝国全土へ向かいます」

みんな頷いている。
「では、よろしくお願いいたします」

「任して頂きましょう」
「腕が鳴ります」
「陛下のご期待に添える様に致します」

「うむ、エーレンベルク、ライムバッハー、オフレッサー、ブレンダーノ、ケスラー頼むぞ」
「「「「御意」」」」

陛下が退室した後、皆が顔を見合わせながら、ＸＤＡＹを待つ為に準備を始めようと思うのであった。

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　会議室隣の小部屋　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

爺様と私で観察を行いなったけど、皆やる気を起こしてくれているようです。
特にエーレンベルク元帥は、失点回復の為に頑張ってくれそうです。
お父様もフレーゲルの事は誤魔化して旨く纏めましたし、
装甲擲弾兵を士官学校から返すのは、フレーゲル一党を油断させるためでも有るんですよね。
事実を突きつけられたとき、どんな顔をするかですね。

取りあえず、クラーマー一家は屋敷で悪性のヴァガインフルエンザが発生したため保健所により隔離入院中としました。ハイドリッヒも一緒に居合わせて隔離した事にしています。
捕まえた憲兵隊は、詰め所ごと変装した連中が入れ替わって居ますが、連中も伝染病にかかって隔離される予定ですからばれる心配は無いんですよ、流石は爺様です。
さてさて、ネタを仕込んで事件を確り料理しないとですね。

■オーディン　軍務省軍務尚書室　ハーロルト・フォン・エーレンベルク

今朝からの事は、自分の軍人生活の中で最も激動の日となった。
陛下からのお呼び出しで出かけたが、まさか現職の憲兵副総監が装甲擲弾兵副総監を襲わせるとは、
自分の監督不行きであると、沈痛に感じたので陛下に辞任を上申したが、
何と陛下はご自身も憲兵の悪癖をそのままにしていたとご自分のせいでもあると仰ったのだ。

陛下は小官の罪を問わずに憲兵の綱紀粛正に全力を入れよと仰って自分の辞任を却下なされた。
此所まで陛下のご期待を受けた以上は、誠心誠意陛下にお仕えし、絶対に憲兵隊の膿を出し切り陛下のご期待に添う憲兵隊を作り上げる、お手伝いを致す所存だ。

陛下のお優しさに胡座をかくわけにはいかないから、実績にてそれを見せてみようぞ。
陛下、残りの人生をかけて陛下にお仕えいたしますぞ。

■オーディン　装甲擲弾兵総監室

装甲擲弾兵総監部に帰還後、ライムバッハー、オフレッサーは、話し合いをしていた。
「オフレッサー、卿の家族が無事で何よりだった」
「総監ありがとうございます」
こう言う所は装甲擲弾兵は体育会系のノリなのか先輩には礼儀正しいのである。

「しかし、我々が憲兵隊を検挙する日が来るとは思っても見なかったな」

「まったくですな、我々は毎度毎度検挙される側でしたから」
「ハハハそうだな、卿と一緒に何度営巣に叩き込まれたか覚えてないからな」

「全くですな、あの頃は一番戦っておりましたから」
「彼奴らは、我々装甲擲弾兵を筋肉馬鹿とかと散々馬鹿にしてるからな」
「小官など、石器時代の勇者だの、ミンチメーカーだの呼ばれていますし」

「俺や卿のように、下級貴族や平民出身者を散々馬鹿にしてきた連中を俺たちが、陛下のご命令で浄化するとは何と気分の良いことだな」
「無論です、今度は我々が徹底的に取り締まってやりましょう」

「うむ早速だが、各地に派遣する者達の人選を行おう」
「そうですな、早速士官学校からも人員を帰還させましょう」
「オフレッサー、宜しく頼むぞ」

「総監任せて下さい」
「それと、憲兵隊総監部への突入は閣下が為さいますか？」
「ハハハ、それはオフレッサー卿に譲るよ。家の絨毯と窓の補修費を受け取ってこい」
「そうですな、受け取りにいきましょう」

帝国暦４８０年８月７日

■オーディン　帝国軍士官学校

士官学校で突如として装甲擲弾兵の駐屯地への帰還が始まった。
校長や教官には、装甲擲弾兵自身の訓練のために各地に増派するためにベテランを連れて行くためと説明され、皇帝陛下の許可も受けたと説明があった為、なんの混乱もなく夕方には帰還していった。

校長はやっと一部でも問題が片づいたとほっとしており、
今夜は久しぶりにゆっくり眠れると安心していた。

フレーゲル一党は、ブラウンシュバイク公に頼む前に装甲擲弾兵が帰還した事を喜んでいた。
「見ろ、あの筋肉馬鹿共がしっぽを巻いて逃げていくぞ」
「フレーゲル殿、我々の勝利ですな」
「クラーマー、卿が勲功第一じゃ、親父共々要職に就けて貰えるように伯父上に話しておくぞ」

「フレーゲル殿、ありがたき幸せです」
「いやはや此所まで図に当たるとは思いませんでしたな」
「ヒルデスハイム、それよ正に図に当たったのだな」

「ハハハ、愉快ですね」
「ハハハハ、そうよ此で又、我らの天下だ！
早い内伯父上に頼んで校長への圧力をかけて又以前のようにしなければなんぞ」
「此もすべて、フレーゲル男爵のおかげでございます」

「ハハハ、愉快だな」
「所で、逃げたコルプトはどうしますか？」
「あー、あんな臆病者、親父からして伯父上に付いたり、リッテンハイムの付いたりする卑怯者よ。
我々の力で放校処分にしてくれよう、或いは最前線へ送ってしまう

のも一興だな」

「ほんに、そうですな」

「あはははは、イゼルローン外縁の不毛の惑星へ送るのも一興ですな」

「追々考えようぞ」

馬鹿共の宴は深夜遅くまで続くのであった。

無論すべて録音録画済みであった。

第八十八話　襲撃前にやるべき事を

帝国暦４８０年８月１２日

■オーディン　第２軍事宇宙港

この日、オーディン各地の軍事宇宙港から、
装甲擲弾兵の訓練の為と称して行われる、装甲擲弾兵大演習の為に
各地へ向かう為に、
高速戦艦、巡航艦、駆逐艦などの高速艦艇が装甲擲弾兵を便乗させ
帝国全土へと旅立っていった。

乗り込む装甲擲弾兵は、装甲擲弾兵総監ライムバッハー上級大将から一斉訓練としか聞いて居ないが、
殆どの者が気にせずに現地へ地と向かうのであった。
そして通常の軍服を着た宮中警備隊の捜査員達が共に乗り込んでいるのも気がつかない状態であった。

憲兵隊一斉捜査の為に向かう行為であったが、完全に秘匿の意味から演習として行動させるのであった。
宮中警備隊の担当者のみしか作戦行動を把握して居らず、装甲擲弾兵は本当の大演習だと完全に思っていたのである。

帝国暦４８０年８月～９月

早い部隊では２日後に遅い部隊でも高速艦艇を使った結果３０日後には次々に現地へ到着した。
装甲擲弾兵は各々現地に着き次第、プログラムに従って演習を始め

た。
此は敵を欺くにはまず味方からの精神から行われるのである。
その間に宮中警備隊捜査官は地元憲兵隊の内偵を始めていた。

まず既に連絡が行き先に調べ始めて居る現地部隊と密かに接触し情報を受け取り内偵を開始した。
各地の憲兵隊が各種不正に手を染めているのが判るのはそんなに時間がかからなかったのである。

ある憲兵隊隊長は、好みの女性を不敬罪と称して脅し愛人にしており。
ある部隊は部隊ごと不敬罪捜査と称して商家に押し入り金品を強奪を行う。
また、密輸や人身売買等を行う悪徳業者から賄賂を受け取りお目こぼしを行う部隊。
僅かな内偵で一斉捜査前に悪事が次々と判明してきたのである。

帝国暦４８０年９月２１日

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　会議室

この日、朝から皇帝陛下からノイエ・サンスーシに参内せよと火急の呼び出しがあり。
国務尚書リヒテンラーデ侯爵、軍務尚書エーレンベルク元帥、
統帥本部長シュタインホフ元帥、宇宙艦隊司令長官ベヒトルスハイム元帥、
宇宙艦隊副司令長官エッシェンバッハ上級大将、装甲擲弾兵総監ライムバッハー上級大将、

装甲擲弾兵副総監オフレッサー大将、７名が参内した。

エーレンベルク元帥、ライムバッハー上級大将、オフレッサー大将の３人は既に連絡を受けている為に明日に迫ったＸＤＡＹの事であると判っていて平静であるが、
他の４人は２１日から２２日まで泊まりがけで来る様にと言われたことで、
何があるのかと話し合っていた。

前回と同じように、ブレンターノ准将とケスラー少佐を引き連れたフリードリヒ四世が現れると、
全員が立ち上がり最敬礼を行い、代表してリヒテンラーデ候がご挨拶を行う。
「皇帝陛下に於かれましてはご機嫌麗しく存じます」

「うむ、御苦労。卿等に集まって貰ったのは知らせることがあるからじゃ、
そこで卿等の忌憚なき意見を聞きたいので礼節は無用じゃ」
「と申しますと？」
リヒテンラーデ候が疑問顔で聞きしてくる。

「先月のことじゃが、オフレッサーの館が何者かに襲撃されたのじゃ」
「なんと、帝国軍大将の館に襲撃を行うなど、何たる事を」
ベヒトルスハイム元帥が驚く。

「しかし、その様な話全く我々は耳に挟んだ事もありませんが？」
シュタインホフ元帥が疑問を投げかける。情報部からもその様な話が上がってこないからである。
「予が素早く箝口令にて隠したのじゃ」

驚く４人。と納得顔の３人。
「陛下のご判断で大事にならずにすんだのです」
エーレンベルク元帥が神妙に話す。

「犯人共は我が家の家族で撃退し逮捕した」
「それで何者だったのですか？」
「うむ、襲撃犯は犯罪者者であったが、それを指示した者は憲兵隊であった」

「なんと、憲兵隊が現職大将を襲うとはそんな事が」
エッシェンバッハ上級大将が驚きを隠せない。
「恥ずかしながら、事実だ。私の監督不行きなのだ」

陛下がすかさず、エーレンベルクの罪を薄める為にフォローする。
「エーレンベルク、卿だけのせいではないぞ。予にも責任があると言うておろう」
「陛下、勿体のうございます」

陛下の言葉を否定できずに、エーレンベルク元帥の罪を指摘しようと思った。
シュタインホフ元帥や、リヒテンラーデ候も何も言えなくなる。

「憲兵副総監のクラーマーめがオフレッサー邸を襲撃させたのじゃ」
「なんと、クラーマーがいったい何の為でありましょうか？」
リヒテンラーデ候が疑問を投げかける。

「うむ、それだがの此から言う事は他言無用じゃ、よいな？」
「「「「「「「「御意」」」」」」」」
皆が頷く。

「予がオフレッサーを士官学校臨時教官として使わしたことを知って居るな。
士官学校にクラーマーの息子が在籍しておるが、息子に頼まれた為に襲撃を行ったのじゃ」
「その様な事を行えば反逆罪に問われるモノを何故したのでしょうか？」
リヒテンラーデ候は疑問を投げかけてくる。

「クラーマーの息子の同期にある貴族の甥が居てな、その者の悪戯話から事が大きくなったのじゃ」
「ある貴族とは言った誰でございますか？」
遂にその名前がわかるとエーレンベルク、ライムバッハー、オフレッサーは真剣な表情であり、
リヒテンラーデ、シュタインホフ、ベヒトルスハイム、エッシェンバッハは驚きの顔である。

「それはこの録音録画を聞いて見れば判る、これはクラーマーの取り調べの様子と、士官学校で恐ろしき陰謀があると、さる者が身の危険を顧みずに帝国の為に隠し撮りしたモノじゃ」
陛下がそう言うとブレンターノとケスラーが資料を配り、そして映像が始まった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

『「クラーマー、未だ罪を認めぬか！」

「アハハハハ、もう駄目ですよ閣下！」
「ハイドリッヒ陛下の御前であるぞ」
「もう諦めましょう、そうです、私がクラーマー閣下の命令でオフレッサー邸を襲撃させましたよ」
「ハイドリッヒ、何を言うか！」
「皇帝陛下に逆らっては反逆罪ですからね、閣下も私も、もうお仕舞いですよ」

「ハイドリッヒ貴様が勝手にやったことだ！」
「ハイドリッヒとやら、誠にそちがクラーマーの指示で動いたのじゃな」
「陛下そうでございます」

「どうじゃ、クラーマー未だシラを切るか！」
「陛下、フレーゲル男爵に命令されたのです、私はブラウンシュヴァイク公が怖いので動いただけです、
私は脅されただけです、心ならずも荷担したのに過ぎません」
「ほー、ブラウンシュヴァイクとフレーゲルが唆したと言うのじゃな」
「そうでございます」』

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

映像が流れ始め次第に7人の目を大きく見開きながら真剣に視聴し続けた。
映像が終わると、リヒテンラーデ候が声を絞り出すように話し出した。
「陛下これは由々しきことでございますぞ、ブラウンシュヴァイク公は陛下の娘婿、
その者が勅命を無視したとあれば、鼎の軽重を問われれましょう。
また他の貴族達に多大なる衝撃を与えるモノになり帝国の安定にも不安が生じましょう」
他の者達も考え込みながらリヒテンラーデ候の話を聞いている。
「しかし、クラーマーだけの告白では、言い逃れの可能性も否定できませんな」
エッシエンバッハ考えながら発言する。
「此だけではないのじゃ、もう一つあるのでな」
陛下がそう言うと次の映像が始まった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

『「フレーゲル殿」
「クラーマーどうした」
「いえね、陛下の勅許が有る限りオフレッサーは我らをしごくでしょう」

「そうだな」
「ならばしごけないようにすれば良いのですよ」
「オフレッサーでも殺すのか？」

「いえそんな事出来るわけ無いじゃないですか」
「まあそうだな」

「違いますよ、私の父は憲兵副総監ですから。
父に頼んでオフレッサーの家族を調べて、
悪党にでも襲撃させて恐怖を与えてやれば良いのですよ」

「そんなことしたら、俺達が殺されるぞ」
「大丈夫ですよ、我々が雇わずに父の伝手で襲撃させますから」
「本当に大丈夫だろうな？」
「任せて下さい、数日後には戦果を上げてオフレッサーを追い出して見せます」

「フレーゲル男爵、今日のような屈辱耐えられません！」
「クラーマー、私もそうだが、未だ返事は来ないのか」
「未だ今日の朝ですから、あと数日はかかりますよ」

「あと数日が恐ろしいが、暫くは大人しく従う振りをしているしかあるまい」
「ですな、それしか有りません」

「フレーゲル男爵、止めるわけには行かないのですか？」
「なぜだ」

「知れたら、きっと殺されます」

「大丈夫だ、親父に頼んであるし気がつかれないさ、いざとなれば、憲兵を出して揉み消すから」

「はあ」

「そろそろ襲撃されている時間です」

「クラーマー、家に投石とかして脅かすので大丈夫だろうな」

「フレーゲル殿、父がフレーゲル男爵の依頼なら、任せてくださいと言っていますから大丈夫ですよ」

「そうか、まあ投石や生ゴミを庭に蒔くなどすれば威圧には十分だろうな」

「いざとなれば、糞尿を玄関にばらまけば大丈夫ですよ」

「ヒルデスハイム伯、確かに良い案だな。今回の事で懲りなければそうしたそう」

「見ろ、あの筋肉馬鹿共がしっぽを巻いて逃げていくぞ」

「フレーゲル殿、我々の勝利ですな」

「クラーマー、卿が勲功第一じゃ、親父共々要職に就けて貰えるように伯父上に話しておくぞ」

「フレーゲル殿、ありがたき幸せです」

「いやはや此所まで図に当たるとは思いませんでしたな」

「ヒルデスハイム、それよ正に図に当たったのだな」

「ハハハ、愉快ですね」

「ハハハハ、そうよ此で又、我らの天下だ！　早い内伯父上に頼んで校長への圧力をかけて又以前のようにしなければなんぞ」

「此もすべて、フレーゲル男爵のおかげでございます」』

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

映像を見ながら段々と皆の顔が厳しくなっていったが、最後の生ゴミ云々で何だと言う顔になった。

「どうじゃな、この映像を見れば、フレーゲル男爵が授業を受けたくない為だけに悪戯を行い、それをクラーマーがブラウンシュヴァイクの頼みと思い行ったと言う事じゃ」

「うむ。此でありますと、ブラウンシュヴァイク公、フレーゲル達は極刑ですな」

皆が頷き始める。

「予は今回、腐りきった憲兵隊を掃除することにしたのじゃ、その為にブラウンシュヴァイクを今回は罰せずに協力させるつもりじゃ、それに伴ってクラーマー親子以外の者達は軽い罰で済ませてるが、役職等は辞任して貰うつもりじゃ」

「陛下、それでは不味いのではありませんか？」

「憲兵隊掃除こそ予の考えじゃ、それを行う為には多少の目こぼし

も必要じゃ」
「確かにそうでございますが」

「オフレッサー、黒幕たるフレーゲルを処罰せずに済してすまんの」
陛下の謝罪に皆が驚く。
「滅相もございません、陛下のお心使い臣は嬉しくてなりません」

「しかし、灸を添えてやらねば成るまい、そこでじゃ午後からブラウンシュヴァイクとフレーゲル達を呼んで居る、卿等も参加し予が灸を添えるのを見て居るのじゃ」
陛下は、いたずらっ子のように話している。
皆はそれを見ながら、陛下の凄みを益々感じるようになっていた。

その後、２２日までは外部との連絡を取らないように命じられたあと、
陛下と共に昼餉を御相伴し一時的に休憩に入った。

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　休憩個室　クラウス・フォン・リヒテンラーデ

突如の陛下の御召しに些か慌てたが、まさかあの様な事件が起こって居るとは全く知らなかった。
現職の大将を憲兵隊が襲うとは何たる事だ。
しかも陛下の娘婿がその中心人物で有るとは驚きじゃ。

ブラウンシュヴァイク公はリッテンハイム候と共に、
国事を我が事のように壟断甚だしいからの、ここいらで灸をそえるのも良い考えじゃな。
真。陛下の御深慮が素晴らしくなってきたものじゃ、臣としても仕

える楽しみが沸き上がってくるのう。
面白き時代になってきたモノじゃ、益々頑張るとしようか。

第八十八話　襲撃前にやるべき事を（後書き）

次回フレーゲル一党に対しての罰が決まりますが、そんなに悪くはないですよ。
殺すと無駄になりますからね。
主に金髪苛つかせる為の餌ですから。

第八十九話　ブラウンシュヴァイク公の憂鬱な日（前書き）

フレーゲルガクブルかな。

第八十九話　ブラウンシュヴァイク公の憂鬱な日

帝国暦４８０年９月２１日

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　オットー・フォン・ブラウンシュヴァイク

本日陛下からエリザベートの将来に対して、火急の用があるとの事で参内した。
陛下からは、家族総出で来る様にとのお話であったので、アマーリエとエリザベートを伴って参内した。
昼過ぎにノイエ・サンスーシの謁見室で陛下にお会いした。

「皇帝陛下に於かれましてはご機嫌麗しく」
「お父様、お久しぶりでございます」
「お爺様、ご機嫌麗しく」

「オットー、アマーリエ、エリザベートよう来た」
陛下がにこやかであるな、悪い話では無いようだな。
扉が開いて誰かが入ってきたな。

「テレーゼ来たか」
「はいお父様」
テレーゼ皇女が入室してきたのか。

「テレーゼ様にはご機嫌麗しく」
アマーリエよお前の妹だが今は我らは臣下だ、挨拶をしてくれ。
「テレーゼ、久しぶりですね」

アマーリエよ、余り儂を困らせないでくれ。
「テレーゼ様にはご機嫌麗しく」
エリザベートよよく言ってくれた。

「オットー義兄様、アマーリエお姉様、エリザベートちゃん、いらっしゃいませ」
「テレーゼ、今から予はオットーとアマーリエと大事な話があるので、エリザベートと共に遊んできなさい。
エリザベートもテレーゼと一緒に行ってきておくれ」

「はい、お父様」
「はい、お爺様」
「エリザベートちゃん、何して遊ぼうか？」

女官が2人を連れて出て行く。
これから、話が始まるのか、エリザベートの婚姻の事であろうか、それともルードヴィヒ兄上に子が出来ぬ為にエリザベートを皇位継承者として決めて頂けるのであろうか、何しても楽しみな事だ。

「オットー、アマーリエよ。今日は来て貰ってすまぬな」
「とんでもございません、臣たるモノ陛下のお召しあれば直ぐに参内するのが勤めでございます」
「お父様、エリザベートの将来とは、婚姻の事でございましょうか？」

ん？陛下のお顔に陰りが見られ始めたが如何したのだ？
「うむ、このままでいくと、ブラウンシュヴァイクの家は消え去るやもしれんのだ」
陛下のお言葉がわからん、当家が消え去るとは？

「お父様、冗談はおよしになってくださいませ」
「アマーリエ、本気じゃ。大変な事が起こってな」
「貴方、何かしましたの！」

アマーリエよ、儂に怒りを向けるな、儂とて心当たりが無いとは言えないが、それほどのことはないぞ。
「陛下、我が家が消え去るとは、いったい如何した事でありましょうか？」
「うむ。先月、装甲擲弾兵副総監オフレッサー邸が襲撃を受けたのじゃ」

「その様な話、初耳ですが？」
「うむ、事が事だけに箝口令をひいておいたのじゃ」
「お父様、その襲撃が何故我が家に関係してくるのですか？」

「襲撃犯を操っていたのが、憲兵隊副総監クラーマーであったのじゃ」
しかしクラーマーが犯人であっても我が家との関係は精々パーティーで会ったぐらいだ。
「お父様、クラーマーなる者が我が家と何の関係がありましょうや？」

「クラーマーを捕らえて尋問した際、ブラウンシュヴァイクが示唆したと告白したのじゃ」
何と言うことだ、身に覚えにないことであるし、陛下には確りと説明しなければ成らんな。
「貴方！それは本当なのですか！」
アマーリエよあまり怒るな、怖いではないか。

「陛下、大神オーディンにかけて、臣はその様な事を一度として命

じたことはございません」
「お父様。夫もこう言っています、その者が夫を落とし入れようとしているのではありませんか？」
「アマーリエ、予もそう思いたかったが、悲しいが証拠があるのじゃ」

陛下が、端末のスイッチを入れるとモニターに画像が流れ出す。
クラーマーが尋問を答える姿が映るが、何だとヨアヒムと儂が示唆したと話して居るではないか。
妻を見ると、更に段々不機嫌になっていくのが判る、妻は癇癪持ちだからまた怒られるではないか。

「貴方！フレーゲル男爵と共謀して示唆したと言っていますが！本当なら早く言いなさい！」
「陛下、示唆など身に覚えがございません。確かに甥にオフレッサー大将を何とかして欲しいと相談は受けましたが、諦めよと諭しております」

精一杯反論せねば、陛下も妻も怖いわ。
「卿の甥、フレーゲルの会話を密告してきた者がおってな、それに驚くべき事があったのじゃ」
ヨアヒムだと、まさか勝手なことをしでかしたのではあるまいな。

陛下がまたスイッチを押し画像が流れる。

そこには、甥であるヨアヒムが勅命を無視して、オフレッサー邸を襲撃させる企みを話し合う姿が、撮されている。更にその原因が単に楽をしたいだけと言う、呆れるほど馬鹿な理由であるのが情けない。
しかし、勅命無視は謀反と同じ、何と言うことをしてくれたのだ！

しかも、儂が何とかしてくれるだと！幾ら亡き妹の子とは言え、甘やかして育てすぎたのか、儂の教育が間違っていたのは今更ながら後悔しても仕切れない。
我が家の歴史も儂で終わりやもしれんが、エリザベートには罪が行かぬようにお願いしなければ成らん。

「お父様、フレーゲルが主犯であるならフレーゲルを処刑すれば宜しいのではありませんか？」
アマーリエ、そうはいかんのが、貴族というモノであろう。
「陛下、甥フレーゲルがあの様になったのは、私の監督不行きでございます、如何様な罰も受ける所存なれど、アマーリエとエリザベートには罪なきようにお願い致します」

「貴方・・・」
ふ、最後ぐらい情けない姿は見せたくないのでな。
「ブラウンシュヴァイクよう、言った！」

陛下の大きな声も初めて聞くかもしれんな。
「オットーよ儂は、今回の事は出来うる限り穏便にしたいのじゃ、皇室の藩屏としてのブラウンシュヴァイク家を潰したくはないのでな」

皇帝陛下がこれほどありがたき感じた事は無かった。
「陛下、ありがたきお言葉」
「さりとて、このままで置くことも出来ぬでな、卿に協力して貰いたい事がある」
「はっこのブラウンシュヴァイク公オットー、陛下のご命令であれば嫌ような事はございません」

「この度の事件を起こした憲兵隊を一気に改変する事にしてな、それを行うに当たり不平不満を言う貴族も多数出ようが、それをオットーが静めて欲しいのじゃ」
その様な事で我が家が無事であれば、全力で行うまでだ、
リッテンハイムが五月蠅かろうが、それも多くの貴族を宥めれば自然と何も言えなくなるであろう。

「陛下、ブラウンシュヴァイク一門の総力を挙げ陛下の改革に文句は言わせません」
「貴方、頑張るのですよ」
「うむ、オットー、アマーリエよ期待しておるぞ」

「御意」
「お父様。任せて下さいませ、夫が怠けたら私がシバきますから」
「ハハハ、アマーリエ頑張るのじゃぞ」

ふう、陛下と妻の機嫌も直ってホッとしたわ、しかしあの馬鹿めどうなるのか。
「オットーよ、クラーマーの死罪は免れぬが、
フレーゲル達は、オフレッサーが今回限りは我慢しても良いと言っておる。

予としても死罪は免除しても良いと思っているが、
あの怠け癖などや成績不良はどうしようも成らん、
そこで、特別クラスを造りフレーゲル達を再教育することにするが、
何か意見はあるかの？」

陛下のお考えに全く意見がない、あの馬鹿も少しはまともになると良いが、どうであろうか。
「陛下のお考え誠に素晴らしく意見など何もございません」

「お父様、いっその事何処かへ送って苦労をかければいいのですわ！それに2度と当家の敷居は跨がせませんわ！」

アマーリエは相当頭に来ているようだな、ヨアヒムは2度と浮かばれまい、

しかし此も自業自得というモノか。幾ら甥とは言えそこまで庇ってはやれぬ。

「オットーよ、3時よりフレーゲル達とその親たちに参内するように命じて居る。

此より国務尚書達とフレーゲル達を呼び出し詮議いたすので参加せよ」

「御意」

儂も肩身が狭い思いをするのか、致し方ないことだ。

「オットーよ国務尚書達は全員納得済みじゃ」

お分かりに成られていたか、ここは確りヨアヒムを罰せようぞ。

「アマーリエはテレーゼやエリザベートと共に居るが良いぞ、久々の実家であろう安心致せ」

「お父様、そうさせて頂きます。貴方！確りしなさいよ」

ふう、今日ほどつかれる日はないかもしれんな。

「オットー、今日は外部との連絡は禁止じゃ、判ったな」

「御意」

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　ヨアヒム・フォン・フレーゲル

本日、なんと皇帝陛下から参内せよとご命令を受けた、
しかもだ私の将来に対する事だという、
遂にテレーゼとの婚約が成立するのだ、此ほど嬉しい日はない。

ノイエ・サンスーシに到着すると伯父上と叔母上も参内しているらしい。
此は間違えなく婚約のことだ。伯父上感謝致しますぞ。

ウキウキしつつ午後3時になると、陛下の侍従が謁見室へ案内してくれる。
謁見室には、陛下の他に伯父上やリヒテンラーデ、帝国軍三長官に何故か原始人達もいた。
まあ、私の婚約だ原始人達のことは気にせずにいよう。
まずは義父上にご挨拶しなければな。

「皇帝陛下に於かれましてはご機嫌麗しく」
なにも反応がないのは、やはり娘を嫁に出す心境と言うのであるな、大丈夫でございますよ、テレーゼは私が幸せに致しますので。

ん？また謁見者だと、リッテンハイム辺りがチャチャを入れに来たのか？

ん？なぜ卿等が来るのだ？
「陛下、フレーゲル男爵、ヒルデスハイム伯爵家族、アイゼンフート伯爵家族、シェッツラー子爵家族、シャイド男爵家族が集まりました」

みんな何故此処へ呼ばれたのだ？
「皆の者、今日呼んだのはお主等の今後のことについてじゃ」
今後の事とは？しかも陛下が怒って居られる。

「皇帝陛下におか・・」
「挨拶は無用じゃ！」
アイゼンフート伯爵の挨拶を陛下が遮った。

「此を見て見よ」
陛下は何を見せるというのだ、侍従武官がモニターに画像をだした。
ここれは。クラーマー中将が独白する姿や、我々が襲撃を相談する姿が流されている。
ななんと言う事だ。陛下達の私を見る目が厳しい、伯父上でさえ鋭い眼光で見てくる。

集められた仲間達も真っ青になってる、きっと私も真っ青なのだろう。
伯父上助けて下さい、伯父上であれば何とか成るでしょう。
そう思いながら伯父上を見るが伯父上は目を会わせてくれない。

陛下は、テレーゼの婚約者を捨てることはしませんよね。
私はテレーゼと共に帝国の藩屏たるべき存在なのですから。

「どうじゃ、この事言い逃れがあるか！」
伯父上が助けてくれるようだ、話してくれるの。
「陛下、誠に恥ずかしき事なれば、我が甥2人がこのような不忠を働くとは、
ひとえに臣の不徳の極みでございます。この上は陛下の御下知に全て従う所存でございます」

伯父上何を言うのですか、助けてください。
「ブラウンシュヴァイクの言や良し」
他の家族も皆同じように言い始めてしまった、最早逃げられんのか

死にたくない。

「陛下、この者達は勅命を無視したのですから、死罪相当でございます」

リヒテンラーデめ、この私を死刑にする気か伯父上が最後には助けてくれるはずだ。

「ブラウンシュヴァイク、国務尚書はこう言っておるが、お主はどうじゃ？」

「はっ、陛下の御心のままに」

伯父上見捨てないで下さい。私は貴方の甥なのです。助けて下さい。

陛下が黙ってしまった、死罪であろうか、死にたくない。

「陛下」

「どうした、オフレッサー」

「はっ、今回は我が家族にも被害はございませんでした。

更にフレーゲル男爵達は悪戯のつもりであった様でございます。

今回のみ死罪は回避し、この者達に再挑戦の機会を与えてやることは出来ませんでしょうか？」

オフレッサーが私たちを擁護してくれるとは。

「陛下、その様な事してしまいましては、帝国の威信に関わりますぞ」

リヒテンラーデ余計なことを言うな。

「うむ。国務尚書よ、今回は我慢してくれ。オフレッサーの言や良し」

「御意」
助かったのか。

「クラーマーは死罪じゃが、卿等はオフレッサーに免じて今回は助けて遣わす。
2度目は無いモノと考えよ！言わずと判るであろうが、役職は辞任せよ」

しかし、ノルディンとコルプトが呼ばれていないのはどう言う事だ、彼奴等が密告したのか、おのれ今は無理だが何れ目にモノ見せてくれるわ。
暫くは大人しくしなければ成るまい。何れ閑居も解けるであろう。

そう思ったが、そのまま部屋へ軟禁されてしまったが、
明日になれば出られるであろう。
その後伯父上に謝って取りなして頂こう。

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

今日の会議を後で観察したけど、まあみんな演技が旨いって言うかなんて言うか。
リヒテンラーデ候がきつい事を言って、襲撃を食らったオフレッサーが助け船を出して、
オフレッサーの度量の良さを見せて、それを採用して父様の度量も見せる素晴らしい作戦ですね。

フレーゲルは反省しないだろうけど、他の連中は父様に安心感を持つはずですよ。

本来なら一族死罪で可笑しくないのですから。
典礼尚書は辞任するでしょうから、後釜はマリーンドルフ伯爵を推薦しますかね。

しかしフレーゲル達は何処へ送ろうかな、取りあえず４７８年度は全員実力テスト行って駄目なら別施設で再教育することにしましょうね、フレーゲル達はもっととんでも無い所へ送って教育ですね。

それとエリザベートと遊んだんですけどね。
叔母より姪が一歳年上ですからね、あり得ないですよ。
まあ、向こうも皇孫だけど、親のしつけの問題か私に対しても結構尊大ですね。

あれは何れ何とかしないと人望無くしますよ。
姉は母様のことが好きじゃないので、
私のことも好きでないようですからかそれが出るんですかね。

ＯＶＡで見たザビーネの方が可愛い気がするんですよね。
攫ってきて育てたいですね、今から育てれば良い子になるはずですよ。
まあ、無理ですけどね。

第九十話　憲兵隊急襲作戦（前書き）

今日の最終分です。
フレーゲルの始末は明日以降です。

第九十話　憲兵隊急襲作戦

帝国暦４８０年９月２２日

この日、帝国全土の憲兵隊庁舎を完全武装の装甲擲弾兵を先頭にした集団が襲撃を行った。
全隊員が集まる午前９時に突如として急襲された憲兵隊はパニックに陥っていた。
オーディンの憲兵隊総監部でも、装甲擲弾兵副総監オフレッサー大将が指揮した１個師団に及ぶ装甲擲弾兵により、あっという間に占拠されてしまった。

総監室では憲兵隊総監コンスタンティン・フォン・ボルマン大将が政務を始めていたが、
騒がしい物音と共に扉が叩き壊されて装甲服を着た大男が進入してきた。

「何だ貴様は！」
「儂が装甲擲弾兵副総監オフレッサー大将である！」
「装甲擲弾兵が何の用だ！」

「ん、皇帝陛下から、お使いを頼まれてな」
不敵に笑うオフレッサー。
「無礼な。陛下を騙るとは、卿を逮捕する！」

「ふん。ケスラー少佐出番だぜ」
オフレッサーの後ろから、ケスラーが姿を現し勅書を開きそれを見せながら宣言する。
「勅命である。恐れ多くも陛下に於かれましては、

憲兵隊の日頃の不正を鑑み我らに一斉捜査を命じられた、その旨承知するようにとのお言葉だ」

ボルマン大将の顔にみるみる冷や汗が流れていく。
「返答や如何に！」
「不正などあるわけがない、陛下の思い違いに相違ないわ」

「貴様、陛下の勅命を認めぬと言うのか！」
オフレッサーが怒り気味に怒鳴る。
「そこまで言うのなら、覚悟はあるのですね」
ケスラーが落ち着いた口調で話すので、オフレッサーの怖さを際だたせていた。

ボルマンも、そう言われると、しどろもどろに成る。
「そうは言っては居ない、小官はあずかり知らぬ事だからだ」
「ほう、では誰が預かっているのですかな」

「副総監のクラーマーに込み入ったことは全て任せてある」
「クラーマー中将ですな」
「クラーマーが全て任してくれと言うので、楽だから頼んであるのだが、
ここ1月半は伝染病で隔離されていて事務も滞りがちなのだ」

「では、協力して貰えますな」
「判った、協力しよう」
そう言うボルマン大将の目は浮ついていた。

「では全隊員に武器を捨てて一カ所に集まるように命じて頂く」
「判った」

その後各地の憲兵隊に突入した部隊も勅書にて憲兵隊の動きを止め拘束を始めていた。
ごく一部の憲兵隊が勅書を無視して抵抗したが、装甲擲弾兵の敵ではなく僅かな時間で鎮圧された。

その後が一苦労であった。元々民間人の検挙は憲兵隊の仕事で無いので大丈夫であるが、
軍人の検挙に必要な人材が居ない為に、装甲擲弾兵が憲兵の代わりをすることになり、
各地の酒場などで、暴れたりする兵達は普段と違い力でねじ伏せられ怪我人が続出したのであった。

それから2ヶ月に渡って、各基地では成るべく外で飲まないようにと多くの兵士が注意をしたので、
飲み屋街が2ヶ月間は閑古鳥が鳴いて、経営者が困ったのであった。

9月22日から早速取り調べと、資料の照査が行われ内偵どおり。
多数の不正や冤罪等が次々にさらけ出されていったのである。
クラーマー中将やハイドリッヒ大佐などは、公金横領や不正なども多数行っており、
その調書だけで数千ページに及ぶモノになっていた。

その課程で、人身売買組織や違法薬物組織や密輸業者などや、
不正を働く貴族達も次々に発見され、検挙されていったが、
サイオキシン麻薬の密売組織に関しては小規模の組織以外は殆ど発見されなかった。

それは、カール・マチウスの関係で482年に一斉検挙の予定がある為に、
コントロールできない組織のみが逮捕されたのである。

憲兵隊の検挙や貴族の逮捕について、門閥貴族達の中でも騒ぐ者達が出たのであるが、
門閥貴族筆頭たる、ブラウンシュヴァイク公爵が憲兵隊の綱紀粛正を全面的に支持した為、
多くの貴族が矛を収めた。

しかし、リッテンハイム侯爵は一門のオッペンハイマー伯爵が逮捕された為に、
最後まで反対していたが陛下から参内を命じられ、叱責を受けた為、矛を収めることになった。

１０月に入り、憲兵隊員の取り調べと、使える隊員と使えない隊員との仕分けが終わると。
定期人事異動が行われ、その際に憲兵隊は新たなる門出を向かえることになった。
陛下の勅命により、人事は次のように決まった。

憲兵隊総監　リヒャルト・フォン・グリンメルスハウゼン大将
憲兵隊副総監　エルネスト・フォン・モルト中将
憲兵隊査閲官　クリストフ・フォン・ケーフェンヒラー中将

憲兵隊実働部長　クレメンス・ブレンターノ准将
武装憲兵隊部隊長　オットー・パウマン大佐
武装憲兵隊部隊長　ワルター・フォン・ラフト大佐

憲兵総監副官　ウルリッヒ・ケスラー中佐
憲兵隊経理部長　アウグスト・フォン・シュターデン大佐
憲兵隊兵站班長　レオポルド・シューマッハ少佐

また司法省から、司法関係のアドバイザーとして、エーリッヒ・フ

ォン・キルヒアイスが赴任した。

また、グリンメルスハウゼンの部下達が多数、憲兵隊に移動してきており、
宮中警備隊と共に皇帝とテレーゼの手の者が増える結果と成った。
更に皇帝陛下の特命で、武装憲兵隊は装甲擲弾兵を編入し再編する事が決まった。

旧憲兵隊で不正を働いていた者達は取りあえず軍刑務所へ収監され裁判を待つ身となった。
そして真面目な者達は再教育の末、再度憲兵隊及び各軍に配属されたのである。

帝国暦４８０年１０月２０日

この日銀河帝国では正午に重大発表がある為、全国民は正午にＴＶを見るようにと発表された。
一年前には俘虜帰還のニュースがあったが今回もそのたぐいかという観測もあったが、
正午になり、国務尚書リヒテンラーデ侯爵が陛下のお言葉を代理として読み上げた。

それは、驚くべく内容であった。
1．憲兵隊が特権を利用して数々の不正を行っていた事。
2．恣意的な逮捕、監禁、暴行、強姦、などの重大事件を起こしながら悉く握り潰してきた事。
3．密輸、薬物販売、人身売買等に関係していた事。
4．敵対する組織の館を襲撃させた事。

などなど、数え切れない悪事が発表されたのである。
特に憲兵副総監クラーマー中将の悪事は凄まじく、聞いている臣民達が怒りを覚えるほどであった。
そして、クラーマーは極刑に処す旨が発表された。

今回の発表は、貴族はもとより、臣民が皆驚きを隠せない状態であった。
社会秩序維持局や内務省や警察は憲兵隊の凋落に笑いが止まらない状態であったが、
数年後の自分たちが同じ姿になるとは、この時は誰も考えつきもしなかった。

その後、皇帝陛下ご自身がマイクの前に立ち、喋り始めたときは全臣民が大いに驚いたのである。
「親愛なる臣民達よ、予フリードリヒ四世は此所に腐りきった憲兵隊の綱紀粛正を行う、
臣民達よ予の為しようを見ていて欲しい。決して卿達の期待を裏切らせはせぬ」

この宣言が為された直後から、帝国全土で皇帝陛下万歳の大合唱が始まり、
多くの臣民がフリードリヒ四世の勇気と徳と正義感を感じ、
益々軍人や下級貴族や平民達の敬愛と尊敬を受けるのであった。

ブラウンシュバイク公も今回ばかりは、陛下の凄みを感じながら、
我が家があの犠牲の羊にならなくて良かった安堵しているのであった。

リッテンハイム候は、未だ納得が行かずにいたが、陛下の怒気に薄ら寒さを感じていた。
多くの貴族も不平不満は有ったが、ブラウンシュバイク公が全面的な支持者であり、
リッテンハイム候は叱責されたと有っては、何も言えなくなり。

さらに、今回クラーマー子爵を始めとして、少なくない貴族が逮捕されたため、
そして軍部が全面的に陛下に協力しているために動くに動けない状態なのであり、
又、怒気を放った。陛下が恐ろしくて、精々サロンで愚痴をこぼす事ぐらいしか出来ない状態であった。

■ノイエ・サンスーシ　　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

今回の憲兵隊大掃除は大成功に終わりました。
クラーマー以下多数の犯罪行為が白日の下に晒されて、
それによりラインハルトがリップシュタット戦後に行った改革が出来てしまいましたからね。

早い者勝ちですから、二番煎じないですよ、やった者勝ちですからね。
父様の玉音放送で臣民の敬愛度は益々あがりましたからね。
ＯＶＡのナレーションの様に、在位３０年でも確たる業績もないなんて、言わせませんよ。

憲兵隊の人事は思うように出来ましたよ、ケーフェン爺様だけは宥めながら頼み込みましたけどね。
後は、シューマッハをスカウトしましたよ、彼は後方支援のエキスパートですからね、
ジャンジャン育ってもらいたいですね。

あとは、理論家がよい兵站や経理に、シュターデンを呼び返しました、
お父様が呼んでくれたと、知った時のシュターデンの感動ったら有りませんでしたよ。
『小官のような者を特命で呼んでいただき、感嘆の極み皇帝陛下の御為にこの命擲つ所存で御座います」
だって、お父様は完全に敬愛さてますよ。

彼は理論家だから補給とかをやらせれば確実に決まりますからね、
シューマッハやアデナウアーと共に帝国の兵站を背負って貰いたいのですよ。

それとキルヒアイスの父親を装甲擲弾兵の法務教育のために司法省から引き抜きました。
まあ、キルヒアイスは、親から改革の状態を知れと無く聞くでしょうから、
どのように悩むかがで、此からの彼の人生が変わりますね。

あとはフレーゲル一派と４７８年度生の始末だけですね。
恐ろしい期末テストを行いましょうかね。
それとクラーマーの脱走を計画しないとですね。
同盟さんクラーマーを宜しくお願いします。

第九十一話　オフレッサーのお笑いウルトラクイズ（前書き）

ネタばかりです。

第九十一話　オフレッサーのお笑いウルトラクイズ

帝国暦４８０年１０月２９日

帝国全土で憲兵隊粛正の嵐が吹きすさんだ直後の人事異動は、
軍務省人事局が泊まり込みでやっと仕上げたモノになった。
何と言っても大量の将官、士官、下士官、兵までが逮捕されたのであるから普段の人事異動に足されてそれらを行うことで激務と成ったのである。

そして、それに鑑み皇帝陛下が余りの酷さに指導を命じて。
士官学校でも人事異動と共に散々サボりまくった４７８年度生に対する、
認知度テストが行われる事になり、本日が試験日となった。

この試験に合格した者はそのままの学年でいけるが、悪い状態の者は留年や卒業延期などが科せられ、
さらに、最悪系の者達は別学校に隔離されて厳しい訓練と勉学をさせられる事と発表された為に今更ながら、必死に勉強する姿が見られた。

日頃真面目にやっている、他の年度の生徒はその姿を冷ややかに眺めていて、
元同期生達などは、完全に見限る状態であった。

テスト自体は、統帥本部、宇宙艦隊総司令部などの現職士官達から馬鹿な後輩達に愛の鞭、裁きの鉄槌を行いたい者達が特別に集められ、試験問題が作成された。
彼等は、本当に軍の将来を憂いて居る者達である為、試験問題は経

験に基づいた非常に難しいモノになり、出来の悪い生徒達が頭を悩ませる原因となった。

ペーパーテストの後は体力テストもあり。
それらはオフレッサー率いる装甲擲弾兵が監督として参加している。
更に、此はテレーゼがオフレッサーに教えて、お仕置きを行う為に、あるクイズ番組の方式を教えて作成した試験を行うのであった。

２ヶ月程居なかった装甲擲弾兵の一団が士官学校に再度現れて、準備し始めると、４７８年度生は恐怖の為何も言えず。
それ以外の生徒は装甲擲弾兵に教えを請おうと思う者も多数居た為、歓迎の声も聞こえた。

その頃惑星オーディンの反対側では装甲擲弾兵が演習地を試験会場として改修していた。勿論テレーゼの悪趣味満載な会場と成っており、此処で演習と体力測定とその他テストを行うのである。

フレーゲル達５人は別室で装甲擲弾兵猛者と憲兵隊の監視下に試験を受けさせられていた。その姿は滑稽を通り越して哀れな姿で、今までの権勢が嘘のようである。
特にブラウンシュヴァイク公爵夫人アマーリエより永久追放を宣言された、フレーゲルは、完全に燃え尽きている状態であった。

この時、フレーゲル以下５名の境遇は既に貴族として致命的な状態であった。
フレーゲル男爵はブラウンシュヴァイク一門より追放の末、皇帝陛下より男爵位を没収までは行かないが、無期限停止を命じられ既に只の一個人であった。

ヒルデスハイム伯爵令息ロベルトは一門から跡継ぎとして不適格者

として継承権を剥奪され、その跡継ぎには姉のイングヒルトが一門より婿を迎えて継ぐことが決まった。

典礼尚書のアイゼンフート伯爵の曾孫コンラートは、曾祖父の典礼尚書辞任の元になった為に、此までの３０年間の裏工作と賄賂５００万帝国マルクがパーになり怒り心頭であった為、伯爵家からの追放が行われ、単なるコンラートに成っていて、名字すら無い状態になっていた。

シェッツラー子爵の息子フィリップは未だマシな方で取りあえずの勘当に留められており、真面目な人間になれれば勘当を解くと子爵が約束していた為に人一倍努力していた。

シャイド男爵子息、ヴェルナー・フォン・シャイドもブラウンシュヴァイク公爵家から一門の参集に参加が無期限禁止とされていて、それを解く為に非常な努力をする気であった。

ヴィクトール・フォン・コルプト子爵令息とヘルムート・フォン・ノルディン子爵令息は、テレーゼの盗撮密告者としての偽装により、彼等こそ密告者とフレーゲル達に思われるように、誘導されていた為に、敢えて見逃して通常のクラスで試験を受けていた。

４７８年度生が試験に悲鳴を上げている中、準備を終了した装甲擲弾兵副総監オフレッサー大将に話しかける生徒達の集団がいた。

「大将閣下、宜しいでしょうか」
「ん？何か用か？」
「はっ、小官はギュンター・キスリング候補生であります。我々在校生は、今回の放送で皇帝陛下の御心を知り、装甲擲弾兵の

方々に時間的余裕がありましたら、是非自分達にも、装甲擲弾兵の格闘術や戦い方をご教授頂きたく有志達で集まり参上しました」

「ほう、装甲擲弾兵の訓練は辛いがそれでも良いのか？」

「はっ、厳しいのは覚悟の上です」

「おう、その目気に入った、俺の一存では決められないが校長と相談して授業に時間を入れよう」

「はっ、宜しくお願い致します」

返答を貰い嬉しそうに帰って行く生徒達を見て、オフレッサーは目を細めて、

未だ未だ捨てたモノじゃない連中が居るモノだと考えていた。

生徒達が帰る途中、一際大げさなアクションの生徒がいた。

彼は伯爵令息であり、私利私欲の多い門閥貴族なのにも関わらず。

人一倍帝室を敬愛しておったが、どうすれば良いか判らずに、

惰性的に授業を受けていただけであったが、

陛下の御心に触れ、一念発起して先輩達が始めた装甲擲弾兵副総監オフレッサー大将への陳情にも参加し頑張ろうと、しはじめていたのである。

流石にオーバーアクションまでは、直らないが、原作ではサロンでつまらない詩を垂れ流し、その後リップシュタット戦役で敗北した後、ルビンスキーに利用されて皇帝誘拐犯として歴史に名を残した存在になるはずであった。

「おーこのランズベルク伯アルフレッド、皇帝陛下の御為にこの身を賭して頑張る所存ですぞ」

「ランズベルグ伯、意気込みは判りましたから、大声は止めましょ

うよ」
「バイエルライン殿、その様なモノであろうか？」
「皆が不思議そうに見てますから」
「判りましたぞ」
ランズベルク伯アルフレッドの人生は此により全く違ったモノになるのであった。

帝国暦４８０年１１月１日

４７８年度生は、士官学校でのペーパーテスト後、逮捕されたクラーマーを除く全生徒４６４９名が輸送機に乗せられオーディン軍事空港から出発した。
フレーゲル達５名は別の機体に乗せられていた。

目的地も知らされず、有無を言わさず輸送機に乗せられた為に候補生達に不安な噂が流れていたが、それはテレーゼとオフレッサーが態と流させた噂であった。

曰く、このまま輸送機から紐無しバンジーをさせられる。
曰く、ペーパーテストの成績が悪いと到着空港でタラップから降りてブザー鳴った人物は強制的に帰還させられ、士官学校も追放される。
曰く、裸で火薬缶を背負って火炎地獄を走らせられる。

などなど、色々な変な噂で候補生は８時間の間胃が痛くなる者が続出した。
８時間後に演習場のあるアーヘン軍事空港に到着し何も無かった為

ホッとさせたがそれからが地獄であった。またフレーゲル達の機体は空港へは着陸せずに演習場上空から空挺降下させられた。

嫌がるフレーゲル達を装甲擲弾兵が蹴り落とした。
他の候補生は演習場へ到着後その落ちてくる姿を見ながら全員が、全身タイツに着替えさせられ、整列させられた。

悲鳴と共にフレーゲル達が落ちてきた。
無論まともな着地なんぞ出来るはずがない為に、演習地で泥まみれでパラシュート索に絡まって芋虫のような状態である。

フレーゲル達がそのまま担がれ連れて行かれた後、オフレッサー大将がテストを始めると宣言した。
「よし、貴様等此より進級テスト第二部を始める、死ぬ気でやるようにせよ！」
教官役の士官が試験の説明を行う。

「此から出す問題の答えが書いてあるバスに乗り込め」
そうすると士官学校生なら判るはずの問題が出される。
ＢＧＭが流れる。ジャジャァ「４４２年に発生したパランティア星域会戦の指揮官は誰？」

口々にわかんねー、誰だっけとか判ったなとかの言葉が出てくる。
４個の答えが有りどれが答えかわからない候補生は適当に走り出す。
１２０人乗りのバスが４０台用意されおり、１０台ずつに同じ答えが書いてある。

候補生が乗り終えると、シートベルトをつけさせられ、急スタートを始める。

バスは演習場内のコースを走るが、至近距離での地雷の爆発や火炎放射や大量の水の放射などが、これでもかと言う限り行われていく。

バス内では、多くの候補生が悲鳴を上げたりしている。
そして、正解した１０台は停止したが、残りの３０台はそのまま地雷原突入後周りで爆発が次々に起こり最後にジャンプ台から次々にジャンプして横転した。

中では候補生達が、パニック状態であるが、生命は保証されている為に教官達は心配をしていない。
その後、〇×試験で壁に突入し泥まみれになる者達。バラマキ試験で走り回る者。
バンジージャンプで答えを言うテスト。
更に体力テストとして、サスケのようなアトラクションでのテスト。

その結果１週間にも及ぶテストが行われたのであった。
フレーゲル達は相変わらず装甲擲弾兵に囲まれて、生きる気がしない状態で試験を受けていたが、話にならない酷い成績である。

その結果マイクロバスに乗せての地雷原突破や横転。
背中に炭酸ガスロケットを背負って池に向かって飛ばされたり。
しまくりである、ある意味某大監督のお笑いウルトラクイズ状態であった。

この模様は全て録画されて、後にお笑い映像としてＴＶ放映され多くの笑いを受けるようになった。
後に海賊版を同盟に流して、同盟側のＴＶ局により同系列のお笑い番組が制作される事になった。

最終的に４６５０名の内無事進級可能な者、５８５名で、彼等が４７８年度卒業生予定者と成った。
続いて、半年の卒業延期が１９５７名。
１年の卒業延期が１５７７名。
２年の卒業延期が４５５名。
フレーゲルを含む、どうしようもない連中が７５名
逮捕されたのが、クラーマー１名。

結果士官学校へ戻れるのが５８５名だけと言う最悪の年度になり、
後々まで４７８年度＝使えないと言う話が続いたのである。
残りの３９８９人は士官学校とは別の校舎でミッチリとしごかれる
ことになった。

そして、フレーゲル以下７５名は熱砂の惑星に流されて、
そこで勉強三昧の日々を送るのであった。

第九十二話　庭園完成（前書き）

今回は短いです。

第九十二話　庭園完成

帝国暦４８０年１１月３０日

■オーディン　ノイエ・サンスーシ　日本式庭園　テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

いやいや、フレーゲル達のせいで本来であれば１０月には完成していた庭園のお披露目が今日になってしましましたよ。そのせいで紅葉じゃなく初冬の庭園になっいます。
遅れた為にウォルフは大尉昇進後イゼルローンへ向かってしまい、参加出来ないんですよ。

あとメックリンガーは今回の移動でローエングラム駐留艦隊の非常勤参謀に任命して、参謀しながら創作活動に専念して貰う予定です。
ワーレンはそのまま教官で行きます。
ロイやビッテンはイゼルローン勤務のままで今回大尉に昇進しました。

シルヴァーベルヒとグレックも田舎から呼び寄せてローエングラム領のオーデイン事務所の無任所スタッフとして内務省から移動させました。

今日ですが、爺さんが父様に復古調庭園を寄贈するという形で行うのですよね。
参加者は、父様、私、母様やアンネローゼを含む父様の寵姫達などで、
今回はあくまでプライベートで行い、その後に大々的に人を呼んで

お披露目をする予定なのですよ。

まあ私は既に数日前に完成を見てますからね。
時間はかかりましたが、ロベルト・ミッターマイヤーの自信作になると思いますよ。
池を配して築山や中之島を造り、滝が流れる川や竹林など、
私の趣味全開の庭園になっています。枯山水庭園も近くに造りましたよ。

さらに池には金閣寺のような寝殿造りの和様な建物が突きだしています。
建物で一番大変だったのが、畳です色々調べて心材はウレタンですが、
外装に藺草系の草を発見させ、それを編んで畳表もどきを造りました。

寝殿造りには茶室を造りましたが、未だに御茶を点てる事は出来ませんね。
床の間には私が書道で書いた掛け軸が飾ってあります。
漢字で【天照皇大神】って書きましたよ、昔の記録から見た字だといってあります。

爺様と説明係に抜擢されたカロちゃんとロベルト・ミッターマイヤーが正装で並んでいます、
爺様は飄々として、カロちゃんは優雅にしていますけど、ロベルトは完全にカチンコチンです。

父様が現れると、私たち以外は最敬礼してますよ。
それにロベルトは完全に跪いたままです。

それで爺様が、父様に目録を渡すんですよね。
「皇帝陛下に於かれましては、ご機嫌麗しく」
「うむ、卿も元気そうじゃな」
「お陰をもちまして」

「して、今日はなんじゃな？」
「はっ、この度嘗て有りました、庭園を復古させましたので、陛下に献上致します」
「グリンメルスハウゼンよ、大儀である」

「御意」
「して、そこの者は何者じゃ？」
「はっこの者は、庭園の制作施行を行いました、ロベルト・ミッターマイヤーと申す者にございます」
「ふむ、此ほどの庭園を作り上げるとは、見事な者じゃ」

「御意」
「卿の顔が見て見たい、ミッターマイヤーとやら、面を上げ」
ロベルトは内心は心臓はバクバクしていたが、意を決して顔を上げる。
「うむ、ミッターマイヤー、見事じゃ。賞めて遣わす」

「ありがたき幸せにございます」
「うむうむ、此からも励め」
「御意」

良くやりますね、事前にシナリオが出来ているので、すらすらと話が進んでいきますよ。
いよいよカロちゃんの出番です、普段の忍姿（しのぶすがた）とは違い艶やかな姿です。

一度ニンニンって言わせたら、馬鹿受けでしたけどね。

「皇帝陛下、祖父に変わりまして、私がご案内致します」
「うむ、頼むぞカロリーネ」
「御意」

それからカロちゃんの独壇場でした、確り私がレクチャーしたかいがありましたよ。
「アレはどう言う意味じゃ？」
「枯山水とは、石と砂で島や水を表す方法でございます」

母様達も質問や散策をしています。結構皆さん評判が良いようで、落ち着くとか風が爽やかだとか行ってますね。でもアンネローゼは目立たないように余り動きませんね。
私としても各寵姫の方々にご挨拶をしていますから、必然的にアンネローゼの元へも行くわけですよ。

「グリューネワルト伯爵夫人、ご機嫌麗しく」
いきなりの挨拶に驚いてますね。
「テレーゼ様、ご機嫌麗しく」

「庭園はどうですか？」
「凄くすてきでございますね」
「私もこんな庭園は凄くすてきだと思いますわ」

「そうですね」
「所で、弟御はおげんきですか？」
いきなり振られたから驚いてますね。

「弟は最近は幼年学校で勉学に励んでいるそうです」

知ってるんだけど聞いて見たのさ。
「まあ、それはそれは、是非ともまたお会いしたいですわ、私、最近料理にも凝り始めして是非グリューネワルト伯爵夫人と弟御をご招待したいですわ」
「テレーゼ様、ありがとうございます、弟も喜ぶと思います」
「そう言えば、弟御と共に幼年学校へ行かれた者が居るとか」
キルヒアイスの事を言うかな。
「弟の友人が共に通っております」
「まあそれはそれは、弟御も心強いですわね」
「そう思います」
「では、その友人も招待しますわ」
「けど、テレーゼ様にお会いできるような身分ではございませんので」
「いいのですよ、料理の腕を是非見て貰いたいのですから、ヴェストパーレ男爵夫人も招待しますから是非とも来た下さいね」
「テレーゼ様がそう言って下さるのでしたら、是非まいります」
「日時は決まったら、お知らせしますね」
「お願いします」
アンネローゼはまた隅に行っちゃった。
けど此で、仕込みが出来たわ、楽しみだね。
そうこうしている内に、屋敷の説明に入ったけど、案の定靴のまま入ろうとして脱がすのが大変な事になったですね、私はチャンと脱いで入りましたよ。
木の床や畳に驚く方々ですが、まあ見たこと無いから仕方が無いで

すよね。

特に茶室の狭さにみんな驚いていますよ、クローゼットなのかとかね。

まあ四畳半しかないですから、それは仕方が無い。

何れは着物で御茶を点てる予定ですよ、いま着物の資料を渡して布から制作始めています。

床の間に飾ってある掛け軸が私の作品だと聞くと、皆が旨いと賞めてくれました。

実際は、未だ未だなんでけどね。対抗するモノが無いから必然的に第一人者ですからね。

その後色々見ながら、終了しました。

最後に父様がロベルトに、帝室御用達の許可を与えました。

これはサプライズでしたよ驚きです。

此により、ロベルトは帝室の後ろ盾が出来たわけで、益々仕事が大変になるんだろうな。

こうして、庭園のお披露目は無事終了したのでした。

後日、変装してロベルトに会ったら、大変感謝されましたよ。

新しい形式を探し出すことが出来ましたって。良いことですね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3863x/

銀河英雄伝説～ラインハルトに負けません

2012年1月9日02時33分発行